鋼鉄のシスター

ジェラシー卑屈川

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品は、ＳＳを読む事が趣味のド素人作者が、とあるＳＳ作家さんの作品に感銘を受けて書き始めたものです。

リスペクトしているため、その方の作品に若干似通ってしまっている部分があると思いますが、できる限り別物になるよう心がけて書いたつもりです。

内容としましては「オーバーロード」の世界をオリジナル主人公が活躍していく姿を描いた二次創作物になります。

人生初の執筆となったので、日本語が変だったり、読みにくかったり、内容が薄かったり、文節がおかしかったり等すると思いますが、それでもよろしければ読んで頂けますと幸いです。

また読んでいて「ここおかしくない？」と感じた部分や、「ここはこうした方がいい！」などアドバイスありましたら遠慮なくご連絡ください。

～あらすじ～

ギルド長『モモンガ』氏の最後の招待に参加するべく、家への帰宅を急ぐ一人の女性は、帰路の中で不運にも交通事故に遭いこの世に帰らない人となってしまう。

二度と目覚めるはずがない目を開けると、其処は知ってるようで全く知らない《ユグドラシル》の世界だった。

目次

第1章
交通事故 1
夢 5
目覚め 8
村長と村長夫人 12
姿見 17
それは男の浪漫 23
緊急事態 29
別れ 36
人間を辞めた日 43
本当の別れ 51
その男、王国最強。 57
陽光聖典 68
望まぬ来客 72
次元眷属〈悍ましき子供達〉個体識別番号・第11番『機械魔人型』【Dina】 79
メメント・モリ 91
キャラ紹介&設定 96
第2章
追懐 101
謁見 110
守護者達の談合 124
仮説　推測　妄想 134
悪巧み 143

慈悲の十字架 ―――――――― 152
#ｉｎｃｌｕｄｅ ＜ｓｔｄｉｏ．ｈ＞ ―――――――― 169
悲劇：序章 ―――――――― 171
悲劇：前触れ ―――――――― 185
悲劇：暴走の始まり ―――――――― 205
悲劇：元凶 ―――――――― 225
悲劇：犠牲者 ―――――――― 238
悲劇：荒ぶりし鋼鉄の化身 ―――――――― 251
悲劇：狂気の果てに ―――――――― 264

第1章
交通事故

「はぁっはぁっはぁっ…」

暗い夜道にコツコツとヒールが道路を叩く音が響く。

「まったく、今日はなんてついてないのでしょうか…はぁ」

少し大きめの独り言を呟きながら小走りで走る修道服を着た女性の名は、『黒須真理亜（くろすまりあ）』という。

彼女はこの町にある小さな教会のシスターだ。

「ここまで帰りが遅くなるなんて思ってもみなかったわ…はぁ、ふぅ」

遅刻してしまったことをぼやく真理亜は、普段から運動らしい運動をしてこなかったので、あまり長くない距離を走っただけでも鉛のように重くなっていく体に鞭を打ち、普段の生活を改めなければいけないと思いながら自宅へ向けてひた走る。

運動が苦手な彼女が走ってまで急ぎ帰らなければならない理由…それは２１２６年に全世界で一大ブームを引き起こしたあるオンラインゲームが原因である。

仮想現実体感型オンラインゲーム《ユグドラシル》。このオンラインゲームは膨大な情報量を売りにしたゲームであり、その膨大な情報量から作られた広大なオープンフィールドを、探検・開拓・発見していくことが目的のゲームである。

その方法はプレイヤー次第であり、仲間を見つけて共に旅に出るのもよし、あるいは同じプレイヤーを倒してアイテムを略奪するもよし…他にも数えきれない程の様々な要素がてんこ盛りで、その高い自由性が話題を呼び、瞬く間に一大ブームと化したのだった。

そんな一大ブームとなったオンラインゲームに、ゲームなど今まで無縁の存在だと思っていた真理亜も興味をそそられ、友達は居た者のあまり多くは無く、教会での仕事もあってなかなか外へ遊びに行く機会がなかった事をきっかけにしてなんとなく遊んでみることにしたのだ。

《ユグドラシル》の世界に引き込まれるのはそれはあっという間だった。
今まで味わうことのなかった感動や興奮、達成感を《ユグドラシル》は彼女にたくさん与えたのだ。気がつけば、真面目だった彼女も休みの日には一日中《ユグドラシル》をプレイし続けるほど、無類の《ユグドラシル（大好き）プレイヤー》になっていたのだった。
更に《ユグドラシル》の中で唯一無二の素晴らしい仲間たちに出会えたのだ。
真理亜は《ユグドラシル》をプレイする中で何が一番良かったですか？と聞かれれば真っ先に仲間たちと出会えた事だと答えるだろう。それくらい、仲間達と過ごした時間が彼女にとって大事なものなのだ。
彼女の所属していたギルドの名は《アインズ・ウール・ゴウン》。《ナザリック地下大墳墓》を拠点とする《ユグドラシル》のプレイヤーで知らないものは居ないほど悪名高い異形種ばかりが集まったＰＫＫを積極的に行うギルドだ。
真理亜も立派にその一員で、『鋼鉄のシスター』として恐れられ、また多くのプレイヤーの心を折ってきた悪名高いプレイヤーであった。

しかしそんな楽しかった日々もある理由により《ユグドラシル》をプレイできなくなってしまった。
それは愛すべき父の死。
真理亜は悲しみに明け暮れ、更に父が亡くなったことで教会は真理亜一人だけになり仕事量が倍増。満足にログインができない日が続いて、ついに真理亜は引退することを決意する。
仲間達との別れは辛かったが、ギルドメンバーは父の死を家族の様に悲しんでくれ、またログインできなくなると真理亜が言った時も誰も反対せずむしろ暖かく見送ってくれた。
彼らの優しさに応えるべく、現実世界に戻り父の死と言う悲しみから立ち直った真理亜は、今日にいたるまで忙しい日々を過ごしながらも充実な暮らしを送っていた。

自分が《ユグドラシル》から去ってどれくらいの時間が経っただろうか？それでもあの楽しかった日々は昨日のことのように思い出せる。

だが時間の経過と言うのは残酷だ

素晴らしい日々を過ごしたあの《ユグドラシル》が遂に時代の波に置いて行かれ、プレイヤー数が激減。かつての賑わいが今では嘘のように廃れたこのゲームは今日、そのサービスを終了させる。

（あそこの角を曲がればもう家ですね）

その余りにも悲しい情報を知った真理亜の下へ、かつて共に冒険をしたギルドのリーダー、『モモンガ』氏からサービス終了の時間までお話ししませんか？といった内容のメールが届き、懐かしと長らくログインできなかったお詫びも兼ねて是非参加しようと思っていたのだ。

しかし、今日はことあるごとに不運が重なり、気づけば時間はもう日付が代わるのに幾ばくもかからない時間だった。これでは満足にお話もできないと思いつつも、せめてお世話になった方たちに顔だけでも出そうと決意し、今に至る。

時刻は夜中の１１時４５分。この調子でいけば何とか０時００分前までにはログイン可能な時間だ。

（何とか間に合いそうですね、もう少しの辛抱です頑張りなさい私！）

縛（もつ）れる足を何とか振るい立たせ、速度を上げる。

しかし、走る勢いを殺せぬまま曲がり角を曲がったとき

――この日〝最大の不幸〟が彼女に降りかかるのだった。

（あぁ…これは…）

曲がり角を飛び出す形で交差路に出てしまった真理亜は、早く帰らなければという焦る気持ちで周りが見えていなかったことに気づき後悔する。しかし〝後悔先に立たず〟と昔の人はよく言ったもので、彼女が気付いた時にはもう遅すぎたのだ。

彼女が後悔した理由、それは飛び出した先で鉢合わせたトラックが、自分めがけて突っ込んで来ていたのだ。

トラックの運転手も飛び出してきた女性に反応し、けたたましいクラクションを浴びせるが、トラックの走る勢いは止められない。
（…まったくもって、自業自得、ですね…）
トラックとぶつかる刹那の間に、走馬燈の如く頭の中で色んな人の顔が思い浮かんだ。そして真理亜は心の中でその人たちへと謝罪をする。
（ごめんなさい…お父さん、そしてギルドの皆さん…さようｎ）
――キキィーーーッ!!ドン！
午前０時００分。大きなクラクションがあたりに鳴り響いた。深夜にもかかわらずその大きな音に何事かと人々が集まって来る。それからすぐに全身を激しく打った女性が発見され、その凄惨な姿はそこに集まった誰の目に見ても即死の重症だった。
――…はずだった。

夢

真理亜は夢を見ていた、とても懐かし夢…。
時刻は朝だろう、父が私を呼ぶ声が聞こえる。
「…☒あ……真理亜、起きなさい朝ですよ。早くしないとお祈りの時間を過ぎてしまいます。」
「…ふあぁ…おはようございます、お父さん。」
「はい、おはよう。さぁ早く顔を洗ってきなさい、寝癖がひどいですよ？」
「も、もうっ！そういうことは婦女子に向かっていうものではありませんよっお父さん！」
朝から仲の良い会話をしている二人の男女はどうやら親子のようだ。
『お父さん』と呼ばれた壮年の男の名は『黒須聖仁(くろすせいじ)』。教会の神父をしている。そして彼を『お父さん』と呼んだ、少し娘にしては幼すぎるような見た目の少女の名は『黒須真理亜(くろすまりあ)』。
二人は都会から離れた郊外にある小さな町の教会に住んでいた。
「準備ができたら、礼拝堂へ来てくださいね。私は先に行って準備をしておきます。」
聖仁はそう真理亜に告げると奥のほうへ行ってしまった。
時刻は朝の５：００、普通の人からしてみれば早すぎる起床時間だが、彼らにとっては普通の起床時間である。教会は朝からやることが山ほどあって、この時間に起床しなければ朝の行事が全て滞ってしまうのだ。
整髪、洗顔等を済ませた真理亜は、急いで聖仁のもとへ向かった。
唐突だが、実はこの二人は血のつながった親子ではない。
町の教会の神父を務めていた聖仁はある日、教会の前に育児放棄をされていた赤子を発見した。子供が居なかった聖仁は神が自分に賜われたのだと思い、拾った赤子を自らの子供として教会で育て今の『黒須真理亜』に育った。
「お待たせしました」

「いえ、丁度いま準備が終わったところですから大丈夫ですよ。さ、始めましょう。」
聖仁と真理亜の二人は礼拝堂の一番奥の祭壇でお祈りを始めるのだった…。

午前7：00
「父と子と精霊の御名によって…アーメン。では、いただきます。」
「いただきます」
朝から長い行事を済ませやっと朝食にありつけた真理亜は並べられたおいしそうな朝食を勢いよく口の中に放り込んでいった。聖仁はその姿をみて微笑みながらも、少しみっともない姿の彼女に注意をする。
「こらこら、お行儀が悪いですよ。自分ことを婦女子と言うのなら、もっとお淑やかにお食べなさい。」
「ふぁーい…。」
「今日からまた学校ですね。帰りは遅いですか？」
「ゴクン…いえ、いつもの時間通りに帰ってきます。」
「そうですか。しかし早い帰宅はよろしいですが、もう少しお友達と遊んでくるなりしてもいいんですよ？」
「んー…でも私は学校のみんなよりは、お父さんとお話ししていたほうが楽しいですから。」
屈託ない表情で言う彼女に嘘は見当たらず、聖仁は困ったような顔をしながらも少し嬉しそうだった。全くこの子に友達は居るんでしょうか？
「そんな風に言われては仕方ないですね…。では帰ってきたら、私のお手伝いをしていただきますよ。」
「はいっもちろんです。あ、そろそろ出なくちゃ。それでは行ってきます。」
「はい行ってらっしゃい。忘れ物はありませんね？」
「大丈夫でーす!!」
元気に家を出て行った娘を見送った後、後に残された聖仁は少し寂

しそうな顔をするがすぐに引き締めなおし、自分の仕事を開始するのだった。

（今日は確か体育がありましたね…体を動かすのは苦手です…憂鬱…。）

一方元気よく家を飛び出したのは良かったものの、今日の時間割を思い出して苦手な体育があることに気づき、真理亜は気分を落ち込ませていた。

（はぁ…あるものは仕方ありません、諦めましょう。あらっ…？あれは…どこかで…。）

若干遠い目をしながら俯きかけていた首を前に戻し、学校へ向かう通学路を歩いていると、ふと何かが目に入った。それはどこかで見たことのあるトラックだ、しかし見覚えがあることを意識した途端、急に自分に迫ってくるトラックの映像と、自分の中に巻き起こる強い後悔の念が押し寄せ、激しい頭痛と眩暈に見舞われた。

「いや…っ！いやあああああああああああっっ!!!!

目覚め

「いや…っ！いやあああああああああああっっ!!!!!」

その恐怖に思わず叫び飛び起きた真理亜は何かにガンッ！とぶつかり、続けて「グェッ」というカエルのような鳴き声が聞こえて来た。

「痛っっっっっ…」

「あら…ここは…？」

見回すとどうやら民家のような建物の中でベッドに寝かせられていたようだった。

しかしどうにも古臭い。天井はそのまま屋根になっており、木造の梁が丸見え。壁は仕上げ材や壁紙が張られた立派なものでは無く土壁がむき出しの状態。寝ていたベッドに至っては藁の上に布をかぶせたものだった。

「やっと起きたか姉ちゃん!!しっかしあんたすんごい石頭だな…イテテ。」

声が聞こえた方へ顔を向けると、ベッドの脇に頭を押さえるようにして尻餅をついているみすぼらしい服を着た同年代？くらいの男が居た。

「貴方は…？」

「ん？ああ俺かい？俺はヨーゼフカ・タイルトン、ヨーゼフって呼んでくれ。ここカルネ村で農夫やってるモンだよ。あんたは？」

名前を響き聞く限り、どうやらこの男は外国人のようだ。つまりここは外国…？

そんな馬鹿なと思いつつも質問に答える。

「あ、わ私は真理亜と申します…。」

名前を聞かれたので思わず本名を名乗ってしまったが、外国でも通用しそうなマリアと言う名前を付けてくれた父親に少しばかり感謝した。

寝ぼけていた頭が意識を取り戻し、だんだんと周囲の状況を確認する中で、真理亜はとあることに気づき仰天する。

（というか、私生きてるっ!?）
　そうなのだ、彼女はトラックとの交通事故により死んだはずだった。しかしどうだろう今のこの状況は?手も足もあり頭もある、肌はいかにも艶やかで健康そうだ。彼女のことを誰が見たって五体満足の健康優良児としか言わないだろう。
「マリア、さんねぇ…珍しい名前だな?もしかして異国の出身かい?」
　ここではマリアも珍しい名前なのか…などと思いつつ、一刻も早く状況を整理したいのだが、そんなことをお構いなしに、自分が看病していた女が目を覚ましたのが嬉しくて仕方ないこの男は興味津々で質問をぶつけてくる。
　そんな姿勢のヨーゼフカに若干の苛立ちを覚えつつも、今の状況から頼れるのはこの男しか居ないと判断した真理亜は我慢して会話を続ける。
「は、はい。その、極東?の方から来まして…。」
　そう答えると何故かは知らないがヨーゼフカと言う男は気分を良くしたようで、聞きもしていないのにペラペラと喋り出す。
「そうかそうかやっぱりな!その見慣れない服からして大体予想はついてたんだよ。やっぱ俺って見る目があるなぁ…自分の頭の良さに惚れ惚れするぜ…。
　っとそれよかあんた良く生きてたなぁ。村の近くでよ、騒がしい音がするから何かと思ってみてみればゴブリンたちが倒れてるあんたを襲ってるじゃないか!こりゃ大変だと思って村総出で助けたんだよ。
　んでもって第一発見者の俺が世話することになったんだけど、あんた3日も目を覚まさないんじゃもう死んでんじゃねえかって不安になってたんだ。だけど、微かにだが呼吸はしてるからいつか目覚ますんじゃねぇかって思ってこうして健気に看病してたって訳よ。
　そしたら今日になってお前さんが急に叫びながら頭突き食らわしてくれるんもんだから…いいダメージ、入ったぜ?」
　極東が異国かどうかわからなかったがどうやら上手く誤魔化せたようでよかったと真理亜は安堵していた。

ヨーゼフカと言う男は、お喋り好きらしく、今までにあったことを勝手に話してくれたお陰で、自分が今どういった状況にあるのか把握することに苦労はしなかった。
（しかしヨーゼフカの言っていたゴブリンという生き物、私が知る限りでは空想上のモンスターです。それらが私を襲っていたというのは少し気がかりですね…うまく誘導してもっと情報を聞けないでしょうか…？）
ヨーゼフからどうやって情報を引き出そうかと模索していると、ヨーゼフ本人が良く回る口でまた喋り出した。
「あぁ、そうかそういうことか！なんかおかしいと思ってずっとあんたのこと見てたんだがやっと分かったぜ！あんたさっきからずっと瞬きしてないよな？目痛くならねぇのか？」
「!!」
真理亜はヨーゼフのその一言で脳に電撃が走ったような気がした。思わず手で目を覆い隠し、瞬きができるか確認する。どうやら意識すれば瞬きができるようだ。
彼の発言で彼女はこの状況に対してある一つの仮説を思いつく、しかしそれは余りにも非常識な思考から導き出されたものであった。それでも一度気にし出すと思考の渦が頭の中を駆け巡り、脳にこびりついて離れようとしない。
「なぁ…どうしたんだ姉ちゃん急に黙りこくって？…もしかして気分でも悪いのか…？」
急に俯いて黙ってしまったマリアを心配したヨーゼフカが、軽く彼女の肩を叩く。そのお陰で真理亜は思考の渦から引き揚げられ、ハッと意識を現実に戻す。
「いいえ、それよりもヨーゼフカさん、鏡はありますでしょうか？できれば全身映せるような、そう、姿見とか。」
意識を取り戻した真理亜は気持ちを切り替えて、仮説を検証するために行動を起こすことを決意した。
「お、おう…しかし鏡かぁ、俺の家には無ぇなあ。うーん…あ！そういえば確か皆で集まる集会場に姿見があったはずだ。」

急に黙ったり、急に目が据わったりと極端な反応をする彼女に戸惑いつつも、ヨーゼフカは彼女のために姿見のある集会場へ案内することにした。
「ありがとうございます！」
「いいっていいって、んじゃあ付いて来な！」
そう言うと、ヨーゼフカはルンルンとした雰囲気を隠すこともなく意気揚々と家を出て、真理亜へエスコートするかの様に手をさし伸ばしている。どうやら美しい彼女と一緒に外を歩けるのが嬉しいらしく、自分の知っている紳士像の真似をして彼女の気を引こうとしているようだった。
真理亜はそんな彼に顔が引き攣りそうになるが、父の教えである『相手からの施しは素直に受け取ること。そして受け取ったならばそれ以上の施しを相手に返すこと。』を思い出し、ヨーゼフカの差し伸べられた手を取り、それ以上の施しを返すべくそのまま腕へとまわした。
ヨーゼフカほんの一瞬だけマリアの手を触ったときに怪訝な顔をしたが、そんなことは美女が自分の腕に手を回してくれたことですっかり吹き飛んでしまった。
有頂天の様子で歩くヨーゼフカとは裏腹に真理亜は真剣な表情を浮かべる。
何故ならこれから判明するであろう仮説の検証結果次第では、彼女の運命に大きく作用するからだ。

村長と村長夫人

家から出ると時刻はまだ午後になっていないくらいだろうか、空は雲一つなく太陽は村を明るく照らしている。

二人で歩いていると、ヨーゼフカは思い出したように集会場に入るためには村長から鍵を借りなければならないことを告げられ、どうせなら自分が借りてくるまでの間に村の中を歩き回ってみてはどうだと提案された。

村人達に助けてもらったお礼をしなければと考えていた真理亜は、ちょうどいい機会に恵まれたと思いその提案を受け入ると、二人は分かれ暫くの間別行動をとった。

ほどなくして鍵をぶら下げたヨーゼフカがマリアの下に帰って来た時には、彼女の周りにたくさんの人だかり（主に村の子供達）ができており、真理亜は困ったようなと嬉しいような感情が合わさった表情をしていた。

「鍵、手に入れてきたぞぉ。」

真理亜はようやくその一言でヨーゼフカに気づく。

「あ、お帰りなさいヨーゼフカさん。ここの村の子供たちはとっても元気がいいですね…あはは。」

困惑するマリアをよそに子供たちはじゃれついて離さず、マリアの服を引っ張りながら口々に「追いかけっこしよう！」「マリアさんは私たちとおままごとするの！」「いやここはかくれんぼだろ！」などマリアと何をして遊ぶか声を張り合わせていた。

ギャーギャーと自分の周りで騒ぐ子供たちに手をこまねいていると

「こらこらお前たちマリアさんが困っているじゃないか、離れなさい。」

静かながらも厳しい口調で年長者の風格を携えた男性が現れ、子供たちがその姿を目にすると、渋々口を噤み大人しくなった。

「貴方は…」

誰ですか、と言い終わるよりも早く男が自己紹介を始める。

「どうも、初めましてマリアさん。私がこの村の村長をしております、以後お見知りおきを。」
　村長は丁寧な口調で自己紹介をし、慌てて真理亜も深い礼とともに自己紹介をする。
「この度は助けていただき本当にありがとうございました。どうやら村長様は私の事をご存知の様ですが、一応形式として…私、真理亜と申します。しかし、私の名前を何処で…？」
「いや、なにそこのヨーゼフカから聞いただけですよ。」
「そうだったのですか」
　何だか村長とマリアが二人ばかりで喋っているようで、段々気に食わなくなってきたヨーゼフカが無理やり村長とマリアの話に割って入る。
「いやそれよりも村長聞いてくれよ村長！マリアさんってば極東の異国から旅で来たんだってさ！凄くねっ!?」
　ちょっと強引なヨーゼフカに怪訝な顔をしそうになる村長だったが、そこは流石大人。グッとこらえてマリアに失礼のないようにする。
「おお！そうでしたか。なればこの地は不慣れだったでしょう、ゴブリンに襲われたのは不運でしたな…。」
　村長は申し訳なさそうに表情を曇らせた。周りもまた村長につられるようにして表情を曇らせる。マリアをゴブリンたちからすぐに救い出すことができず、ぐったりした彼女の姿を思い出したのだ。
　空気が重い…耐えかねた真理亜は何とか元気づけなければと焦り、修道女をしていた時の言葉づかいが咄嗟に口から出て来てきてしまったが、出てきてしまったものは仕方がない、口を噤むわけにはいかないのでそのまま続ける。
「いえ、ですがあなた方に助けられるという幸運もまた神は与えてくださいました。そして何処の誰かも分からない私にここまで優しくしてくださる人々に出会う事が出来た。これは神に感謝をしなくてはいけませんね。」
　どうやら真理亜の狙い通りの言葉に村人たちは救われたようで表

情に明るさを戻していった。
　しかし村長は真理亜の村人たちを励ますときにマリアが使った独特の言葉回しに何かを感じ取っていたようで、
「ほぉ、神と言う言葉を使うあたりマリアさんは神職を務められている方とお見受けします。」
　ニヤリと、いたずらっ子のような目で真理亜のことを勘ぐる。意外とお茶目なのかな…？
　ただ初めて出会った筈なのに言葉回しだけで自分のことを見破られた真理亜は少しだけ驚いた。それから真理亜はその推理に答えるべく、怪しくならないよう言葉を選んで返答する。
「村長様のご慧眼の通りでございます。私は極東の地にて教会へ勤めており、そこでシスターをしておりました。私は少なくなった信者の新たな獲得を教会から命じられ、こうして遥々遠い異国の地へとやってきた次第でございます。」
　全部が全部嘘ではないけれど、こうもスラスラと嘘が出てきてしまうと少し自分に嫌気が指してくる…いや、今は非常事態だ、少しばかりは致し方ないだろうと真理亜は心の中で己の良心を納得させる。
　そんなマリアの気持ちを露には知らない村長は、自分の推理が当たっていたことに満足がいったようで気分良さそうにニコニコしていた。
「さ、そろそろ集会場へ行きましょう、マリアさん。」
「なんだ村長もついてくるのかよ？」
　村　長がマリアへ向かって出発の提案をするも、それに応えたのはマリアではなく不満そうな顔をしたヨーゼフカだった。村長が一緒に付いてくるのが気に食わないらしい。
「フンッ、お前だけでは何かと不安だからな。ささっマリアさんこちらですぞ。」
　村長はそんなヨーゼフカを気にも留めず、意気揚々と軽い足取りで村長は前を歩いて行った。あれ？なんかさっきも同じような光景を見た気がする。これがデジャヴ…？そんなことを考えていると、いつの間にか隣に居た女性から声がかかる。

「はぁ…まったく二人して鼻の下延ばしちゃってマア仕方ないんだから…。男どもだけじゃこんな奇麗な子に何か手出すかもしれないね、私もついてくよ。マリアさんもいいね？」
　声を掛けて来た中年の女性が言うには村長の妻であるそうで、半ば強引な要求ではあったが、女の人が一人いると何かと心強いので快く受け入れる。
「ええ、お世話になります。」
　真理亜は村長夫人が言っていた“何か”という言葉をあまり考えないようにしつつ、火花を散らしながら前を歩く男二人に遅れてはいけないと小走りでついていった。
「しかしあなた本当に奇麗ね。まるで絵本から出てきたお姫様みたいじゃない…。」
　隣から視線を感じているなぁ、と思っていた真理亜へ唐突に村長夫人は話しかけて来た。
　村長夫人からしてみれば、その物珍しさと純粋な本心から真理亜へ賞賛の言葉を贈ったのだが、当の本人にとっては違って聞こえてしまった。
　その原因も真理亜の言う仮説の中に含まれるのだが、先ほどの村長夫人の言葉がいまだ不確かなことに拍車がかかるようで思わず怪訝な表情をしてしまった。
　マリアの表情が少し曇ったことを敏感に感じ取った村長夫人は何か女の気に障ったと思ったらしく謝罪の言葉を述べる。
「ご、ごめんなさいね！うちの村にも可愛い子は居るんだけど、あなたみたいに美人な人は初めてだったからつい…。」
「あっいえ！そんな滅相もない！謝らなければいけないのは私の方です。少し考え事をしていたものですから難しい顔をしていただけだと思います…村長夫人は何もお気になさらないでください…。」
　村長夫人にいらぬ誤解を生ませてしまったことを後悔しすぐさま真理亜も謝った。
「そ、そう…？じゃあ、お相子様ってことでこの話はこれくらいにしときましょ。あ、それよりも着きましたよ、ここがこの村の集会場で

「。す

姿見

村長夫人の声に真理亜が顔を上げると、そこには周りに建っている民家の約3倍程の大きさがある建物が建っていた。

ヨーゼフカが持っていた鍵を使い扉を開けると、待っていたかのように村長が開いた扉の脇に素早く立ち、マリアを出迎える。

ヨーゼフカは村長の姿を見て「やられた」と言ったように苦虫を噛み潰しているような渋い顔をするのだった。

「ささっマリアさんお手をこちらに、そこは段差がありますので足元にお気を付けください。」

村長がどこか浮ついた表情で真理亜に手を差し伸べる。真理亜は村長の心遣いを無下にすることもできないので、その手を取った。

「んん?マリアさんのお手は氷のように冷たいですな?」

「!?」

村長のその一言を聞いて真理亜は思わず手を勢いよく戻してしまった。

後ろからは「デリカシーが無い」だとか「これだから男は」だとか聞こえてくるが真理亜の耳には全く入ってこない。

聞こえてくるのはさっきから頭の中をガンガンと駆け巡る五月蠅い思考の濁流だ。ここまで仮説の要素が集まってしまっては落ち着いてなどいられない、今すぐ確認をしなければ頭がどうにかなってしまいそうだ。

「…っ!」

「あ、ちょっとマリアさん!?待ってください!」

急に駆け出した真理亜を呼び止める声も、今の彼女の耳には届かない。

(確認しなければ…!早く、早く!)

そして必死に求めた姿見に映る自分の姿を見たと瞬間…

――彼女は膝から崩れ落ちた。

「急に走り出されたのでビックリしましたよ…ど、どうかされたのですか!?」
後からやっと追いついてきた村長は、姿見の前に座り込んだ状態で両手を床へつき、肩を震わせている真理亜の姿を発見すると、先程までの彼女の態度とはまるで違った状態を何事かと思い、声を掛けずにはいられなかった。
すると、声がかけられた真理亜が凄まじい勢いで村長の肩に掴みかかってくる。
「村長様！私の目から涙は流れていますか!?」
「いったいどうし…」
「早く!!」
そのマリアの細い腕からは考えられないような握力で掴まれ、指が食い込み肩はギシギシと軋む。
痛さに村長は顔を歪めながらも、必死の形相で訴えかけてくる彼女に何とかして答えるべく言葉を選んで事実を告げる。
「…わかりました。では、申し上げます。…私が見る限り、マリアさんの麗しい瞳から涙は流れていません。」
真理亜は村長の言葉を聞いた瞬間、美しい顔を絶望の色に染めた。
「っ!!…うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
真理亜は村長にもたれ掛かりながら大声で泣くが、その彼女の大きな瞳からは涙が零れることはなく、村長の服もまた濡れることはなかった。
マリアが泣く声を聞き、慌てて駆けつけて来たヨーゼフカと村長夫人はその光景を見るなり声を掛けようとするが、村長は無言の圧力で二人を止めさせ、おとなしくしているように言った。後ろに引き下った二人は心配そうな顔でマリアを見守っている。

彼女が泣き崩れた理由、それは彼女の仮説が実証されてしまったからだ。
彼女が立てた仮設の内容は至極単純なものだ。ただそれは『ここが《ユグドラシル》の世界なのではないか？』という常識を疑うような普

通では考えられない内容だったのだが…。
彼女がこの仮説に至った要因は極めて少ない。それは真理亜がヨーゼフカから言われた「ゴブリン」と「瞬きをしない」という二つのキーワードがこの仮説を成り立たせるのに十分な要因だったからだ。
まず、ヨーゼフカの言った「ゴブリン」とは、ファンタジーの世界等で出てくるように現実には存在しない空想上の生き物の事だ。
だが《ユグドラシル》をプレイしたことがある人間ならば誰もがその存在をよく知っている一般的なモンスターである。故に真理亜は真っ先に《ユグドラシル》の事を思い出し、またこの世界が《ユグドラシル》であるならば、そのような存在が居たとしても不思議ではないと思ったのだ。
次に「瞬きをしない」だが、これは真理亜が使っていたアバターに関係がある。
彼女が《ユグドラシル》で使っていたアバターの種族名は〈大いなる機械（マグナ・マキナ）〉と言い、有体に言えば全身が機械で構成されていて、その髪も、目も、肌も、服さえも金属でできた種族だった。
彼女は機械で出来た体とは言え、多額の課金により手に入れたデータクリスタルを使用して作り出したその人間然とした見た目を気に入っていた。だが周りのギルドメンバーも人間の姿とは大きくかけ離れた魑魅魍魎の異形種ばかり。少しくらい自分も何か人間離れしたことをしなければと考えた真理亜は『瞬きをしない』ことで、人間種にしか見えないその見た目が異形種のものであるという意思表示をしていたのだ。
そして姿見に映った真理亜の姿はまさしく《ユグドラシル》で遊んでいた時に彼女が使用していた『ローザリア』と言う名前をつけたアバターであり、『ここが《ユグドラシル》の世界なのではないか？』と言う仮説のほとんどが実証されてしまった。
この衝撃の出来事は彼女を一瞬で追い詰めた。
誰にも話す事が出来ない事実にやり場のない感情が合わさって、悲しみの感情に苛まれても彼女が涙を流さなかったのは、その体が《ユ

グドラシル》の設定をそのまま引き継いでいたことを示し、機械の身体になってしまった彼女は涙を流せなかったのだ。
暫くして泣き声がやみ、マリアが落ち着いたところを見計らって村長は声を掛ける。
「落ち着かれましたか?…その、大変失礼だとは思いますが、もしお話ししてくださるのであれば、あなたに何があったのか我々にお聞かせ願えませんか?」
しかし真理亜はうつむいたままフルフルと無言で首を横に振る。
「しまった」と村長は心の中で呟いた。
彼女は姿見を見ただけで泣きだしてしまうような、何か大事なことに気づいたのだろう。そうやすやすと他人に話せるような内容ではないはずだ。と、村長は好奇心が率先してしまい、彼女の気持ちをくみ取ってあげられなかったことを後悔した。
「わかりました…不躾な要求をしてしまい本当に申し訳ありません。…ですが我々はあなたの味方です。もし気が変わりましたらあなたの話しやすい方にお話しください。きっと誰でもあなたの相談に乗ってくれると思いますよ。」
村長はそう言いながらマリアの肩を優しく摩った。
どうにかしてこのお嬢さんを悲しみから救うことができないか模索していると、助け船を出したのは村長夫人だった。
「マリアさん、少し泣き疲れたでしょう?私達の家で休んでいきなさい。私は先に帰ってお茶の準備でもしておくわ。それからもっと別の話をしましょう、きっと気分が晴れるわ。」
村長夫人はそう言うと、未だに声を掛けあぐねているヨーゼフを強引に連れて先に村長宅へと帰っていった。
「ではそうするとしましょう、立てますか?」
村長が立ち上がろうとすると服の裾をキュッっと掴まれた気がした。
次に「村長…」と、か細い声で自分を呼んだのを聞き漏らさず声を掛けて来たマリアと同じ目線になるようにまた座り直した。
「…村長に…二つだけ伝えておきます…。これから私の名前を呼ぶと

きは『真理亜』ではなく『ローザリア』とお呼びください…私の本当(ニセモノ)の名です。…そして、私は村長が思っているほど人間ではないということです…。」

真理亜が村長に話した呟きは意味深長で、普通の人ならば理解に苦しむ内容だろう。

しかし長年カルネ村の村長をしてきた自分には人を見る目と、相手が何を考えているのかを察する能力を持っているという自負がある。その自信からマリアが今とても大切なことを私に話してくれたのだと直感的に理解していた。

「…そうですか。その言葉に秘められた意味を、思いを、私ではすべて汲み取ることができません…しかしマリ…いえ、ローザリアさんが今私に話してくださった言葉はとても大切な意味を孕んでいるということだけは理解できました。貴女が悲しみの中で振絞って出した言葉です、心して覚えておきましょう。」

真理亜は自分でも支離滅裂なことを言っているのは分かっていた。それでも村長は真正面から受け止めてくれ、出合って間もない真理亜のことを本気で思ってくれるその優しさに真理亜は深く感謝した。

「さて、そろそろ我が家帰るとしょう。きっと妻が何か用意してくれているはずです。かくいう私もお昼をまだ食べていませんでしてね？もうおなかがペコペコなんです。」

重たくなっていた空気を吹き飛ばすかの様に村長は明るい声で切り出して、家に帰ることを提案した。

「ふふっ…」

「お、やっと笑ってくださいましたね？美しい方は悲しんでいる姿も様になりますが、やはり笑った顔が一番ですな。」

村長の優しさと気遣いのお陰で真理亜の表情からは悲しみが消え、代わりに優しい微笑みを浮かべていた。その笑顔を見た村長は余りの美しさに見惚れそうになるも、お道化て誤魔化すのだった。

真理亜は決意した。

神よ、この世界で生き抜いて見せよというのならば、私は全力でそ

れに応えて見せる…と。
　それから村長宅へ着くなり村中の人と言う人が集まってきて、大賑わいだった。どうやらマリアのことが目当ての様で、これはまた質問の嵐だろうなぁと悟りつつ真理亜はその輪の中へ飛び込んで行くのだった。

　村長との話し合で、真理亜は自身を危機から村総出で救ってくれた恩を返したいことを伝え、村の住人として此処で生活をしたいことを希望すると、「喜んであなたをカルネ村の住人として迎え入れましょう」と村長は快諾してくれた。
　それからというもの、一村人として真理亜は幾日を過ごし、その平穏な日々に村長があの日マリアから伝えられた言葉を忘れかけた頃
　――――彼女（ローザリア）の運命を変える事件が起きるのだった。

それは男の浪漫

ここはリ・エスティーゼ王国領土内のはずれにある小さな村『カルネ村』。

そこに一人の青年が住んでいた。名前は『ヨーゼフカ・タイルトン』村人たちからはヨーゼフの愛称で呼ばれる村の農夫だ。

午前中の仕事を早めに終わらせた彼は、機嫌が良さそうに鼻歌交じりで村の外を散歩していた。とある一つの野心を胸に抱えて…

「ふんふふんふふ～ん♪お、あの木にしよう！角度もよさそうだ！」

そう言うと彼は目に止まった少し村の外れにある森の入り口近い高い木に駆け寄り、おもむろに登り始めた。

今の彼はさながら猿の様で、スイスイとあっという間に木の天辺にまで登り切り、普段は見られないその高い場所から見下ろす景色を堪能していた。

「ん～、いい風だ。」

この世界において森とは人間の住むべき場所ではないとされ、多くは危険な獣やモンスターが蔓延る魔境なっているのだが、そんな危険な場所に隣接してカルネ村が存続できているのにはちゃんと理由がある。

それはこの森、『トブの大森林』には古くから『森の賢王』と呼ばれる魔獣がナワバリとして生活している場所であったため、その影響によりカルネ村にはモンスターが近寄ることが滅多にない場所となっているのだ。

だからヨーゼフカが柵も無い村の外を歩いていても、誰かが見掛ければ少し注意するくらいで無理やり止めようとする者はいない。

そんなわけで彼の趣味の一つに木の上で昼寝をするというものがある、これも村の周囲が比較的安全だからできることだ。

だが、今日の彼の目的はそれじゃない。

『トブの大森林』に生えている草木は豊富な自然の恩恵により様々な種類が存在し、中には季節によってその時期でしか手に入らないような貴重な薬草が群生することもあるため、薬師が薬草を求めてこの

場所を訪れることも少なくない。
そして何よりも木が大きいのだ。背が高いとも言う。
高い場所とは得てして大変見晴らしの良い場所だ、周りに高い建物が無いのなら尚更に景色が良いだろう。
故に彼がこれから行おうとする行為には、高さと見晴らしの良さが重要なのだ。
ヨーゼフカは一人心の中で思い出す。あの熱き思いを抱いた時のことを…
…それはいつの時代も男達の心の中で生き続け、１２歳を迎えた頃に発芽する。年を重ねるごとに成長を続け大輪を咲かせ終えた頃にはまたいつの間にか次の世代へと受け継がれていく、無限の連鎖。
そう、これは男達の男達による男達のための浪漫…
『覗き』だ。
ヨーゼフカも一端(いっぱし)の男子、それも婦女子に興味が出てきてもしようがないグッドなお年頃だ。
そんな彼に幸か不幸か、自分にとても親切にしてくれるそれはそれは美人なオネイサンが突如として目の前に現れてしまったのだからさぁ心はパニック寸前！
猛々しい欲望の渦にまみれた男心はもはや誰に手にも止められず、一人こうして溜まりに溜まった欲望を吐き出しに赴いたのだ。
「さーてっとぉ、いっちょやりますか！」
彼はそう言いながらズボンのポケットを弄りある機械を取り出した。
その機械の見た目は眼鏡のような形をしていたが、レンズの部分には円筒が嵌められており、どうやら伸縮するようだ。
彼が取り出した機械の名前は『見通し眼鏡』と言う。
《ユグドラシル》では、単に遠くを見渡せるだけの需要の低いチープな汎用アイテムであり、レベルを上げて行けばこんなものよりもはるかに頼りになる索敵スキルをプレイヤーは習得できるため、手に入れたとしても売却なり廃棄したりと処分することの多いシロモノだった。

では何故彼がそんな《ユグドラシル》のアイテムを持っているのか？

それはローザリアが人知れず動作確認などを行っていた時に《ユグドラシル》と同様にしてアイテムボックスが開けることに気づき、アイテムボックスの隅っこの方で埃を被っていた『見通し眼鏡』を見つけた事が原因だ。

長いこと彼女はヨーゼフカにお世話になっていた事に感謝の気持ちを込めて何かお返ししなければと考えていた矢先、丁度良いタイミングで『見通し眼鏡』が見つかったので、これならば手放しても自分には何の不利益も生まれないし何よりも『世界を揺るがすような問題』は起きないだろうという判断に至ったため、お礼と言う形で処分したのだ。

ローザリアから世話になった時のお礼として『見通し眼鏡』を貰ったヨーゼフカは、見たこともない機械（モノ）を手に入れ大はしゃぎすると非常に喜んだ。しかしそれを与えた彼女からしてみれば、何の変哲もない唯の…言ってしまえばゴミであり、処分と言う名目で与えたはずが、彼のあまりの喜びように申し訳なさを感じずにはいられなかった事は言うまでもないだろう。

そんな彼女の気持ちを知ってか知らずか、ヨーゼフは有効活用する術を見つけ今に至る。残念ながら健全的な使い方ではないのだが…

「おー!!よっく見えるなこれ!スゲーー!!」

と高い木の上で足をジタバタさせながら一人で興奮しつつ、彼の標的である小高い場所に立つ一軒の建物をレンジャーの如き瞳で探す。

「あ☆れ☆だ…今日は『見通し眼鏡』のデビュー戦だ、思う存分『観て』やるぜぇ…グヘヘ…おお？どうやらお出ましのようだぁ…ジュルリ」

ブツブツと怪しい独り言を呟きながら、不敵な笑みを浮かべ、舌なめずりをする今の彼の姿を村の女性陣が見たら間違いなく集団暴行に合うだろう。更には女の敵として一生蔑まれること必至。ナンテカワイソウニ…。

まぁそんなことは微塵も考えないヨーゼフカは変なところで用意周到なのだ。

「この日、そしてこの時間！調べによればローザリアさんはお清めの時間だったはずだァ…今日こそ、その服の下に隠された秘法を拝ませてもらう…っ!!」

懲りずに変態発言を繰り返しながら『見通し眼鏡』の倍率を更に上げ、彼女にズームイン！した。

ヨーゼフカが熱い眼差しで覗いているとは露にも知らない（筈の）標的は、お清めと言う名の水浴びをするために服を脱ぎ始める。

ローザリアは先ず頭にかぶった修道帽子（ベール）に手をかける。

ベールを外したその頭には、他人に見せない様に隠されていた長いストレートの銀髪がサラサラと流れ、それだけでもこの村の大抵の男共は生唾を飲む美しさだろう。

次に彼女はワンピース状の修道服の背中に手を掛け、ボタンを外すと肩から脱ぎ始めた。

そして遂に彼は熱望していた存在を、下心の炎が燃える瞳で括目するのだ。

「ウッヒョーーー!!初めて会った時から思ってたけど、やっぱローザリアさんの『おっぱい』デケェーーーー!!!スゲェーーー!!!」ウオオオオオ!!

それは出合った当初からずっっっとチラチラと気にしていた彼女の胸だった。

いついかなる時も変わらず黒い修道服を彼女は身に着けていたため、その存在の大きさは村の男たちの中でも意見が分かれるほど曖昧な物だったのだが、今日彼は自分の憶測が間違っていなかったことを確信し狂喜乱舞した。

全力で鼻の下を伸ばしながらローザリアの豊満な双丘を舐めるように観察するヨーゼフカだったが、ふと異変に気づく。

ローザリアが修道服を腰のあたりまで下げたまま脱ぐのを止めていたのだ。

ヨーゼフカは最大倍率で胸を観察するのを止め、少し倍率を落とし彼女全体をレンズの中にとらえる。

「ほぇーー…おぉ??」

全身を映した彼女の姿にまた見惚れそうになるが、先程抱いた違和感が消えない。
胸が妙にザワついてくる気持ちを必死に抑え何か不自然な点が無いか探していると、あることに気づいた。いや、気づいてしまった。
(あれ?ローザリアさんこっちを見てないか…?)
そう、ローザリアが此方を向いていたのだ。その麗しいご尊顔まで寸分違わずに。
それから誰かに何かを伝えるようにして、ゆっくりと口を動かしていく。その口の動きに注目しながら彼女が言っているであろう言葉を自然と声に出してしまっていた。
「『あ』、『と』、『で』、『お』、『し』、『お』、『き』、『で』、『す』ぅうううう!!??」
復唱し終えたヨーゼフカは驚きのあまり木からズッコケそうになったが、何とか枝に掴まり直すことで態勢を整えることができた。
起き上がったときには既に彼女が居た部屋の窓にはカーテンが閉められ、中の様子はもう確認できない。
いや、今はそんなことなんてどうでもいい
(信じらんねぇ…ここからローザリアさんの家まで一体どれだけ離れてると思ってんだ…?普通なら気づけるはずも無いのにそれをあの人は「オシオキ」って…ホントに一体何者なんだローザリアさんは…?)
彼女がヨーゼフカに見せつけた人間離れした技に驚愕しながらも、しかし不思議の多い彼女ならこれ位の事なら平気でやりそうだなぁ、と心の中で呟くのだった。
「オシオキねぇ…何とか赦してもらえないかなー…はぁ、無理だな。諦めよう。このことはあとで素直に謝るとして、せっかくここまで来たんだ、もっと違う場所の景色を見てみるか。」
ローザリアに正座させられ、プリプリと怒られる自分の様を想像し…案外それもいいかもしれない…じゃなくて、落ち込みそうになる気分を紛らわせるために木の上で体を反転、森や草原の方を向き『見通し眼鏡』を使って普段は滅多に行かないような遠い場所へとヨーゼフ

カは思いを馳せるのだった。
「おっもうこんな時間か、そろそろ帰るかなっと…ん？なんだありゃ？」
夢中になって景色を見ていたため、気づけば時刻はお昼を過ぎていた。
グゥとなったお腹の音でお昼を食べ損ねていたことを思い出したヨーゼフカは、家に食い物あったっけなぁ？と呑気なことを考えながら木から降りようとした時、目の端に不審なものが映ったのを見逃さず、その方向に注意を向けた。
「ありゃあ…煙か？なんだろう…？そうだよ、こんな時のためにこの機械があるんじゃねえか！よしゃ、さっそく覗いてみっか。」
ヨーゼフカは降りかけていた体を起こし直すと、また『見通し眼鏡』を覗き込んだ。
しかしそのレンズに映り込んだのは奇麗な景色でも、見たことのない生き物でも、美しい美女でもなく、思わず目を疑いたくなるような光景に戦慄が走ったのだった。

緊急事態

（これはマズイ）

確信に近い直感で危険を察知した彼は素早く木から滑り降り、自分が持てる全ての力を足にそそぎ込んだ全速力で、この村の重役である村長が居るであろう自宅へと走った。

（今見た光景を一刻も早く告げ皆に広めなければ！これは村の存亡に関わる大問題だ！）

ヨーゼフカは内心不安と焦りで一杯一杯だった。こんな感情は産まれて初めてかもしれないぐらいに。

何度も疲労の溜まった足がもつれ合い転倒しそうになるが、前に進むためただひたすらに走る。

やっとの思いで村長宅に着くも長く走ってきたせいで勢いを殺せず、そのままタックルする形で村長宅に飛び込んだため、物凄くけたたましい音が周囲に鳴り響いた。

静かに白湯（さゆ）を飲みながら、村の備蓄状況や農作物の収穫量についての確認作業をしていた村長は、慌ただしいにも程がある来客に作業を邪魔された事よりも余りの訪問の無礼さに思わず怒鳴った。

「なんだ何事だ!?もっと静かに入って来ないか!!」

飛び込んできたのがヨーゼフカだと分かるとすぐさま説教を始めんとする村長だったが、彼のあまりの慌てふためく姿から、もしやただ事でないことが起きたのでは？と考え何があったのか尋ねる。

「どうしたのだそんなに慌てて…」

「村長大変だっ！ローザリアさんの胸はデケェ!!っじゃなくて大変なんだ！バハルス帝国の奴らがカルネ村から一番近い村を襲ってたんだよ!!」

「なんだとっ!?それは本当か⊠」

『帝国が村を襲っている』という衝撃的な言葉を受け、背筋に冷や汗が流れる。

ヨーゼフカのこの焦り様から彼が言っている事は本当だろう。彼は人を不安がらせる様な無益な嘘をつく真似をする男では無いこ

とはよく知っている。
（一体帝国共がこんな辺ぴな場所に来る用事とは何だ？略奪か？いや、そんな事をするほど帝国は貧乏な国ではない、むしろ裕福と呼べる国だろう。では何故にそんなことを…？）
村長は頭の中で一人思考を巡らせ始めるが、事態は刻々と進んでいく。
…いや、今は事を考えている場合ではない、近辺を帝国の人間が彷徨っている事を皆に伝え、村の外へ出ないよう注意を呼びかけなければ。
考えを改めた村長はすぐさま行動に移そうと村へ駆けだそうとした時、さらにヨーゼフカから追い打ちをかけられる。
「しかも奴ら次はこっちに来るみたいなんだ！」
その一言でこれから自分がすべきことは注意でもなんでもない事を悟った。
帝国がこの村に来る。
これは、村最大の危機だ‼？
更に考えを改めさせられた村長は、村人達の『避難』へと行動を瞬時に切り替える。
こうなってはなりふり構ってはいられない、上ずりそうになる声を必死に隠してヨーゼフカに指示を出す。
「緊急事態だヨーゼフ!!お前は村の男どもにこのことを伝えて迎え撃つ準備をさせよ！ついでにローザリア先生にこのことを伝えて来い、子供たちは今学校で授業をしているはずだ！私は避難指示を出してくる！
妻よ、今の話を聞いていたな!?お前はもう一つの避難所である此処の片付けをして村人を受け入れる体制を整えなさいっ！よし、行くぞっ!!」
「わかった!!」
半狂乱になりながらも、この村を守るために男二人は家を飛び出した。

ここは集会場の一部を教室として使い、子供たちに教育をするための学校である。
そこで教師を務めているのはローザリアだ。彼女は現実世界では勉強ができた方で、学校の成績もよい点数を納めていた。
そのため、教養ある立ち振る舞いと神職を勤められる偉いお方と言う理由で子供たちの先生を村人達から抜擢されたのである。
(なんでしょう、外が騒がしいですね?)
「どうしたんですか、ローザリア先生?」
ザワザワとした気配を外から感じ取ったローザリアは、黒板に文字を書いていた手を止める。
しかし子供たちは急に板書の手が止まったことを不審に思い、一人の生徒が代表して何かあったのかと尋ねてきた。
声を掛けてきたのは、この学校で教えている子供達の中でも一番の年長者である『エンリ・エモット』だった。
学校を開いてからわかったことなのだが、彼女は優秀な頭脳の持ち主でローザリアの知識をどんどんと吸収していく村でも一目置かれた将来有望な少女だ。
それに村の女子の中では、一番仲の良い存在だと思っている。こうして今は授業で一生徒として扱っているが、学校が終わってしまえばタメ口で話すほどの親友と呼べる人間だ。
こちらの世界に来て気を許せる相手ができたと言うのは、とても幸運なことだろう。
「あぁ、どうやら外が騒がしいようなので少し様子を見てきます。その間、皆さんは今やったことの復習をしていてください。エンリ、少しみんなの事を頼みます。」
「わかりました。」
子供達から「「はーい!」」という元気な声が帰ってきて思わず笑顔になるローザリアだったが、集会所の外へ出てから表情を厳しいものに変える。
それは男たちの慌てようから何か異変が起きていることを察知したからだ。

「あっヨーゼフカ！、いったい何があったのですか？」
　丁度いいところに現れた顔見知りの男、ヨーゼフカに声を掛けると少しギョッとした顔をするがすぐに真剣な顔に戻り今起きていることを教えてくれた。
「あ、さっきはその、ごめん！つい出来心で…ってそれどころじゃない！ローザリア先生大変なんだ！この村に帝国の奴等…鎧を着ていたから多分騎士だ！そいつらが此処へ向かって来てるんだよ！」
「帝国ですって!?」
　ローザリアは『帝国』と言う言葉に思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。それから冷静に村長との話を思い出した。
　この村に住むこととなったローザリアは、村長からある程度この国とその周辺国のおおまかな情勢を聞き出しており、この世界が《ユグドラシル》の世界とは全くの別物だということは理解していた。その代わりに今存在しているこの世界を統治している国を教わり、その国の一つであるリ・エスティーゼ王国に属するこの村にとって『帝国』が指す意味はとは
　――すなわち敵の襲来である。
「しかし何故っ!?」
「そんなもんわっかんねぇよ!?でもこっちに向かって来てるってことは、ここが目的だってことは確かだ！男たちで何とかしてこの村を守ろうと思ってる、だけど女子供は危険だ！早く避難してくれ！」
　気がつけば、周りには知らせを受けた村の男達がクワや干し草などをまとめるときに使うピッチフォークなど武器になりそうな物を手に取って戦う姿勢を見せていた。しかしその両足はガクガクと震え、突けば今にも腰から崩れ落ちそうな状態の者ばかりだ。
　こんな状態でまともに戦えるわけがない…
「いえ、私も手伝います！村人達の避難を優先させなければいけません！幸い子供たちは集会場に集まっているので避難漏れの心配はありません。高齢の方や怪我などで動けない方達を優先的に集会場へ避難させましょう。」
「わ、わかった!!俺はまだこのことを村の男共に伝えなきゃなんねぇ。

あんた、絶対に無茶はすんなよ!?」
ヨーゼフカが言い終わるかどうかで既にローザリアは駆け出し、何も知らないであろう教え子たちの下へ向かった。
その顔に焦りと困惑の感情をごちゃ混ぜにした表情を浮かべながら、彼女は心の中で叫ぶ。
(なぜこの村を襲うような真似を帝国がするのです!?一体何の目的があってこの小さな村を襲おうとするのですか!?)
いくら考えたところで答が出る筈も無い。それでも彼女は問い続ける。そして彼女は思い出す…
(…まさか、これは私への神が下した罰だというなのですか…?私が少しでも人間として生きようとしたからなのですかっ!?)
――自身が人間ではなかったことを。
(…きっとそうです…これは平和な日々に甘んじて過ごした私への神が与えたもうた罰なのでしょう、「お前の生き方はそうではない」と…ですが!ですが、これではっ!!)
ギリィ!と音が聞こえそうなほど命一杯歯を食いしばりながら子供達のいる集会場へローザリアは走る。
(神よっ!!罰を受けるのは私だけでよいはずでないですか!?なぜ村人たちまで巻き込むような真似をするのです!!)
余りにも強く歯を食いしばり続けたためか唇に歯が大きく食い込む。
常人ならばその痛さに少しは噛む力を弱めるだろう。しかし彼女は機械だ、痛みなど感じない。深く噛まれたニセモノの唇からは血なんて流れていなかった。
(お答え下さい!神よっっ!!)
集会場に着くと、走る急いそのままで扉を開けたためバンッ!!と大きな音が鳴り響く。
中にいた子供たちは少し驚いた顔をするが、ローザリアは構わずヨーゼフカから聞いた話を子供たちに伝えた。たちまちその幼い顔に恐怖の色が浮かぶが、そんなものは想定済みだ。子供達を安心させるために、彼女はは先ほどの緊迫した口調とは打って変わって優しい

宥める様な口調で話を続ける。
「皆さん落ち着いて下さい。大丈夫、この建物は村一番に頑丈な建物です。この中にいればあなた達は守られるでしょう。それに村の男たちが貴方達とこの村を守るために立ち上がってくれています、ですから安心してくださいね。」
優しく穏やかに「ここは安全だ」と言うローザリアの言葉を聞いて、子供たちの表情から恐怖と不安は少しばかり取り除かれたようだ。
しかし、いくら頑丈とはいえ帝国騎士達がこの建物に火を放つようなことをすれば、中にいる者達を焼き尽くす地獄の窯と化すだろう。
そうなってしまっては元も子もない。正直、今の男たちは贔屓目に見ても戦う事なんてできやしない。帝国騎士の玩具として蹂躙された後、十中八九手当たり次第に村の建物に火を撒いて、中にいる女子供を炙り出すことは目に見えている。
帝国の騎士が、どれくらい強いかは分からない。それでも今の男達よりは私が戦った方がまだまともに渡り合えるだろう。
…しかし手元に武器が無い。
農具などはその用途にそってならば使うことができるが、武器として扱おうとした時、どれだけ強く握ろうと手から滑るようにして落ちてしまう。《ユグドラシル》で例えるならば、近接武器を装備できる職業を一切取っていないためにこういった手に持つ武器を装備することができないことと一緒だろう。この非常事態になるまで気づかなかったのは、やはり平穏な日々に甘えていたツケが回ってきているのだ。
唯一自分が持てる武器は、引退するときにギルドマスターへ譲渡したままだ。このままではまともな戦闘はできない…あの姿になる以外には…
――今はまだ決断の時ではない。
「私はまた外へ出て避難の手伝いをしてきます。皆さんはここにたくさんの人が集まってくるので、この部屋と他の部屋を片付け、空間を広くしておいてください。エンリ、貴方にはここを任せます。では皆さんよろしいですね？」

「「はいっ!!」」
子供達の思いのほか元気な声を聞いて少し驚いた。これならパニックも無く速やかに避難の受け入れができるだろう。それにどうやら私の教え子たちはなかなか肝の据わった子達のようだ。
そんなことを思いながらローザリアはまた外へ出て、先程ヨーゼフカに告げた行動を開始するのだった。

別れ

時間は今から少し戻る。

そこはカルネ村から少し離れた平原で馬に乗った数十の帝国の鎧を身に纏った兵士たちが集まり、次の目的地への襲撃について作戦とはとても呼べないような話し合いをしていた。

「いや～さっきは最高だったなぁ！」

「泣きながら必死になって逃げちゃってさァ、馬に乗ってる俺らから逃げられるとでも思ってたのかよｗｗ」

「まったく逃げ惑う奴を後ろから斬るのは堪んねぇぜ！なァ！隊長もそう思うだろォ!?」

一人の兵士が呼びかけると反吐が出るほど下種い会話をする兵士たちの輪から、少し風格の違う鎧を身にまとう男が前に進み出た。

「全くお前らは人間を殺すことしか頭にないのか。ふんっまあいい…おい、てめぇら！準備はいいか？次はあの村だ、命一杯暴れろよ？一匹も生して残すんじゃねーぞ！」

「うおおおおお!!」

「あーー…早く殺したい…」

「…下らん。」

「言われなくたって分かってますって隊長ぉ！」

その男の怒声に続くようにして周りに居る兵士たちが各々に感情を昂ぶらせる。

兵士から隊長と呼ばれているこの男の名は『ベリュース』。ある目的のために国から派遣された独立部隊の隊長だ。

ベリュースは兵士たちの指揮が上がったことを確認し、村への襲撃を命令した。

「では行けっ、さっさと八つ裂きしにしてこい！」

鶴の一声で兵士たちは口々に寄声を上げ、カルネ村に突撃していった。

だがそんな兵士たちを、彼らとは真逆の心情で冷ややかにベリュースは眺める。

（くくく低能の馬鹿どもめ…この作戦を終えれば、俺の地位がまた一段階ステップアップする事は確実だ！報酬もお前らには一切やらん、私が全て頂く！…まぁせいぜい俺の、踏み台兼捨て駒として馬車馬の如く働いてくれたまえよ。）

熱く燃える野心を抱えつつ、ベリュースもカルネ村へ突撃した。

彼は知らない。彼自身もまた国の捨て駒だということを。

帝国騎士の標的となった事を知り慌てふためくカルネ村だったが、ヨーゼフカの素早い発見と村長やローザリア等による手際よい避難指示によって、帝国兵達が到着するよりもずっと早く避難を完了させていた。

あとは外にいる村の男たちの働き次第で、この村の運命が決まるのをただ待つだけの状態だ。

「よしっ！お、お前ら気合入れて行けよ！この村の運命は俺たちに掛かってるんだからな!!」

その男たちの中心で一人叫ぶ男が居た、第一発見者のヨーゼフカである。

恐怖心が表に出てこない様に必死に自らを鼓舞して村長からの指示である男達の指揮を執っていた。

「おうっ!!」

ヨーゼフカの呼びかけに大きな声で続く男たちだったが、依然として足はガクガクと震え、耳にはカチカチと歯が鳴る音が忙しなく聴こえる。手慣れた筈の農具を持つ手はこれから来る恐怖に怯えおぼつかない。

こんなことでは帝国兵を前にした途端、一気に心の箍（たが）が外れて恐怖に体を支配されたまま何の抵抗も出来ずに皆殺しにされるのがオチだろう。

（……。）

そんな男たちの背中をローザリアは無言で見つめる。

村人たちを避難させるという彼女の仕事はとうに終わっており、本来ならば今は避難所で彼女の教え子達と共にしているはずだった。

しかし彼女がこうして集会場の外へ出ているのは、男たちが心配だからなのもあるが、もっと個人的な理由だ。
ローザリアは迷っていたのだ。
このまま男たちが皆殺しに合うのを指をくわえたまま見捨て、帝国騎士が村を襲うのを赦すのか、…それとも自分の正体を晒して帝国騎士達を皆殺しにするか。
正義ある者ならば迷わず後者を選ぶだろう、よく正体を隠した英雄が人助けをする話なんかは多い。ただしそれは人間の世界の人間に限った場合の話だ。
彼女は違う。『異形種』という人間からすれば立派な化け物の彼女が同じようなことをした場合はどうだろうか？まともな人間は感謝よりも先に恐怖が勝つだろう、そしてこの村の人間達も同じだ。
つまり今ここで己の真の姿を晒すということは、この村での生活を捨てることに他ならない。
この村での生活は毎日が楽しかった。２１ＸＸ年と言う遥か未来の時代に住んでいた彼女は、普段当然の様に何気なく使っていた文明の利器もこの世界には存在しない。その不自由さが彼女にとっては新鮮で、何よりも新しく、楽しかった。
仲の良い友達もできた。生前の世界でも友達は居た、しかし認識としてはただ一緒のクラスになったクラスメイトみたいな感じでしかなかった。
それが今は、心から話し合える素晴らしい親友に出会った。これは《ユグドラシル》であの仲間達と出会った時以来だろう。
だから迷った。
全く知らないこの世界で不安に圧し潰されそうになった自分に救いの手を差し伸べてくれたこの村から離れなければならないことがどうしても嫌だった。
しかし決断は迫られる。
今の自分にとって何よりも大事な存在であるこの村人たちは、己に下された天罰の巻き添えをくらうのだ。
それを回避するためには、決断しなければならない。自身の正体を

白日の下にさらすことを。
残された猶予は無く、しかし誰にも相談できない「迷い」が彼女の足を自然と外に向かわせていたのだ。
「ローザリアさんっ！」
そこへ声を掛けて来たのは、未だ避難所の外へ出ているローザリアを見かねて連れ戻すべく、エンリがたまらず集会場から出て来ていた。
「エンリ…」
親友の姿を目にするもローザリアの表情は優れない。
「さぁ！早く避難しましょうっ、ここは危険です！」
エンリが泣きそうな顔をしながらローザリアの手を取り必死に連れ戻そうとする。しかし彼女は動かない。動けない。
そのような態度をとる彼女に少し苛立ち、声を荒げる
「男たちが心配なのはわかりますっ！私もさっきからずっと心配で、胸が張り裂けそうで苦しくて仕方ありません！でも非力な女の私たちにはどうしようもできないんです!!」
遂に泣き出してしまったエンリは、それでも動こうとしないローザリアに必死に訴えかける。
（この子なら、私のためにここまでしてくれる彼女になら相談してもよいかもしれない…）
大粒の涙を浮かべながら自分の身を案じて泣いてくれる親友に、ずっと胸の中に抱えて来た迷いを打ち明けることを決意した。
ローザリアはエンリの瞳を真っすぐに見つめる。
「エンリ、少し私の話を聞いてはいただけませんか…」
しかしエンリはこの緊急事態に何を言っているんだ！といった表情で却下する。当然だろう、誰がこんな危険極まりない場所で話しなどしたいものか。
「避難所に着いたら幾らでも聞きますから！今は早く戻りましょう！」
「それでは遅すぎるのです…どうか、お願い…。」
エンリはようやくローザリアの雰囲気がいつもとは違うことに気

づいた。
女の中では最も親しい仲だったエンリにも、一度として見せたことはなかった彼女の迷いが露わになった表情に驚きを隠せない。
彼女が自分に初めて見せた弱気な態度に、きっと何か大事なことを話そうとしてくれているのだと感じ取り、ローザリアの話を改めて聞く姿勢になる。
「っ…わかりました。でも手短にお願いします。」
その言葉を聞いたローザリアはちょっとだけ嬉しそうな顔をしたがまたすぐに迷いの深い表情へと戻ってしまった。
「ありがとう、やっぱり貴女は優しいわね。では、単刀直入に聞きます…エンリ、貴方はもし私が得体の知れない化け物だったとしても…それでも私のことを『ローザリア』と呼んで慕ってくれますか…？」
エンリにはローザリアの言っていることが理解できなかった。ローザリアが化け物？それこそ一体何を彼女は言っているんだ…？
いや、ちがう、そうじゃない、今考えるのはそこじゃ無い。彼女は自分に問うたのだ、「化け物でも好きでいてくれるか」と。
それならばエンリの答えは一つしかない。
「ローザリアさんの言った『化け物』という言葉の意味が私にはよくわかりません。でもこれだけはハッキリ言える！私はね…この村で誰よりも優しい心の持ち主の貴女が、奇麗で美しくて思わず見とれちゃう貴女が、子供達と一緒に遊んで泥だらけになった貴女が、この村のことを一番に思ってくれて、真っ先に貢献しようとしてくれる貴方が…そして何よりも、私の、エンリ・エモットの親友である貴方が私は大好き！」
エンリの告白を聞いたローザリアは心底びっくりした様な表情をした後、いつも彼女に見せる慈母のような優しい笑顔へと変わっていた。
もうローザリアに迷いの影は無い。
「ふふっ…そう、ありがとうエンリ。そこまで言われてしまうと、何だか一人で悩んでいた私が馬鹿みたいね。
私も貴女のことが大好きよ、言葉で表しきれないくらいに。こんな

親友を手に入れてしまっては、もしかしたら一生分の運を使い果たしてしまったかもしれないわね。」
　彼女は朗らかに笑う。それからまた突拍子も無い事を言うのだ。
「聞いてエンリ、私は今から男たちを助けに行くわ。そしたらもう村には戻れなくなるかもしれない。でも大丈夫、私の名に懸けて必ずこの村を守って見せるわ。」
　本当にさっきから目の前の女性はとんでもない発言ばかりして心臓に悪い。私の気持ちを伝えたために彼女はこんなことを言い始めてしまったのか？…しかしその奇麗な顔に喜びの感情を爆発させながら握っていた手を逆に握られてブンブンと振り回されると、とても「行っちゃ駄目だ」なんて雰囲気ではない。
　でもやっぱり駄目だ、私の家族と同じくらい大事な彼女を戦地へ向かわせるわけには彼女の親友として意地でも許さない。
「駄目です!!」
「知ってるわ。」
　えぇ…そんなニコやかに言われたから意地がどっかに飛んで行っちゃったよ…。
　…多分もう何を言っても彼女はきっとこの調子だろう。ならば親友として彼女に言えることはまた一つしかない。
「わかった…でも本当はスッゴク嫌！だけど、止めるのは無理そうだから諦める。でもこれだけは約束して、絶対に帰ってくるって。」
　エンリの「帰ってくる」と言う言葉を聞いた瞬間、ローザリアの表情が少し哀しみの籠ったものになる。
「私が帰ってこれるかは、貴方達次第よ…」
　しかしまたすぐに明るい声と表情に戻り、言葉を続ける。
「もし私が帰ってこれなくても、心配しないで。それとこれを貴女に授けます、賢い貴女になら使いこなせるはずよ。」
　そうして彼女から手渡されたのは両の掌に収まるほどの何の変哲もない二つの小さな角笛だ。
　エンリは受けると親友へと真っすぐ見つめて送り出す。これは最後の意地だ、絶対に帰ってきてもらうための魔法の言葉を使う。

「またね」
「ええ、またね」

人間を辞めた日

「来るぞみんな！ちゃんと尻の穴閉じとけよ!!」
　ヨーゼフカは男たちの中心で目の前に迫り来る帝国騎士達に屈しないよう、一生懸命に己と周りを励まし続けていた。
「やっぱ駄目だぁ！ゴメンッ!!」
「俺も無理だ！うわあああああああっ!!」
　だが彼の努力もむなしく恐怖に耐えかねて心折れる者が続出し、前線は既に崩壊してもうほとんど人は残っていなかった。
（クソッ俺だって怖いけどよ！それでも俺たちが戦わなかったら誰がこの村を守るっていうんだよ!!）
　ガクガクと震える膝を片手で押さえ、カチカチと歯が鳴らない様にきつく口を食いしばり、やりきれない思いを胸の中で叫ぶ。だがそれすらも反力にしてヨーゼフは立ち向かい続ける。
　もう目の前に映る帝国騎士達への緊張で、恐怖で、呼吸が苦しくなるほど早鳴りする心臓は今にも爆発してしまいそうだ。
「ヒャッハーッッッ!!!」
「この村の男共はこれだけかァ？」
「皆殺しだーーっっ!!」
　両者の距離は帝国騎士達の怒号が明瞭に聞こえるほどにまで短くなっていた。
　もう逃げられない。
（この戦いが終わったら、俺はローザリアに思いを告げるんだ！だから絶対に死ねないし死ぬつもりもない！やってやる！やってやるぞぉおおおおおお!!!）
　遂に決戦と言う虐殺の火蓋が切られようとした、その瞬間
　――ドガーーーン!!!
　両者との間に突如として上空から何かが降ってきて、瞬く間に周囲を砂埃で覆い尽くす。
　その異常事態と衝撃に帝国騎士達の馬が驚いてしまい、落馬する者が続出。カルネ村の男たち弱り切っていた足に何かの落下の衝撃で

体制が崩され、尻餅をついて何事かと目を見開いていた。
その場にいる全ての人間の動きが止まる。
（一体何だってんだ…？）
立ち上る砂煙の中、勇敢にも何が降ってきたのか確認しようと落下点に近づくヨーゼフカの耳へ良く知った声が聞こえてきた。
「ヨーゼフカ」
その凛と澄んだ声の持ち主を自分は一人しか知らない。
「ローザリアなのか!?」
そう叫ぶと土煙が掻き消えるように消え、中から現れたのは彼が密かに思いを寄せている女性だった。胸だって見たことあるんだぜ？
「ヨーゼフカ、よくぞここまで踏ん張りましたね。貴方がそれほどまでの勇気の持ち主だったなんて、私少し見直してしまいました。」
意中の人にそんな体がこそばゆくなるようなことを言われれば、こんな非常時でも全力で頬を赤らめてしまうヨーゼフカなのだが、ハッと我に返るといつの間にか目の前に現れた彼女に対して当然の疑問を尋ねる。
「ローザリア一体どこから!?いやそんなことよりこんな所にいちゃ危ねぇよ！早く避難所に戻れ!!」
帝国騎士達の馬は未だに暴れ、それを抑えるのと訳の分からない状況に半ばパニック寸前だった。
しかしその間にも二人の会話は続けられる。
「いいえ、戻るのは貴方ですヨーゼフカ。」
自分に対して信じられないことを言う目の前の女性にヨーゼフカは全力で咬みつく。
「馬鹿野郎！女が戦場に出てきて何ができるっていうんだ！いいからとっとと戻れって!!」
しかしローザリアからは引く気配が微塵も感じられなかった。何か決意を秘めた雰囲気もする。
だが、彼はそのことに気づこうとも、もうなんでもいいからローザリアに避難所へ戻ってほしかった。
「頼むよ！あんたが死んじまったら俺はどうしたらいい!?どうやって

生きて行けばいい!?何をして生きて行けばいい!?俺の生きがいのアンタが目の前で知らねぇ男に殺されるような事があったら俺はもう生きて行けねぇんだよ!!」
彼は必死さのあまり戦いが終わった後に告げようと思っていた言葉を思わず口走ってしまった。
その彼の必死の告白を聞いたローザリアは優しくヨーゼフカに微笑みかけてくる。
ヨーゼフカはその表情で、もしや俺の思いに答えてくれたのか!?と期待に胸が高鳴ったが、彼女が返した答えはもっと残酷なものだった。
「ふふっ、貴方も私のことをそこまで好いてくれたのですね。もう幸せで胸がはちきれそうです。ありがとうヨーゼフカ。…でもね、貴方が好きになってしまった女性は、貴方の想像もつかないモノなのですよ。貴方がどうしても戻らないというのならばいいです、其処で見ていてください。きっと後悔すると思いますが…」
ようやく事態を収拾した帝国騎士達は、急に目の前に現れた見慣れない姿の女に、これから自分たちが得る筈だった快楽の邪魔をされたことに、口汚く唾を飛ばしながら罵詈雑言の嵐を叩きつける。
しかし目の前にいる女はそれらをまるで気にも留めていないらしく、帝国騎士達はその彼女の態度に怒りをさらに高めるのだった。
「こんのクサレアマァ!よくも邪魔してくれたなぁ!?ぶっ殺してやらぁっ!!」
怒りに理性が負け、我慢できなくなった帝国騎士の一人がローザリアに猛然と切りかかる。流石騎士なだけはある。その重い鎧を身に纏いながらも素早い動きで距離を詰めて来たのだ、これでは村の男がいくらいようが勝てる訳も無い。
その騎士が切りかかってくる様を見ていたヨーゼフカはもう駄目だと思わず目を瞑った。
(あれは素人目に見ても必殺の一撃だ。それに早い、避けられるわけがない。男の俺だって無理だ。怖い!体が動かないっ!君を庇うこともできない!!情けない俺を許してくれ!!)

愛しい女性が切り殺される姿など誰が見たいものかと…

――ガキィイイン!!!

しかし彼が聴いたのは、肉が切られた時のような鈍い音ではなく、むしろ硬い金属同士がぶつかる甲高い音だった。

普通、人を切った際にはとてもじゃないが鎧を着ていたりしない限り響かない音であろう。

不思議に思ったヨーゼフカは恐怖で瞑っていた目を開けると信じられない光景が目に飛び込んできた。

刃を向けた帝国騎士も今何が起きたのか理解が追い付かないらしく、フルフェイスの兜の下で狼狽の表情を浮かべている。

一体何が起こったのか?それは一目瞭然だ。

信じられないことに、ローザリアが手の甲で帝国騎士の振るった剣撃を受け止めていたのだ。普通なら手袋しかしていない手はそのまま剣の鋭さによって切り飛ばされるだろう、常人ならそもそも恐ろしくてそんな真似はできない。

もし手袋に鉄板が入っていたならば受け止められる可能性があっただろうが、彼女の嵌めていた手袋は豪華でありながら決して派手ではなく上品に仕立て上げられたレースの白い手袋だったのだ。鉄板なぞ入っていようもない。

だが彼女は、大の男が渾身の力を怒りと共に込めて振るってきた剣撃に顔色一つ変えず、それはまるで偶然出会った知り合いに軽い挨拶をするときのような軽く手を挙げる仕草で何事もなかったかのように受け止めていたのだ。

その信じられない事態にやっと気づいた帝国騎士は狼狽の表情を驚愕の表情へと変える。

しかしそんなことなど心底どうでも良く、更に言うなればヨーゼフカと大事な話をしていたところを邪魔されたローザリアは少し怒っていた。

怒気を僅かに孕んだ声で帝国騎士達に静かに語り掛ける。

「まったく、人間風情が良く吠えますね…。いいですか、よくお聞きなさい。刃を相手に振るうということは、振るった相手に反撃をされて

も構わないという意思表示と覚悟を意味します。剣をただ無差別に振るい、自分よりも弱い者達を傷つける快楽に酔っているあなた方に、その覚悟がおありですか？」

一体俺たちの目の前にいる糞女は何を言い出したんだ？

帝国騎士たちは唐突に自分達へ向けられた道徳的説教に一瞬戸惑ったが、誇り高い兵士の陳腐なプライドが逆撫でされ、自分たちに生意気な口を利く女へ冷めかけていた怒りがまた沸々と煮えたぎり、全ての兵士たちの顔が怒りの色に染め上げられる。

「なんだとこのクソアマァ!?」

「俺たちをなんだと思っていやがる!!」

口々に暴言を吐く兵士達の中で一際怒りに身を震わせていた男が居た。これまた一際自尊心の高い男であるこの部隊の隊長ベリュースだ。

（このクソッ垂れな女は私に向かってなんと言った!?この部隊の隊長であり、いずれ法国のトップとなるこの私に向かって説教だと!?なんて生意気な！なんて愚かしい!!絶対に絶ッ対に許さんぞぉ!!この私を辱めたことを後悔させてやる!!）

怒りが頂点に達したベリュースは部方達に命令する。

「お前ら！あの女は半殺しにしろっ！俺が止めを刺ぁす！その前にたっぷり可愛がってやるがなぁ!?あーはっは!!それから見るも無残に嬲り殺してくれる、産まれてきたことを後悔するくらい惨たらしくな!!」

怒りに我を忘れた彼らはベリュースの命令を受けて、雄叫びをあげながら一斉にローザリアへと切りかかる。

しかし彼らは忘れていた、いや、意識したくなくて忘れたのかもしれない。

剣を生身で受け止めた彼女の異常な振る舞いを。

そして彼らは実感するのだ、自分たちが相手にしているのはとんでもない女だったのだと。

（なんと救いようのない…彼らの行いは許されるものではありません、愚者には裁きを…。先ほどの兵士の斬撃である程度この方達の強

さは把握できました。しかしどんな隠し玉があるかわかりません。覚悟を決めた以上全力で対処するとしましょう。）

帝国騎士達はもう剣を振れば届く距離にいた。が、彼らが切りかかる直前で彼女は呟くようにして特殊スキルを発動させる。

「〈機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）〉起動」

呟くと同時に凄まじい爆風が彼女を中心にして巻き上がり、切りかかる寸前だった帝国騎士達がその風圧で吹き飛ばされる。

一瞬の出来事だったため一体何が起きたのか理解できない帝国騎士達は自分たちを吹き飛ばしたであろう存在を睨みつける。だがその鋭かった視線は次第に怯えた子供のような目に変わっていき、ただただ目の前の存在が得体のしれないモノに変異していく様を見ることしかできなかった。

スキル発動と同時に彼女の姿は銀色に変わる。

その着ていた服も、頭に着けていたベールも、長く美しいストレートの銀髪も、麗しい顔さえも輝く二つの瞳を奇麗な若草色から血に濡れた赤色へと変えて残した今は、ドロドロとした水銀に包まれたかのように全身を覆われていた。

そして液体状の何かはヌルヌルとスライムのように蠢き形を変えてゆく。

見る見るうちにローザリアの原型は崩れ去り、新たに形を成した。それは、とてもこの時代に存在してはいけない人智を超えたモノだった。

彼女の種族である『大いなる機械（マグナ・マキナ）』に加え課金により手に入る種族の一つである『機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）』は、自身を純粋な戦闘兵器へと変えることのできる種族だ。

今の彼女にシスターの面影は無い。

その体表面を覆うのは現代では解明できない謎の金属により構築された深紅の装甲。そしてその装甲に這うように捲きつく植物の蔓を連想させる緑色の線が周期的に点滅を繰り返している。

胸には大きな白をベースに金で縁取られた大きな十字架があり、そのクロスの中央には薔薇の花弁が赤く刻印されている。

頭は流線型の攻撃的なフォルムをした頭部にすげ変わっており口と鼻は無く、唯一顔のパーツとして残った目の部分は、その形を模る様に白い直線で囲まれ、その中で深紅の瞳が欄欄と煌めく。
体の全ての末端は鋭くとがっており、手や足は鉤爪に、両肩からは美しい曲線を描いた棘が三本生え、その先端はどれも体を這う蔓と同じ色をしている。まるで薔薇の棘だ。
否、彼女は薔薇なのだ。
彼女が《ユグドラシル》で膨大な量のデータクリスタルを使い仲間と創造した、彼女の名を体現するもう一つの真の姿だ。
「見ヨ、ソシテ畏レヨ。我は星ヲ堕トセシ者ナリ。」
そして今の彼女が発する声は、ヨーゼフカが好きだったあの凛と澄んだ声ではなく、いろんな人間の声を雑多に合成したような、とても人間の出せる声ではなかった。
帝国騎士達は立ち尽くす。
今まで生きてきた中で、一度も見たことも聞いたこともない存在と対峙してしまっているこの状況に、そのちっちゃい脳みそがついていけていないのだ。
何故こんなことになった？俺たちの目の前に居るこいつはなんだ??なぜ、なんで?、どうして…？
――なんでこんなに（恐怖の）涙が止まらないんだ…
帝国騎士達は目の前の異形から体を滅多刺しにされるような凍てつく殺意の刃を向けられ、まるで地面に磔にされたように動けなくなり、そのまま"死"を迎える。
「罪深キ人間ニ裁キノ光ヲ…〈超高密度収束光（ザー）：拡散型（タイプディフュージョン）〉」
ローザリアは帝国騎士達に向け両腕を水平に向ける。
その鋭く尖った十本の鉤爪に意識を集中させ帝国騎士達の急所以外を的確に狙うと、その爪先から放射状の赤い閃光を一瞬だけ放った。
…本当は体の一部を痛めつけて脅すことが目的だったのだが、この世界での戦闘が初めてであり、威力の調整を間違えたせいで、急所も何も関係なく攻撃をくらった場所から騎士たちの体は跡形もなく吹

き飛んでしまった。
訪れるのは静寂。
普段から暴力を好まず、生きている人間を傷つけることを是としない彼女にとって人間を殺すなど決して己の良心が許さない行為であった筈だ。
…筈だったのだが、たった今数十人の人間を消し飛ばしたというのにも関わらず、良心の呵責も罪の意識も悔恨の念も感じない。
そう何とも思わないのだ。
（人の姿を失い、人の心すらも、私は失ってしまったのですね…。…あぁ神よ、人の心を忘れた今の私に、あなたを信仰する資格があるのでしょうか…）
全てを消し飛ばした張本人は、何の感情も起きない機械の心に自問自答を繰り返すのだった。

本当の別れ

帝国騎士を消し去るのに時間はほんの1秒もかからなかった。
しかしその場に未だ残っていた人間に対しては恐怖を植え付けるという意味では充分な時間であった。
村の男共は口々に叫びながら村へ脱兎の如く逃げ帰っていく。だがそれでもまだ一人残る者が居た、ヨーゼフカだ。
ヨーゼフカは帝国騎士共を一瞬で消し去った後動かなくなった目の前にいる存在に意を決して声を掛ける。
「…な、なぁ…本当にお前あの『ローザリア』なのかよ…？」
その呼びかけに呼応するようにして、固まっていた目の前の存在が動き出しヨーゼフカへ体を向けると問いに答えた。
「ソウダ。我ハオ前達ガ助ケ出シタ人間、否、異形種ノ化ケ物『ローザリア』ダ。」
ヨーゼフカは違うと言ってほしかった。
しかし帰ってきた返答は残酷なまでに真実だった。
それでも、どうしても認めたくないヨーゼフカは強引にその真実から目を背ける。
「嘘だっ!!ローザリアを何処へやったんだこの化け物!!ローザリアを返せよっ!!」
ヨーゼフカは叫ぶ。
美しかった彼女が、笑顔が素敵な彼女が、自分が思いを寄せた彼女が、この世のものとは思えない化け物になってしまった真実を否定するために。
彼の叫びは魂の叫びだ。
もし人間であったならばその熱き思いに心を動かされただろう。だが身も心も機械となってしまった今、どうしようもないくらい人間という存在に無関心になってしまったのだ。
村人達を救うために人の姿を捨てたことで、まさか人の心まで忘れてしまうとは思いもしなかった。このことを実感した時は、今まで共に暮らし友情や絆を深めていった人たちへの感謝の心を忘れるなど

ありえない！と今までにないくらい自分を憎んだ。が、次の瞬間にはむしろそれが当然の事であったかのように倫理観がすげ変わり、すっと馴染んでしまったのだ。
　先ほど村人達に抱いていた思いや感情は機械の心になった今でも覚えている。しかし彼らに笑顔を向けていた自分が信じられないほどに今は何も感じない。エンリとの約束も、ヨーゼフカの告白も何もかもが全て遠い過去の出来事のように思えてしまった。
　こうして異形と化した自分へ怒りと悲しみの感情が混ざった声で必死に語り掛けてくるこの青年にさえも…。
　何か反応を返さなければ、話が進まないと思った彼女は肩をすくめ青年に話しかける
「仕方ガ無イ…。」
　彼女は器用に体を変形させ、人間の姿と機械の姿を半分にして見せた。
　目を背け続けていた真実をまざまざと見せつけられたヨーゼフカは絶句する。やはり目の前のコレは彼女なのだと。
「嘘でハ無イわ、コレが本来の私ノ姿なのダ。」
　人の姿の時に使っていた声と機械の姿の時に発する合成音が入り混じった不気味とも言える声と口調で、口を開き目を見開いたまま動かなくなったヨーゼフカに淡々と話を続ける。
「私は此処へ来タ時からズッと人間でハ無イ事を隠シてイたのダ。村の皆ヲ、そシてオ前を騙し続けテいタのデす。イつかハ皆に正体ヲ明カサねバと思ッていタ。しカシ平穏ナ日々を捨てたクナいがたメに、何モ私につイテ聞いてコなイ貴方達に甘エ続けた結果、こノ様なナ形で正体ヲ晒スことニなってシまッた…。
　ソして人ノ姿を捨てタ今、我は人ノ心まで忘レた。もう貴様等ニ今マでの様な接シ方はできヌ。今の私ナラ躊躇イなく貴方達ヲ殺すコとガデきるでしょう。…私ハ此処を去ル。こンな化け物ヲもう村デ飼ウ訳にハいかナいでショう？」
　淡々と喋るローザリアの最後の言葉にヨーゼフカは反応し、驚愕の顔を懇願の表情に変えて、彼女にその考えを改めるように訴える。

「そんなこと言うなよ!?こんな事にはなっちゃったけど、いつも通りのあんたに戻ってりゃ大丈夫だって！あんたは村を救ってくれた命の恩人なんだぜ!?みんなを説得すればまた受け入れてくれるよ!!」

彼は本当にそう思っていた。ローザリアはこの村の最大の危機を救ってくれた命の恩人であり英雄だ。たとえ正体が異形の化け物だったとしても、そんな人物をないがしろにしていいわけがない！と。

「いいエ、後ロヲごらんナさイ。アの村人達の怯えた表情ヲ。我はコの村ノ皆を騙し続けタ裏切り者なノです、タとえ貴様が良クても彼ラは許さナいデショう。」

彼女にそう言われたヨーゼフカは思わず村へ振り向くと愕然とする。

村人達は村を救ってくれた恩人であるローザリアを恐怖し怯えた表情で凝視していたのだ。目を離せば次は私の番だと言わんばかりに…。

その信じられない光景に彼らへ叫ぶように問いかける。

「なんで!?なんでお前等はそんな顔をしているんだ！この人は帝国共から村を救ってくれたんだぞ！そんな目で見るんじゃない!!やめろよぉ!!そうだ、村長っ！あんたも見てんだろなぁ!?なんか言えよ!!!」

彼の言っていることが正しいことくらい村人たちも分かっていた。だがそれでも恐ろしいのだ、見たこともない禍々しい雰囲気を携える血に濡れた様な化け物が、常識では考えられない出来事を平然と行ったが彼女が。

確かに彼女は村にとっての恩人であり英雄だ。それでもこの恐怖を拭うにはあまりにも足りない。村長でさえも自分の中の恐怖を隠すことができず悔しそうに俯いてしまっていた。

「想像セヨ、ヨーゼフカ。仮にモ私が村へ帰ったトしまショう…コンな状態デ以前と同じような生活がデきルと思うカ？」

「っ…！」

この村人たちの反応を見れば一目瞭然だ、そんなこと叶うわけがない。例え彼女が戻ったとしても、いつ殺されるかわからない恐怖に村

は静まり返るだろう。
彼にはもう何も言い返す術が無いと思ったローザリアは村に帰るように促す。
「さァ、早くオ戻りナサい…あナたの住む世界ハあちラです…。」
だがそれでも諦め切れないヨーゼフカは必死に食い下がる。
「でもっ…でもっ！」
あれだけのことを言ったのに、まだ食い下がろうとする彼にいい加減怒りを覚えたローザリアは完全形態へと姿を戻し脅すように声を荒げる。
「早ク戻れレト言ッテイル！ソレトモオ前ハ我ニ殺サレタイノカ!?」
その殺意と怒気に、必死で恐怖から耐え続けていた心が遂に折られた。
「ヒッ…くそっ…くそおおおおおおおおおお!!!!」
悔し涙を流しながら、彼女から向けられる殺意から逃れるようにして村へ走る。
（俺は何もできなかった、彼女に何もしてやれなかった、彼女を怖いと思ってしまった、彼女を恐ろしいと感じてしまった！彼女を愛していたはずなのに!!）
悔しさに涙が止まらない。
彼女に正体を明かさせてしまった己の不甲斐なさに嫌悪感を感じずにはいられなかった。
走り去っていくヨーゼフカの背中を、ローザリアは悲しみの籠った目で見つめる。
（さようなら、ヨーゼフカ。もう会うことは無いでしょう…。これでよかったのです、私が歩む道はもう人の道ではないのですから…。）
ローザリアは心の中でヨーゼフカに別れを告げ、これからの生き方に覚悟を決めた。
彼が避難所に着いたことを確認すると、村人達が見つめる中完全形態を解いて地面に向かって両手をつけた。
「スキル発動、〈黒鉄の防壁（ブラックアイアン・ウォール）〉」
彼女がスキルを唱え終えるのと同時に、村を囲うようにして地中か

ら黒い金属の壁が出現した。
村人達はこれから自分達が殺されるのではないかと戦々恐々だが、これはそんなことするようなスキルではない。
彼女が使ったスキル〈黒鉄の防壁（ブラックアイアン・ウォール）〉は彼女の持つ防御スキルであり《ユグドラシル》では、文字通り攻撃から身を守るための防壁としてＭＰを消費し出現させるものだった。
本来ならば村の出入り口に出現した門などは作れなかった筈だが、試しに『門がある〈黒鉄の防壁〉』をイメージしながら発動させると全くその通りに出現したため、どうやらこの世界ではある程度のスキルに応用が利くらしい。
未だにぶるぶると震える村人達を安心させるために、普段通りの優しい口調で説明をする。その声は決して大声ではないのにもかかわらず、村人全員の耳に届いていた。
「村の皆様、どうぞご安心ください。今出現したこの壁は貴方達を傷つけるようなものではございません。この壁は耐久力が無くなるまで貴方達を守るでしょう…。今まで大変お世話になりました。私のような人ならざる者を置いて下さり感謝の言葉もございません。私はこの村から去ります、貴方達を殺すような真似も致しません。今まで本当に有難うございました。」
今まで世話になってきた人々へ別れの挨拶を済ませると、村に背を向け、帝国騎士達の吹き飛びそこなった部位をアイテムボックスから取り出した布に綺麗に包んでいく。
人の心を忘れたとは言え、彼女は修道女である。人の死は丁重に扱わなければならない。
流石に村の目の前で墓を作るわけにはいかないので、どこか見晴らしの良い場所を見つけてそこに自分が葬ってしまった人の墓を作り弔おうと思ったのだ。
すべての破片を包み終えた時、彼女が新たな敵影が現れないかと予め発動させていた探知スキル〈プロヴィデンスの瞳〉にこのカルネ村へと近づいてくる二つの人間の群れを見つけた。
哀れみとも諦めともとれる表情でカルネ村を見る。村人たちは未

だに怯えた表情でローザリアの事を見つめていた。
（次から次へと…カルネ村の人たちにとって今日は厄日ですね…。）

その男、王国最強。

カルネ村からほど近い平原を、先程村を襲ってきた帝国騎士の身に纏っていた統一性のある鎧とは違い、各自が自分の戦いやすいようにとアレンジが施された皮鎧や鎖帷子など、様々な武装を身に纏う傭兵団が馬に騎乗し走っていた。

…傍から見れば傭兵団にしか見えない一団なのだが、実はそうじゃない。

彼ら王国の優秀な部隊であり、その王国『リ・エスティーゼ王国』最強の戦士と謳われる戦士長『ガゼフ・ストロノーフ』は次の目的地であるカルネ村へと急いでいた。

先ほど訪れた村の惨状から襲撃されてから時間があまり経っていないことを読み取り、周辺で一番近い村へと至急馬を走らせたのだ。

「隊長！そろそろ次の村が見えてくるころです！」

「わかった！」

ガゼフは副隊長の報告に応え、カルネ村のある方角に目を細める。確かに村のようなものがある。だが少し、いや大分ほかの村とは様子が違う。煙が上がっていない…帝国騎士に襲われていないのか？

その疑問は当然の如く周りの部下も感じていたらしく、これから部隊の方針をどうするのか指示を仰いできたのはこの部隊の副隊長だ。

「隊長、帝国騎士達はあの村を襲わなかったのでしょうか？それとも我々の予測とは違う別の村に向かっているとか…」

「その可能性は否めない、だがもしかしたらあの村の人間が何か情報を知っているかもしれない。ここまで来たのだ、一応訪ねることにしよう。」

「了解しました。」

副隊長が言った前者なら幸運だったことだろう、だが後者である可能性が無いわけではない。もしかしたらこうしている今も、どこか別の村が襲われているかもしれないのだ。

しかし情報が極端に少ない今、少しでも何か掴んでおきたいと思ったガゼフは帝国騎士の目撃情報などがないか目の前の村へ訪れるこ

とを決心した。
ガゼフ達はカルネ村に近づくにつれ、疑問を浮かべていた顔をさらに険しい物へと変える。それは村全体が黒い何かで囲まれていたからだ。それがただの木でできた塀ならばまだ納得はいく、だがあれはなんだ？
カルネ村の目の前に到着したときようやくこの塀、いやもう壁と呼んだほうが良いだろう、が何で出来ているのか分かった。
それは金属の壁だった。
（しかし自分はこんな金属を見たことがない、全ての光を吸い込むような漆黒の色をしたこの金属は初めて見る。そしてこの作り…見た目だけで判断するなら、もしかしたら王都の城壁よりも頑丈かもしれない。
確かにこの壁があれば幾ら帝国騎士と言えどもそう易々と突破できるはずはないだろう。だがこんな小さい村にこんなものを用意できる能力があるのだろうか…？）
「どちら様でしょうか？」
村を囲む黒い壁に近づこうとしたとき突然真横から声を掛けられたガゼフ達は驚きのあまり剣を抜く。
どうやら声を掛けてきたのはこの黒い見慣れない服を着た女のようだ。
しかしガゼフは抜いた剣を仕舞えないでいた。
なぜならばついさっきまでそこに人がいたような気配は全く感じなかったのだ。歴戦の戦いを経て培ったこの五感でもだ。
「…私はガゼフ。ガゼフ・ストロノーフだ。王国で戦士長をしている者だ。」
本来ならば一国民に対して名を名乗るようなことをする必要はない…というよりも名乗る前に大抵は名前を先に相手に言われてしまうので、もとより名乗る機会が少なかったのだが、今はそんなことなどどうでも良い。一刻も早く帝国騎士の情報を聞き出し討伐に向かわなければならないのと、何よりもこの女の前から早く立ち去りたかった。

先ほどから目の前の女は自分達へ向けて、静かな殺気を向けてきているのだ。いつもならこの程度、戦場が仕事場のガゼフにとって何の苦痛も無い筈なのだ。だがコイツはヤバイと本能が頭の中で必死に警鐘を鳴らし、危機感が心を支配していく。

ガゼフの言った『王国』という言葉に反応を示した女は独り言のように呟いて、ガゼフ達にとある確認をしてきた。

「王国戦士長…と言うことは、あなた方は先程の帝国の人間とは無関係な方たちなのですね？」

「奴等について何か知っているのか!?」

求めていた『帝国』という情報に思わず大きな声を出してしまったガゼフだが、目の前の女性はピクリともせず無表情に見つめている。

その視線から目を逸らしたくなるが、気づくと先ほどから向けられていた殺気はもう感じない。構えていた剣を鞘にしまうと改めて『帝国』について尋ねる。

「いや、済まない急に大声を出してしまって。どうやら貴殿は帝国騎士について何かご存知の様だ。頼む、そのことについて教えてはもらえないだろうか？」

ガゼフは王国戦士長と言う高位な立場でありながら頭を下げ、情報の提供を求めた。

普通ならば一市民になど頭をそう易々と下げていいものではない。だが彼は平民出身であり、下手に自尊心の高い貴族の騎士とは違い、人にものを頼むならば頭を下げるという行為は当然のことだと考える人間だ。そんな庶民じみた振る舞いや人間性が多くの人間の支持を集める原因の一つだろう。

（目撃情報であれば最高だ、それをもとに迅速に討伐へ向かう事が出来る。もしそうでなくとも、何かしら帝国の情報が手に入ったということは我々、ゆくゆくは王国にとって大きな利益となるだろう）

そんなことを考えていたガゼフだが、次に女が発した言葉に耳を疑う。

「えぇ、全て私が葬り去りました。」

「は？」

女の突拍子もない発言に思わず間抜けな返答が出てしまった。
（一体なにを言い出すのだこの女は？帝国騎士を葬ったただと…それに言い方からして一人でというのか…？…信じられれるはずもないが、もしかすると高位の魔法を操れる魔法詠唱者（マジックキャスター）なのかもしれない。そうであるならばこの見慣れない神聖な服装も頷ける。）
とガゼフは適当にあたりをつけて無理やり心を落ち着かせる。
しかし目の前の女は聡いようで、自分の言ったことをガゼフたちにはなっから信じて貰えていないことは承知だったらしく、そのまま無表情な顔で話を続ける。
「信じてもらえないようですね。結構なことですが、証拠ならばあちらにあります。どうぞご確認ください。」
そう言って女の指さした方向を見ると、白い布で包まれた小さい何かの山があった。もしあの山が帝国騎士達の亡骸ならば、我々は納得せざる負えないだろう。
「…副隊長、確認してきてくれ。」
「…了解しました。」
隊長の命令を受け、一人部隊を離れ確認しに行った副隊長は白い布で包まれた一つを持ち上げ、ゆっくりと包みを解いていく。悍ましい物が転がっていた。
「うわぁっ！」
全てを解き終わった副隊長は包まれていた物を驚きのあまり放り出してしまった。地面をゴロゴロと転がるそれは吐き気を催すような悍ましいものだった。
それは帝国騎士の生首。
他の包みを開けてみても現れるのは、千切られた様な断面を持つ手や足の残骸だった。そのどれもが帝国の紋章が入った鎧を身に纏っている。
しかしいったいどういう死に方をしたのだ？残っている部分が手や足の先だけと言うのは些か不自然すぎる。
「どうやら貴殿が帝国騎士を葬ったというのは本当の様だ、疑って済まない。だが一体どうやって…そもそもこのような事が出来る貴殿

はいったい何者なのだ？」
　村を囲う壁といい、ガゼフでさえ恐れる殺気を放つ目の前の女、そしてそいつは一人で帝国騎士を殺した事実。積もりに積もった疑問が我慢できなくなり、遂に女の素性を問いかけてしまった。
「失礼いたしました、自己紹介をまだしていませんでしたね、私の名は『ローザリア』と申します。この地で新たに入信者を募るため、異国である極東からやってきた神職を勤める者でございます。」
「なるほど、異国の出身であるならば我々の知らない魔法や技術があってもおかしくはない。しかし神職を勤めるような方が多くの騎士を前にして立ち退かず、逆に全てを返り討ちにするその勇気に畏れ入った。ローザリア殿、この村を救って下さり感謝する。」
「いえ礼には及びません。この村の方達には大変お世話になりましたから。」
　丁寧な言葉遣いで深く礼をする彼女は、今しがた気づいた事だが尋常じゃないくらい美しい顔の持ち主でありその一挙一動に優雅さを感じさせる。神職に勤めていると言うよりは貴族ですと言われた方がしっくりする位だ。だが、あれほど恐ろしい殺気を放っていたのもまた事実。…まったく底が知れない。
「では、私もストロノーフ様に一つ質問をしてもよろしいでしょうか？」
　全てを見通していそうな目で訪ねてくる女に冷や汗を流しながらガゼフは答えるべきか否か考える。が答えは考えるまでも無かった。
　村の人間を、遠い異国から来たにもかかわらず我が国の民を救ってくれた人の質問に答えないなど愚の骨頂だ。恩を仇で返すような真似はしてはいけない。
「えぇ、私が答えられる範囲でならば幾らでもお答えしよう。」
　ガゼフがそう言うとまた彼女は深い礼をする。なんと礼儀の良い人なのだろうか…
「感謝いたします。それではお尋ねしますが…どうやらまだ皆さんお気づきになられていないようですので、まずはそれを先に申し上げます。

今我々を取り囲むようにしてこちらに向かってくる人間の姿があります。つまり私の質問とは、我々を包囲するような真似をするその人間達に何かお心当たりがないでしょうか、ということです。」
ガゼフは言われて初めて気づき、心の中で大きく舌打ちをした。
確かに、かなりの人数に囲まれてしまっているようだ。目の前の女性に色々と気を取られてしまって、周囲の状況に注意を向けなさ過ぎた自分が恥ずかしい。ローザリアの発言で周りの兵士たちも思わずあたりを見回し始める。
ガゼフはその強さから多くの人間から英雄として語られる一方で、その強さを邪険に感じている者達も少なくはない。今までも何度か命を狙われてきた、今取り囲んできている奴らも恐らくその類だろう。しかし一体何処の誰だ…と思索するガゼフに後ろから声がかけられる。
「あの…隊長、一つよろしいでしょうか…？」
「どうした副隊長？」
声を掛けてきたのは、先程からずっと死体とも呼べない人体の破片を調べていた副隊長だった。
「…今我々を取り囲んでいる人間は十中八九スレイン法国かと思います。」
「…その根拠は？」
「先ほどの死骸の中に刺青をしていた者がいまして、その刺青がスレイン法国の紋章でした。これはスレイン法国による偽装部隊です。そしてその目的は…」
ここまで言われればあとは嫌でもわかる。我慢できずに苦虫を噛み潰したような顔をしてガゼフは吐き捨てるように副隊長の言葉に続ける。
「俺を釣ることか…」
「…はい。」
ガゼフの言葉を受け、悔しそうに副隊長は頷いた。ガゼフはその身に怒りを沸々と湧きあがらせていく。
私を誘き出す為にスレイン法国は何人もの村人の命を奪うとは…

絶対に許せるものでは無い。
スレイン法国とはこのカルネ村から遠く南に行った場所に存在する宗教国家である。信仰する神は遥か昔に存在したと言われる『六大神』で、人間こそ選ばれた種族であるという概念のもと亜人種やモンスターを狩ることに全力を尽くしている珍しい国家だ。そのため人間同士の争いにはあまり口を出さない立場ではあるのだが、こうしてガゼフ暗殺を企てるあたり、水面下で多くの謀略を張り巡らせているのだろう。
「どうやら、お心当たりがあるようですね。」
先ほどまでの平坦な声とは打って変わって冷たく問いかけてきた彼女の声により熱くなっていた体が冷まされ、ガゼフは怒りで失いかけていた自我を取り戻す事が出来た。
「ええ、今我々を取り囲んでいる人間はスレイン法国の恐らく聖典の何者かでしょう。奴等は非常に強力な魔法を使う特殊部隊だと聞く。ただ私を暗殺するというだけで全くの無関係である村の民達を殺し、帝国騎士にまで偽装して私を呼び寄せ、こうして法国の特殊部隊に囲まれて…まんまと奴等の罠に嵌ってしまった己が情けない。」
「恨まれているのですね、貴方は。」
彼女はガゼフを気遣ってこう言ったわけではない、むしろその逆だ。「お前のせいでこの村は狙われたのだぞ」と、軽蔑の意味で吐き捨てたのだ。
ガゼフは何も言い返せず、ただ握りこぶしを更に硬くする事しかできない。
村を救えなかったのも、新たな被害者が出てしまったのも、敵の策略に嵌ってしまったのも、全て自分の力不足が招いた結果だ。王国戦士長という立場を辞職するだけでは、この罪は償うには余りにも足りない。
だがまだ自分にはやらなければならないことがある。全てはそれからだ。
「戦士長と言う立場になってからは尚更にな…。しかし、目を背けるつもりは毛頭ない。全てが終わった時、然るべき罰を受けるだろう。

先ずは我らを囲む法国を始末する。」
決意を固めたガゼフの瞳には鋭い光が宿っていた。それは紛れもない戦士長たる存在が放つことのできるすべてを切り裂く刃のごとき輝きだ。
その瞳を見たローザリアは少しだけ見つめると目を閉じ、開く。それだけの動作であったはずなのに、全ての者を魅了するようであった。
人形の様に美しかった無表情の顔は影を潜め、その人形に命が吹き込まれたかのように人間然とした表情でガゼフへと話し始める。
「貴方の決意は伝わりました。では私もスレイン法国なる者達の相手をしましょう。」
しかしガゼフはその申し出を受け入れる訳にはいかない。
「それには及ばない、ローザリア殿。これは私の問題だ、無関係である貴方に手を貸してもらう訳にはいかない。」
「無関係ではありません、こうしてスレイン法国なる者達に村を襲われたのですよ?それでもストロノーフ様は私が無関係であると仰いますか。」
そういわれてしまうと返す言葉がなくなってしまうガゼフはムゥ…と唸る。困った末に出した結論は彼女との共闘と言う結論だった。
「では今回だけでいい、我々に雇われてくれないか?」
「良いでしょう、ですがくれぐれも巻き込まれない様にお気を付けください。私の持つ攻撃は範囲が広い物ばかりですので…」
彼女の目が少しだけ残忍なものになるのを感じ取り、ガゼフの背中に冷たい汗が流れる。
「…善処しよう。では、我々は先陣を切らせてもらう。」
「でしたら、こちらをお持ちください。お守りのようなものです、身に危険を感じましたらお祈り下さい。きっと助けになるでしょう。」
そう言って差し出されたのは、木でできた人形の様だった。見た目は何の変哲もない不格好なものだ。だが見たことのないそれはきっと異国で作られたマジックアイテムなのだろうと思い素直に受け取る。

「貴殿が言うのだ、奇跡が起こせるのかもしれないなこの人形は。有難く貰い受けるとしよう。」
「私はこれからこの者達の弔いをしなければなりません。到着が少し遅れるかもしれませんが、どうかご無事で。」
「ローザリア殿の様な美しい方にそう言ってもらえると、絶対に死ねないな。では失礼する、行くぞ!!」
ガゼフの軽い一礼の後、仲間たちの「おうっ!」と言う声と共に颯爽と敵陣へと駆けて行った。
その後ろ姿を見送ったローザリアはふぅと息をつき胸をなでおろす。
「行きましたか…歴戦の猛者ともなるとなかなか迫力があります、はぁ緊張した…。では、この方達の弔いを始めましょう…。」
先程副団長と呼ばれる男に奇麗に包んでおいた帝国騎士達、いやスレイン法国の兵士達の破片を全て暴かれてしまったのでまた布で綺麗に包み直しすと、村から離れた場所に移動し、生前何度も父と共に教会で行ったキリスト教の葬儀作法に則り、簡略ながらも彼らを弔った。
葬儀を無事に終えると、ローザリアは空中に腰掛ける。
空気椅子の様に足の筋肉で踏ん張り、あたかも空中で座っているように見せかける様な見苦しいものじゃなく、彼女の体に使われているデータクリスタルの一つ〈反重力装置〉によって体を浮かせているのだ。
「さてと、私も戦う準備をしなくてはいけません。安易にあの姿になるのは得策ではないでしょうから、違うやり方で臨みましょう。…〈次元門（ディメンジョン・ゲート）〉」
村での出来事を思い出し、少し悲しい気持ちになる。いくら人間に興味が無くなったとはいえ流石にあの怯えた視線は機械の心でも堪える。あまり気持ちの良いものでもないので、武器がない今完全形態にならずに戦う方法はあと一つしかない。
スキルを唱えながら右手の人差し指をピンと伸ばし空中に線を引くようにしてそのまま真横に動かすと、まるで空中にジッパーが初め

からついていたような動きでガパッと斑色(まだらいろ)の穴が開いた。
《ユグドラシル》の時とは違ったエフェクトでスキルが展開されたため、ローザリアは少し驚いた。
「こちらの世界ではこんな風に開くのですね…まぁ問題なく開けたようなので安心しました。…〈接続開始(コネクト)〉。」
彼女がまた新たなスキルを唱えると、斑色穴を埋め尽くさんばかりに無数のコードが生き物のように這い出てきた。
それらはウネウネとしながら彼女に絡みつくように伸びていき、彼女の細い首筋に次々と先端の尖ったプラグが差し込まれていった。
「ん…《ユグドラシル》では…何ともない…動作だったはず…んんっ…でしたが、今は…なんだか…あっ…くすぐったいですね…あんッ／／／」
最後に伸びて来た一際太いコードが背中に指された時、何かと繋がる感触が一瞬で体を駆け巡り、ちょっと熱っぽい声を上げてしまった。
思わず両手で口を押え周囲を見渡すが、誰も見ていなかったことを確認すると両手を静かに降ろし何事もなかったかのように作業を開始する。…まぁその顔は誰が見たって湯だったタコのように真っ赤だったのだが。
(なんてはしたない声を…でも、ちょっとだけ気持ちよかったかも…？)
…イカンこのまま進めると作者の妄想が止まらなくなるので、非常に心苦しいが話の筋を元に戻す。
「ゴホンッ、では気を取り直して〈起動要請(ザ・スタートアップ)〉」
彼女は目を閉じ、また聞きなれないスキルを唱える。すると彼女の体に刺さったコードを伝って一斉に光が短い間隔で空間に開いた穴に流れていき、無数に何かと繋がっていく感覚に懐かしさを覚える。
そして全ての何かとつながったとき彼女は目覚めの時を告げる。
(さぁ『子供達』、起きる時間ですよ…)
ローザリアの呼びかけに応えるようにして、頭の中に大音量で響く明らかに人間のそれではない絶叫にも似た機械音がこだました。

――ギャウアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!

陽光聖典

…はっきり言って奴らの事を舐めていた。
ガゼフは窮地に追い詰められていた。
王国の至宝を身に纏っていない体は傷だらけになり、体力もほとほと使い果てまっすぐ立っていることも困難な状態だ。
周りは数百の天使が取り囲みその後ろには数十のスレイン法国の魔法兵、誰がどう見たって絶望的状況にしか見えない。
しかしガゼフは剣を固く握りしめ、目の前の敵を睨みつける。
「さぁ狩りも最終段階だ、獲物を休ませるな。天使たちの攻撃を止めさせず、交互に攻撃を仕掛けろ。」
ガゼフに睨みつけられても顔色一つ変えずにガゼフを攻撃をするよう命令した男は、スレイン法国『陽光聖典』の隊長、『ニグン・グリッド・ルーイン』である。
ニグンには『タレント』という特殊能力を生まれつき保持しており、その効果は『召喚したモンスターを強化する』と言うものだ。そしてニグンの後ろに存在する巨大な天使は監視の権天使（プリンシパリティ・オブザベイション）と言い、部下たちが召喚する天使たちの能力を引き上げる効果がある。さらにこの効果はニグンのタレントによって効果が底上げされ、相乗効果も相まって召喚された上位天使（アーク・エンジェル）は通常よりもかなり高いレベル帯まで強化されているのだ。
ニグンは先程まで無表情だった顔を勝ち誇った歪んだ笑みを浮かべた顔に変え、まるでボロ雑巾のような姿になったガゼフに最後の言葉を送る。
「…止めだ。ただし一体で行かせるな、複数で確実に息の根を止めろ。」
命令された部下たちは一斉にガゼフへと天使を突撃させる。
その圧倒的物量差、圧倒的優位差に勝利は目前だろう。
ニグンは興奮を堪えるのに必死だった。何せ王国最強と謳われる男を自らの手で葬り去ることができるのだ、これに喜ばずしてなんとしようか！この男を討伐した暁には、スレイン法国の神官長から名誉

の勲章が与えられ、自分の地位はさらに高いものになり、強大な権力で多くの部下を意のままに操ることさえ容易いだろう！
　想像するだけで涎が出るくらい歓喜に身が振るえるが、部下たちの手前余り情けない姿を見せる訳にはいかないので、修行で鍛えた強い意志と理性により何とか表面化しないように封じ込める。それでも隠し切れない愉悦に今か今かとガゼフの悲鳴が聞こえてくるのを心待ちにするニグンだった。
「がああああああああ！なめるなぁああああああ!!」
　だが、己の運命にまだ抗おうとする心底哀れな男がニグンを失望させるのだった。
　ガゼフは限界を迎えた体で尚も抵抗し続け、突撃させた天使が真っ二つに切られていく。だが、そうする間にも魔法兵が放つ遠距離魔法攻撃が容赦なく全身を叩き、また地面に膝をついて口からは苦痛の呻きが漏れる。だがその瞳は真っすぐにニグンを睨み続け、執念の炎はまだ燃え尽きていない。
　あれだけ痛めつけたのにもかかわらず未だに対抗心を燃やし続け、自分に刃向かってくる姿は滑稽としか言いようがないが、常人には真似できない偉業だろうと素直に感心してやる。
「諦めろ、見苦しいぞガゼフ・ストロノーフ。お前は今日、今、此処で、私に殺されるのだ。」
「黙れぇ!!俺は王国戦士長！この国を愛し、そして守護する者！我が国土を！大切な民を！土足で踏みにじる貴様らに負けてたまるものかぁ!!!」
　自分に対して激昂するガゼフへ冷ややかな視線を送り、話にならないと溜息をつく。なんと哀れな…戦士であるならば潔く散ったらどうなのだ。
「そんな夢物語を語るから死ぬのだよ、お前は。もっと現実を見れば良かったのだ、あんな辺境の村など切り捨てて逃げるほうがよっぽど賢いとは思わないのか？お前が死ねば我々は万々歳だが、お前の祖国にとっては多大な損失となるのが分からないわけではあるまい、本当に国を愛しているなら村人の命など捨て置いて、さっさと逃げるべき

だったのだ。」
「下種が……お前とは…平行線の様だ……行くぞ。」
ぼろ雑巾とも呼べなくなった男は地面に剣を突き刺し、腕の力でまた体を無理やり立たせると、剣を引き抜きニグンに切っ先を向けるのだった。
いつまでも諦めないガゼフの姿勢にニグンは軽く苛立ちを覚える。
どうせまともに動けないのだ、いくらでもそこで吠えていろ。すぐに大切な民とやらと同じ場所へ送ってやる。
「無駄な足掻きを止め、其処で大人しく横になれ。せめてもの情けに苦痛なく殺してやる。」
ニグンは本当に最後になるであろう命令を部下に下す。
「各員、全力をもって奴を始末しろ。」
先程の倍以上の天使の突撃と、魔法兵による援護射撃が繰り出された。この攻撃をくらえば誰が相手だろうとしても生き残れる人間はいないだろう。
成す術なく死んでゆけ…
興味が薄れたニグンはもう結末が分かっている戦闘に早々に見切りをつけ、帰還の準備を始める。
――始めようとした時、目を疑った。

ガゼフは絶体絶命の極限的な状況で限界突破した脳は、周囲の時間を遅く感じさせていた。俗にいう走馬燈を見ているような状態だ。
(クソッもう駄目なのか!?俺が手塩にかけ共に戦ってきた仲間たちも奴等の手に倒れていく…俺の体はもう指先一本でさえ動かせない…このまま王国の何の罪もない国民を無残に殺した憎たらしい敵を叩き斬ることもできずに死んでいくのか俺は!?何か、何かないのか?この状況を打開する会心の一手は!?)
必死になって思考を巡らすが、出てくるのは仲間達の顔と、一緒に過ごしてきた思い出ばかりが浮かんでしまう。
もう駄目なのか…そう諦めかけた時一人の美しい女性の顔がフッと何の脈略も無く浮かんだ。そこから先の行動は早かった。

ポケットに入れていた木の人形を握りつぶさんばかりの強さで握り締め、手の平から血が滴るのもお構いなしに神にも縋(すが)る思いで仲間と民の安全を願った。
(頼む、俺のことなどどうでもいいから仲間と民を救ってくれ！そして叶うなら、あの憎き王国の敵に天罰を!!)
――――汝の望み、叶えましょう。
願った瞬間すぐ耳元で凛と澄んだあの美しい女性の声が聞こえた。
そしてガゼフ気づいた時は、先程まで戦っていた戦場とは遠く離れた場所にある草原だった。隣を見れば兵士たちや馬までもが揃っており皆混乱の表情を浮かべていた。
「隊長！無事ですか!?」
「…副隊長か…？私は大丈夫だ。それよりも…我々はどうなったのだ？」
「それが…私にもわかりません、気づいた時には皆ここに居ました。…ただ一つだけわかるのは、部隊全員の命が救われた、と言う事だけでしょう。」
ガゼフは副隊長の「命が救われた」と言う言葉で張り詰めていた緊張が一気に解け、立っていられるのが不思議なほど酷使した体は膝から崩れ落ちた。それからやっと手の平に痛みを感じ、握り締めていた物事ポケットから引き抜く。
取り出して見ると、ずっと握りしめていた木の人形は見事なほど縦に奇麗に割れており、この人形が我々を救うために力を使い果たしたのだと理解した。
しかし皆の安全を願った時に聞こえて来たあの女性の声は…
「…フフッ、なぁ副隊長よ、つくづく何者なのだろうな…あの美しい女性は。」
「え？」
そうしてガゼフは眠るように気絶した。

望まぬ来客

「なん…だと…？」

王国最強の戦士、人類の希望、13英雄の生き写し、その他数々の名誉ある二つ名を持つ本当に最後まで気に食わなかった男『ガゼフ・ストロノーフ』は、我らスレイン法国の独立特殊部隊『陽光聖典』の手により確実に討ち取った筈だった。

だが、どういうことなのだこれは…？

ニグンは信じられない光景を目の当たりにしていた。

時間は少し巻き戻る。

ニグンはガゼフ・ストロノーフを討つべく、監視の権天使（プリンシパリティ・オブザベイション）によって強化された大量の上位天使（アーク・エンジェル）と魔法兵による援護攻撃を命令し、その衝撃で地面の砂が大量に巻き上げられたため巨大な砂煙が発生し著しく視界の明瞭度が悪くなったが攻撃をする前から既に奴の死は確定済みだった。

砂煙が晴れるまでの時間を呆けたまま無駄に突っ立って居るほど馬鹿な真似すまい、と死亡したであろう男に背を向けて祖国へと帰る準備をしようと思ったのだ。

――一人の兵士が声を上げるまでは…

「なんだ…あれは？」

そう一言だけそばにいた兵士が呟いたのをニグンは聞き漏らさなかった。

もしやまだ生きているのか!?と反射的に振り返ったそこには未だモクモクと舞う砂煙があったが、あったのはそれだけではない。

直立する黒い影があったのだ。

（そんな馬鹿な!?奴は不死身か!?）

ニグンは思いっきり顔を歪めて胸ポケットへと手を伸ばす。服からはまだ出さずその手に掴んでいたのは高位階の魔法が封印されているマジックアイテム『魔法封じの水晶』だ。これには第7位階と言う到底人類では到達しえない未知の位階の魔法が封じられており、そ

の価値は一国を買えるほどだろう。しかしどうして彼がそんなモノを持っているのかと言えば、彼の上官である神官長から直々に「もしもの時に使うよう」と預かっていたからだ。
(使う気はさらさら無かったが、まさかこれを使わなねばならない程の相手だったとは…)
心の中で敗北にも似た感情を抱きながら無言で黒い影を見つめ、砂煙が晴れる時を待つ。
そこへ一陣強い風が吹いた。
急速に砂煙が晴らされていくとそこにあったのは、攻撃をくらう最後まで自分たちに闘志を燃やして反発し続けた戦士の死体は欠片も無く、その代りにそこに居たのは全く見覚えのない美女が見慣れない黒い服を強風ではためかせながら立っていた。
そして今に至る。
「お初にお目にかかります、陽光聖典の皆さま。私は『ローザリア』と申す者でございます。」
目の前の女は優雅なお辞儀と共に自己紹介をした。
その流れる様な美しい所作と場違いすぎる唐突な出来事に、陽光聖典の兵士たちは口をアングリと開けたまま目を丸くして呆然と立ち尽くすしかなかった。
「…こっこれはこれはどうもご丁寧にお嬢さん、自己紹介をどうもありがとう。いやぁしかしおかしいですね…先ほどまであなたの居たその場所にはボロ雑巾のような男が居たはずなんですがねぇ？すみませんが、何かご存じありませんか？」
ニグンは呆けそうになる頭を必死にフル回転させ、名乗ってすらもいないのに自分達の存在を知っているこの女に危機感を覚え、冷静に対処するべく彼女に返答しながら女の素性を探り出す。
だが女はニグンの詮索など気にもかけないで、投げかけられた質問にただ答えていく。
「ええ、存じております。そのボロ雑巾のような男の名はガゼフ・ストロノーフ、王国の戦士長をされている方で、人間達からは王国最強の戦士と呼ばれているみたいですね。」

そのはっきりしながらも明らかに自分を嘲る様な物言いに思わず眉尻がピクリと撥ねる。
「フム…よく、ご存じで。では次の質問、その男を何処へやった？」
今の質問に答えたことで、目の前の女はガゼフと何らかの関係を持っていることが分かり、そしてこの状況に関与していることもまた明らかになった。ならば次に問うべき事はこの女が奴を何処へやったかだ。しかし問題はその方法だ。
ニグンは聡明と自負する灰色の頭脳で今起きている状況を分析する。
（先ほどの状況を可能な限り整理するならば、ガゼフ、そして奴の仲間達までもがこの女の出現する間に消えていた。ガゼフであるならば、…考えたくはないがあの状況で何かしらの〈武技〉を発動させ天使と魔法の攻撃を避けて、あの砂煙の中逃げ出すことはできるだろう。だが四方八方を我々に囲まれた状態で誰にも見つからず砂煙の中から脱出することなど不可能だ。そして何よりも奴の部下が一緒に消えたことが説明できない。奴等の中には魔法を使えるような者は存在していなかった、つまり魔法による方法で脱出の可能性は無い。そもそもそんな事が出来る魔法など私が知っている中で一つしかない、それも書物の中の存在だ。…第6位階の魔法〈転移（テレポーテーション）〉私ですら到達できない域にある魔法をあの筋肉ダルマが使える訳がない！ならばもう残る可能性は二つしかない、マジックアイテムの可能性とこの女だ。しかし王国にこんな真似が出来るマジックアイテムが存在するなど聞いたことも無い。
残ったのは目の前この女のみ…
今まで生きてきた中で一度も見たことがない黒い服を着たこの女は得体が知れない。名乗ってもいないのに既に我々の部隊名を知っていたことから相当情報に長けていると考えられる。先に自分から名乗ったことで、深く詮索できなくしたのも賢しい…侮れない相手だ。だが、コイツ以外に原因が見つけられない。なんとかして口を割らせなければ…）
ニグンは思慮耽っていた頭を目の前の謎に満ちた女に切り替え、情

報を聞き出すことに専念する。
「いや、失礼した。"やった"などとぶっきら棒な言葉を使ってしまって申し訳ない、少しびっくりしてしまったものでね。では改めて、貴女はガゼフ・ストロノーフをどのようにして此処から移動させたのですか？」
「お気になさらないで下さい。それよりも方法ですか…そうですね"神に祈ったから"とでも言っておきましょうか。」
「なにィ？」
　問いかけに答えた女の返答があまりにも抽象的過ぎて繕っていた紳士の表情を崩してしまう。
（一体どんな手段や方法が飛び出てくるかと思えば、神に祈っただと？ふざけるな！さっきからこの女は私を馬鹿にしているのか!?そうだ、そうに違いない！その奇麗な顔の下にどれ程の醜い本性を隠しているのやら!!）
　それからのニグンは、自分に対してふざけた態度を取る女へ向けて考えうる限りの論理で捲くし立て「お前以外がこの状況を作ることは出来ない」と言うことを唾をまき散らしながら述べた。
　必死の説明を聞き終えた女は何か納得したような顔をして
「…なるほど。貴方の話を聞く限りでは、この世界で転移をするというのはどうやら相当に大変な様ですね。」
「はァ!?さっきからお前は何を言っているのだ！いい加減白状をしろこのクソアマァ!!」
　女だからと言って穏便に事を進めようと努めて苛立ちを我慢していたが、全然会話にならないこの状況に頭の中でプッツンと糸が切れたニグンは、溜まっていた鬱憤を吐き出すかのように全身で怒りを表現した。特にその顔は般若の如く醜く歪み、火が出そうなほど赤くなっていた。
「もういい！ガゼフのことなど後回しだ!!女ァ、死にたくなかったら答えろ！お前は此処へ何をしに来たのだ!!!」
　隠すことのない怒気は周りの兵士をも背中を縮ませる迫力だったが、女は全く表情を変えず柳に風で気にも留めていないようだ。それ

が更にニグンの怒りのボルテージを上げるのだが女が喋り出したので「流石に命は惜しいか。」と少しだけ頭を冷やす。
「そのご質問にはお答えしましょう。私はあなた方を煉獄へ案内するために赴いた次第です。」
「…。」
ニグンは呆れてものも言えない。女は話を聞かないという噂はどうやら本当の様だ。
しかし、女の余りにも世間知らずというか怖いもの知らずな発言に陽光聖典の中からは思わず吹き出す者が続出し、嘲笑が巻き起こる。
この女は我々になんと言ったのだ？煉獄へ連れて行くだと？この陽光聖典を？ここまで冗談のセンスがあるというのは素晴らしいな。
ニグンも部下たちに吊られて、呆れていた顔を徐々に笑いに変えていく。ついには満面の笑みなり、大声で笑いだした。
「あーっはっはっはっ!!面白い事を言う女だ！つまりお前は私たちを殺すと言うのだろう？あー可笑しい…世間知らずにもほどがあるだろぅ？お前は最初に言ったよな？我々の部隊名を、『陽光聖典』となァ!!それを殺すだと!?お前のような野暮ったい女に我ら陽光聖典に対して何ができるというのだァ!!あーなんだか段々イライラして来たぞ!!お前はガゼフ・ストロノーフすらあと一歩で殺すところまで追い詰めたこの陽光聖典に喧嘩を売ったのだァ！もう全てどうでもいい、たっぷりと後悔して死んで行けこの愚か者がァ!!!」
「…あと一歩のところで逃がしているじゃないですか。」
ニグンの発言に思わずポロッと本心が出てしまったローザリアは「やってしまった」と後悔したがもう遅い。目の前の男は赤かった顔が更に赤くなりブチィッ!!と何かがちぎれるような音を男から聞いたような気がした。
「こんのビチグソがァ!!お前たち！あいつをぶっ殺せェ!!!」
ローザリアの要らぬ一言で下がりかけていた怒りのボルテージがＭＡＸ１２０％なったニグンは、ほぼ絶叫の命令を部下達に下す。そしてニグン同様に苛立ちを高めていった部下たちはその命令を待ってましたと言わんばかりに待機させていた全ての天使を突撃させる。

天使は円形に隊列を組み円の輪を狭めていくようにして対象に向かって突撃する。その間にも怒りでいつも以上に気合の入った魔法攻撃で３６０。から攻撃し、相手を一歩たりとも動かせる隙を作らせない。

――――ドガァァァァァァァァァァン!!!!

天使と魔法兵による見事な連携プレイにより終始一歩も動けなかった女は呆気なくその数えるのも億劫になるほどの天使たちの刃によって体を貫かれた。

ニグンは歪んだ笑みを顔に張り付けたまま余裕の態度で最後まで眺めていた。

（もし仮に無傷のガゼフがこの攻撃を受け止めたとしても、一撃で瀕死の重傷にまで持っていける威力だろう。ただあいつの場合は〈武技〉を使うせいでここまで上手くは決まらないがな…。まぁいい、こうして奇麗に攻撃が決まった今、あのクソ生意気な女が生き残れるはずも無い。見るも無残にぐちゃぐちゃの挽肉になっただろう。情報は聞き出せなくなったが、どうせ離れた場所にはいないだろうしあの怪我だ、動くことすらままならないだろう。斥候を出して周辺を探索させれば問題なくすべてが片付く。）

もうすでに勝敗は決しているのだから、早くガゼフの捜索に映らなければならないのだが、自分をここまで怒り狂わせた女の最期くらい見て行ってやろうと、未だに剣を突き刺している天使を下げさせるため命令を下す。

「…ん？なぜ動かないのだお前たち…？」

それからの出来事は一瞬だった。

天使たちの間から一瞬だけ赤く光った輝きを眩しいと感じ、瞬きをして、目を開けたとき

――――女を突き刺していた大量の天使たちが全部焼け堕ちていたのだ。

まったく訳が分からない…一体何が起きたというのだ？なぜ天使たちは焼け堕ちている？それよりもなんであの女は生きている…？

陽光聖典は全員このような思考に陥っただろう。

相も変わらずあのクソッ垂れな女は砂埃一つ被らずにそこに立っている。しかし、いや違う、そうじゃない。いけないのだ、駄目なのだ。彼女は本来ならば立っていてはいけないのだ。挽肉になってなければいけないのだ。あのガゼフでさえ一撃で瀕死に追いやるとニグンは豪語したのだ。だから普通の人間が喰らっては跡形も残っていい筈がないのだ。

ならなぜ彼女は傷一つない澄ました顔でそこに立っているのか？

答えは、彼女が彼らが思う程普通じゃなかったからだ。

「まだ、天使は出されますか？」

次元眷属〈悍ましき子供達〉個体識別番号：第１１番
『機械魔人型』【Ｄｉｎａ】

彼女の一言でこの場全てが凍りついた。
陽光聖典の魔法兵士たちはその一言を発した女を凝視する。その目は大きく見開かれ、瞬きを忘れた眼球は乾燥による充血で赤く血走っている。大きく開かれた口からは何の言葉も発しないが、誰もが一目で驚愕の表情を浮かべているのだと良くわかる。
あの女が言った言葉の意味は「これ以上天使を出しても無駄だぞ」であることに他ならない。間違っても「辛いのでこれ以上出さないでください」と解釈するような馬鹿はこの部隊には居られない。
女（こいつ）にとって上位天使（アーク・エンジェル）なぞ、雨上がりによく飛んでいるそこら辺の羽虫と何ら大差ない存在なのだ。強いて言うなれば先程の出来事は自分に向かって飛んでくる羽虫を叩き落としただけに過ぎないのだろう。だが我々にはその叩き落とし方さえ分からなかった。ガゼフのように剣で切り裂くような野蛮な方法じゃない、一瞬だ、一瞬で全ての片がついたのだ。
感じていたのは今まで味わったことのないような無力感だった。それはニグンだけではなくある者は項垂れ、ある者は膝から崩れ落ち、ある者は自分の信ずる神へ必死に祈りその庇護を求めた。
あれだけの数が居た自分たちの上位天使（アーク・エンジェル）がこうも容易く屠られ、この信じたくも無い状況を作り出したその張本人は平然とした表情を浮かべている。
多くの特殊任務をその卓越した追跡能力と完膚なきまでの追い込み能力でこなしてきた陽光聖典にとって目の前の女はその全てを否定したに等しい。
そして彼らの死んだ魚のような眼差しは次第に移り、唯一の希望である隊長のニグンへと向かう。特殊部隊長を任されいくつもの任務を完遂して来た我らのリーダーならばこの化け物をなんとかしてくれると。

しかしニグンは焦る、部下たちの希望のまなざしという思い重圧と何よりも信じられないことをしでかしてくれた目の前の女に。自分ですらこの状況が把握できていないのだ、あの圧倒的だと思っていた力量差が一瞬のうちに入れ替わってしまったのだから混乱するのは当たり前だろう。だがニグンはこれしきの事で心を折られるような肝っ玉の小さい男ではない、己の自尊心を守るためにそして仲間から不安を取り除くためにびっくりするような"言い訳"を吐き始めた。

「は、ハハハハ…お、面白いじゃないか。実に…実に素晴らしい"手品"を見せてくれてありがとう。いい余興になった、きっとこれもガゼフを何処かしらへやった時と同じ事なのだろう?あの天使が焼け落ちる姿は我々を怯えさせるためにお前が用意した”フェイク”だ、実際に倒されてはおらず何処かへ行ってしまったのだ、そうなのだろう?いや結構結構!種明かしなどはしなくて結構だ。次の観客に見せるときに我々が腹いせで種をしてしまうかもしれないからな、そうなっては困るだろう?…まぁ、君が次にこの手品を誰かに見せることは二度と来ないがね。」

ニグンは鋭く女を睨みつける。

彼の言い分はかなり強引且つ非現実的なものであったが、この状況を何とかするにはもう開き直るしかない。そういう意味では良い選択肢を選んだと言えるのだろう、流石頭脳明晰と自負するくらいの能力はある。そのお陰もあって魔法兵士たちも無理やりその言い訳を心に言い聞かせることで、墜落寸前の指揮を見事取り戻すことができたのだ。

大した逸材だとローザリアは素直に感心する。

ここまで見せつけて出した結論が、あくまでただの手品だと言うのだ、脱帽したと言ってもいい。

人間も数人殺しておけば今のような無駄な時間を作らなかったと少しだけ後悔する。が、ビビらせ過ぎて逃げ惑うのを後ろから追って殺すよりも、こうしてまだ自分に意識を向けてくれているほうが後々処理が楽だからまあいいかと一人合点する。

そんなローザリアの腹積もりなど露ほども知らないニグンは、上手

く苦境を打破したのはいいものの、それ以降のことは全く考えていなかったので手当たり次第にやれることが無いかと探し自分の真後ろに浮かんでいる大きな天使に気付くと、ゆっくりと彼女に振り向き直った。それも表情に不敵な笑みを浮かべて。

「これだけ面白いものを見せてもらったのだ…そのお礼に、私も少しばかり本気を出すとしよう…。」

ニグンはそう言うと、ずっと背後に浮かせていた大きな天使監視の権天使（プリンシパリティ・オブザベイション）を前に出す。

今までこの天使が動かされなかった理由は、その固有能力である『自軍構成員の防御力を少しだけ引き上げる』という効果が動いてしまうと発動しないからだ。その能力を無視してまで動かした事はニグンの動揺が如何に大きいかを表している。それでもただ考えなしに動かしたというわけでもない、先ほどはこの天使よりも遥か格下の存在で、小さな存在であったから奴の術中に嵌ったのだと考えたニグンは、この高貴で神聖な輝きを放つ巨大な存在ならばあのようなことは起こるまいという結論に至ったからだ。

「行け我が僕、監視の権天使（プリンシパリティ・オブザベイション）！」

主の命令を受けた監視の権天使（プリンシパリティ・オブザベイション）は急速にローザリアへと接近し、その勢いのまま手に持っていた巨大なメイスを振り下ろす。莫大な質量と加速度を持ったメイスは破壊の権化となり、対象を絶対に葬り去ることが決定した確殺の一撃となるだろう。

余りの速さと力強さに動くことができない女の姿を見た陽光聖典達とニグンは、躊躇うことなく勝った！と確信した。この攻撃なら幾ら不思議な真似をあの女が出来ようと、さっきの天使やガゼフの時のようなことはできまいと。

しかし彼らの喜びに染まった顔も飴細工の様にいとも容易く崩れ去る。

…本当に信じられなかった。つい数分前に大量の天使を一瞬で消し去られたことなどどうでも良くなるくらいにはソレはありえなかった。

女は自分の頭上に振ってきた巨大な鉄の塊を上に伸ばした左腕そ

のただ一本のみで軽々と受け止める。あれだけの質量がぶつかったのだから衝撃は凄まじく、彼女を中心に地面にはいくつもの亀裂が走っている。にもかかわらずその女は足を動かして踏ん張ったような気配も無い。そしてそのまま受け止めたメイスを鷲掴み、あっけなく監視(プリンシパリティ・オブザベイション)の権天使(プリンシパリティ・オブザベイション)の動きは封じられてしまう。

必死に落ち着けていた心は荒波の如く揺らいでいた。立て続けに自分の脳を疑うような信じられない光景を見せられれば、例え聖人であったとしても気が狂うだろう。

思考が何にもまとまらないニグンは脂汗を額にびっしりと浮かべ、上ずる声で自分の使役する天使を救出しようと躍起になる。

「ひ、引きはがすんだ監視(プリンシパリティ・オブザベイション)の権天使(プリンシパリティ・オブザベイション)！お、お前たちもぼおっと見ていないで早く援護しないか!!」

監視(プリンシパリティ・オブザベイション)の権天使(プリンシパリティ・オブザベイション)は必死に体を動かし、自分よりも何倍も体格差がある女の拘束から逃れようともがくが、いくら頑張っても抜け出せない。

ニグンの命令を受けた魔法兵たちも持ちうる限りの魔力で女へ攻撃呪文を放っていく。

放たれる衝撃波を全身に食らっているのが確認できるにもかかわらず、全くダメージの入っている素振りを見せない女は、衝撃音が鳴り響くの中で何故かはっきりと聴こえてくる声で喋り出す。

「どうやらあなた方を誇大評価し過ぎたようです。お相手するのも飽きましたので、そろそろご退場願います。では…〈次元召喚(ディメンジョン・サモン)：手(ハンズ)〉」

彼女の死刑宣告のように聞こえる言葉と共に唱えられたまったく聞き覚えのない謎の呪文に、一体これから何が始まるのかと魔法兵士達は戦々恐々としていると、突如監視(プリンシパリティ・オブザベイション)の権天使(プリンシパリティ・オブザベイション)の背後にグパッと斑の色をした穴が開き、中から黒く見たことも無い機械の腕やら金属(コー)でできた紐(ド)やらが大量に這い出て来て瞬く間に絡みついていく。

女はメイスを掴んでいた手を離し、後は任せたとでも言う様に突如現れた手とも形容しがたいものに向かって手を振っている。そして監視(プリンシパリティ・オブザベイション)の権天使(プリンシパリティ・オブザベイション)はそのまま身動き一つとれず成す術ないまま引きずられるようにしては斑色の穴へと消えていき、姿が見えなくなった

ところで空間に開いていた穴は静かに閉じた。
「この…化け物めェ!!」
叫んだのはニグンだけではない、陽光聖典全員が口々に口汚い言葉を叫んでいた。
数々の信じられない状況に自分を正当化するため目を瞑ってきたニグンだがもう無理だ。許容限界などとうに超過していた理性は監視の権天使（プリンシパリティ・オブザベイション）が突如として現れた穴の中から出て来た訳の分からないものに引きずられ消えていったことをきっかけに遥か彼方へぶっ飛んでいた。
もうなりふり構っては居られなくなったニグンは最終手段として大事に胸ポケットに仕舞っていた『魔法封じの水晶』を荒々しく取り出し天に掲げると絶叫した。
「落ち着け、落ち着くのだぁ！私にはまだ秘策がある！見よこの輝きを！これは神官長から直々に賜わった人間の人智をはるかに超える第7位階の魔法が封印された魔法封じの水晶だ!!!その威力は魔神ですら一撃で沈めたとされている!!!」
「おぉ!!!!」
第7位階という人智を遥かに超えた魔法という本来ならば冗談話で済ませるような存在は、絶望しきった陽光聖典たちへ希望の光を送る。
この化け物のような女にきっと致命的な一撃を加えてくれるだろうという期待が一身に集められた水晶が、正しい手順を経て破壊された。
「ハハハ!!感謝しろよ化け者ォ!!貴様にはこれを使うだけの価値がある！それを俺に認めさせたことも誉めてやろう!!だがお前に与える褒美は"死"だァ!!!さぁ括目して見ろよ化け物！最高位天使の尊き姿を、輝きを!!出でよ、威光の主天使（ドミニオン・オーソリティ）!!!」
周囲を埋め尽くす白い光と僅かに香る芳香の中から現れたのは、光り輝く翼の集合体だった。
その神々しい姿に陽光聖典からは感嘆と歓喜の声が上がる。
これならば、この最高位天使ならば、如何に奴と言えど耐えられる

術はない！今に見ていろ化け物め！たった一騎で魔神を滅ぼした我らが最高位天使の一撃が貴様の全てを葬り去ってくれる!!

陽光聖典はその圧倒的な輝きと人智を超えた存在の顕現という安心感に、誰もが笑みを浮かべていた。

（はぁ…。）

そんな中、ローザリアは一人心の中で溜息をついていた。

自分をぐるりと囲む男たちは口々にすでに勝ったような発言を繰り返しているが、召喚された天使が何なのか彼らは知っているのだろうか？

この世界の魔水晶を見たのは初めてだったため、一体どんなものを秘めているのか真剣に身構えた自分が恥ずかしい…まぁ危機感を持つことはとても大切なことではあるから、するに越したことは無いだろう。しかし…今出て来た天使が《ユグドラシル》と全く同一の存在であるならば…非常に期待外れと言っていい。

「すみません。」

「な、何だ!?命乞いか!?はははは！やはり最高位天使を見たからには怖気づくのも仕方あるまい。だがもう遅いぞ化け物!!」

「いえ違います。その魔神と言う方は存じあげませんが、貴方が言うからにはきっと私も滅ぼせるのですよね？」

「あ当たり前だ!!お前など跡形も無く消し去ってやる!!!!」

「そうですか…。」

急にこれから倒される対象から話しかけられてギョッとするニグンだったが、女の弱弱し（く見える）い姿を見ると、流石にこの眩い神聖な輝きを放つ最高位天使に恐れをなしたようだと思ったのか勝ち誇った表情を浮かべ、嬉々として威光（ドミニオン・オーソリティ）の主天使に攻撃の命令を下す。

「さァ威光（ドミニオン・オーソリティ）の主天使よ、あの化け物に裁きの光を！〈善なる極撃（ホーリー・スマイト）〉を放てぇ!!」

ニグンの命令により最高位天使は己の持つ最大級の魔法を発動した。

第７位階と言う到底人間では到達することができない領域にある

極限の呪文は、ゴシュゥと言う音と共に天空から光の柱を出現させる。
絶対なる清浄の力は不浄の者に会心の一撃となりてその存在は霧散するが如くこの世から抹消されるだろう。
不浄の者、数々の人間離れした業を見せてくれたびっくり人間こと黒い服の女を包み込んだ大質量の光はその輝きを衰えさせることなく、力の全てを放出し切るまで続いた。

この圧倒的威力、圧倒的輝き、感じるのは悪を倒した愉悦のみ。

「あぁ素晴らしい！これぞ魔神を一撃で沈めた必殺の魔法!!なんていう輝き！なんという美しさ！これぞ勝者にして聖者たる我々にふさわしい祝杯の光だ!!」

「あの、私には少し眩し過ぎるのですが…」
「はぁああああああああああああ!?!?!?!」
なんだ、なんで奴の声が聞こえるのだ!?〈善なる極撃（ホーリー・スマイト）〉は第７位階の極限的魔法のはず！この魔法を食らって形の残るものなどこの世に有りはしないのだぞ!?それを、それをこの女はいや、化け物と呼ぶのも相応しいかわからないこの存在はなんと言った!?「眩しい」だとぉぉ!?!?!
「あ、有り得ない…有り得えてはいけない!!!」
「はぁ…いい加減お認め下さい。いいですか？今の攻撃で私に与えることができたダメージは０です。」
ああもう駄目だ、お終いだ、と陽光聖典から絶望に打ちひしがれる者の声が後を絶たない。もうニグンにも目の前の化け物とも呼べない、訳の分からない、自分達とは存在していい次元が違うこの存在をどうしていいかわからなかった。
ローザリアは帝国騎士（スレイン法国偽装兵）や手品と言わしめた天使の瞬殺劇は決して彼女が高火力技を使ったと言う訳ではなく、単

にその圧倒的レベル差からくる能力の差が主な由来だ。だからと言って高火力技を持っていないわけでもない。彼女の最大火力技は大きなデメリットが発生する諸刃の剣だが効果は絶大で、発動した場合は地図を書き換えなければならなくなる程の威力と効果範囲を併せ持っている。ただこの技を使ったのは《ユグドラシル》で大人数の部隊がナザリック地下大墳墓に侵攻して来た時の一度だけある。では彼女の本領とは何か？

それは限界を超えた物理防御力と魔法防御力だ。

これが彼女が『鋼鉄のシスター』と呼ばれる由縁であり、多くのプレイヤーを恐れさせた原因なのだ。彼女にはギルド一硬いという自負があり、そのせいか仲間たちが神器級武器を作った際には了承の上でわざ攻撃を食らい、体力がどれくらい削れたかを指標とすることによりその武器の強さを判別していた位には硬いのだ。

だから当然、ニグンのタレントによって強化された威光（ドミニオン・オーソリティ）の主天使の更に固有能力で魔法の威力が強化し、その魔法の特性である攻撃対象の属性（アライメント）がマイナスに傾くほど威力が上昇する効果で更に更に攻撃力が上昇した善なる極撃（ホーリー・スマイト）だったとしても、彼女の装甲を貫通することは出来ず、極限の一撃は彼女にとってただの眩しい光でしかなかったのだ。

目の前のバケモノは少し上空を眺めた後、つまらないものを見るような目でしかし残忍な輝きを孕んだ瞳でニグンを見つめる。

「残念ですがそろそろこの茶番も終わりにしましょう。どうやら貴方の行動を監視していた覗き者も居たみたいですし、生きているかどうかは知りませんがずっと見られているのも嫌ですからね。さて、ニグンさん、先ほど貴方は"最高位"と仰られましたが、本当の最高位はこういうモノのことを言うのですよ。」

一拍置いて、彼女は凛と透き通る声でスキルを唱える。

「次元召喚（ディメンジョン・サモン）：【Ｄｉｎａ（正裁）】」

彼女の言葉に答えるかのようにして地鳴りのような低い音が鳴り響くと、彼女の後方にある空間が文字通り

――――罅割（ひびわ）れた。

大きな亀裂が空中を走り巨大な斑色の穴が作られていく。そして中から現れたのは体長が恐らく３０ｍはあるだろう機械で出来た黒い餓者髑髏（がしゃどくろ）だった。機体のいたるところから蒸気が吹き出し、何処からともなく歯車がガチャガチャと鳴る音が鳴り響いて、全身からは繋がっていない大量のコードがまるで生皮が剥がれたかのようにぶら下がている。余りの体の大きさに全てを外に出すのは難しいらしく、上半身だけが異空間から出てきている状態だ。

正式名称、次元眷属〈悍ましい子供達〉個体識別番号・第１１番『機械魔人型』【Ｄｉｎａ（正裁）】はローザリアが『子供達』と呼び使役する全１３体の眷属の中の第１１番目の子であり、一日に２度までしか召喚することのできないレベル９０の超強力モンスターだ。

「ア！ママダー!?元気元気☆？私ハスッゴク元気ダヨ！久シブリニ会エテ超嬉シイヨーー☆☆!!」

「あぁやっぱり！さっきの接続で薄々は感じてたのだけれど貴女"自我"があるのね！なんて喜ばしいことなのでしょう!!私も貴女に会えてとっても嬉しいわ！」

動くたびにガッシャンガッシャンと鳴るその悍ましい姿の餓者髑髏は、ローザリアを見つけるとかなり明るい口調で親しげに話しかけて来た。実はこの餓者髑髏、こう見えて眷属の中で唯一の"女の子"なのである。眷属それぞれにはちゃんとした性格設定があり、《ユグドラシル》でつけられた【Ｄｉｎａ】の性格は『可愛い物大好き！キラキラする物大好き！飛び散る血シブキ大好き！な、女の子』というギャップ萌えにしたって限界がある設定をつけられていたのだが、ギルドが誇るギャップ萌えの化身『タブラ・スマラグディナ』氏曰く、「だがそれがいい！」とのこと。

ローザリアは《ユグドラシル》の戦闘でもこの眷属を何度となく呼び出し、また窮地を救われた経験が何回もあったため非常に思い入れのある眷属だった。ゲームの設定上、眷属は召喚してただ命令するだけの存在だったため、「もしお話しができたらなぁ」と考えたことも少なくは無かった。だからゲーム世界では喋ることなど考えられなかった眷属がこうして語り掛けてくれることに、何とも言えない感情

がこみ上げてきてもし涙が流せたのなら大粒の嬉し涙を大きな瞳から流していたことだろう。
「ウッヒョー！ア、デモデモママ―、久シブリニオ外ニ出タラ何ダカオ腹ガスイチャッター…」
「ふふ、さっき起きたばかりだものね。それじゃあ威光の主天使、食べてもいいですよ」
「ホントー!?ソレジャア、イッタダッキマース☆」
そうして【Ｄｉｎａ】はおもむろに威光の主天使へ腕を伸ばすと、ガシッと鷲掴みにしそのままバリバリと食べ始めた。もちろん食べられている側も抵抗はしているのだが、逆らうことのできない強大な力の前では児戯に等しい。
「ナンカコレ、パサパサスルー…デモ、好キ嫌イハイケナイヨネ☆」
文句を言いながらもちゃんと食べ切ろうとするあたり、性格設定の「根っからのいい子」もちゃんと反映されているようだ。
へー、威光の主天使ってパサパサするんだーと、ニグンは知りたくも無かった情報を大きな声で教えてくれた巨大な骸骨を口から涎を垂らしながら見ていることしかできなかった。自分の理解を遥かに超える二人に目を背けたらどんなに心が楽になれるだろうか…。
いきなり空間にバカでかい穴が開く時点でもう理解出来ないのに、そこから黒くてでっかい骸骨が現れ、自分たちの希望であった最高位の天使をムシャムシャと食べているのだぞ？この状況でまだ意識を保っていられている自分は褒めて然るべきだろう。
そうこうしているうちに、どうやら巨大な骸骨は威光の主天使を食べ終わったらしく両手を合わせて満足げな表情？を浮かべていた。
「ゴチソーサマデシタ！」
「残さずに食べて偉いわ、ディナ。お腹いっぱいにはなったかしら？」
「ンー、マダ食ベラレルケド他ニ食ベラレソウナノガ無イカラ大丈夫。」
「それもそうね、そしたら次はお仕事の時間よ。」
「ナニスレバイイノー？」
「簡単よ、ここに居る人間を一人残らず焼き払いなさい。」

「アイ、アイ、マムッ！」
【Ｄｉｎａ】は母の命令に元気よく答えると、両手をアバラ骨にかけガパッとそのまま開く。そして胸の中央に収められていた球状の水晶らしき物体はそのまま真っすぐ飛び、陽光聖典の上空で滞空する。
明確な殺害予告を聞かされたニグンは心ここにあらずだった意識を急速に引き戻して必死に思いつく限りの謝罪の言葉を羅列しながら頭が地面につきそうなくらい命一杯下げて陳謝する。
「すみませんでした！ごめんなさい！お赦しください！私しめが浅はかでございました！貴女様のその偉大なるお力に唾を吐くような真似をしてしまったことをどうかお許しください！ここに居る人間は全て貴方様に捧げましょう！足りなければ金でもなんでもお出しします！ですからどうか命だけはお助け下さい!!」
自分たちが今まで信じて来た優秀な隊長のあまりにも情けない姿と身勝手な言動にそ、陽光聖典の兵士たちは驚愕の表情を浮かべるが今のニグンは脇目もふらない。
「そうだ！取引をしましょう！偉大なる貴女を我が法国でお迎えいたします！きっと国から膨大な契約金で雇い入れていただけるはずだ!!それに貴女様のお力ならば、すぐに国の官僚にまで上り詰め、その手に国を治めることができるでしょう!!素晴らしい！実に素晴らしいではないですか!?貴女に損は無い筈だ！ですからどうか私の命ばかりはお見逃し下さい!!お願いします!!!」
自分が助かりたい一心で自分部下と祖国すら売ろうというのだ、このニグンと言う男は。本当に人間の心と言うものを持っているのかと疑いたくなるほどに下劣で最低な男だ、全く反吐が出る。
「慈悲、ですか」
「お考え下さいますか!?」
「…ええ、宜しいでしょう。」
ここまでの優待をしたのだ、きっとこの偉大なるこの御方は私の素晴らしい提案を受け入れてくださるに違いない！
ニグンはそう信じることでしかもう正気を保たせることが出来なかった。少し油断をすれば白目をむいて、意識を失い糞尿を捲き散ら

してしまうだろう。
「おぉ！そうですか！ではすぐに手配を…」
「黙りなさい人間。あなたご自身でおっしゃられましたよね？『無駄な足掻きを止め、そこで大人しく横になれ。せめてもの情けに苦痛なく殺してやる。』そっくりそのままお返しいたします。さぁやりなさい、ディナ。」
「待ァッテマシタァ!!食ラエッ！目カラ強イビーム!!!」
【Ｄｉｎａ】が元気よく叫ぶと、大きく窪んだ虚ろな眼孔から赤い光の線が射出され、滞空させていた球体にぶつかると光は水晶の中で複雑に反射を繰り返し、水晶から拡散して雨の様に陽光聖典へと降り注ぐ。
この赤い光は、ローザリアが機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）の完全形態で帝国騎士を葬ったときに使った物よりもさらに数十倍の熱量を誇り、直撃せずとも掠っただけで、対象は跡形も無く蒸発する。
「嫌だァあああああああああああああああああああああ!!!!」
ニグンは死刑宣告をされたことで遂に発狂し、奇声を上げながら腕をブンブンと滅茶苦茶に振り回して脱兎の如く逃げるが、【Ｄｉｎａ】の放った光線が命中し跡形も空く消し飛んだ。隊長を失った陽光聖典たちは蜘蛛の子を散らしたかのように規律も統率も無い蜘蛛の子を散らしたようにバラバラな方向へ持ちうる限りの力を使って全速力で逃げだした。
だが空から雨の様に降ってくる光の速さから逃げ切れるような術を持たない彼らは、奮闘空しくニグン同様に次々と蒸発していくだけだった。

メメント・モリ

巨大な餓者髑髏が放った雨のごとき破壊の光は獲物を蒸気に変え、緑豊かな大地を穿ち抜き、鼻孔をくすぐるのは全てが滅ぼされた死の香り。

ローザリアの見る景色は、動く者、生きる者が存在しなくなった不毛の地へと化していた。それはまるで生前に過ごしていた時代を垣間見るかのようで彼女は表情を哀しみの色に染める。

２１ＸＸ年、地球は黒く淀んでいた。

空気は一息吸っただけで人間を殺し、大地は汚染物質で穢され雑草一本さえ生えなくなり、海は多様な微生物ですら存在しない死の水溜めと成り果てていた。真理亜は生きとし生ける者を否定するそんな世界が大嫌いで仕方がなかった。真理亜が産まれた時には既に世界はガスマスクなしで人は外を歩けない状態だったため「ずっとこうなのだ」と思っていた。しかし学校に通うようになってから歴史の授業で過去の地球の姿を目にしたとき彼女は驚愕した。遥か昔の地球は、空気はガスマスクなど必要ないくらいに澄み渡り、大地は様々な草木に覆われていて、海は数えきれないほどの生物が生息する生命の源だったのだ。そして同時に美しい自然を破壊したのは何を隠そう自分達人間だと知った。教会の神父である父から常日頃「慈愛の心」を教え込まれてきた彼女は人一倍優しい心の持ち主であったため、美しい自然を破壊してしまったのは直接的に自分では無いにも関わらず、人間であるという理由だけで自分が許せなかったのだ。

それから彼女は毎日自宅の教会の懺悔室で信仰する神へ人類が行った許されざる罪を懺悔し、少しでもあの美しかった自然を取り戻したいという思いで高級品であった花のプランターを今までずっと使わずに取っておいていた貯金で買えるだけ買い、丹精込めて育てた。その彼女の思いに答えるかのように手塩にかけて育てられた花たちはスクスクと成長し、いつしか町で『花の教会』と呼ばれるほどに教会は緑豊かになっていた。

そして彼女は花を育てることと同じくらい大好きになったものが

あった、それが《ユグドラシル》である。
《ユグドラシル》は失われた遥か過去の地球のようなフィールドが舞台であったため、見渡す限りの緑豊かな自然が溢れていた。それがたとえＣＧで作られた疑似的な世界だったとしても真理亜の目を輝かせるのには十分だった。目に入るものす全てが美しいその光景は現実世界でいつも抱いていた夢の世界そのものだったため、一瞬で虜となった彼女は始めてから三日もたたないうちにその世界の住人と呼べる程にのめり込んでいった。
そしてゲームの世界が現実となった今。実際に手で触れて本物の感触が実感できるこの世界で、彼女は人類の過ちを再び繰り返してしまったのだ。自分が大嫌いだった光景を彼女自らの手で作り出してしまったのだ。
なんの贖罪にもならないだろうが、彼女は祈りの姿勢を取り己が犯した過ちを懺悔する。
「メメント・モリ（死を忘れることなかれ）…これも神が与えし業の一つなのですね…。」
「…モシカシテ、ヤリ過ギチャッタ…？」
彼女の悲しみに満ちた表情を見た【Ｄｉｎａ】は不安が籠った声で話掛けてきた。その問いかけに答えるためローザリアは俯いていた顔を起こすと母が子を愛するような慈愛の表情で、それは違うと教える。
「いいえ、貴女のせいではないわ。これは全て私が招いた結果なのです。それよりも頑張ってくれてありがとう、やはり貴女は頼りになるわ。」
「エヘヘ照レチャウヨ～／／／ア、ソウダ。コレカラママハドウスルノ？」
「あぁ、そうねぇ…」
言われて気づく、どうしよう…。
最悪と言ってもいい別れ方をしたカルネ村にはもう戻れないだろうし、かといって周辺の国に行けるほど自分はこの世界の地理に詳しくない。自分は体に埋め込まれているデータクリスタル〈永劫炉心核〉によって食料を食べなくても力尽きることは無く、機械の体であ

るため疲れることなど一切ない。ついでに言えば飛行能力もあればステレス機能だって持ち合わせているからやろうと思えば三日も四日も休まずに次ぎの目的地も探すことは容易いだろう。しかしこの世界は広大だ、ゲームの世界とは訳が違う。今言ったことをやるならば、途方もなく膨大な時間がかかるだろう。それに帰るべき場所がないのも、いくら機械の心とは言え根っこはまだ人の心が残っている。いつかは耐えられなくなるだろう…んん？帰るべき場所…？

「ああっ!!」

「ナ、ナニッ!?」

今の今まですっぽり忘れていた。自分には帰るべき場所があるじゃないか！なんで真っ先に思いつかなかったのだろうか…？いや、そんなことよりも！

彼女は急いでアイテムボックスを開くとあるアイテムを取り出す。それは赤い宝石が埋め込まれた豪華な指輪だった。名は『リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン』と言う。ナザリック地下大墳墓を拠点とする悪名高き最愛のギルド『アインズ・ウール・ゴウン』への転移を可能とするマジックアイテムだ。

取り出し終えると人差し指に指輪を嵌める。彼女のその細い指に対して輪が大きすぎるのだが、指輪の特性で対象者の指の太さに合わせる効果が発動し、シュルシュルと丁度良い大きさに収まった。

彼女は指に嵌めた指輪を不思議そうに眺める。

「なんで忘れてしまっていたのでしょうか…」

「忘れるなんて酷いですね、ローザリアさん。」

「!?」

「アッ!!」

唐突に話しかけられたため肩が大きくビクリと撥ねる。

「その声は『モモンガ』様!?」

「骸骨ノオ兄☆チャン!?」

ほぼ同時に女性陣が叫ぶ。

「ええ、どうやらお元気そうでなによりです。ディナさんもこんにちは。貴女もこちらと同じ状況の様ですね…。いや～しかしびっくり

しましたよ、ナザリックの外で第１０位階級の魔力を感知したので何事かと来てみればまさかローザリアさんにお会いすることになろうとは。」
　ローザリアの真後ろに現れたのは、豪華な黒いローブを身に包み、右手には黄金に煌めくこれまた素晴らしく豪華なスタッフを持った骸骨の異形だった。
「…そ、そうだったのですか。はぁ～びっくりした…。」
　モモンガはローザリアの言動に少し違和感を覚える。
「ん？ローザリアさんって精神作用無効化スキルが発動していないんですか？」
「精神作用無効化ってあの精神作用無効化？」
「そうです。」
　精神作用無効化スキルとは異形種が持つ特有スキルの一つで、人間種や亜人種などに有効とされる〈魅了〉や〈催眠術〉などの精神作用系スキルを完全に無効するというものがある。
「…すみません、仰っている意味が良くわからないのですが…？」
「フム…」
　モモンガは混乱していた。この世界において精神作用無効化スキルは精神の安定化を強制的に発動させる効果が追加されており、この効果のお陰で何度となく危ない場面を切り抜ける事が出来たのだが、目の前の女性はどう見たってアタフタと動揺している。さっき声を掛けた時の驚きようも人間そのものだ。
　もしかして発動しているのは自分だけなのか…？それともっと何か違う原因があるのか…？…わからない…。
「とりあえず、ナザリックへ戻りましょう。いつまでもここに居ては何が起きるかわかりませんしね。詳しい話はそこで聞きたいと思います。」
「まぁ！ナザリックはこの世界にもちゃんとあるのですね、よかった～。さてでは、そういう事なので暫くお別れですディナ。」
「ウン分カッタヨ、ママ！帰ッタラ兄弟ニママノ事オ話シシナクッチャネ☆骸骨ノオ兄チャンモバイバイーイ☆」

【Ｄｉｎａ】はブンブンと元気よく手を振りながら次元の穴へと帰っていった。彼女が次元の穴の中へ引っ込むと、罅割れていた空間の穴は、時間を巻き戻したかのような動きで塞がって、跡形も無くなった空中は奇麗な橙色の夕焼けを映していた。

「指輪は持っていますか？」

「はい、此方に。」

「では帰りましょう、私たちの家に。」

黒い衣を身に纏った美女と、豪華なローブに身を包んだ骸骨はその言葉を最後に、一面の焼け野原から忽然と姿を消すのだった。

キャラ紹介＆設定

◇キャラクターネーム：ローザリア（本名：黒須真理亜）
解説：名前は彼女が育てた花の中で一番好きだった『薔薇（ローズ）』と教会のイメージである『十字架（ロザリオ）』を掛け合わせたもの。
◇二つ名（蔑称）：鋼鉄のシスター、剛壁女
◇年齢：２３歳
◇性別：性別なし（現実は女）
◇身長：１７０cm（完全形態：２００cm、究極形態：５０m）
◇体重：５００kg
◇体形：痩せ型
巨乳
足長い
◇服装：クラシックな修道女服。色は黒と白のモノクロスタイル。遠目だと分かりにくいが、近くで見ると豪華な刺繍が品よく施されている。実は服ではなく、体表面を覆う液体金属を操って服に見えるよう擬態させている。同じ理由で肌や髪の毛も液体金属をそれっぽく擬態させたものである。つまり彼女は全裸。
◇種族：人型機械（アンドロイド）ｌｖ１５
古の機械人形（エンシェント・オートマータ）ｌｖ１０
大いなる機械（マグナ・マキナ）ｌｖ５
▪［課金］機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）ｌｖ５
◇職業：考古学者ｌｖ１０
超文明技術学者ｌｖ５
深淵を覗く者ｌｖ５
銃術士ｌｖ１０
ガンマスターｌｖ５
精密射撃技術士ｌｖ５
大型兵機ｌｖ１０
大規模破壊兵機ｌｖ１０
最終兵機ｌｖ５

◇キャラクターレベル

・種族ｌｖ３５＋職業ｌｖ６５＝１００

◇キャラクターステータス（最大値を１００とした時）

・ＨＰ：１０

・ＭＰ：９０

・物理攻撃：２０

・物理防御：限界突破

・素早さ：５０

・魔法攻撃：１００

・魔法防御：限界突破

・総合耐性：１００

・特殊：限界突破

解説：《ユグドラシル》のゲームにおいてはその貧弱なＨＰステータスにより、育成難易度が半端じゃなく難しい種族として有名であり、またそのせいで全く人気がない種族でもあった。もし仮に選ぶとしても最初からＨＰや防御力に優れた同一の無機物異形種系統に属するゴーレム種に軍配が上がるだろう。そんな種族を彼女が選んでしまったのは、キャラクター作成時に選べる初期種族が余りにも多かったため、適当に選んだらこれになってしまったと言う具合である。

◇属性（アライメント）：極悪（カルマ値：―５００）

◇種族スキル

・状態異常耐性強化Ｖ

・信仰、聖職、呪術、死霊、精神操作、即死系魔法無効

・斬撃耐性強化Ｖ

・打撃耐性強化Ｖ

・防御力増強化Ｖ

・火属性耐性強化Ｖ

・ＨＰ脆弱化Ｖ

・刺突耐性脆弱化Ｖ

・雷属性脆弱化Ｖ

・水属性耐性脆弱化Ｖ

・腐食耐性脆弱化Ｖ

▪ｅｔｃ…

◇職業スキル

・アンティキティラの歯車：自身の素早さを一定時間限界突破させる（３００秒）

・バールベックの巨岩：自身の物理と魔法防御を限界突破させる。

・ネビュラの円盤：自身の周囲に不可視のバリアを張る。バリアの耐久力は自身の防御ステータスに依存する。一定量以下のダメージを吸収し、吸収した量の半分の値でバリアの耐久値を回復させる。

・邪馬台国の銅鏡：魔法を詠唱者に反射させる鏡を出現させる。

・虚ろの合わせ鏡：自身の分身を任意の数だけ作り出し、それぞれが本体として機能する。但しＭＰは共有する。

・ピラミッド・パワー：一定時間自身が受けるダメージを５０％にする。（３００秒）

・プロヴィデンスの瞳：自身を中心とした半径５㎞以内に存在するすべてを知覚する。また、任意に方角を絞ることにで効果範囲をその方向へ延長させることができる。

・魔力弾精製量上昇Ｖ：魔力１に対して魔力弾５０発精製することができるようになる。

・魔力弾威力強化Ｖ：魔力弾の威力を上昇させる（１５０％）

・黒鉄の防壁：ＭＰを消費して防壁を出現させる。この時の耐久力と防御力は召喚者のステータスを５０％の値を引き継いだものとなる。

・次元召喚：次元眷属の召喚スキル

▪ｅｔｃ…

◇隠しクラススキル

▪・ｔｈｅ　ｔｒｕｔｈ：???

▪・Ｔｒｉｇｇｅｒ　ｈａｐｐｙ：???

◇大技

▪・星堕とし

▪・自爆

◇使用武具

▪武器：慈悲の十字架（The cross of mercy）

▪防具：装備不可

解説：武器は無機物異形種だけが使用できる『銃』である。普段は彼女の首元に白をベースとして金の縁取りと中央の赤い薔薇の花弁の彫刻が美しい縦５cm横３cm程のロザリオとしてぶら下げられているが、「撃鉄を起こせ！慈悲の十字架（The cross of mercy）!!」と叫ぶと武器として展開することができる。叫ばなければいけないのは、武器制作時にヘロヘロ氏がいたずらと浪漫で仕込んだ音声認証キーが原因であるため。ついでにＡＩも仕込まれており、割と良く喋る。銃は変形機構を有しており、ハンドガンからガトリング、果てはロケットランチャーにまで変形することが可能。武器として展開したときの初期形状は大口径ハンドガンとして設定されている。

防具は課金種族である機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）の固有設定により一切つけられない。ただしステータスに影響を与えないものであれば可。（白いレースの手袋なんかがそう。）

◇戦闘スタイル

戦闘スキルに広範囲攻撃が多いため「一対多」の戦いが得意である。半面フレンドリーファイヤに巻き込みやすいのが玉にキズ。その硬い装甲を生かした電撃戦が彼女の基本戦術であり、敵陣に一気に突っ込んで集中砲火を食らいながら高火力技をぶっぱして殲滅するなど性格のわりにド派手な戦い方を好んだ。もちろんこう言った戦い方だけではなく、超遠距離からの高火力射撃による援護をしたり、豊富な防御スキルでひたすらに壁役を担ったりなどチームプレイを重視した戦い方もできる。また、彼女が『子供達』として愛用する高レベル帯の眷属たちもかなり強力で、それら全てを出現させて放つ必殺技の威力は地図を書き換えねばならないほどの威力を持つ。

◇所属

▪ナザリック地下大墳墓

▪ギルド：アインズ・ウール・ゴウン

▪住居：第９階層自室と第６階層『薔薇の教会（ローゼン・チャペル）』

解説：アインズ・ウール・ゴウンに所属する原因となったのは、その貧弱なＨＰステータスと異形種であることが原因で、異形種狩りの格好の餌食であり頻繁にＰＫをされていた。彼女は美しい《ユグドラシル》の世界を堪能したいだけなのだが、こうも頻繁に殺されてしまうと精神的にも疲れゲームを辞めようかと考えていた時、颯爽と現れた正義の銀騎士『たっち・みー』氏にＰＫをされていたところを救われたのが原因だ。それまでずっとソロプレイをしていたローザリアにとって『たっち・みー』氏は救世主であり、助けてもらった恩返しをしたいと強く希望すると、「同じ異形のよしみ」と言って快く受け入れてくれたことで入団を果たす。

◇世界設定

世界設定はほぼ原作通りでございますが、主人公の設定だけはオリジナルとさせてもらってます。先ず、ローザリアが転移したての時点では心が完全に人間であったこと。これは彼女が交通事故による死亡（？）と同時に異世界へ転移したことが原因としています。モモンガさんは最初からゲームにオンラインしたままの転移と言うことで、初めからゲームの設定を大きく受けることができました、しかしローザリアの場合は転移先がナザリックではなく、異世界の村近くに出現してしまい《ユグドラシル》とは影響が全くない状態でのスタートですので、体だけが《ユグドラシル》の設定を引き継ぎ、心や思想は現実の人間そのものとなってしまったわけです。次に心の異形化ですが、これは彼女が異世界で初めて異形の姿になったことにより起きた現象です。これにより《ユグドラシル》では自身が異形種であったことを思い出した事で《ユグドラシル》の影響を受け心までもが異形となりました。最後に精神操作無効化スキルの無発動ですが、これは２章の最初の方で明らかになりますのでお待ちください。

第2章
追懐

この場所を訪れた者はきっと、いや確実にその目に映る光景に息を飲むだろう。

それが例え目の肥えた貴族や美術家だろうが、美しい物とは無縁の生活を送る下級市民だろうが、この場においては全員等しく言葉を発することや息を吸うことを忘れてしまう。

「素晴らしい」「なんと輝かしい」「風格がある」「荘厳だ」「煌びやかな」…対象を褒める言葉は数多く存在するが、此処はそれら全てを受け付けない、ましてや相応しい賛美の言葉なぞ見つけようがないほどに

――美しい

見上げるように高い天井には精巧な金色の装飾が施され、吊り下げられた複数のシャンデリアは見たことも無いような七色の宝石で作られており、思わず目が釘付けになるほどの幻想的な輝きを放っていた。

壁には天井付近から床にまで届かんばかりの長く大きな旗が計４１枚かけられており、それぞれに至高の４１人の一人ひとりを表す紋章が描かれている。

そして巨大な空間の最奥には数十段の階段が設けられ、その頂にはまるで一つの巨大な水晶から切り出したかのような背もたれが高く天をつく玉座が鎮座している。その背後には、４１人の素晴らしい仲間達と共に過ごした日々、記憶、歴史、誇り、そのすべての象徴であるギルドサインが施された深紅の大きな垂れ幕が悠々と垂れ下がっている。

そう、此処こそが仮想現実体感型オンラインＲＰＧ《ユグドラシル》において数々の非道な悪行を好んで行ってきたゲーム内トップ９の悪名、誇り共に高きギルド、《アインズ・ウール・ゴウン》の最重要箇所である【玉座の間】だ。

冒頭でここを訪れた者達は息を飲む、と記述したが少々語弊があったかもしれない。正しくは「心臓の鼓動を止めた者達」だ。なぜならば、ここは「生」を否定した暗黒の「死」が統治する世界。生きた者が存在することすら許されない聖域なのだから。

その玉座の間に突如として二つの影が現れる。

影の一つは大きく黒いローブを身に纏った2メートルを超すであろうかと言う程巨大な骸骨だ。その細くも逞しい白骨の指には一本一本に巧緻な指輪が嵌められ、その手にはこの世の全ての宝石を集めたとしても見つけ出せないであろう美しさを誇る石を9個もはめられた黄金のスタッフが握られている。

そしてもう一つの影は、前者と比べて小さい人型をしている。これは女性のようだ。いわゆる修道服を着こなしたシスターの格好をしており、頭に被った黒いベールの間からは形容できないほど美しい碧眼の美女が顔を覗かせる。

「うわー!・うわー!・凄いっ!!」

小さな影、もとい碧眼の美女は周囲をキョロキョロと装飾に彩られた巨大な空間を見渡しながら思いつく限りの賛美の言葉を発していた。

「見慣れていた筈なのに、現実になってみると一層美しさが際立って確かに凄いですよね。」

キョロキョロする美女とは逆に落ち着いた雰囲気で骸骨は応える。肺も声帯も無いのにどうやって喋っているのかは甚だ疑問ではあるが、突っ込んではいけない。

骸骨はこの美しさを共感できる存在が増えたことに喜びの表情（に見える）を満足そうに浮かべていたのだが、異変を感じ取り表情を訝しめる。

異変とは、散々騒いでいた女性がピタリと動きを止め、且つ黙り込んでしまっていたのだ。

「ど、どうしましたローザリアさん?」

骸骨から声をかけられたローザリアと呼ばれるシスターは反射的に振り向き、その表情は不安そうだ。

「いや、その…凄く興奮していた筈なんですけど、急に落ち着いちゃって…自分でも何が何だか…？」
彼女発言を聞き骸骨は「あぁ…」と胸をなでおろす。もし自分でも察知できない様な異変を彼女が察知して、それに対する反応だったらどうしようと考えていたのだがどうやら杞憂に終わったようだ。
「やはりローザリアさんも適用されていたようですね、精神操作無効化スキルが。」
「精神操作無効化スキルって、私達特有の？」
「そうです。」
精神操作無効化スキルとは、異形種のみが持つ特有のスキルで、効果は主に人間種や亜人種などに有効な洗脳や魅惑等が一切聞かないと言うものである。
精神操作無効化スキルが今の状態と何の関連性があるのかを少し理解しかねている彼女をよそに、骸骨は一人思慮ぶける。
（しかし…先ほどの外での会話では彼女は精神操作無効化スキルが発動していなかったように思えたんだけど、もしかしてナザリックに来たことに何か関係があるのだろうか…？まぁ時間はある、ローザリアさんとじっくり話して原因を探っていけばいい。）
思考で俯きかけていた頭を起こし、これからの事を相談するため再び喋り出す。
「ローザリアさん、ひとまずは…「アインズ様っ!!!!」ッぉお!?」
突然、玉座の間に響き渡るほどの大きな声で会話に割り込まれたため、二人は思わず肩を震わせ勢いよく声がした方向に振り向いた。一瞬だったが白い影がこちらに向かって猛然と突っ込んで来ていたのは見えた気がする。
「アインズ様！よかった、本当によかった…もしアインズ様が居なくなられてしまったら私は、私は…」
白い影は勢いのままドスンッという鈍い音が聞こえるほどにアインズと呼ばれた骸骨へと抱き着いて、小さく消え入りそうな涙声が漏れ聞こえる。どうやら骸骨の無事を喜んでいるようだ。
「あ、アルベドか？」

「はい！貴方のアルベドでございます!!」
　自分に抱き着いている人物を見紛う筈はないのだが、あまりに一瞬の出来事だったために思わず疑問形の問いかけになってしまった。対して抱き着いている白いドレスを身に纏った女性は、名前を呼ばれたのが嬉しかったのかローブにうずめていた顔をガバッと起こし涙目ながらも満面の笑みで応えた。少しその内容が引っかかるのだが今はおいておくとしよう。（貴方の…？）
「その、済まなかった。断りも入れずにここを離れてしまったことは深く詫びよう。それと、私はお前たちを置いてどこかに消えるような真似をしないことを誓おう。…だから、その…腕を離してくれると助かる…」
　もちろん心配を掛けさせた自分が一番悪いのだが、もう少し抱きしめる力を弱くしてくれると…お、折れる…
　いくら自分が１００レベルとはいえ魔法詠唱者（マジックキャスター）という職業柄そこまで物理防御は高くないのに対し、アルベドも同じく１００レベルで防御特化型の職業とはいえ攻撃は物理寄りであり、その数値はアインズの物理防御力を上回る。つまるところ何にも防御スペルを発動していない今、ステータスが１００％影響するので許容圧力を超えた熱いハグは単純に…申し訳ないのだが『痛い』のだ。ほ、骨がきしむ…あとなんか甘い香りがするし何かはさっぱり分からないけど二つの柔らかい感触がするしもう色々と不味い…
　白骸を全力で抱きしめるアルベドと呼ばれたこの美女は、このナザリック地下大墳墓の守護者統括という重要な役割をを任されているＬｖ１００の高レベルＮＰＣだ。しかしゲーム世界が現実世界となった今、自我を持った彼女に対してＮＰＣと呼ぶのはふさわしくないだろう。
　アルベドはアインズに言われて我を忘れていたこと気づき、素早く抱きしめていた腕を自分の胸元に戻して、先ほどまで嬉々と輝いていた大きな瞳は伏し目がちになり態度は歓喜から反省へと一転してしまった。
「すっ、すみませんアインズ様！アインズ様がナザリックにご帰還さ

れた嬉しさの余りとんだはしたない真似を…」
　ただ手を離してもらいたかっただけだったのだが、自分のたった一言だけでこうも態度を一変されてしまうと焦りとやりにくさを感じずにはいられない。
「いや良い、お前の全てを赦そうアルベド。それにさっきも言った通り悪いのは何も言わずに出て行った私の方だ、むしろこうして心配してくれるのだから感謝している。ありがとうアルベド。」
　自分の主人から感謝の言葉を送られて嬉しくない従者など、このナザリック大墳墓中をいくら探したって見つからないだろうが、特にアルベドは顕著で力なく垂れ下がっていた腰の翼は大きく広げられ、目は輝きを取り戻し果てには喜びの涙まで流している始末だ。
「命を捧げる主人を心配しない僕がどこにおりましょうか、それにアインズ様の行動には全て意味がございます、それを図り切れなかったのは私の失態。感謝などもったいないお言葉でございます！」
　彼女の言葉を聞いたアインズは、アルベドとは裏腹に少し気分が落ち込んでいた。
　これだもんなぁ…。素直に感謝の気持ちを受け取ってくれればいいものを、わざわざ自分を蔑むような真似をするんだもの…非常にやりにくい事この上ない。
「…アルベド、時には自分をおとしめる様な発言はかえって相手にとって失礼に当たることがある。お前が主人の考えを図ると言うなら、その主人の言葉に含まれた意味も考えよ。」
　アインズの深い釘指しにまた失敗していしまったと謝罪しそうになるが、ハッと考えを改めてアルベドは深く礼をした。
「感謝のお言葉、痛み入ります。」
　アルベドの態度にようやく満足したのか、アインズは若干嬉しそうな声で頭を上げるよう指示した。
「よい頭を上げよ、次からは気を付けるのだぞ？さて、この話はもうお終いだ。ではアルベド、来てくれたのならばついでに頼まれてくれ、各階層守護者達をこの玉座の間に集合させよ。」
「はっ、御心のままに。」

短い了承の言葉と共に行動を開始するべくアルベドは一瞬で姿を消した。
しかしアルベドには転移能力は無い。ならば何故一瞬で消えることが出来たのか、それはアインズが守護者統括と言う役職において必要となるであろうと思いあらかじめ渡しておいた【リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン】の効果を使ったのだろう。この指輪状の魔法道具（マジックアイテム）は、外の世界に居る時一瞬でこのナザリック地下大墳墓に転移する機能と、ナザリック地下大墳墓内で好きな場所に転移することができる機能がある神器級アイテムだ。アルベドが突如として玉座の間に現れたのも、アインズの帰還をいち早く察知したアルベドが指輪の効果を使って転移して来たのが原因だろう。
「ふぅ…疲れた。あれ？そういえばローザリアさんは？」
アルベドの突然の乱入により完全にローザリアの存在が思考外へと追いやられてしまっていたことに気づき、あたりを見渡すも彼女の姿が見えない。と、
「あ、ここです。」
不意に真後ろから声が聞こえて来たのでこれまたビックリと肩を震わせるアインズだったが、また懐かしさを憶えもした。
「もう驚かさないでくださいよ、心臓に悪いです。って言っても《ユグドラシル》の時はよく驚かしてきましたもんねローザリアさんは。貴女のステルス能力は特殊すぎます…。」
声がした方向にアインズが話しかけると、その空間が歪んだ様にもずれた様にもとにかく異様に形が崩れスゥーとローザリアの姿が浮かび上がってきた。
「えへへ、すみません。でもモモンガさんが悪いんですよ？私を無視して可愛い女の子とイチャイチャするんですから…」
そういうとわざとらしくローザリアは頬を膨らませる。
「いや、そのイチャイチャしていたとかではなくてですね…」
彼女の態度にアインズはアタフタと取り乱し必死に言葉を並べて取繕うが、その悍ましい見た目と身振り手振りの動作とのギャップが何とも滑稽だ。

そんなアインズの姿を見てローザリアは頬に溜めていた空気をそのまま吹き出して笑う。
「ふふっ、冗談です。ホントはびっくりした癖で無意識にスキルを発動させてしまっていたようです。自分でも気づくのにちょっと時間がかかりました。」
「そういえば《ユグドラシル》でもステルス状態で居ることが癖でしたもんね。…あれ？と言うことはアルベドはローザリアさんの存在に気付けていない？」
「あー、そうかもしれないです。私が消えていたのが原因かもしれないですけど最初っからモモンガさんの方しか見ていませんでしたし目を離そうともしませんでしたから。彼女そんな性格の設定でしたっけ…？そんなことより、モモンガさんは何故彼女にギルド名を呼ばせているのですか？」
彼女の問いかけにアインズは口ごもってしまう。僅か数分で黒歴史よりも恥ずかしい事態に陥った出来事を思い出し、頭を抱えそうになるアインズだがこれは自分が招いたことだ、当然説明しなければならない義務がある。（ただ…まぁ今じゃないだろう？）
「うぐっ…あー、そこらへんはえーっと…追々説明することにします。と、取り合えずローザリアさんも聞いていたとは思うんですが、此処に階層守護者達が集まってくるので、まずは彼らに挨拶と行きましょうか。」
アインズがそう言うと、先延ばしの論点ずらしが功を奏したのかローザリアは了承と共に期待と不安が入り混じった複雑な表情を浮かべたのだった。
「さっきのアルベドさんもそうですけど、推測ですが他の皆さんも私たちしか認識できない異常事態によって自我が生まれ、自分の意志で動いているんですよね？」
「えぇ、その推測の通りです。この状況に陥ってしまった原因は自分も一切分かっていませんが、彼らが喋り出した時は相当にビビりました。」
「ですよねぇ…あぁ何だか不安になって来ちゃいました。みんなに変

な風に思われないか心配だなぁ…それでも会って話してみたいなぁ…」
アインズは彼女の抱いている不安に痛いほど共感できる。
彼女に会うまで、彼はここナザリック地下大墳墓の主にして王という、つい最近まで一般市民だった階級の人間にとっては重すぎる立場に偶然にもなってしまった。会社の上司と部下ならまだしも、王として従者たちへの接し方など普段から考えることではない。それでも四苦八苦しながらも自分の事を王と崇める従者たちの期待に背かない様な振る舞いをせねばならないと必死になって努力して来た。しかしそのストレスたるや、アンデッドとなって疲れを知らぬ体になったとしても心労だけは増えるばかりで心休まる暇がないのが現状だった。
だからこそ、彼女を見つけられたことはアインズにとって歌って踊りたくなる程に嬉しい出来事だった。まさに奇跡!!
この辛さ苦しさを共感できる、愚痴る事が出来る、いやそれだけじゃない。この未知の世界において知っている存在が一人でもいるだけで心強さが段違いだからだ。
「ローザリアさんの気持ちは良っくわかります。安心してください、私がちゃんとサポートしてみせますので。それよりも彼らは、至高の41人の一人と言うだけで相当の忠誠心を見せてくるので、どうか彼らの気持ちに引いてしまわないよう気を付けてくださいね。」
「例えばさっきのみたいな?」
「えぇ…本当に苦労させられますよ…。」
「あはは…」
苦労を思い出してまた気分が沈みかけそうになったアインズだが、払拭するようにわざとらしく大きく手を叩いて気分を一新させる。乾いた音が玉座の間に響き渡った。
「よし、では彼らが来るまでまだ幾ばくか時間があります。それまでにスピーチのレクチャーなどをしてしまいましょう。」
「はい、よろしくお願いします。先生♪」
「や、やめてくださいよ」

「ふふふ、モモンガさ…いえアインズさんは昔と全然変わってないですね。」
「それは、貴女もですよローザリアさん。…はははっ」
アインズは幸せを感じていた。昔馴染みの仲間とこういった何の他愛も無い会話をすることがこんなにも楽しくて、懐かしくて。それに誰にも見せられなかった、見せてはならなかった本当の自分を安心して見せることができる人がこんなにも近くにいる。なんて幸せなことなのだろう。涙腺があったのならばアルベド宜しく涙を流していたかもしれない。

各階層守護者達が玉座の間まで集合するまで時間にして残り5分。
果てさてローザリアと彼らの邂逅はうまくゆくのだろうか。

謁見

ナザリック地下大墳墓最下層、ギルド《アインズ・ウール・ゴウン》最重要箇所【玉座の間】

「階層守護者各位、御身の命により集結を完了致しました。」

広いこの空間にスゥと溶けていくようで、しかしはっきりと聞き取る事が出来る若い女性の声が響き渡る。ナザリック地下大墳墓　全１０階層あるエリアの各守護者達が集まったことが、女性の恭しい礼と共に水晶の玉座に深く腰を掛けた骸骨に告げられる。

「うむ、ご苦労。此度は皆忙しいところを良く集まってきてくれた。感謝する。」

報告を受けた骸骨は軽く手を挙げ、白いドレスを着た女性とその後ろに控える影達に礼をした。

この巨大な水晶の玉座に座っている骸骨は、ここナザリック地下大墳墓の絶対の君主にして王と崇められる存在。彼の名はモモンガ、否、今は『アインズ・ウール・ゴウン』としてこの地を治めている。彼は強大な力を誇る魔法詠唱者（マジックキャスター）で、かつて仲間たちと共に数々の極悪非道ＲＰと多くのワールドアイテムを保有したことで一躍有名となったギルドのリーダーを務めていた。

そしてアインズの正面に立つ、階層守護者集結の報告をした白いドレスを身に纏ったこの女性は、ナザリック地下大墳墓守護者統括という重役を務めている『アルベド』。見る者全てを虜にしてしまうような美貌の持ち主で、人間の姿をしているものの、頭から天に向かって伸びる純白の巻角と腰から生えている堕天使を思わせる様な漆黒の翼が人間ではないことを如実に表している。彼女の種族は人を惑わすことに長ける小悪魔（インプ）だ。そのお陰でアインズは色々と苦労させられているのだが、それはまた別の話。

アインズが玉座から見下ろす階段の下には集められた階層守護者達が横一列に並んでいる。彼らはいつ誰が命令したわけでも、訓練したわけでも、教えたわけでもない筈なのに全員から畏敬の念がにじみ出ているのが分かる見事な立ち姿で君主の言葉を待っている。

アインズは異世界に転移してからと言うもの、これまでに何度かこのような状況に直面してきた。現実世界ではただの会社員であった鈴木悟にとって、そうそう簡単に慣れるような状況ではなく毎回極度の緊張で失った筈の胃がキリキリと痛む思いをしている。だが、アンデッドの体になったことですぐに波一つ立たない湖面の様な平静さを保つことが出来る様になった。どうやら異形種特有の〈精神操作無効化スキル〉と言うパッシブスキルの影響によるらしい。《ユグドラシル》が異世界とすげ変わったことに関係があるかどうかは分からないが、人間の時に得られる過度な興奮状態や憔悴状態といった精神的に不安定な状態を強制的に平定させる効果が付与されたようだ。

この効果のお陰でいくつもの窮地を何とか切り抜けて来たのだが、同時にまだ人間であった時の感覚が残っているので、大喜びしたい時でもスキルが発動してしまい、感動を素直に実感できなくなってしまった事がもどかしく感じる時もある。まぁともかく、こういう場面では非常に助かるので有効活用することにしよう。

「まずは…アルベド、私がナザリックを留守にしていた間に起きた事はあるか？」

「いえ、先の第１０位階級の魔力検知した後、ナザリックの警戒レベルを最大に引き上げ警戒に当たりましたが周辺区域並びに内部での異常事態はございませんでした。…強いて上げるのならば…その…」

「ん？どうした、遠慮なく申して見よ。」

順調に報告をしていたアルベドだったが、最後の方で何か言いづらそうに口ごもってしまった。それを不審に思ったアインズは全てを話すように促す。

「…はっ。大変申し上げにくいのですが…その、アインズ様が突如としてご不在になられたことを知った者達が少々取り乱しまして…。」

「そうか…やはりな…。」

守護者だけではない、このナザリックに居るすべてのキャラクター達はアインズに絶対の忠誠を誓っている。それはもはや依存に近いレベルであり、心のより所として崇めている存在が突然消えてしまったとなれば、ショックで情緒が不安定になることくらい考えなくても

分かることだ。先ほどのアルベドが良い例だろう、事態は思っていたよりかなり深刻だ。…絶対に『〈遠隔視の鏡（ミラー・オブ・リモートビューイング）〉の扱いが煩わしくて、面倒だからそのまま行っちゃった。』なんて言える空気ではない。

「皆にはひどく迷惑を掛けさせたようだ、すまない…。」

「そんな！謝罪などなさらないでください！全てはその者達がナザリックに仕える身としての心構えが足りなかった事で起きた事態でございます！アインズ様がお気に悩む必要などありません!!」

アインズの謝罪に真っ先に反応したのは眼鏡を掛け、ネクタイまでしっかりと締めた三つ揃えのスーツをバッチリと着こなしている1.8メートル程の男だった。

この男は第7層『溶岩』エリアを守護する『デミウルゴス』。アルベド同様に人間のような出で立ちだが、腰から伸びる邪悪な造形をした尻尾には銀のプレートに包まれている。種族は悪魔だ。彼はナザリック随一の明晰さを誇る頭脳の持ち主であるため、重要な仕事を多岐にわたり行っている。

「畏れながら申し上げます。まず大前提にアインズ様の輩下である我々が主人の御行動の妨げになる事があってはなりません。御身自らが深いお考えの下で行動されているならば、それに干渉することなど下僕としてあってはならない愚の骨頂の行為にございます。ましてやそのお考えに『迷惑』などの感情を持ち合わせる様な不届き者がここに居ようものなら、今すぐにでも消し炭にして御覧に入れましょう。」

先程とは打って変わったデミウルゴスの流れるように落ち着いた話し方と心地よい耳障りの声音には隠しきれない激情が込められており、彼の言葉によって守護者達を取り巻く空気がピンと張り詰められる。守護者達は表情を崩さないが全員がその見解に賛同し、デミウルゴスの言葉通りもしこの中にそのような考えを持つような者が居たならば例え仲間だろうと己の全力を持って殺しにかかるだろう。

アインズは守護者達の間に張り詰める緊張感を刺激しないよう慎重に言葉を選びながらデミウルゴスの主張に異見する。

「お前の言いたいことは分かっているつもりだ、デミウルゴス。だが

な?そもそも私が皆に何も言わずに消えたのがそもそもの原因なのだ。例えどんな位に属していようと、迷惑をかけたのならば謝罪するのが当然の義務と私は思う。」
　対するアインズの主張にまだ何か言いた気な態度をとるデミウルゴスだったが、アインズは右手を前に差し出して二の句を継がせない。
「だからこそ、けじめとして私は皆に誓おう。今後一切、私は皆に無断でナザリックから出て行ったり身を隠すような真似をしないことを、そして行動を起こす際は必ず報告することをここに誓う。」
　アインズが誓いの言葉を言い終わると同時に守護者とアインズとの間でゴォッ!!と一瞬だけ紫の炎が燃え盛り、開いた状態のスクロールが出現した。そしてその書面にはアインズの誓いの言葉が炎の焦げ目となって印字されている。
　中空に浮いているスクロールは丸まりながらアインズの正面に立っていたアルベドの手元へと移動する。
「アルベドよ、守護者統括として今ここに居ない者達全てにその誓書を見せ、私の誓いを言い伝えよ。」
　スクロールを丁寧に受け取ったアルベドは軽く足を跪かせ了承の意を示す。
「はっ、我が命をもって必ず遂行いたします。」
「うむ、頼んだ。」
　一先ず己の後先考えない行為で招いた失態のけじめとして、絶対にやっておきたかった事が無事に完了し、心の中で安堵の溜め息を吐くアインズだったが、なにやら守護者達の様子がおかしい。ある者は俯き、ある者は目頭を押さえ、ある者は肩を震わせ…と、とにかくアインズの話の前と後で、守護者達の態度が明らかに違った。
　まさか何かやらかしてしまったか!?と安心していたのもつかの間。またジットリとした嫌な焦燥感にかられるがすかさず精神操作無効化スキルにより何とか平静を取り戻す事が出来た。
「み、皆どうしたのだ?もしや今の誓いだけでは不十分だっただろうか…?」

恐る恐る問いかけた言葉に守護者達の動きがピタリと止まる。そして…

「いいえ!滅相もございません!!むしろわたくし達は歓喜に打ち震えているのでありんす!!」

クワッと言う擬音が聞こえそうなほどの勢いで俯いていた顔を上げた小柄な美少女が威勢よく答えた。その手にはハンカチが握られ、目から零れ落ちる宝石のように美しい大粒の涙を拭っている。

彼女はナザリック第1・2・3層『墳墓』の階層守護者である『シャルティア・ブラッドフォールン』。種族は吸血鬼の祖である『真祖』だ。肌は心臓が鼓動していないせいか蝋のように白く、生を感じさせない。服は黒にピンクのフリルがついたゴシックロリータ調の衣服を身に纏っており頭にボールガウンを被っているので、服と雰囲気が相まって等身大の西洋人形のような印象を受ける。あどけなさが残る顔立ちは、しかし何者をも寄せ付けぬ風格と気品があふれ出ている。それと作者は血を吸われて死にたくないので『胸』についての言及は一切しないこととする。

「輩下デアル我々ニ対シ、君主自ラオ隠レニナラナイコトヲ誓ッテ下サッタ。我々ニトッテコレ程喜バシイ事ハアリマセン!」

シャルティアに続く形で隣に居た青い大きな塊が、ゴシューと圧力弁から空気が漏れる様な音を立てて賛同の意を表した。

彼はナザリック第5層『氷河』の階層守護者、『コキュートス』。今集まっている階層守護者の中で唯一人間離れした見た目をしている人物だ。種族は蟲王（ヴァーミン・ロード）である。全長は2メートルを優に超え、例えるなら悪魔が歪め切ったカマキリとアリを融合させ2足歩行にしたような外見をしている。全身は甲虫さながら青く輝く強化外殻に覆われておりその硬さは尋常の力では傷一つ付ける事さえ叶わない。表面には氷柱のようなスパイクが無数に突き出ており極寒の冷気が携えられている。

「アインズ様の誓いのお言葉は、今後いっそう我々の励みとなることでしょう。」

深い敬畏に満ち溢れた眼差しと物言いのこのナイスミドルは、階層

守護者ではないものの同格の力を持っている。主に至高の４１人の生活面を支える最高責任者である家令、『セバス・チャン』だ。種族は竜人であるが人の姿をしており、見た目は執事服を見事に着こなした壮年の男性だ。彼には直属の部下として１０人の男性使用人と戦闘メイド隊『プレアデス』を指揮下に持っている。

「お、おう…そうか。」

守護者達から怒涛の賛辞を聞いてアインズの抱いていた不安は霧散した。心の中で張り詰めていた緊張の糸が切れ、思わず力が抜けてしまい伸びていた背筋を崩して少し深めに玉座にもたれかかる。

「アインズ様！失礼を承知の上で一つお聞きしても良いでしょうか！」

皆が思い思いに感動している中、一人の少年が意を決した表情で問いかけてきた。それを見たすぐ隣に居る少女はオドオドと慌てている。

「む？構わぬぞアウラ。」

どう見たって男の子にしか見えない恰好をした『アウラ』と呼ばれたこの少年は正真正銘女の子である。そしてその隣でオドオドしている割と短めのスカートを履いた少女はアウラの双子の弟『マーレ』、つまり男の子…いや男の娘である。なんでこんな格好を二人がしているのかは、かつての仲間であるこの二人の創造主『ぶくぶく茶釜』氏しか知りえない。

二人ともナザリック第６層『ジャングル』の階層守護者だ。彼らの名前は正しくは姉の『アウラ・ベラ・フィオーラ』と弟の『マーレ・ベロ・フィオーレ』と言う。種族は共にダークエルフであり褐色の肌と横長で尖った形の所謂エルフ耳を持っている。外見は垢抜けない子供で、「活発」と言う文字をそのまま顔に張り付けた様なのがアウラ、「臆病」と言う文字を張り付けたのがマーレと言った感じだ。見た目こそ１０歳そこいらの少年少女と変わらないがエルフは長寿とされているため、二人の年齢は人間に例えればもう立派なおじいちゃんおばあちゃんに匹敵する７６歳だ。

「お、お姉ちゃんやっぱり失礼だよぅ…」

消え入りそうな声で弟のマーレが姉にやめるよう促すが、アウラはびくともせずそのまま質問を続ける。
「あの、どうしてアインズ様はお一人で外の世界に行かれたのでしょうか？」
「うわわっ…お、怒られても知らないんだからね！」
単純にして核心。守護者達のほとんどは「至高なる御方の深いお考えに基づいた行動」として、あえて誰も聞かずにいた。が、それでもやっぱり気になっていたことをアウラは臆しもせず質問したのだ。これが若さか…アルベドとデミウルゴスはその明晰な頭脳を用いてアインズの行動に含まれた意味をある程度推測し自分を納得させていたのだが、そうでも無い者たちにとっては些か疑問点が大きすぎるのだ。
『何故我らの君主は何も言わずに出て行ってしまったのだろう』と。
無事に自分たちの下へ帰ってきたから良かったものの、もしそのまま帰ってこなかったらと思うだけで体の震えが止まらなくなる。そう、彼らが何よりも恐れるのは強大な敵対峙することでも、己の命が奪われることでもない。創造主たるアインズに見捨てられることなのだ。
何か失望させるようなことをしただろうか、もしや見放されてしまったのではないだろうか…
考えれば考えるほど負のスパイラルに陥ってしまう。短い時間ではあったが、アインズがナザリックを離れていた時の内部の荒れようと言ったら口に出すのもはばかられる程だった。それほどまでに『アインズ・ウール・ゴウン』という存在は彼らにとって決して失ってはならない存在なのだ。
だからこそアインズは今までの上司と部下のような甘い認識を改め、ナザリック地下大墳墓の主としての責任を再認識し、皆の前で誓いを立てたのだ。
「よい、マーレ。アウラが言うことはもっともなことだ、そのせいでお前たちに多大なる不安を抱かせたのだからな。答える義務があると言うものだ。」

アルベドやデミウルゴスが畏れ知らずな発言をしたアウラに物申しそうな態度をとるが、それを見越して間髪入れずにアインズは言葉を続ける。
「…そうだな…ここまで迷惑を掛けさせたのだ、正直皆に話すことではないと思っていたがそれは錯誤なのだろう。そう、早い話が皆を試したのだ。」
「試す…？」
アインズの「試す」と言う言葉に全員が疑問符を頭の上に浮かべている。
「あぁ。常日頃からお前たちの忠誠心には驚かせれ、また嬉しく思っている。だが良いことを思えば同時に悪いことを考えてしまうのが自然の摂理と言うものだ。ここナザリックの君主と言う立場なら尚更にな。『もし私が居なくなったとしたら彼らは大丈夫なのだろうか』…と。」
守護者達からゴクリと生唾を飲む音が消えてくる。アインズの行動に秘められた本当の意味を一言一句聞き漏らさない様に真剣に傾聴の姿勢をとっていた。
「だからあえて『異世界での第１０位階級の魔力検知』という絶好の非常事態で行い、皆がどのような反応を示すのか知りたかったのだ。…しかし現実は私が思っていたよりもかなり深刻そうだ。先ほど皆の前から身を隠さないと誓いはしたが、この先何があるかは分かったものでは無い。いずれ近いうちに本当に消えてしまうかもしれない…。だから今のうちに皆の反応から何か対策を練っておこうと思っていたのだ。…これが私が何も言わずしてナザリックを留守にした理由だ。」
アインズが事の真意を話し終えてから寸刻、静寂が続いた。暫くして口火を切ったのはアインズだ。
「皆もこのことは念頭に置いておいてくれ。…少し空気が重くなってしまったな、この話は今日はここまでにしておいて少し話題を変えるとしよう。お前たち、外で感知された第１０位階級の魔力の正体が何だったか知りたくはないか？」

そういえば、と守護者達は思い出す。アインズの失踪という余りにも大きなショックでそちらの存在を誰もが忘れかけていた。アインズが無事であったならば一先ず第１０位階級の魔力などどうでも良かったのだ

しかしアインズが戻ってきた今、言われて俄然興味が湧いてきてしまった。どうやらアインズはその正体について知っている様子だし、彼の口ぶりからそう悪い知らせではないことも読み取れる。

彼らの雰囲気が暗いものから明るいものへと変わったことを感じ取りアインズは満足する。

「皆驚くと思うぞ、何故なら私も声に出して驚いたのだからな。」

君主が声を上げるほどの存在…それだけで心の内に抑えきれない期待感があふれだしてくる。早く教えてくれないか、もったいぶらないでくれ、そんな声が聞こえてきそうだ。

「まぁそう焦るな。第１０位階級の魔力の正体はな…」

――ゴクリッ…

「…これだ。」

アインズがパチンッと器用に骨の指で音を鳴らすと…何も…起きない。

『お久しぶりですね、皆さん。』

すっかり油断していた守護者達は突如として虚空から声を掛けられてビクリッと肩を震わせる。しかし今の声…聞き覚えがある？

声の主を探そうと守護者達は思わずあたりをキョロキョロと見回す。

「あ、あれは…？」

マーレが異変に気付き目を止めた。指がさされた先に守護者達が意識を集中させる。

指が指された先、そこはアインズの座っている玉座のすぐ横にある空間だった。よく見ると空間が不気味に歪み始めている。守護者達はその異常さから目を離せないでいた。

歪みはだんだんと規模を大きくしていき、形を成していく。それが人型だと分かるころに表れたのは黒い服を身に纏った身長の高い女性だった。

――――驚愕

守護者全員が目を見開き口をあんぐりと開け金魚のようにパクパクさせている。他の者達ならば分かるが、アルベドやデミウルゴスがこんな表情をするのはなかなかに貴重だ。まぁ無理も無いだろう、彼らの前に現れた女性はナザリックに仕える者ならば誰しもが知っていなければならない偉大なる存在だからだ。

彼女は至高の４１人が一人、名を『ローザリア』と言う。

驚愕に身を固まらせている守護者達をよそに〈通信（メッセージ）〉でアインズとローザリアは声に出さず会話をする。

（みんな驚いてますねぇ）

（そりゃそうですよ。私でも会えないと思っていた人に逢ったらあああもなります。）

（ふふふ…しかし先ほどの『言い訳』は本当に思っていたことなんですか？）

（『言い訳』って言うのやめてくださいよ、実際そうなんですけど…でも彼らとこれからどのような関係を築いていくのが理想的かいい判断材料になったので結果オーライです。）

（…確かに、深い依存の関係は非常に危ういですからね。しかしそろそろ何か言ってあげなくていいんですか？彼らまだフリーズしてますよ。）

（おっと、いけないいけない…。）

ローザリアに言われ、未だに固まっている守護者達に声を掛けるため視線を彼らに戻す。

「あーゴホンッ、驚くｎ「素晴らしいっっっ!!!!!」ッぉおお!?!?!?」

…本日二回目。なんだろう、話すタイミングが悪いのか彼らが話を聞いていないのかは分からないがよく割り込まれる…。凄く興奮しているみたいだし水を差すような真似はかわいそうなので注意するのは今度にしよう。…はぁ

「やはり…やはり我らが君主は偉大なるお方だ！そこまでお考えになられていようとは！あぁ…素晴らしい…アインズ様は到底私のような者の頭脳では計り知れない領域にいらっしゃられる!!そもそもいち下僕である存在がアインズ様のお考えを図ろうとなどと言うのが間違いなのだ…!!私デミウルゴスはアインズ様にお仕えする事が出来て恐悦至極にございます!!!」

デミウルゴスの眼鏡の奥にある普段は閉じられた瞼はカッと見開かれ、宝石の瞳が大きく覗いている。顔には恍惚とした表情を浮かべ両手は天を仰ぎ全身で喜びを体現している。自制心が働いていなかったら腰から伸びる長い尻尾は興奮で今頃ブンブンと音を立てながら大きく左右に振られていたことだろう。

お、おう？一体どんな誇大妄想をしてくれたのか気になるが、なんかアルベドも頷いてるし…まぁ悪いことは考えて無さそうだから放っておくことにしよう。うん。

アインズが人知れずそんなことを考えていると、いつの間にかローザリアの正面へと進み出ていたアルベドがゆったりとした優雅な動きで跪き、感謝の言葉を述べる。

「再び我らの前にローザリア様が帰還して頂けたこと、誠に喜ばしい限りでございます。もう二度と対顔叶わぬものだと思っておりました…さぁ皆の者！ご帰還なされた至高なる御方へ『忠誠の儀』を！」

アルベドの言葉で、各階層守護者達が改めて自己を名乗り順々に跪いていく。そのなんと丁寧な仕草の事か。ローザリア自身も教会と言う場所に勤めていたので礼儀と言うものは厳しく教えられてきたものだが、彼らを見ていると自信を無くしてしまいそうだ。

（これは…なんとも凄いですね…。）

目の前で繰り広げられる光景にローザリアは思わずアインズに目配せしてしまう。

（でしょう？私も最初ちびりそうでしたよ…さぁ、準備が出来たみたいです。声を掛けてあげてください。）

アインズに促され守護者達へ向き直ると、彼らは深々と首を垂れている。何も言わなかったらきっと彼らは何時間でもその姿で居続け

てしまうだろう。
心が緊張と平静の狭間を行ったり来たりして落ち着かない。集中が乱れる、だがいつまでもこうしているわけにもいかない…。静かに深呼吸をして「よしっ」と覚悟を決めたローザリアは謁見の前に二人で決めていたある作戦を決行する。
ローザリアが右手を横に振るとパシュンッと言う音が鳴ると同時に、完全形態へと姿を変えた。
先程まで修道服を着た優し気な雰囲気を携える女性の姿は微塵も無くなり、深紅の薔薇をモチーフにして作られたその姿は、薔薇の棘を思わせる鋭利で攻撃的なフォルムに包まれている。そしてあたりには禍々しい死の香りが漂い、幾分か照明が落ちた様に暗く陰る。…もしも心の弱い者が彼女の姿を見たならば、彼女の発する圧力（プレッシャー）に耐えきれず命を落としてしまうだろう。
そう、ある作戦とは何のことは無い、あえて厳つい姿となり、《ユグドラシル》のＲＰで仲間達から半強制的に会得させられた仰々しい話し方をすることで、守護者達に強者の印象を少しでも与えようと言うものだった。これはアインズの姿を見てローザリアが閃き、発案したものだ。
「我ニ忠誠ヲ誓ウ者アラバ、面ヲ上ゲヨ」
ローザリアの指示で全員が一斉に顔を上げ、守護者達から畏敬の念が込められた熱い眼差しを向けられる。
「ウム、皆元気ソウデ何ヨリダ。シカシ会ウノ本当ニ久シイ、心嬉シク思ウゾ。」
人間なのか動物なのかもわからない音で無理やり声にしたノイズ交じりの機械音でローザリアは守護者達に声を掛ける。雰囲気と声音の不気味さも相まって、なかなか様になっているんじゃないか？と、ローザリアは満足そうだ。
代表として守護者統括であるアルベドがローザリアの言葉に答える。
「はっ、我々はこうして再び至高の４１人の御一人であるローザリア様にお逢いする事が出来て、幸甚の至りでございます。」

「ソウカ、ナラバ聞コウデハナイカ、忠誠ノ儀トヤラヲ。」
ローザリアから忠誠の言葉を求められると
「御意」
とだけアルベドは短く答える。そのあとアルベドは本当に僅かな時間だが守護者達と目配せをしたように見えた。そして…
『階層守護者各員、ローザリア様の御下命とあらば、例えいかなる難行と言えども、全身全霊をもって造物主たる至高の御方々に恥じない働きをすることを誓います。』
一言一句全くずれることなく、全員が誓いの言葉と共に忠誠を立てた。
「ア、アリガトウゴザイマス…」
流石にこの演出には度肝を抜かされたらしく、ローザリアは完全に素が出てしまっていた。頭が真っ白になってしまったが、何か答えなくてはと必死に頭を巡らせ言葉にしていく。
「ハッ!…ゴホンッ…エー、ウム…。ソ、ソナタ達ノ忠誠シカト心得タ。今後ハアインズダケデ無ク、我ガ命ニモ従イ共ニナザリックノ発展ヘト励モウゾ。」
『はっ!!』
ローザリアに自分たちの忠誠を受け取ってもらえたのが嬉しいのか、各々満足気な表情を顔に浮かべている。
無事に忠誠の儀が終わったことを確認したアインズが、改めてこの場を仕切り直す。
「実に見事な忠誠の儀であった。これはローザリアの言葉を借りるようだが、今後は私たち二人がナザリックの運用方法を指示していく。だがこれはあくまで議題に過ぎず、最終的な運用決定は全員の意見を取り入れたうえで行う事とする。この後私とローザリアは今後の話し合いをするので9層の円卓の間に移動する。皆は各自の仕事に戻り作業に励んでくれ。」
そういうとアインズは指輪を使いナザリック地下大墳墓第9階層『ロイヤルスイート』にある【円卓の間】へと転移した。
ローザリアもアインズに続いて転移しようとしていたのだがふと

思いとどまったらしく守護者達に向き直る。
「皆さん今日はお疲れ様でした。アインズさんが言っていたとおり暫く話し合いをしてきますが、まだまだ名残惜しいので皆さん後でいっぱいお話をしましょうね。それでは失礼します。」
女神顔負けの美貌と、性格から来るお茶目な笑顔で守護者達と後で話す約束を取り付けたローザリアは、指輪の力を使い彼らの前から去った。
そんなローザリアの姿に男性陣からひと言。
『可憐だ…。』

守護者達の談合

渦中の人物がいなくなったのにも拘らず未だに興奮冷めやらぬ玉座の間からは、残された階層守護者たちの昂揚とした会話が聞こえてくる。

「それにしても、まさかローザリア様が私たちの前に帰ってきてくれるなんて思いもしなかったよ!!」

子供のように落ち着きなくはしゃいで全身で至高の４１人の内の一人であるローザリアの帰還と言う吉報を祝うのは、文字通り子供の様な外見のアウラだ。だが階層守護者を務めるだけあって崇める君主の前ではきっちりと大人同様の対応ができる凄い子なのだ。

「えぇ、本当に喜ばしいことだわ。これはナザリック総出で祝杯を挙げる準備をせねばなりませんね。（くふー！アインズ様かっけぇ!!ヤべぇ!!）」

アルベドも腰から生えた翼をパタパタと小刻みに羽ばたかせているあたり本当に嬉しそうだ。若干鼻の下が伸びているような気もするがきっと気のせいだろう。

「これはいずれナザリックがこの世界を支配したときの祝日にすべきですね。そろそろアインズ様カレンダーの作成を本格的に始めなくては…」

デミウルゴスは口元に手を当て、真剣な面持ちで世界征服後の事を考え始めている。

ナザリック随一の頭脳と言われるだけあって常識も人並み以上に持ち合わせているのだが、たまに突拍子もない事（人間牧場とか）を言い出すので過信は禁物だ。デミウルゴスの言うアインズ様カレンダーはもしかしたら２～３日に一回祝日が入っているかもしれない。

「ヌ？シャルティア、ドウカシタノカ？」

コキュートスが傍らにいる少女＝シャルティアが未だ跪いた姿勢を崩さないでいるのを不審に思い、心配そうに声を掛ける。その姿を見たアウラは怪訝そうに顔を顰(しか)めて、邪推をそのまま投げかけた。

「…シャルティアぁ、もしかしてアインズ様の時みたいにまた粗相し

ちゃったわけ？」
　粗相というちょっと不穏な言葉が聞こえて来たのだが、これはアインズと最初に行った『忠誠の儀』でシャルティアの少々特殊な性癖とアインズの強者たる気に充（あ）てられ、下着を汚してしまったということがあったのだ。アウラも同じ女性だが流石にこの性癖には同意しかねるらしく、ドン引きだ。
　シャルティアはアウラの問いかけでようやく顔を上げる。それから震える声で喋り出した。
「アインズ様を前にして下着が濡れなかったことなどあれ以来一度たりともありんせん…ただ今回は違うでありんす…」
「…？」
　「いつも粗相をしているんだ…」とは突っ込まないのが優しさと言うものだ。それよりもシャルティアが生まれたての小鹿のようにフルフルと力が入らない原因が粗相ではないとすると他にどんな原因があるだろうかと疑問符を浮かべる。
　だがシャルティアはむしろ何故分からないのか！と言った勢いで彼女の意図を計りかねている仲間に涙をまき散らしながら訴えかけてきた。
「ローザリア様の常軌を逸した美しさに打ちひしがれているのでありんすぇ！…私も自分の顔には多少なりとも自信があったでありんす。アインズ様に少しでも美しく見てもらいたいと、毎日欠かさず美容のお手入れをして来んした。でも先程のローザリア様を見て改めて思い知らされたでありんした…私は造物主である御方々には到底及ばない存在であったと…。」
　シャルティアは化粧が崩れるのも構わず号泣している。
　ナザリックには数多くの女性キャラクターが存在するが、一部を除き誰もかれもが振り返る美人ぞろいだ。（ちょっと!?拷問するわよん!?）…そんな中で第1．2．3層の階層守護者という地位を生まれながらにして与えられたシャルティアはその役職柄、最も敬愛するアインズに出会える機会が他のキャラクター達よりも多い事もあって自分が美しいと思われる存在で居ようと日々努力を重ねて来た。しか

しローザリアの登場によって儚くもその努力が無駄に等しいものとなってしまった。
　実際に目にしたときは思わず生唾を飲んでしまった。アインズの死を形容した美しさとは根本的に違う純粋な「美」。同じ女性だからこそ感じえた羨望と嫉妬の念は、造物主と被造物者と言う立場によるジレンマで余計に増幅され、吐き出すことのできない思いは涙となってシャルティアの頬を濡らすのだった。
　不意に「あ、」とマーレが小さく呟いた。
「何かお気づきになられたのですか？」
　造物主にそうあれと設定されているからなのか、それとも彼の素なのかは分からないが、同じ階級の存在に対しても丁寧語を崩さない執事の鑑であるセバスがマーレに問いかけた。
「うん、シャルティアが言ってて思ったんだけど、その…ローザリア様が帰って来たってことはつまりナザリックの女王様はローザリア様ってことで、それにもし、もしもだけどあのお二人以外に至高の御方々が帰ってこなかったとしたら自動的にアインズ様のお妃様はローザリア様になるのかな？」
　このマーレの何の嫌味も含まれない唯々純粋な推測は、超位階級の氷属性呪文でも食らったかの如く女性陣を不動にさせた。半面男性陣は大いに盛り上がっており、「挙式…いつ……」とか、「オ世継ギ……爺ハッ…爺ハッ…!!」とか聞こえてくるが女性陣の耳には一言たりとも入らずもはやそれどころではない。彼女たちはマーレの発言に対して一様にこう思った事だろう。
　――あれ？詰んだ？
　シャルティアは白い肌を更に蒼白にし、アウラは持ち前の活発さが消えうせ、アルベドはガクリと膝を折り高い天井を力なく見上げていた。
　アルベドは異世界に転移する前、アインズがギルド長権限でアルベドの不憫極まりない『ビッチである』というキャラクターの設定文をサービス終了直前だからと言う理由でふざけて『モモンガを愛している』と改変させていた。だが神様の悪戯か、ゲームの世界は異世界へ

と転移し現実となり、ＮＰＣ達は自らの意思で考え行動できるようになった。当然人格は造物主たちが考えた設定に忠実にあてはめられている。よってアルベドは『ビッチ』ではなくなったものの『モモンガを愛する』という設定に従い、モモンガ＝現アインズを慕っている態度を頻繁に見せている。ただこの彼女の態度はアインズを酷く後悔させるのだ。まぁ当然というか自業自得なのだろう。異世界に転移してＮＰＣ達が動き出すなど予想できるわけないのだが、こうしてアルベドの人格を歪めてしまった事に変わりはない。アインズはアルベドに言い寄られる度に良心の呵責に耐え兼ね何度か謝罪をしたことがある。だがそんなアインズの気持ちを知っていて尚アルベドはアインズを愛する態度を崩さない。これは設定に逆らえないとかではなく、守護者として女として衷心からアインズを愛し尊敬しているからなのだ。本気で「迷惑だ」、と言われない限りアルベドはアインズを愛する行為を止めないだろう。

…しかし先ほどのマーレの一言で、突如として高い壁が立ち塞がった思いがした。言わずもがな、それはもう二度と会えないと思っていた至高の４１人の一人、ローザリア。その偉大なるお方が女性であるということだ。

正確には無機物生命体であるローザリアに性別などない、だがシャルティアが言ったように誰しもが息を飲んだあの美しい姿は女性と意識せざる負えなかった。

今までアインズ以外の造物主がいなかったため、自称王妃を名乗るなど好き放題やってこれたが、ローザリアが帰還した今そうも言っていられない。なぜなら、至高なる御方の”妃”となるには、同じく至高なる御方以外にこれ程相応しい組み合わせは無いからだ。

「そう言えばデミウルゴス、一つ聞いても宜しいですか？」

「えぇ、なんなりとセバス。」

絶望に打ちひしがれ勝手に暗くなっている彼女たちをよそに、男たちは談話を続けていた。

「貴方は先程の謁見でアインズ様の言葉に秘められた真意を掴まれたようでしたが、一体何を理解されたのです？」

セバスの質問にデミウルゴスは優しくも不敵な笑みを浮かべる。決して言葉には出さないが何となく「そんなことも分からないのか」と言われているような気がしてならない。セバスはデミウルゴスの雰囲気を敏感に感じ取るが、紳士然とした態度で何も言わずにじっとこらえる。しかし、その目は決して笑っていない。

こういう書き方をすると一方的にデミウルゴスがセバスに対して意地悪をしている様に見えてしまうが、別にそう言う訳ではない。子は親に似るとはよく言ったものだがその通りで、デミウルゴスの製作者であるとことんにまで〝悪〟に拘った『ウルベルト・アレイン・オードル』と、セバス・チャンの製作者である〝正義〟に拘った『たっち・みー』は《ユグドラシル》で度々そりが合わずに喧嘩を繰り返していた。その因果なのか、デミウルゴスとセバスは本人たちも意図せず何となしにこうやって衝突してしまうのだ。

「ゴホンッ。まぁ冗談はさておき…アインズ様の御行動に秘められた真意だったね。私が全て説明してもいいのだが、どうせなら皆で考えてみるとしよう。きっとそのほうがアインズ様の慈悲深さに感動できるだろうからね。」

腕組みをしていた右腕を直角に伸ばし、人差し指をピンと立ててデミウルゴスが話始めると、どうやら興味が湧いたらしく蚊帳の外に居た女性陣もいそいそと会話に加わってきた。デミウルゴスは偉大なるお方の行動に秘められた真意（妄想）を守護者全員で共有する事が出来て今度こそ含みの無い笑顔を浮かべていた。

「ではまず…シャルティア。このナザリックにおいて今現在最も偉大なるお方は誰ですか？」

デミウルゴスの少々幼稚な問いかけに苛立ちを覚えたシャルティアは声を低くする。

「デミウルゴス…貴方まさか私を馬鹿にしているんじゃありんせんぇ？…フンッ、まぁ良いでありんす。えーっと何？ナザリックにおいて最も偉大なるお方は誰か、でありんしたか？そんなの当然至高の４１人の御方様全員でありんしょうが…今、となるとご帰還されたローザリア様含め、アインズ様のお２人でありんす。」

間違いだらけの郭言葉でぶっきら棒に答えたシャルティアだが、デミウルゴスはさして気にするようでも無く、むしろ予想通りの答えが返ってきたことに満足そうだ。
次に誰へ問いかけようと思案するデミウルゴスはふと丁度よくアウラと目が合ったので、そのまま彼女に問いかける。
「えぇ、その通りですシャルティア。では次に…アウラ、今のナザリックにおいて君が一番強いと思うのは誰だい？」
唐突に自分へと話を振られたため、油断していたアウラは目を丸くする。
「えっあたし!?もう不意打ちは良くないと思うなーデミウルゴスぅ…。うーんそうだなぁ…単純なパワーとか強さってなると『ルベド』とか、『8階層のアイツ等』なんだろうけど…戦闘の経験値だったり所持してるアイテムなんかを含めると、やっぱりアインズ様かローザリア様が一番じゃないかな？…あ、そう言えばアインズ様とローザリア様どっちが強いんだろう？」
アウラが最後に口にした疑問は守護者達を大いに惹きつける。ローザリアが帰還するまでナザリックにおいて誰もが最強と崇めたのは、ただ一人残った彼らの造物主であるアインズだけだった。しかし今こうして最強と呼べる存在が一人増えたことによりナザリックには最強の存在が二人に増えた。これはナザリック全てにとってとても喜ばしいことだ。
だが待ってほしい、そもそも『最強』とは〝最も強い〟と言う事を表す言葉だ。つまり本来ならば最強と名乗って良いのは一人だけなのだ。間違いなくあの二人はナザリックで最強だろう、しかし守護者という立場以前にどうしようもなく気になってしまう。アインズとローザリア、そのどちらが〝最強の中の最強〟なのかと…
僅か数秒だが、守護者達の間に沈黙が流れる。それぞれがきっと頭の中で仮想的に二人を戦わせていることだろう。だがその思考を遮る様にデミウルゴスが口火を切る。
「…非常に気になるところですが、我々でそれを計るのは至高なる御方に対して不敬に当たるでしょう。それよりも素晴らしい回答をあ

りがとうアウラ、貴女と共に守護者として居られることを嬉しく思いますよ。アウラの言った通りこのナザリックにおいてあのお二方に太刀打ちできる者などいないでしょう。では、ここで一旦話しの時間軸を第１０位階級の魔力検知がされた時に戻します。そうなると今までの答えから、最も偉大で強いのはアインズ様だったことなります。そしてもしこの時、我らが敬愛するアインズ様からお一人で向かうことを告げられたとしたら、皆さんはどう思いますか？」

デミウルゴスのわざとらしい笑みには全てを見透かしていそうな雰囲気が感じ取れる。そしてその雰囲気は続く守護者達の回答で確信へと変わったのだった。

「そ、そんな危ない事をアインズ様にしてもらう事なんてできないよっ!!」

「ソウダ、アインズ様ニモシモノ事ガアッテハナザリックニ未来ハ無イ。故ニ我々ガ出向キ対応スルノガ当然ト考エル。」

概ね予想通りの人物から予想通りの返答が帰ってきて、ここぞとばかりにデミウルゴスの眼鏡が輝きを増す。しかしそれはもう一人も同じ考えだったようで

「ふふふ、そこまで考えられるなら、その先も分かるのではないかしら？」

どうやらなんとか復活したアルベドから横槍を入れられ、言いたいことを奪われたデミウルゴスは少し残念そうに肩をすくめる。

「…なるほど。アインズ様も同じお気持ちだったということですね？」

セバスは大体わかった、と言った感じで確認の意味を込めて疑問符で返す。だがセバス以外はこれと言ってまだよく分かってないらしく、首を傾げて不思議そうに会話を聞いている。これも階層守護者としての意識が逆に本質を曇らせてしまっているのだろう。

セバスの推測を肯定するため、デミウルゴスが再び口を開こうとするがいよいよアインズ様の慈悲深さを語る事が出来る雰囲気に昂ぶったアルベドが興奮気味に答えてしまった。まったく、アインズ様のこととなると周りが見えなくなってしまうのは考えものですね…

「その通りよセバス!!アインズ様は自らの命も顧みず私たちを失うまいとして、お一人で向かわれたの！この世界の第１０位階級魔力は考えたくはないけど、もしかしたらアインズ様より強力なものかもしれなかったわ。もしそうなるとナザリック最強と言う結論が出たアインズ様を差し置いて、私たちがいくら立ち向かったところで無駄だわ。最悪誰か一人欠ける可能性だってある。それは慈悲深いアインズ様にとって何よりも苦痛でしかない。それにさっきマーレやコキュートスが言ったように私達に相談すれば絶対に止めて『自分たちが行く』と言ったでしょう？きっと私も止めたわ。だからアインズ様は誰にも何も言わずお一人で調査に向かわれたのよ。そうでしょう、デミウルゴス？」

一通り言いたいことを言い終えたアルベドはグルンと首をデミウルゴスに向けて、同意を求めた。その顔は興奮で上気し、頬は朱に染められ、口からはハァハァと熱っぽい吐息が漏れている。見る人が見ればとても煽情的に見えるのだろうが、普段の態度を知っている守護者達からしてみればいつものアルベドだ。

同意を求められているので答えないわけにもいかないデミウルゴスは苦笑いが顔に出ない様に気を付けつつ肯定する。寧ろアルベドでさえ到達していない真意に自分だけが気付けているのが分かってデミウルゴスはちょっとだけ誇らしそうだ。

「え、ええ全くその通りですアルベド。流石は守護者統括を務めるだけありますね。ただアインズ様の行動に秘められているのはそれだけではないのですよ？」

アルベドの説明で秘められたアインズの慈悲深さに驚きを隠せない守護者達だったが、デミウルゴスの言葉で意識を引き戻される。

「マーレ、君は確かアインズ様へ一番に魔力の検知を報告しに行ったそうだね？その時にアインズ様のお部屋で見た物は覚えているかい？」

これ以上何を隠しているのかと逆に恐ろしささえ覚えるが、それ以上に自分が見た物に一体どんな真相が隠されているかと思うと気になって仕方がないマーレは口早に応える。

「う、うん覚えてるよ。確か執務机の上に〈遠隔視の鏡（ミラー・オブ・リモートヴューイング）〉が置いてあったと思う！」
　デミウルゴスも、もちろん確認済みでアインズの執務机の上に何があったかは把握済みだが、あえてマーレに聞いたのはアインズがいなくなる瞬間を目撃したマーレが発言することによって会話に臨場感をもたらす為だ。いわば演出、どうせなら今以上にアインズを尊敬できる存在にしたいと思うデミウルゴスの粋な計らいだ。
「皆も知っているとは思いますが〈遠隔視の鏡（ミラー・オブ・リモートヴューイング）〉はアインズ様が所持しておられる魔法道具（マジックアイテム）で、外の風景などを遠隔操作で見る事が出来ます。つまりアインズ様はこの魔法道具（マジックアイテム）で何かをご覧になられた可能性があります。」
　デミウルゴスがそこまで言うと「分かった!!」と言う様にアウラが元気に手を伸ばして自分が言いたいと主張していた。デミウルゴスは優しく手を差し伸べる動作でアウラに発言の了承をする。それを受けたアウラはパァと輝いて見えるほど顔を明るくし上機嫌で答えた。
「アインズ様はそれでローザリア様を見つけたんだね!!」
「ええ、そう考えるのが妥当ですね。そしてローザリア様が第１０位階級の魔力を使用していたことを考えると何者かと交戦中だったと考えられます。ローザリア様がこちらの世界に来て右も左もわからずに敵と遭遇し不安だろうとお考えになられたアインズ様は、ローザリア様の救援に向かうべくすぐさまナザリックを立ち去られたのです。これがあのアインズ様の唐突な失踪に隠された真意であり、我々のみならず至高なる御方を含めた全ての者達への〝愛〟によるものだったのです!!」
　デミウルゴスは両手を天に広げ、声高らかに真実を述べ終えたその表情には達成感が満ちて溢れていた。
　おぉ…なんと…なんと慈悲深い御方なのだ…こんなにも素晴らしい方に仕える事が出来る喜びに勝るものは無い…!!
　アインズから尋常ではない愛情を知らぬ間に自分たちへ向けられていたことを知った守護者達は総じて胸の内を熱くしていた。彼ら

からは微かに鼻水を啜る音や嗚咽まで聞こえてくる。
しかし忘れてはならない。これは単にアインズが『〈遠隔視の鏡（ミラー・オブ・リモートヴューイング）〉の扱いが煩わしくて、面倒だからそのまま行っちゃった。』という行動が発端であることを…本当に彼らの忠誠心には畏れ入る。
もう暫くこの感動の波に身を委ねていたいが、しかし仕事は山ほどある。このままでは終わる仕事も終わらなくなってしまうため、アルベドが守護者統括として喝を入れる。
「さぁ皆、そろそろ自分の仕事へと戻りましょう。このアインズ様のご慈悲に報わねば我々は守護者として失格です。この思いを胸にこれまで以上にアインズ様、そしてローザリア様へとお仕えしましょう。」
しかし喝を入れた意味は薄かったようだ。
なぜならば、守護者達の瞳には確固とした忠誠と伏侍の炎がメラメラと燃え盛り、早く己の仕事に戻り少しでも至高の御方の役に立ちたいと言う空気感で満ち溢れていたからだ。
それを確認したアルベドは少し微笑んだ後すぐに表情を引き締め、守護者統括に相応しい態度で号令を下した。
「では、解散！」

仮説　推測　妄想

ナザリック地下大墳墓第９層『ロイヤルスイート』

ここは主にギルドメンバー達が現実世界（リアル）とは別に第二の世界で暮らす生活の場として利用されてきた場所である。残念ながら現在は２人を除きここで暮らす者はおらず、非常に閑散としてしまっている状態だ。ギルドメンバー総勢４１人の個室が用意されている他、大浴場、バーラウンジ、雑貨店、ブティック、果てはネイルアートショップまで様々な設備が存在しており、まるで大型ショッピングモールにでも迷い込んでしまったかのようだ。しかしこれらの大半はゲームの仮想現実世界にリアリティを演出するための言わば〝小道具〟に過ぎなかったのだが、異世界に転移してからは実際にその役目を果たすため数多く存在する使用人ＮＰＣ達によって現実世界同様のサービスが受けられる環境となっている。そしてもう一つ、ここには忘れてはならない重要な部屋がある。

それが【円卓（ラウンドテーブル）】だ。

この部屋はギルド：アインズ・ウール・ゴウンのメンバーが仮にも死亡してしまった時のＲｅＰＯＰ（復帰）地点として設定されており、部屋の中央には巨大な黒曜石で作られた円卓が据えられ、その周りを囲むようにどれ一つとして同じ形のない４１脚の絢爛豪華な椅子が並べられている。主にメンバー達と《ユグドラシル》世界の攻略や、他ギルドとの抗争、異形種狩りへのＰＫ（プレイヤーキラー）Ｋ（キラー）などの作戦や方針を決めるための会議を行うための部屋として使われてきたのだが、あまりの内装の煌びやかさに〝会議室〟ではなく〝貴賓室〟と見間違えてしまいそうだ。

かつてアインズがギルド長として座した一際目を引く椅子の後ろには台座があり、今は彼の手元に収まっている〈スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン〉は製造されて以来一度もそこから動かされたことは無かった。

綺麗に磨かれ鏡の様に周りの景色を映し出す黒曜石の円卓には和やかな雰囲気で話す二人の人物が反射して映し出されている。

現ナザリック最高責任者であるモモンガ改めアインズ・ウール・ゴウンと、現実世界では決して味わうことは無かっただろう支配者としての演説を終えたローザリアの二人である。
彼らは異世界への転移という異常事態の中でまさかの再会を果たし、これまでお互いが得てきた情報の交換やこれからの方針を決めていくためこの円卓へと転移して来たのだ。
「ナザリックに来てからもう興奮しっぱなしです！アルベドを最初に見てからまさかとは思っていましたけど、みんなとあんな風にお話しできるなんてまるで夢でも見ているみたいです…!!」
ローザリアの興奮と感激に満ちた声が広い円卓の空間に響き渡る。彼女の表情からは普段の凛々しさが消え、かわりに口や目尻が緩みまくった我が子を愛でる母の様な顔をしている。それにしても普段は〝冷静沈着〟や〝泰然自若〟といった言葉を体現した大人しい人の部類に入るローザリアがここまで感情をあらわにしているのは非常に珍しい事である、よっぽど彼らに会えたのが嬉しいらしい。
ゲーム《ユグドラシル》では、ある程度の条件が必要だがプレイヤー自身がゲーム開始時から存在する既存キャラクターとは別で完全オリジナルの新しい存在を生み出す事ができた。このナザリック地下大墳墓に存在するＮＰＣキャラクターだった者達は全てがギルド：アインズ・ウール・ゴウンのメンバーによって新しく生み出された存在なのだ。そしてそういったＮＰＣ達にマクロを組み込むことで、呼びかけたらお辞儀をするなどと言った簡単な行動をさせることも可能であり、プログラマーの『ヘロヘロ』氏含め他５人の手腕によって大幅にチューンアップされたＮＰＣ達は、それはそれはゲームの世界だと言う事を忘れさせるほどにナザリックの雰囲気を盛り上げてくれた。しかしどんなに高度な技術を用いられたマクロを組み込んだとしても、先程の彼らの様に会話をしたり、意思を持たせたり、表情を変えることなどとてもではないが実現不可能だった。
だからこそ彼らは大いに妄想したことだろう。『こんな子がいたら…』『あんな子と喋れたら…』そんなプレイヤー達の妄想の具現体が自我を持ち、己の意思で行動して、果てには実際に話しかけてくれるの

だ。彼らを作り出した者にとってこんなにも嬉しいことは無いだろう。ローザリアが興奮するのも訳がない。

子供のようにはしゃぐローザリアの姿を見たアインズは、過去に一度だけ今と同じような彼女の姿を見た事を思い出し、懐かしさに無い筈の口角が上がる。

「ローザリアさんがそこまで喜んでいる姿を見るのは第６層の【薔薇の教会（ローゼン・チャペル）】の完成以来ですかね。」

「そうですね、本当にこんなに興奮しているのはそれ以来かもしれません。あの時は今みたいに表情での表現が出来ませんでしたからスマイルアイコンを連打しながら目一杯のボディランゲージしかできませんでしたけれど。」

フフフと柔らかく微笑む彼女は贔屓目に見ても愛らしい…いや勘違いしないでほしい！そう、これは別に彼女の事が好きとかではなくてだな？その…純粋に傍から見て可愛らしいなぁと思っただけだからな？…な？

旧友と出会えば懐かしい思い出話に花が咲くものだが、残念ながら今話さねばならないのはそれではない。アインズは軽く咳ばらいをした後、少し真面目な口調で本題を切り出す。

「…改めて、またこうしてお逢いする事が出来てとても嬉しいです、ローザリアさん。この異常な事態を除けば殊更（ことさら）に。」

アインズの雰囲気の変化を読み取ったローザリアも軽く頷き、先程まで緩んでいた目元はいつものキリッとした目つきに戻っていた。

「こちらこそ八方塞がりになりかけていたところを救っていただいてありがとうございました。」

「いえいえ。さて、それでは本題に入ろうと思います。まず最初に確認したいことが一つあるのですが、ローザリアさんはこちらの世界に来る直前どのようにしてお過ごしでしたか？」

アインズの質問の意図はこうだ。〝ログインもせずにどうやってこちらに来たのか〟と。アインズは《ユグドラシル》のサービス終了時間までログインし続けた結果どういった理由かは分からないが《ユグドラシル》に似ても似つかないこの異世界へと飛ばされてしまっ

た。彼女と再会するまではそれこそ自分一人だけだったため原因はログイン状態に起因するものだとばかり思っていた。事実、サービス終了時間までチーム名簿一覧でログイン状態を示していたのはアインズただ一人しかいなかったのだから。しかしローザリアの登場によりその推測は大きく覆されてしまった。故のこの質問なのだが、対するローザリアの瞳に若干の憂いの色が浮かんだことをアインズは見逃さなかった。

「…何か、あったんですか？」

彼女は首を軽く横に振った後、静かに喋り出した。

「いえ…その、ここのところ色々あってすっかり忘れていたものですから。今の質問であの時の事を鮮明に思い出してしまって…。」

悲し気な表情は少し覚悟を決めた様な面持ちに変わり、一拍置いた後再び語り出した。

「ふぅ…ではお話ししますね。…簡単に言うと、恐らくですが私は交通事故により――死亡しています。」

「…は？いや、死…え？」

彼女の突飛すぎる発言に頭がついていかない。無い筈の眼が点になる。なんだって？死亡？じゃあ今目の前にいる人は一体誰なんだ？

「混乱するのも無理はないと思います。順に説明しますね。《ユグドラシル》サービス終了の夜、モモンガさんから事前に送られてきていた招待に参加する予定だったのですがその日は仕事が長引いてしまい気付けば時刻は夜中の１１：３０でした。それでも最後は皆さんにお逢いしたかったので帰路を急ぎました。そしてその途中、注意を欠いた私はトラックに撥ねられて…死亡したと思います。」

呆然とするアインズだったが、彼女の言葉の中の違和感に気付き衝撃で停滞しかけていた思考をなんとか回転させる。

「その、先程から聞いていて少し思ったんですが、〝死亡したと思う〟と言う事は死んでいない可能性があると言う事ですか？」

アインズの指摘にローザリアの表情が複雑なものに変わる。

「…ええ。かく言う私も私が明確に死んだ場面を見たわけではないで

すから何とも…。何分次に目を開けた時は既にこちらの世界でしたので。ただトラックとぶつかった時の衝撃や光景はハッキリと体が覚えているので、あの事故の後一命をとりとめている可能性は低いと思います。」

是非とも一命をとりとめていて欲しいと願うアインズだったが、やはりどうにも実感がわかない。そりゃそうだ、だって目の前に本人が居るんだもの。こんな時は気の利いた事を言って少しでも彼女の気持ちを軽くできると最良なのだが、色々と言葉を探してみてもぱっと思いつくのはありきたりなお悔やみの言葉だけだ。…今下手に慰めの言葉を掛ければ自爆するだけだろう。何の言葉も掛けられない自分の力不足にアインズは心の中で舌打ちをしつつ頭を本筋へと戻す。

しかし彼女がこんな質の悪い嘘をつくことが無いのは彼女の性格からして明らかだ。そうなると…

「…つまり、ローザリアさんはこちらに来ることになった原因は交通事故での死亡がきっかけとお考えなのですね？」

「はい。」

「うーむ」とアインズは白骨の指を顎にあて思わず唸ってしまう。にわかには信じられない、いや自分の事を棚に上げる訳ではないが、それでもとんでもない方法によりこちらの世界に来てしまった彼女。こうなると転移のトリガーが何に起因しているかさっぱりわからなくなってしまった。ただ考えようもある、もし転移に正規の方法と非正規な方法があるとするならば色々説明できるかもしれない。

「残念ながら僕はローザリアさんの様な方法でこちらに来たわけではありません。なのでお互いの転移直前の出来事に共通する部分がない事が分かった今、なぜこちらの世界に来てしまったかは結局分からずじまいです。ただ、ローザリアさんがこちらの世界に来たとき、ここにＲｅＰＯＰしなかったのかは何となくですが分かったかもしれません。まぁあくまで推測の域を出ませんけれど。」

「是非アインズさんの意見を聞かせて下さい。」

推測でも構わない、とにかく今は情報が欲しいといった様子で彼女は食いついてきた。

「わかりました。先ず、僕がこちらの世界に来た時のことをお話しましょう。と言ってもログイン状態をサービス終了時間まで維持していたらいつの間にか転移していて、周りのＮＰＣ達が喋り出した、と言った感じなんですが。もし、この方法が正規の転移条件だとするとローザリアさんの転移の仕方は異常です。僕はそもそも既にナザリックに居たわけですが、ローザリアさんは事故死による転移というイレギュラーな方法でこちらの世界に飛ばされてきてしまったためにナザリックとは別の場所でのＲｅＰＯＰとなったと考えられます。」

ローザリアは口を挟むことなく、時折頷くなどして真剣にアインズの話を聞いている。

「さらに此処からはもう妄想と思ってもらっても構わないんですが、話を飛躍させるともっと説明がしやすくなります。僕とローザリアさんの明確な違い、それは《ユグドラシル》にログインしていたかしていなかったかです。つまり何が言いたいかと言うと、僕はゲームを通すことでこちらの世界に来た可能性があります。しかしローザリアさんの場合、きっかけは事故にしろ何らかの力が働きこちらの世界が直接あなたを呼んだと考えると納得できることがいくつかあります。」

「なるほど…。理由は分からないが一時的にこの世界が私たちの世界に干渉し事故の瞬間に私を転移させた、ということですね？確かに現実離れしたお話ですが、今この状況が既に現実離れしているのでありえない話ではないかもしれませんね。それで、アインズさんのおっしゃった〝納得できること〟とは？」

彼女のもっともな質問にアインズは続ける。

「はい。ずっと不思議に思っていたんですが、ローザリアさんの〈精神操作無効化スキル〉不全です。」

「〈精神操作無効化スキル〉って私たち異形種の固有スキルですか？」

「そうです。こっちの世界では〈精神操作無効化スキル〉にスキル所有者の過剰な感情の高ぶりや落ち込みを強制的に平常状態にすると言う効果が追加されたみたいなんです。しかしローザリアさんの様子

を出会ってから暫く伺っていましたが、どうもスキルの適用が鈍感なんですよ。現に先程ローザリアさんが守護者達に会えたことで大変喜ばれていましたが、もしあれが僕だったとすると1秒後には強制的に感情の高ぶりが抑えられていつもの調子に戻る筈なんです。このことから考えられることは、ローザリアさんがまだ完全に〝アインズ・ウール・ゴウンのローザリア〟に同期出来てはいないのではないかと言う事です。」

「同期…」

「はい。僕は《ユグドラシル》を通してこの世界に来たので、１００％モモンガの情報を引き継いだ状態で転移できました。しかしローザリアさんは特殊な方法による転移で、完全に〝ローザリア〟の情報を共有できないままこちらの世界に顕現してしまったのではないかと考えられます。そこでなんですが何かこの推測を裏付けるような心当たりはありませんか？」

　尋ねられたローザリアは何かなかったかとここ数か月の事を思い返す。そして記憶をさかのぼる中、アインズの話にピッタリ当てはまりそうな出来事を一つ思い出した。

「あぁ、それならとっておきがあります。あれは転移してきてから間もない頃でした。転移先で介抱されていた村で自分に起きた異常事態を確かめるため、まず己の状況を確かめようと鏡を見た時です。あの時は自分の姿が異形のものに変化していたことに驚き思わず泣いてしまった事を覚えています。アインズさんのお話をお借りするならば、〈精神操作無効化スキル〉が発動していれば絶対にありえないことでではないでしょうか？」

「確かに、それじゃまるで人間そのものですね。他には何かありますか？」

「えぇ、私はアインズさんに会うまでその村で人間達と暮らしていました。今思うと不思議で仕方ありませんが、自分が異形の存在だと分かっていながらも彼ら人間と同じ立場で生活したいと本気で思っていましたね。良い例が人間の子供たち相手に教育まがいのことをしたりして…あの時は先生なんて呼ばれていましたっけ…」

それから彼女の話を聞けば聞くほどなんというか人間らしい内容が多くある。自分が異形だと自覚しているなら尚更に〝ローザリア〟とのズレがあったことは明白だ。…あながち妄想も的外れではなかったと言う事か。

「しかしそうなると、多少の同期ズレがあるにしろ今のローザリアさんと、村に居た頃のローザリアさんとでは大分ズレの差がある様に思うのですが、それにはまた何かきっかけがあるのですか？」

「はい。おそらく私が世話になっていた村が周辺国の政治的な争いに巻き込まれまたのがきっかけだと思います。」

「あーなるほど、それであの戦闘跡に繋がるわけですね。」

「あの時は自分の正体がバレるのも構わず村の人たちを助けたい思いで一杯でしたから、頭に血が上っていたのかもしれません。ですが完全形態に変身したときに感情と言うか心がスイッチが切り替わったかのように人間のものでは無くなってしまった感覚をはっきりと覚えています。それ以来今の状態が続いていますね。」

「ん？では明確に異形種〝ローザリア〟の能力を使ったのはそれが最初ですか？」

「そうですね、それ以前にもアイテムボックスを開いたり無意識に探知スキルが発動していたこともありましたが、種族スキルを使ったのはそれが初めてです。」

最後の彼女の話を聞き散らばった情報に最後のピースが加えられ、かっちりと型枠に嵌った気がした。

「ふむふむなるほど…ローザリアさんの今の状態が何となくわかりましたよ。ついでに同期ズレについても何とかなるかもしれません。」

「本当ですか！」と嬉しそうに答える彼女はやっぱり不安を覚えていたのだろう。せっかくこの異世界で仲間に会えたというのに自分はその人と状況が違うなんて、あまりに寂しい。だからこそ自分がしっかりと彼女を支えねば。

「とりあえずローザリアさんは現状僕の言った妄想に近しい状態であることに間違いなさそうです。それで同期ズレの方ですが、種属スキルを使用したことでズレの差が縮まったことから積極的に異形種ス

キルを使用して当時の〝ローザリア〟に近づくことが鍵っぽいです。」

「そこで、一発で当時のローザリアさんに戻れる妙案を思いついたんですが――ひと暴れしませんか？」

「…はい？」

悪巧み

ナザリック地下大墳墓第９階層『ロイヤルスイート』：ローザリア自室

彼女の部屋には物が少ない。

ワンルームの部屋に有るのは、シンプルながらも存在感のある机、そしてその上には深紅の薔薇が一輪挿しの花瓶に挿されている。机の脇にはアンティークなロッキングチェアが据えられ、何と言うか白髪のおばあちゃんがそこに座って編み物でもしていたら凄く様になりそうだ。それから形ばかりのドレッサー。あとは壁に掛けられたこれまたシンプルな時計と、衣装を入れるための洋服箪笥があるが、あいにくと彼女の服装は彼女自身と一体化されているため中は空っぽのままだ。

女性プレイヤーにしては何とも寂しい室内となっているがそれは彼女が教会の人間であることに関係している。

彼女は物心ついた時から神父である父親に宗教家とは何たるかを教え込まれてきたため、かつてのバーチャルな世界でも自然と清貧の精神が表れてしまったのだろう。

だがそんな無個性な部屋で一つだけ目を引くものがある。

それは白い壁に大きく開かれた窓だ。

窓からのぞく風景は美しく、空には大きな入道雲を浮かべた真っ青な青空がいっぱいに広がり、地面には草花が青々と生い茂り、木々からは鳥のさえずりが聞こえてくる。

リアルでは数百年も前に失われた地球の本当の姿。もう一度この景色を見ようと思ったらいつ手に入るか分からない空想の景色。

そう、地下世界で見ることのできる筈がない緑豊かなこの景色は多種多様なデータクリスタルが作り出した〝幻〟だ。

これはローザリアとブルー・プラネット氏が共同で作り出したマジックアイテム『シャングリ＝ラ』。その名の通り彼らの理想郷を体現したものだ。

このマジックアイテムは簡単に言ってしまえば現実世界では決し

て見ることが出来なかった美しい景色を鑑賞するためのものであり、少なくともナザリックには一つしか存在しないマジックアイテムだ。
　このマジックアイテムの凄いところは、まず景色が時間と連動しており朝になれば朝日が昇り、夕方になれば夕日が沈み、夜になれば空には星々が煌めく。そして季節も再現されており、春には花々が咲き乱れ、夏には新緑が眩しく輝き、秋には紅葉が燃え盛り、冬には純白の雪が降り積もる。更には天候もランダムで、日によって清々しい晴天の日もあれば雷鳴が轟く土砂降りの雨の日もあるなど、とてもではないが観賞用として作ったにしてはクオリティが高すぎる逸品だ。それだけローザリアとブルー・プラネット氏が自然に向ける思いは強かったと言う事だろう。
　しかしこれだけ精巧に作ったとしても《ユグドラシル》では〝窓〟という一枚の額縁に収まる活動写真でしかなかった。それが何故かこちらの世界での『シャングリ＝ラ』は、窓の外の景色が風によって揺らめけば窓から爽やかな風が吹き込む様になっていたのだ。
　この変質にはローザリアも大いに喜び感動した。が、同時にやはり目に映る景色に触れることは出来ないことも再認識し落ち込みもした。まぁ今となっては第６階層と言わず、ナザリックの外に出ればこれでもかと言うくらいに本物の草木に触れる事が出来るのであまり問題でもないのだが、それでもリアリティをグッと増したこのマジックアイテムは彼女の一番のお気に入りとなっただろう。
　ローザリアは窓の近くにロッキングチェアを置き、深く腰をかけゆらゆらと揺れながら窓に映る景色と吹き抜ける涼風を楽しんでいた。しかしながら暇を持て余しているようにも見える。事実、両足をプラプラと振り子のようにしている様子からは手持無沙汰な雰囲気が否めない。
（今日はアインズさんと待ち合わせをして宝物殿へと向かう予定なのですが、しかし一向に連絡が来ませんね…。）
　ふと彼女が壁に掛けられた時計を見やると時刻は昼の１２時を指そうとしていた。先程の会議のあとアインズと別れてから結構な時間が経つが、依然として通信（メッセージ）が来る気配はない。

（暇、ですねぇ…。）

再びナザリック地下大墳墓に帰還した支配者たる至高の４１人の一人として、アインズやＮＰＣ（仲間）達と共にこの異世界を生き抜くためにはどうしていけばよいか考えなければならない義務がある。そんな大事な役割を担った彼女が忙しくない筈がないのだが、現実はどうやら違うようだ。

なぜ、彼女がこうして自室にこもっているのか。それはアインズから直々に〝待機命令〟があったからだ。命令と仰々しく言っても、待機しておいて欲しいといった真意を悟られないよう巧妙に隠した回りくどいお願いだったのだが。

（まったく、「戦闘や守護者達への顔合わせ、それにぶっ続けで長く話し込んでしまいましたし、お疲れでしょうからお部屋でお休みになられてはどうですか？」だなんて。アインズさんらしいと言うか、らしくないと言うか…）

確かにアインズの言う通り、スレイン法国との戦闘から現在に至るまで長時間にわたり彼女は動き続けていた。普通、これだけの時間を休息も無しに活動し続ければ身体的、精神的にパフォーマンスが大幅に低下するだろう。

だが、それは〝人間であったなら〟の話だ。

彼女は見た目こそ人間とほぼ変わらないが、その実中身は誰もが恐れた鋼鉄の体を持つ人ならざる存在なのだ。

鋼の肉体を手に入れた彼女は、アインズと等しく疲労を感じることが無くなった。更に彼女を構成する特に重要なパーツである《小型縮退炉：改式》により動力源となる魔力は常に生成され続けるのだ。だから睡眠も食事も必要としない。故に彼女に向けられた「長時間動き続けたのだから休息をしろ」など、何の中身も無い戯言に他ならなかった。

だからこそ逆に気になるのだ。なぜアインズはそれを知ったうえでこのようなことを言ったのか、と。

（おそらくですが、何やら私に知られたくないことがあり、あの場に私がいるとそれを勘付かれる恐れがあるため退去してもらうべくやん

わりとあのような事を言った、と考えるべきでしょう。というかそれ以外に考え付きません。）

この自分の考察でアインズ達からの疎外感を覚え、拗ねた子供の様に唇をツーンと尖らせる。が、それもすぐに止め変わりにスッとロッキングチェアから立ち上がると『シャングリ＝ラ』の戸を名残おしげに閉める。それと同時に部屋の中を吹き抜けていた涼風が止み、後は刻々と時を進める時計の秒針の音だけが残った。

くるりと方向転換した彼女が次に向かった先は自室の入り口であり、この部屋の出口だ。

（アインズさんが悪いんですよーだ、私をこんなにほったらかしにして。守護者達と一緒にお話しもしたかったのにそれもお預けで、いい加減我慢の限界が来たと言うものです！）

フンスッと軽く鼻を鳴らし、不機嫌そうに腕を組みながらスタスタと扉へと歩を進める。――その顔にいたずらっ子の笑みを浮かべて。

「さーてどうやって外に居るお目付け役さんを撒こうかしら？」

彼女は自室に戻った時から、玄関外の廊下の天井に八肢刀の暗殺蟲（エイトエッジアサシン）が三体張り付いているのが分かっていた。彼らは完全不可視化のスキルを持っており同時に気配を消す技術に特に優れているまさに忍者の様な存在だ。そして彼らはナザリックにたった15体しか存在せず、その内の1／5をあてがうとは余程ローザリアに知られたくないことがあるらしい。

「んー…あ！いいこと思いついたわ。スキル発動、〈虚ろの合わせ鏡（ホロウ・ミラーズ）〉」

そう彼女が唱えると、何処からともなく2枚の巨大な鏡がローザリアを挟むようにして現れた。

ローザリアを中心に合わさった二つの巨大な鏡は、その鏡面に無限の反射を繰り返し数えきれないほどの彼女の虚像を生んだ。そして…

――ギョロリ

と、一斉にそれら虚像が実像である彼女へと顔を向けたのだ。

合わせ鏡に映る無数の虚像の内の一体が自分へと振り向くとき、そ

れはこの先に起こる不幸を暗示している、と言った都市伝説は良く耳にする。嘘か真か実際に合わせ鏡を行って不吉な目に遭ったという話は後を絶たない。しかしそれにしたって全部が全部振り返るなんて不気味を通り越して何だか笑えて来てしまう。

そんな異常現象の中心である彼女は恐れるでも笑うでもなく、至って普通だ。

「さぁ、もう一人の私達よ――――お出でなさい。」

ローザリアの呼びかけに呼応して平面であるはずの鏡の世界からぞろぞろと彼女の虚像たちが歩み出てくる。その数は１０を超えたあたりから数えられなくなり、気がつけば部屋の中は鏡から出て来た彼女の虚像達で埋め尽くされていた。

〈虚ろの合わせ鏡（ホロウ・ミラーズ）〉は彼女の持つ固有スキルであり、今起きた現象通りの効果を持つ。彼女の任意の数だけ鏡から虚像を呼び出すのだが、この虚像をただのニセモノと侮るなかれ。呼び出された虚像達はオリジナルであるローザリアのステータス、スキル、所持アイテムなど全てを模している、いわば完全なるもう一人の自分だ。更にはどんなタイミングでもこの虚像は実像に〝成り代われる〟。正確には実像であるローザリアが任意の虚像を選択しその虚像へと意識を移し替える事が出来る。だから万が一にも自分がやられそうな場合、他に虚像が存在していれば瞬時にそちらと入れ替わることでＤｅｔｈを免れることが出来るのだ。

ただし、もちろん弱点も存在する。まず、虚像は存在していられる時間が決められており、その時間は１８０秒とごく短い。次にいくら自分と同じ能力を持った虚像を生み出そうと、全ての虚像のＭＰは実像である彼女のただ一人分だけを共有する。つまり全ての虚像が一斉に高火力な攻撃をすれば一瞬で彼女のＭＰは空になってしまう訳だ。これは所持アイテムにも言えることで、一人の虚像が消費アイテムを使用すれば全員のアイテムパックから消費された分だけその個数が減る。だからアイテムを無限に増やしたり減らしたりというセコイ真似は残念ながらできない様になっている。極めつけは瞬時に虚像を作り出すことができないというのが一番のペナルティだろう。

最低でも全ての行程を終えるためには３０秒はかかり、その間は一切の行動が制限されてしまうため、場合によっては３０秒間棒立ちのただの的になってしまう恐れがあるのだ。
　このように高性能ながらも制約が厳しいため《ユグドラシル》ではあまり使われてこなかったスキルだ。
「よし、準備完了。さて彼らはどんな反応をしてくれるのかしら？」
　嬉しそうに、楽しそうに彼女は微笑む。八肢刀（エイトエッジアサシン）の暗殺蟲達が慌てふためくさまを想像しながら…。

「～♪」
　鼻歌を歌いながら軽快な足取りでローザリアは廊下を進む。ちょっとでも気を抜けばスキップでもしてしまいそうなほど上機嫌な彼女の様子を見れば、あの後に起きたであろう出来事を想像するのは難しくない。
　結果を先に言えば、悪戯は大成功に終わった。
　最初は一人部屋から出て来たローザリアに対して、八肢刀（エイトエッジアサシン）の暗殺蟲からもう暫くの間だけどうか自室に控えていてもらいたいという旨を非常に丁寧に伝えられ、これから彼らに対して悪戯をする者の心境としては若干の申し訳なさを感じずにはいられなかったが、申し訳なさよりもそんな彼らの慌てる姿を見たい欲望が勝ってしまい、こうして悪戯は決行された。
　もうお気づきだろうが、悪戯と言うのはたった一人しかいない筈の至高の御方が自分達の目の前で話しているにもかかわらず、一人また一人と次々に部屋から出てくる光景を作り上げることだ。そして部屋から出て来た無数の至高の御方はそれぞれてんでバラバラな方向に進むため、急いで三体は散開し手当たり次第に説得を試みるも圧倒的な物量差に到底間に合う訳も無く、終いには一番最初に話したであろう本物のローザリアも見失ってしまい、もうどうしてよいかわからず呆然とした表情でその八本の手足をワチャワチャさせることしか

できなかった、と言うのが事の顛末だ。
（最初にもう一人の私が部屋から出て来た時の彼らの驚き様ったら…あぁ駄目だわ、思い出したら吹き出してしまいそう。）
　思い出し笑いで顔がニヤけるのを必死に我慢する。もしそんなだらしない表情を誰かにでも見られてしまえば、いくらナザリックの頂点に君臨する存在だとしても評価が下がるのは否めないだろう。普段から落ち着いた雰囲気を醸し出している彼女なら尚の事だ。
　今は無事に八肢刀の暗殺蟲（エイトエッジアサシン）達を撤き、〈虚ろの合わせ鏡（ホロウ・ミラーズ）〉の制限時間が過ぎたためまた一人に戻ったローザリアはどこへ行くでもなくとりあえず気の向くままに歩を進めていた。移動するのなら『リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン』を使えば歩かずとも一瞬で目的地に到達できるのに敢えてそれをしないのは、今目に映る光景が《ユグドラシル》のバーチャルな世界ではなく、触ればその質感がちゃんとわかる本物の材質、素材でできているのだ。たとえナザリックの地図をすべて把握していたとしても、こうして見慣れた景色が一変している様を見て回るのは楽しいものである。それに…
「ろ、ローザリア様っ!?」
（それに、こういった出会いがありますからね。）
　曲がり角でたまたま鉢合わせになったのは、ナザリックに数多く使えるホムンクルスのメイドの一人だ。手に何か大きな荷物を抱えている。
「ど、どどどどうしてこんな場所に!?いや、そうじゃなくって、えーっと、ほ本日もご機嫌麗しく…」
　どうやら突然目の前に現れたローザリアに対してテンパりまくっているようだ。
「フフ、御機嫌よう。でも今はそう言った堅苦しい挨拶は不要だわ。それにしても…大きな荷物ね？良ければ手伝いましょうか？」
「へ？いやっ、いやいやいや!!至高の御方様にお手伝いして頂くなんて！と、とんでもございません!!そそれよりもローザリア様はどちらに向かわれるのですか？」

「んー…特に目的地は無かったのだけれど、そうね。あなた、アインズさんが今どちらにいらっしゃるかご存知ですか？」
「はい、只今大食堂にて守護者の皆様方とローザリア様ご帰還の祝賀会の最終調整をしておられます。…ッハ！」
そう言った彼女は顔面が一瞬で蒼白になる。足はブルブルと震えて今にも崩れ落ちてしまいそうだ。
（思わず答えちゃったけど、これ秘密にしなきゃいけないやつだったぁーーーー!!!）ガーン
そんな彼女に更に追い打ちがかけられる。
「なんだ、バラしてしまったのか。」
再び声を掛けられたがこれは女性の声ではない。低く、重々しくもこの脳がしびれる様な声音を持つ人物はこのナザリックにおいて一人しか存在しない。
恐る恐る声を掛けられた方向へ顔を向けると、そこに居たのは漆黒のローブを身に纏った巨大な骸骨が立っていた。
（あ、終わった。私終わったわ、秘密を洩らした責任取らされて死ななきゃいけないやつだコレ…。みんなゴメン、私先に逝くね。みんなと過ごした日々は絶対忘れないよ…）
絶望しきった顔で、ついに膝は折れその場にへたり込んでしまった。頭の中で今までの記憶が濁流の様に思い出される。あぁ、これが走馬燈か…
完全に一人の世界に入ってしまった彼女の肩にポンと白い骨の手が乗せられ、現実の世界に意識が引き戻される。
「あー、いいかい？良く聞くんだ。何となくだが君の考えてることはわかる。だが私はそんなことをするつもりは全くないと言っておこう。確かにバラされてしまった事は多少残念に思うがほら、彼女の顔を見てごらん。」
そうアインズに言われるがまま指さされた方向、ローザリアの顔へと視線を向ける。
その瞳には花の様な微笑みを浮かべるローザリアの顔が映った。彼女から手が差し伸べられ、その手を取ると優しく引き上げられその

まま抱きしめられた。
（ふあぁ…柔らかい、それにいい薔薇のいい匂いがする。）
　先程までの沈み切っていた感情はあっという間に吹き飛んでしまい、今は母にでも包まれているような安らぎで心が満たされている。
「ミスは誰でも犯します、それこそ昔は私もミスばっかりでした。でも大事なのはミスをしてしまった事を悔やむより、次に同じミスをしないことを心がけることです。そうすれば貴方はもっと成長できるわ。良いですね？」
　ローザリアの胸から顔を上げたメイドは「はいっ！」と元気よく返事を返した。もう心配はいらないだろう、だが彼女に限らずここに居る多くの者達は何かあれば自分の命を差し出そうとしてくるので大変だ。最悪自分の命令一つで全滅しかねないこの状況はいずれ何とかしなければならないだろう。
　アインズは若干の憂いを感じながらも、メイドへと意識を戻し職務に戻るよう告げる。
「では、会場の準備を頼むぞ。」
「畏まりました！誠心誠意、腕によりをかけて準備させていただきます!!アインズ様、ローザリア様、不遜な私めのためにご鞭撻いただき有難うございました。ここに居ないメイドたちを代表して、後ほどお会いできる事を心待ちにしております。」
　そう言って、メイドは軽快な足取りで大食堂へと去っていった。大きな荷物を抱えているから転んでしまわないか心配だ。
「しかし何の連絡も無いと思ったら、こうゆう事だったのですね。」
　さっきとは打って変わってローザリアはジトーっとした目でアインズを睨む。
「いやあはは、申し訳ありません。そのびっくりしてもらえたら嬉しいかなと思いまして。でも確かに遅くなってしまったのは事実です、すみませんでした。」
「ふふ、許します。それよりここにアインズさんが来たと言う事は？」
「はい、重ね重ね遅くなりましたが、宝物殿へと向かいましょう。」

慈悲の十字架

ナザリック地下大墳墓『宝物殿』

ここにはかつてその名を知らぬものがいないほど世に悪名を轟かせた者達が、努力と知恵、時には己の血をもって集めに集めた数えきれない程の財宝が保管、安置されいる。

更にこの宝物殿には入り口となる〝扉がない〟。

扉がないとはどういうことなのか、それはこの宝物殿がナザリック地下大墳墓内にありながらその何処からもここへと繋がる通路はなく、普通では決して侵入することのできない完全な独立空間となっているためだ。

唯一この空間に入ることが許されるのは、ナザリック地下大墳墓内を自由に転移できる効果を持つ『リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン』を所持する者のみ。だが、万が一にも襲撃に会い、敵にリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを奪われ宝物殿への侵入を許した際にも対応できるよう、様々なデストラップが備えられている。

それにしても凄い、凄いとしか言いようがない。

仰ぎ見るほどの天井は夜空に輝く星々の様に燦然と輝き、視界に全てを納めるのが難しい程の広さをもつ部屋の中央には、御伽話でしか聞いたことのないような金貨や銀貨、財宝がまるで山脈の様にどこまでも高く積み上げられている。よくよく見ると、それらに埋もれるようにして超一級品の工芸品や芸術品も混ざっている。しかし超一級品に対する保存状況としては些か乱雑ではないだろうか、と疑問に思うだろう。だが仕方がないことのだ。

なぜならこれらを置く場所がないのだから。

この広い空間の巨大な壁面は全て陳列用の棚となっており、そこには所狭しと宝物が並べられ、そのどれもが一目で足元に転がっている超一級品よりも価値の高い物ばかりだと分かる。

「まぁまぁ、こんなに沢山ため込んでいらっしゃったのですね。」

《反重力装置》の出力を調整し、浮力を高めて飛行しているローザリアは眼下に広がる光景に感嘆とも呆れともつかない感想を漏らす。

「ローザリアさんは余り宝物殿の方へは来ませんでしたもんね。まぁ、でもこんなのは目的の物を得る為の過程で生まれた副産物の様なものですよ。それを知らないわけではないでしょう？」
　対するアインズは〈飛行（フライ）〉の魔法でローザリアに並列飛行する。
「えぇ、まぁ。私は皆さんの様にあまりお金を掛ける事が出来ませんでしたから、自分の武器と言える物もたった一つしか持っていませんけれど。でも今思い返してみても大変だったなぁ…完成させるまで一体どれほどかかったのやら。」
　せっかくだから自分専用の武器を作ろうと決心してからの、完成までにかかった長い道のりを思い出し懐かしさに目を細める。
「はは、確かに。必要なデータクリスタルを集めるために古代遺跡のダンジョンに入ったら馬鹿みたいに強い敵ＭＯＢがわんさか出て来て、やっとの思いで突破したと思ったら、最下層でレイド級のボスが出て来た時は泣きそうになりましたよ。今では楽しかった良い思い出です。」
「ふふ、でもこうして無事に武器を完成させられたのはアインズさんと皆さんのお力添えがあったからです。あの時は本当に有難うございました。」
「いえいえこちらこそ、普段なかなか出会えない機械系の敵と戦えて楽しかったですよ。…あ、目的地が見えてきましたね。」
　彼らの向かう前方に黒く大きく穴の開いた場所が見える。その先は宝物殿で最重要区域となる武器やその他の倉庫が控えている。
　ほどなくして、二人はその黒い穴の近くに降り立つ。目の前にそびえる全ての光を吸い込んでしまうような漆黒の闇は、その暗さに距離感が掴めなくなってしまいそうだ。
　この二次元的な暗闇は倉庫へと繋がる扉であり、特定のパスワードに反応して開くタイプだ。
（さて、困った。その大切なパスワードが思い出せないぞ…。）
　ナザリックにはこういったパスワードを必要とするギミックが多い。そのため良く訪れるような場所のものは問題なく覚えていられるのだが、ローザリアよりは宝物殿に訪れるにせよこんな場所まで来

る機会はそうそう無いため、記憶もおぼろげとなりアインズはなかなかパスワードが思い出せないでいた。
しばらく思案するものの、一向に思い出せる気配がしないので応急的手段をとることにする。
「仕方がない、『アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ』。」
アインズの言葉に反応し、湖面から浮かび上がる様に漆黒の扉の上に白い文字が現れた。
もしかしたら経験がある人もいるかもしれないが、こういったパスワードを忘れてしまった時に自分が設定した問題に答えることでパスワードのヒントが得られる、もしくは直接的に教えてくれると言う保険的機能がある。ナザリックの場合、全てに共通する第二のパスワードがありそれを入力することで正式なパスワードのヒントが得られる仕組みになっている。そしてその第二のパスワードと言うのが『アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ』と言う訳だ。
第二のパスワードのお陰で無事にヒントを得る事が出来た。できたのだが…
「…まったく、タブラさんは凝り性だからな。」
漆黒の扉の上には『Ａｓｃｅｎｄｉｔ ａ ｔｅｒｒａ ｉｎ ｃｏｅｌｏｍ，ｉｔｅｒｕｍｑｕｅ ｄｅｓｃｅｎｄｉｔ ｉｎ ｔｅｒｒａｍ，ｅｔ ｒｅｃｉｐｉｔ ｖｉｍ ｓｕｐｅｒｉｏｒｕｍ ｅｔ ｉｎｆｅｒｉｏｒｕｍ』と書かれており、どうやらラテン語の様だ。これが扉を開くためのヒントであるのは間違いないのだが、どういった意味だったのかまた思い出さなくてはならなくなってしまった。
（これでは堂々巡りじゃないか…）
思わぬところで足止めを食らい、苛立ちと焦りで頭を抱えそうになる。
「『――かくて汝、全世界の栄光を我がものとし、暗きものは全て汝より離れ去るだろう――』ですかね？」
隣に居るローザリアが不意に紡いだ言葉は正解だったらしく、眼前に広がっていた暗闇はある一点に集中するように吸い込まれ、気がつ

けば倉庫へと繋がる道が開けていた。
「お見事です。でも、どうして？」
アインズが疑問に思うのも不思議ではない。冒頭でも伝えたように、彼女は宝物殿へと来る頻度は極めて少なかった。それなのにアインズでもめったに来ないこんな場所のパスワードを彼女が知っているのは少々変ではないだろうか？が、その答えもすぐに分かった。
「あぁ。いえ、私の実家は教会でしょう？なので外国語の本が多くて、それにラテン語はキリスト教と深い関係がありますから、多少読めるんです。驚きました？」
「えぇ、それはもう。ローザリアさんがいなかったらこの扉はいつまでたっても開きませんでしたよ。では思い出の品を取りに戻るとしましょう。」
扉から先は先程までとは打って変わった世界が広がっていた。例えるなら博物館や美術館の展示室という言葉以上に相応しいものは無いだろう。床に隙間なく敷き詰められた黒色の石は光量の落とされた照明の光を淡く照り返し、静けさと荘厳さを感じさせる。
左右には様々な武器が整頓されたうえで美しく展示されている。それらは全てありふれた金属などで鍛造されたものでは無く、選りすぐりのマジックアイテムを使って作られた魔法武器なのだ。刀身に炎を湛える剣や全てが結晶でできた槍、中には何でできているのか想像すらできない不気味なオーラを放つ斧など、その数は数えきれない。
そんな武器たちには目もくれず（ローザリアは珍しそうにキョロキョロしていたが）二人は１００メートルほど歩いたところで終着点となる長方形の部屋に出た。
ここにきてまたがらりと部屋の雰囲気が変わる。今までが博物館なら、ここは古墳だ。より一層照明が落とされた暗い空間には、何か大きな物が置かれているようなくぼみが規則正しい間隔で空いている。
「アインズさん、ここは？」
「ここは、霊廟です。ギルドの皆さんがログインしなくなってから、皆

さんから預かっ武器や防具を保管するために僕が新しく作ったんですよ。もし誰かが帰ってきてもすぐに装備を返せるように…ね。」
「…。」
そう話すアインズの口調はどことなく寂しげだった。
アインズの様子から、ギルド・アインズ・ウール・ゴウンを去っていった仲間たちが、結局誰一人として帰ってこなかった事実を想像するのは容易だろう。
ローザリアは慰めてよいのかどうか言葉に詰まる。自分は父の死を理由に引退せざるを得なかったが、それでもアインズを孤独にしてしまった張本人の一人であるのには変わりないのだ。
「まぁでも、こうして本来の使い方が出来るんですから作っておいて損は無かったと言う事ですよ。あ、もしかして心配してくれました？」
しかし二言目には寂しげな雰囲気は消え去っていた。それこそローザリアの憂い気な表情を見ておちょくる程度には。
「もうっ！…でもあれからずっとお一人で辛かったのは事実でしょう？」
「確かに何度も寂しい思いはしましたけど、今こうしてローザリアさんに出会えたので、そんなものは吹き飛んでしまいましたよ。」
アインズは朗らかに笑う。
裏の無い笑い方から、どうやら本心からそう思ってくれているようだ。
ローザリアはスッと心が軽くなったような気がした。
「あ、この部屋に入る前に今装備しているリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを外して、この上に置いておいてください。」
アインズがパチンと指を鳴らすと、床から直径３０㎝程の円柱がせり上がり腰の位置で止まる。
アインズはその上に外した指輪を置き、ローザリアもそれに続いた。
「なぜ、外さなければならないのですか？」
「簡単なセキュリティですよ。この中に保存されている物はどれも大

事なものですから、この指輪を手に入れた部外者がここに入って盗みを働くことを想定して、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを装備している者に対して中のアヴァターラが問答無用で襲いかかる設定にしてあるんです。それこそ僕たちにも例外なくね。」
「なるほど。アインズさんがこんなにも大事にしてくださっていたなんて、とてもうれしいです。」
「いえいえ、当然のことをしたまでですよ。さて、ではローザリアさんの装備を取りに…「これはこれはっ!!」…ん?」
　ローザリアのアヴァターラへと足を向けた矢先、唐突に二人の会話に割り込む声が薄暗いこの部屋の虚空に響いた。何事かと二人は声のした方向へと視線を向け、そしてアインズの気分は最悪のどん底へと落ちることになる。
「これはこれはっ!!アインズ様にローザリア様、久しく御目に掛かれて光栄にございます!アインズ様はもとより、ローザリア様のご帰還はアルベドよりメッセージにて伺っておりましたが、こうして拝謁賜われればその美しさは何たるや!!このナザリックに住まう全ての女中を集めようともその足元にすら及べない究極の美貌!!そしてオリュンポスの美の女神アフローディテも嫉妬に狂うその体躯!!まさに神をも超えた存在がこのナザリックの頂点に君臨あそばされる事実にこの愚生、至福の喜びで全身が打ち震える思いであります!!」
(しまった、こいつの存在をすっかり忘れていたっ…!!)
　二人の目の前に現れたのは全く凹凸のないのっぺりとした顔に、子供が黒いクレヨンで目と口の位置にグルグルと塗りつぶしたような穴が開いている。まるで身長の高いハニワの様だ。そして黄色い軍服と帽子を被ったハニワはカツンと小気味よく踵を鳴らし、ビシッと大げさに敬礼のポーズをとる。
　反対にアインズは気分でも悪くなったのか、両膝を床につき両手で頭を抱えて身悶えしていた。
「…あなたは、えーと…そう、確かパンドラズアクターさん…で良かったかしら?」
「ええそうですとも!本日はようこそ宝物殿へお越しくださいました

!!」

ローザリアから名前を呼ばれ嬉々としてそれに答えるこのハニワは、宝物殿を守護管轄する領域守護者パンドラズアクターである。

「その…この際だから教えて欲しいのですが、私って皆さんが仰るほど、えーっと…〝美しい〟、ですか？」

ローザリアはナザリックに来る以前から美しい美しいと人々から持て囃されており、それはここに来てからより一層強まっていた。彼女としては美しいと言われることに対して特に嫌悪感は抱かず、むしろ嬉し恥ずかしい気分で心地は良かった。だが余りにも皆が皆言うものだから現実世界の黒須真理亜と異世界のローザリアとのギャップに少し戸惑っていたのだ。これもまた黒須真理亜の精神とローザリアの体との同期が上手くいっていないせいで起きている不具合の一つなのだろう。

そんな彼女の気を知らず、パンドラズアクターはローザリアの質問に対し大きすぎる身振り手振りでローザリアの美しさを語り始めた。

「それはもう！頭の先から爪の先まで一寸たりともミスのないこの計算されつくした美貌と御体は芸術を超えた神秘の領域に到達、いえ超越しておられます！この美しさを言葉で表すなど底の知れた卑しい者がする所業ですが、しかしあえてその汚名を自ら被り表現するならば！燦然と煌めく宝石箱の云々…」

「ちょっとこっちに来ようかパンドラズアクター君⁉」

パンドラズアクターの熱弁を遮る様にアインズが割って入る。先程まで部屋の隅でうずくまっていたが、今は怒気を噛み潰したような表情でパンドラズアクターに詰め寄り、肩を掴んで端っこの方へズルズルと引きずって行ってしまった。パンドラズアクターはと言うと、引きずられながらも執念深くローザリアがどれほどまでに美しいのかを声が聞こえなくなるまで語り続けていた。

（あらあら、連れて行かれてしまいました。それにしても、あそこまで褒め称えられてしまうと一周回って冷静になれるわね。でもお陰で少し誇ってもいいかなって思えるようになりました。感謝しなくてはいけませんね。でも、これから外の世界に行く機会があるとした

ら、美し過ぎると言うのはもしかしたら面倒を起こしかねませんね…何か対策を考えておかないと…。）

ふと視線をアインズ達の方に向けると、顔と顔がくっつきそうなほどの距離でひそひそと話し合っていた。

（そういえば、パンドラズアクターさんはアインズさんが作り出したキャラクターでしたっけ。ああやって自分が手掛けたキャラクターと面会出来ると言うのはなんだか羨ましい思いがしますね…。言うなれば親子の様なものですから、きっと積もる話でもあるのでしょう。一先ず邪魔をしない様にしませんとね。）

うんうんと頷きながら静観することに決めたローザリアは、慈母の様な表情で二人を遠く見つめる。

…優しさも時には刃と化すことを彼女が知るのは、まだまだ先の様だ…。

数分後、話が終わったのか二人は再びローザリアの下へと帰ってきた。

「お待たせしてしまってすみません。」

「いえ、それよりもうお話はもう宜しいのですか？」

「えぇ…いや、もう少し彼とはしっかりとした話し合いをしたいところですが、ローザリアさんの件を忘れる訳にはいきませんから。」

アインズの少し後ろに立っていたパンドラズアクターが耳ざとく反応する。

「そういえば、本日はどのような御用件で宝物殿へお越しになられたのですか？」

アインズは舌打ちしたくなる気持ちをグッと堪え、努めて平常に聞こえるように言葉を選んでいく。

「今日はローザリアの装備を取り戻しに来たのだ、パンドラズアクターよ。」

「おぉ、そうでしたか！ローザリア様の装備と言えば『慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）』でございますね。」

彼は宝物殿の領域守護者の役割を与えられているのに相応しく、保管されているアイテムの殆どを熟知している。その中にはもちろん、

かつてギルドの仲間たちが使用していた各々の装備品も含まれている。
「ローザリア様の趣向がとてもよく凝らされた大変素晴らしい逸品だと思います。それに、彼女とはよく仕事の合間に話し相手になっていただいております故、特に至高の御方々の装備の中で印象深く残っております。」
　ええ…？装備品が話し相手って…少し彼を宝物殿に籠らせ過ぎてしまったようだ。もっと外に出していろんな人と交流させよう、うん。
「…パンドラズアクターよ、この用事が終わったらお前も祝賀会に参加すると良い。」
「宝物殿の守護は宜しいので？」
「あぁ、許す。ナザリック総出で行われる一大行事だ、全員で参加せよと皆に伝えてある。もちろんその中にはお前も含まれているのだ、存分に祝い楽しむと良い。」
「有難きお言葉。不肖パンドラズアクター、喜んで参加させていただきます！」
「うむ、では宝物殿の領域守護者に命ずる。我々をローザリアのアヴァターラまで案内せよ。」
「はっ！」
　ビシッとまた敬礼のポーズをとった後、迷いのない足取りでパンドラズアクターは先陣を切る。といってもただ真っすぐ道を進めばよいなだけのだが、これは異世界に来てから学んだアインズなりの愛情表現だ。守護者や他のキャラクター達は自分たちの創造主であるアインズの役に立てることを最上の幸福としている。だから時折こうして直接的にアインズへ奉仕をするような仕事を与えてやると非常に喜んでくれるのだ。
　それぞれ音色の異なる三人分の足音が、静かに響き渡る。
　ものの数分も歩かないうちにローザリアのアヴァターラの前へと着いた。
　しかし、何と言うか他のアヴァターラに比べて極めて味気ない見た

目をしている。と言うのも琥珀色に輝くアヴァターラの首元に、白いロザリオがかけられているだけだからだ。横に並ぶ大きな武器や見事な甲冑、怪しいローブなどを着込んだアヴァターラと比べてしまうといかんせん迫力に欠けてしまうのも仕方がないと言えば仕方がない。なにせ、ローザリアは装備可能な武器以外の武具を一切装備する事が出来ないという特殊なパッシブスキルが発動しているからだ。

これは課金種族である【機械仕掛けの神（デウス・エクス・マーキナー）】によるもので、データクリスタルを用いてあらかじめ用意されていない全く新しいスキルを作り出すことが可能なのだ。だから彼女の持つ変身能力や次元眷属などは彼女しか持ちえない特別なスキルなのである。その代わりとして、能力パラメータを左右するような装備品や防具などは一切装備する事が出来ないと言う厳しい制約があるのだが、正直防御力の面では彼女の右に出るものは居ないため、必要ないのもまた事実。ただし例外として、彼女が低い体温を隠すために手に付けている白いレースの手袋は防御性皆無で特殊効果を何も持たないただの手袋であるため、装備することが可能となっている。

ローザリアは一歩近づき、アヴァターラへと顔を近づける。

「ふふ、これを見るのも久しぶりね。それにとてもきれいに磨いてあるわ、これも貴方が？」

「はい！私の仕事は宝物殿の守護であり、管理であります。そのため至高の御方々様の装備品の管理は最重要事項でありますれば、いついかなる時でも最高の保存状態を保つのも私の使命です。さあどうぞ、ご自身の装備品でございます。ぜひ手に取ってご覧ください。」

「あら、でしたら私の首にかけて下さりませんか？」

「へぁっ!?そそ、そのような栄誉ある行為、私の様な一介の領域守護者には相応しくないかと…」

唐突な創造主の物言いにさすがのパンドラズアクターも狼狽える。

男からしてみれば、女性の首元にネックレスを掛けるという行為がどれほど敷居の高い行為なのか分かってくれるだろう。それにもまして相手は雲の上に住んでおられる存在だ、敷居が高いにも程があ

る。
「そんなに謙遜せずとも、これは普段から奇麗にしていただいたお礼だと思って下さい。さぁ、どうぞ。」
そう言ってローザリアはパンドラズアクターに背を向け、頭に被っている長いヴェールを片側に寄せてその下に隠れていたうなじを露わにする。これにはパンドラズアクターのみならずアインズも生唾を飲んだ。
（うわ、エロい。）
思わずアインズはそんな感想を漏らしてしまった。そして言葉に出さなかった自分ナイス！と小さくガッツポーズをとる。
古来より女性のうなじには男を惑わす魔性の魅力があると言われている。
髪の長い女性であれば滅多に見せない領域を無意識に、あるいは狙って見せることによって生まれるその煽情的な光景は、男の心に潜む眠れる獅子を呼び覚ます。
パンドラズアクターは悩んでいた。自分には余りにも不釣り合いなほど栄えある申し出を甘んじて享受するのか、それとも厳然たる態度で主従関係を明確にするために拒絶するのか。しかしナザリックに住まう者達の思考には、誰かが仕組んだわけでもないのに大前提として、至高の御方を失望させることなど決してあってはならない、という回路がある。従者ならば当然の志ではあるが、これは〝失望させて見放されたくない〟という気持ちの裏返しでもあるのだ。だからパンドラズアクターはこの大前提に戻って考え直した、もしここで拒絶したならば目の前の女性はどんな表情をするのだろう、と。
そこからはパンドラズアクターの決断は早かった。
狼狽えて縮こまった体をシャキッと正し、踵を奇麗にそろえ、左手は腰の位置に真っすぐ伸び、右手は今日一番の鋭さを持った敬礼をとる。
「パンドラズアクター、誠心誠意心を込めてローザリア様の御申し出を遂行させていただきます!!」
「はい、お願いしますね♪」

パンドラズアクターはローザリアのアヴァターラへと近づき、『慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）』へと手を伸ばす。
ネックレス状の数珠を繋ぐホックを外し『慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）』をアヴァターラから取り外すこの一連の動作は何十回何百回と整備のために行ってきた慣れ親しんだ動作である筈なのだが、緊張のあまり手の震えが止まらない。
額に汗がにじむ。ここからが本番だ。
「ではローザリア様、失礼いたします。」
覚悟を決めたパンドラズアクターは深呼吸をして呼吸のリズムを整える。
慎重に且つ素早く無駄のない動きでローザリアの胸元の丁度良い位置に『慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）』が収まるよう調整し、最後にチェーンのホックを止める。
「…装着、無事完了いたしました。」
全てをやり遂げたパンドラズアクターは久しぶりに呼吸をしたような思いがした。
ローザリアは片側に寄せていたヴェールを元に戻すとパンドラズアクターの方へと向き直り礼を述べる。
「とても丁寧に着けてくださってありがとうございます。なんだか私まで大事にしていただいているみたいで嬉しかったです。」
「はうわっ!!」
眼前に今まで見たことが無い美しい満開の花が咲いていた。その眩しい輝きにパンドラズアクターの心はいとも容易く撃ち抜かれてしまった。
純粋無垢な淑女の笑みほど尊いものは無い。ああ、やってよかった、喜んでもらえてよかったと、心から思わせてくれるそんな笑顔だ。
「こ、こちらこそローザリア様の御首元に『慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）』を御納めする大役を任されまして、大変幸福でありました！」
分度器で計ったら９０。くらいまで曲がっていそうな礼は、赤面した顔を隠すには丁度良いのだろう。

「ん～もおうるっさいな～」

間延びした、いかにも寝起きで機嫌が悪い様子がうかがえる声音からしてどうやら女の子の声が聞こえて来た。それも比較的近くから。

（なんだ？最近は挨拶も無しに喋りかけてくるのが流行りなのか…？）

怪訝な表情でアインズはあたりを見回すが、何処を見ても女の子の姿は見つからない。

「お～パンドラちゃんじゃん、おっはー。あれ？でも私の整備って今日だったっけ？」

「お、おはようございます、マーシー様。」

顔の見えぬ存在から朝の挨拶を交わされ、律儀に挨拶を返す。ん？今マーシー様とか言わなかったか？パンドラズアクターの奴。

「まぁいっかー。それにしても今日はなんだか随分と上質な枕を使ってるじゃない。こう両脇から柔らかいもので支えられてるフィット感が堪んないっつーか何つーか…イイネッ!!」

アインズは思考する。この場でパンドラズアクターが発した「マーシー」という単語に該当する者は一つしか存在しない。

うん、と考えるまでも無く結論に行き着いたアインズは、恐る恐るローザリアの胸元に目をやる。

――――『慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）』がローザリアさんの胸の上で跳ねてる!?

開いた口がふさがらない、とは今みたいな状況を指すのだろう。もしかしたら顎が外れてしまっているかもしれないが、もしそうなっていたとしても骸骨だから直接治せて楽でいいよね。あはは

（違うっ！そんなことを考えている場合じゃない！一体何が起きているんだ?!）

現実から目を背けかけていた自分にキレの入ったツッコミを入れ意識を取り戻し、改めて観察する。

うん、どう見たってあれが喋ってるよね。パンドラズアクターは本当のことを言っていたのか…

そして胸の上で十字架が喋っている様子を間近で見ることになっ

た当の本人はと言うと、目が点になったままフリーズしてしまったかのようにピクリとも動かない。
「あの、その、マーシー様？えぇっとですね…」
「おぉっ!?よく見なくてもこの形はおっぱいじゃん!!しかも超おっきい!!なーになーにぃ??遂に私の願いごと叶えてくれたのパンドラちゃん!!」
「いや、えっと、ですから…」
　本気と書いてマジに狼狽えるパンドラズアクター。それも先程の様な主従関係がもたらす狼狽え方とは違う、素でヤバイ時に出る方だ。
「うぇへへへへへへ、こんな素晴らしいおっぱいに巡り合えるなんて、マーシー感激っ！んでんでんで、こんな素晴らしいおっぱいの持ち主は一体誰なのカナー？」
　落ちたとしても決して怪我をしない柔らかい双丘の深い谷間に、己の身をぐいぐいと潜らせながら今までパンドラズアクターに固定していた視線を外し、このお山の持ち主であろう人物の顔を見上げる。
「うわーお、これまた超美人さんじゃないですか奥さん。いや～幸せだなぁ僕ぁ…ん？でもどっかで会った事あるよーな？んーー??」
　器用に十字架の短い方で腕を組み、小首をかしげるかのように全身を傾け、さも考え事をしている人のような仕草をとるこの十字架（？）はムムム、と己の記憶をたどって今目の前にしている人物がいったい誰なのか思い出そうとしているようだ。
　不意に大きな影が十字架を覆う。
「んぉ？」
　そして次の瞬間
　――ぎゅうううううううううう!!!
「いだだだだだだだだギモヂイだだだだだだだだだ!!!!!!!!!!」
　大きな影はローザアリアの手だった。
　バシバシと掌から免れた部分で懸命にギブアップサインを送っている。
「貴女は！いったい！どこで！そんな！お下品に！なったのですかっ

!!!」
「そ、そのイダッ声はイダダッまさかイダダダッ御主人さmイダイッ!ギブギブギブギブ!!!」
『』のギブアップコールを聞いても暫く握るのを止めなかった。
少しして、ローザリアも流石にかわいそうに思ったのか握る手を緩めてやると、『慈悲の十字架(ザ・クロス・オブ・マーシー)』はすかさず隙間から這い出て来て肩で息をする。ピクピクと痙攣し、なんだかボロッという効果音が似合いそうなやつれ方をしていた。
「はぁーっはぁーっ…死ぬかと思った…。あーそれにしても、お久しぶりですご主人様。」
「まったく、一目見て自分の主だと気付けないのはどうかと思いますよ、『慈悲の十字架(ザ・クロス・オブ・マーシー)』?」
「長いのでマーシーちゃんで。」
「…ゴホンッ。マーシー?」
「あはは…でもでも、ぶっちゃけ私って眼はそんなに良くなくって、それこそ輪郭を把握するぐらいしが限界なのですぅ…あ、でもその代わり音声認証は感度抜群のビンビンですよ!だってさっきの一声ですーぐにご主人様だと分かりましたから!」
えっへんと、十字架が人の胸の上で胸を張ると言う何とも奇妙な光景だ。
いい加減『慈悲の十字架(ザ・クロス・オブ・マーシー)』について少し説明しようと思う。
『慈悲の十字架(ザ・クロス・オブ・マーシー)』はローザリアが唯一所持する明確に武器とよべる神器級(ゴッズ)アイテムだ。普段は今の様に十字架の形をして彼女の胸元にぶら下がっているのだが、ひとたび戦闘になれば武器として展開、運用が可能となる。
武器の種類は無機物生物種のみが使用できる銃だ。それもかなり高性能で、弾丸は実弾ではなく、ローザリアから直接供給される魔力を銃弾にして撃ち出すため、彼女の魔力が尽きるまで撃ち続けることが可能だ。そして何より、この武器は〝変形〟するのだ。武器展開時はデフォルト設定として初期形態は大口径ハンドガンの形をとるが、それ以降は彼女の任意のタイミングで決められた数種の銃に変形で

きるのである。つまりこの銃一つさえあれば電撃戦も遠距離戦もこなせる優れモノなのだ。
さて、では何故武器が喋る奇天烈な事態になっているのかも説明しよう。
簡単に言うと、この武器開発に携わったメンバーの一人がいたずらで簡易的なＡＩを取り込んだからである。このＡＩは至極単純なもので、周りで発せられた言葉を記憶し無作為に喋る、例えるならインコの様なものであった筈だった。それがなぜあのような変態に育ってしまったのか…恐らくだが、ゲームとは得てして男女の割合では男性プレイヤーが多いのが世の常だ。例外的に女性だけで結成されたギルドなんていうものも存在していたが、ギルド：アインズ・ウール・ゴウンは漏れなく、男のほうが多かった。そして男が複数人集まると自然発生的に起こる話題がある。さて、ここまで言えば後はまぁ…つまりそう言う事だ。
女性からしてみれば非常に嘆かわしいこの事態であるが、相手は唯一自分だけが所持するアイテム。ここは不出来な娘を持った親の気持ちで割り切るしかないだろう。
「はぁ、なんだか先が思いやられます…」
「はっ！ご主人様お疲れですか!?そー言う時はですね、おっぱいを良く揉むと…」
減らず口のバカ娘にスッと右手を差し向ける。
「ヒィッ!!ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!」
「はぁ…」
これから先、溜息をつかなくて良い日が来るのか不安になるローザリアだった。
「あの、終わりましたか？」
ずっと傍観を続けることしかできなかったアインズがやっと口を挟めるタイミングを見出して、おずおずと声を掛けて来た。
「あぁっすみません！すっかり無駄な時間を取らせてしまって…」
「い、いえいえ話が収束したのならそれは結構なことです。しかしびっくりしました、まさか装備品まで喋り出すとは、まだまだこの世

界は油断大敵ですね。」
「あ、骨のにーちゃんも居たんだ。やっほー久しぶりー」
　ふりふりと手を振り今更な挨拶をアインズに送るマーシーはいつの間にか、また半身をローザリアの胸の間に挟み込んでいた。
「またそんなところに！…もうっそれより貴女はもっと敬意と言葉遣いと言うものをですね…」
　やばい、またローザリアさんがお説教モードに入ってしまう！こうなったらええい！ままよっ!!
「あーいや！大丈夫です！どっちかっていうとそのぐらいフランクなほうがやりやすいと言うか、硬い人たちが多い中でマーシーさんみたいな存在は新鮮と言うか、とにかくそのままで大丈夫です！」
「そ、そうですか？アインズさんがそうおっしゃるなら…」
　よし、何とか回避できたようだ。…意外と本心だったりするのは内緒にしておこう。
「さて、ローザリアさんの装備品も無事渡し終えましたし、祝賀会の会場へと向かう事にしましょう。さっきお二人が話してる間にアルベドに進捗状況を聞いておいたんですが、もう既に準備は整っているそうなのであとは僕たちの到着を待つだけだそうです。」
「それは大変！早く向かわないと、あの子達とっても律儀だから私たちが来るまでいつまでも待ってしまうわ。」
「まったくです。とりあえずこの部屋を出て、指輪で飛びましょう。」
「わかりました。」
「よし、パンドラズアクターも行くぞ。」
「Ｅｉｎｖｅｒｓｔａｎｄｅｎ！（了解しました！）」
「だからそれを止めろと言っている!!」

＃ｉｎｃｌｕｄｅ　＜ｓｔｄｉｏ．ｈ＞

ピピッ…

初期電源の入力を確認…　以降は縮退炉からの魔力供給によること

縮退炉点火シークエンス開始　完了まで５…　４…　３…　２…　１…

点火準備完了…　縮退炉　点火

縮退圧上昇　小型ブラックホールの形成…　確認

縮退炉　平常稼働完了

ＰＯＳＴへ移行…

１０％…　５０％…　７０％…　９９％…　１００％

ＰＯＳＴ完了　ハードウェア《ＲｏｚＡ＝Ｌｙ》を検出

ハードウェアの動作確認へ移行

インプット及びアウトプットセンサー・ＯＫ

アクチュエーター・・・ＯＫ

各関節部モーター・・・ＯＫ

次元干渉装置・ＯＫ・

フィードバック回路・ＯＫ

次元魔力回路・ＯＫ・

マザーベース《ｔｉｒ＝ｎａ＝ｎｏｇ》よりオペレーティングシステム《ｍＡ＝Ｌｉａ》の同期作業を開始

システムエラー　オペレーティングシステム《ｍＡ＝Ｌｉａ》が著しく破損しているため同期できません。修復プログラムを実行しますか？〈Ｙ／Ｎ〉…〈Ｙ〉

同期作業を一時中断しています…　完了

修復プログラムを開始します

修復完了まで残り　１００時間…　５７時間…　２４時間…　３０時間…　１２時間…　４時間…　３６０分…　２１０分…　１１０分…　４５分…　６０分…　１８分…

エラー　修復不可能な領域を検出しました　修復をキャンセルし

ますか？〈Ｙ／Ｎ〉…〈Ｎ〉
強制修復を実行すると正しく修復されない恐れがありますが、それでも実行しますか？〈Ｙ／Ｎ〉…〈Ｙ〉
強制修復に移行　修復を継続　修復完了まで残り　１０分…　４分…　６０秒…　４５秒…　１０秒…　３秒…　２秒…　１秒…
オペレーティングシステム《ＲｏｚＡ＝Ｌｉａ》の修復を完了
ハードウェア《ＲｏｚＡ＝Ｌｙ》の主記憶領域へコピーを開始…
コピー完了
オペレーティングシステム《ＲｏｚＡ＝Ｌｉａ》をハードウェア《ＲｏｚＡ＝Ｌｙ》へ同期を開始…　同期完了
ハードウェア《ＲｏｚＡ＝Ｌｙ》へ前ハードウェア《ＲｏｚＡ＝Ｌｉａ》のデータファイルバックアップをコピー…　１０％…　５０％…　７０％…　９９％…　１００％　完了
エラー報告　一部の破損したデータを正しくコピーできませんでした。
最終起動シークエンス開始
最終調整　全システム及びプロトコルを現バージョンに最適化
完了
ジェネレーター出力　安定
駆動部異常　検知なし
システムオールグリーン
ホールダーアンロック
《機械仕掛けの神（デウス・エクス・マーキナー）》第二ハードウェア　非常事態時運用モデル《ＲｏｚＡ＝Ｌｙ》　起動します…

悲劇：序章

暗闇。
見渡す限りの深淵。
光は無く、音すらも聞こえない暗黒。
気づけばそこに自分（ローザリア）が立っていた。光のない場所でそれはそれははっきりと。
そしてそれを私はただ傍観している。
真っ暗な空間に二人きり。
なぜだか自分がもう一人いることに対しては何の疑念も抱かなかった。
それはピクリともせず、ひたすらに立っている。
いや、立っていた。
私に後ろ姿しか見せなかったそれは、いつの間にかこちらへと振り返り、歩いてくる。
私は動けなかった。
溶けた鉛で全身を固められてしまったかのように、指先一つ動かせなかった。
それは歩いてくる。ゆっくりと、確実に。
それが近づいてきて分かったことがある。
それは何かしゃべっている。
私はそれが何をしゃべっているのか聞き耳を立てた。
『…ス…セ……コ…ソウ…』
どうやら壊れたスピーカーの様に同じことを繰り返しているらしい。
『コワ……コ…セ…』
私は後悔した。聞き耳を立てるんじゃなかった、と。
『コワ…ス…コワセ…コ…ソウ』
どんどん近付いてくるそれの声に混じる音があった。
ズル…　ズル…
何かを引きずる様な音だ。

ベチャ…　ベチャ…
それに湿っぽい音もする。
『コワス…コワセ…コワソウ…コワセバ…』
音の正体はすぐに分かった。
溶けていた。
体表面を覆っていた筈の液体金属が、見るも無残に溶けて足元にボトボトと零れ落ちていく。
皆が美しいと褒めてくれた眼も、鼻も、口も、火に当てられた蝋人形の様にドロドロと溶けてしまった。
代りに顔をのぞかせたのは真っ黒な頭蓋骨。
誰にも見せたくない私の醜い内部骨格だ。
それは私のすぐそばまで来て止まった。
相変わらずそれはブツブツと呟きを繰り返し、私は動けなかった。
意を決して私は問うてみた。口だけは動くらしい。
「貴女は…一体何者なのです？」
グルグルとカメレオンの様に忙しなく動いていた真っ黒な瞳は、私の問いに答える様にこちらへと焦点を合わせた。
『……。』
沈黙。先程まで永遠と続いていたつぶやきも止め、それはジッと見つめてくる。
「もう一度聞きます。貴女は…」
『オマエダ。』
喋った。しかしそれの声は私のものでは無かった。
聞いたことのない悍ましい声。
『私ハ、オ前ダ。ソシテ、オ前ハ、私ダ。』
私は否定した。こんな悍ましいものになったつもりはない。
「消えなさい、私の前から！」
手足が動かないため、言葉の限りを尽くして目の前の私に罵詈雑言を浴びせる。
「ぐぅっ…!!」
とてつもない握力で首を絞められた。メキメキと鳴ってはならな

い音が首から聞こえてくる。
声が出せない。
『ハハハ！…サァ、コワソウ。…コワス…コワセ…コワソウ…コワセバ…コワス…コワセ…コワソウ…コワセバ…コロス…コワセ…コワソウ…コワセバ…コロス…コロセ…コロソウ…コロセバ…コロス…コロス…コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス…殺す。』
それの手から何かが首を伝って侵食して来る。
そしてそれは、私の体を黒く黒く染め上げていく。
（いや…やめてっ！いやぁっ!!）
苦しくても、もがくことすら許されない。
だんだんと視界がぼやける。
頭の先から爪先まで全身が黒に染まった時、私は意識を失った。

（うっ…ここは？）
状況を確認するため体を起き上がらせようとするも酷い怠さで、体に全く力の入らない。それでも無理やり起き上がりあたりを見回す。
人はいない。
見知らぬ照明のない薄暗い天井、何処からともなく聞こえてくるモータの静かな駆動音、そして肌にまとわりつく乾いた冷気。
目を覚ましてから感じたのはこの三つ。そして自分は背後にある巨大な機械に繋がれたカプセルの様なものに横たえられていたらしい。
巨大な機械から伸びる部屋を埋め尽くさんばかりのコードから発せられる青白い光だけが部屋を照らしていた。
それにしても状況が全くつかめない。そもそもなぜ自分がこんなところに居るのか皆目見当がつかない。
何か原因になるような出来事が無かったか、一番近い記憶を思い出してみる。
「うぐっ…!?」

祝賀会までは思い出せた。しかしその先を思い出そうとした途端、強烈な吐き気と頭痛に襲われた。強靭な機械の体を手に入れた筈なのに、これではまるで人間ではないか。
が、そうではないらしい。全身に刺さる機械的なプラグとコードを見れば、自分の体が人間でないことは一目瞭然だ。
一先ず記憶を遡ることはやめ、頭から脊髄にかけて刺さっているプラグを抜いていく。
「くっ…痛みまであるなんて、変なところで不便な体ですね…。」
プラグを抜くたびに痛覚の神経を撫でられるような痛みが襲ってくる。
ふと気づく。自分の声が、自分の知っているものでは無いことに。それにプラグを引き抜く手も若干小さいし、着ている服も違う…
小さな疑念を抱くと同時にカシュッっと部屋の扉が開く音がした。
「ろ、ローザリア様!!」
「ローザリアさん!!」
扉の方を見ると、そこにはアインズとアルベドが立っていた。
二人はすごい勢いで近づいてくると、力強く抱きしめて来た。
「良かった…本当に良かった…」
何故だか涙声のアインズは、抱きしめる力を更に強める。
「うぅ…い、いたい…。」
アインズの職業はマジックキャスターだ。育て方で個性は出てくるが、それでも一般的なマジックキャスターの筋力ステータスは、その他の職に比べて低い傾向になることが多い。しかし、それがＬｖ１００ともなると、その筋力ステータスは人間の成人男性を遥かに凌駕し、そこらの中堅近接職よりよっぽど高い。
更に、普段なら体格が変わらないため正面から抱きしめられるならともかく、何故だか今は、アインズが完全に覆いかぶさるようにして抱きしめてくる状態だ。そのため全身がギリギリときつく締められる。
ここまで体格差があると、物理、魔法防御共に限界突破している身とは言え、感覚的に痛みを感じてしまう。

「はっ！すみません！大丈夫ですか!?」
　精神操作無効化スキルの影響で、感情の高ぶりは無理やり平常に戻されるはずなのだが、今の彼はやけに慌てた素振りを見せる。それだけ私が目覚めたことが彼にとってとても大きな出来事だったと言う事だろうか。
「は、はい。私は大丈夫です。それよりもここはどこですか？」
　目覚めてからずっと疑問に思っていたことを二人にぶつけてみる。
「ローザリア様、記憶が…無理もありませんね…」
　アルベドが口元を抑え、同情の涙を流す。しかし彼女の言い方からどうやら事情を知っているみたいだ。自分が寝ている間に何かがあったことは間違いない。
「アインズさん。一体何があったのか教えてくださいませんか？」
「…わかりました。それと説明の前に、先に謝らせてください…本当に、すみませんでした。」
　そういってアインズは深々と土下座した。ナザリック地下大墳墓を統べる死の支配者、アインズ・ウール・ゴウンが土下座するなどただ事ではない。
「や、止めてください！そんな急に謝られても、こちらとしては何が何だか…」
「それでも！僕はローザリアさんに謝らずにはいられません！貴女に取り返しのつかないことをさせてしまったのですから!!」
「っ……！」
　アインズの余りの必死な訴えに気圧される。
「…わかりました。とりあえず今はアインズさんの謝罪を受け取っておきます。」
　ローザリアの許しを得て、ようやくアインズは床にこすりつけていた頭を上げる。
「ありがとうございます。では、僕が責任をもって全てをお話しします。ローザリアさん動けますか？」
「はい。まだ体は怠いですが、歩くぐらいなら何とか。」
「辛いようでしたらすぐに言って下さい。」

大丈夫ですよと言いつつカプセルの中の拘束具から足を引き抜き、床へと足を下ろす。そのまま立ち上がろうとするが、上手く足に力が入らずによろけて転びそうになったところを咄嗟のアインズに支えられ、何とか立つ事が出来た。
「これは…重症ですね…」
ははは と軽く笑ってみるが、二人の表情は暗くなる一方だ。
それにしてもおかしい。自分はよろけはしたがちゃんと立っている。そして目の前にいるアインズさんも立っている。しかしどうしたことか、彼の顔を見るためには見上げなくてはならない。
「あの…一つお尋ねしてもいいですか？」
「!!、はいっ何でも聞いて下さい！」
「あ、いやそんな大したことではないのですが…その、もしかしてアインズさん大きくなりました？」
暗い雰囲気を和ませるため、努めて冗談っぽく聞こえる様に言ったつもりだったのだが、どうやら逆効果だったらしく更に二人の空気を重くしてしまった。
「いえ、違います…」
おもむろにアインズが虚空へと手を伸ばすと、その手首から先が消えてなくなり、ごそごそと暫く弄る様な動きの後、大きな鏡を取り出した。
そこに映ったのは――――
「…ローザリアさんが小さくなったんです。」
――――小学校中学年ほどの少女だった。
「…え？」
突然の出来事に一瞬頭が真っ白になる。
だが、すぐに冷静さを取り戻しこの状況を分析する。
目の前の鏡に映る少女を自分は知っている。いや、知らない筈がない。
黒いレースのワンピースに身を包み、白銀のロングヘアーを揺らす頭には、深紅の薔薇をあしらったカチューシャをつけている。瞳はローザリアと同じ若草色、いやそれ以外も全てローザリアを幼くした

ような外見を持つこの少女の名は《ロザリィ》。
《ロザリィ》はある特定の条件を満たすことで起動する、黒須真理亜が創造した第二のアバターだ。
終ぞこのキャラクターが起動することは《ユグドラシル》のサービスが終了するまで無かったが、今こうして実現していると言う事は、そのある特定の条件を満たしたからなのであろう。
その条件とは…
――ローザリアがナザリック地下大墳墓内で自害する。
という特殊なものだ。
「…なんとなく、大雑把ですが…私が起動するまでにどれ程の事が起きたのかわかりました。アインズさん、どうか詳細をお願いします。」
ロザリィに自分が意識を宿していると言う事は、それ相応の事がここで起こったことになる。焦る心とは裏腹に、語り掛ける言葉は冷たくなっていた。
「っ…はい。では現場に行きましょう。そこへ行けばローザリアさんも何か思い出せるかもしれません。」
仲間から冷たい視線を向けられると言うのは、何事にも勝る最悪の失態だ。ギルドを束ねるリーダーの立場なら尚更に。
このまま全てを明かせば最悪の場合仲間割れを引き起こしてしまうかもしれない。だが、それでも自分は説明せねばならない、全ては自分が招いた結果なのだから。
三つの間隔の違う足音が、薄暗い通路に響きわたる。
「…事の始まりは、祝賀会でローザリアさんの不調とその治療方法をその場に集まった全員に伝えた事がきっかけです。」

「――以上の観点から、彼女に何らかの不調が起きていると思われる。」
アインズの説明が終わると、賑やかだった会場が冷や水を撃たれたかのように静まり返る。

自分たちの創造主であり、仕えるべき主人の体に得体のしれない不調が表れていると言う衝撃の告白を受けて、その場にいた誰もが言葉を発せないでいた。
沈黙を破ったのは主賓席の近くにウェイターとして控えていたセバス・チャンだった。
「そ、それは真なのでございますかローザリア様…？」
恐る恐る真実を本人に確かめるセバスだったが、ローザリアがその質問に答える前に入った横やりで無礼な発言をしたことに気付く。
「おやセバス、君はアインズ様のおっしゃることが信じられないと言うのですか？」
横槍を入れたのは三つ揃えのスーツを見事に着こなした悪魔、デミウルゴスだ。
そこにきてセバスはハッと我に返る。
このナザリック地下大墳墓を創造した偉大なる至高の４１人の中の頂点である人物が、決して嘘などをつく筈がない。
ナザリックに仕える者であれば誰もが考えなくともわかることだ。だがセバスは動揺の余り我を忘れてしまった。
故の発言。故の失態。戦闘メイド集団《六連星（プレアデス）》を指揮する者としてはありえてはならない所業だ。
しかし逆を言えば、我を忘れてしまう程にセバスはローザリアの事が心配でならなかったのだ。
アインズに続き、再び自分たちの前へと帰還して下さった慈悲深い御方を失ってしまうかもしれない可能性と言うのは、それだけで彼らの精神を著しく磨り減らしてしまう。
セバスは己の醜態に顔を歪め、無数に刻まれた深い皺を更に濃いものへと変える。
「大変無礼な発言をしました…どうぞ何なりと罰をお申し付けください。自害も辞さない所存でございます…。」
セバスの発言に、周りは当然だと言わんばかりの視線を向ける。
普通の感覚の人からしてみれば簡単に『自害』などと言う言葉が出てくるこの異常すぎる光景も、彼らからしてみればこれが普通なの

だ。
　セバスは深い謝罪の礼の姿勢を崩さない。その姿からはいかなる命令にも従うと言う彼の覚悟が伝わってくる。
「セバス、面を上げなさい。」
「し、しかし私は…」
「デミウルゴスの言う事は聞けて、私の言う事は聞けぬと申すのですか？」
　セバスはローザリアの言葉を受けて、素早くいつも通りの美しい立ち姿へと姿勢を直す。しかし顔には拭いきれない大量の脂汗が浮かんでいる。
「ごめんなさいセバス、意地悪な言い方をしてしまって。私は別に貴方を罰するつもりはありません、その代わりよく聞いて下さい。これから話すことはセバスだけでなく、ここに居る全ての者達へと向けた言葉でもあるのです。」
　ローザリアは主賓席から立ち上がると一歩前へと踏み出して眼下の者達へと言葉を投げかける。
「一つ。何か間違えを犯したのなら、正せばよいのです。その場で全ての責任を負うことはありません、次に同じ過ちを犯さぬよう気をつければ良いだけなのです。私は再びここを訪れてから気づいたことがあります。それは先程のセバスの様にあなた方はよく『自害』をもって過ちを償おうとしますが、それは絶対に許しません。例え神であろうと仏であろうと許しても、この私がいる限り絶対に自害はさせません!!よいですか？私やアインズさんはあなた方を生み出したいわば親の様なものです。それなのに、その娘や息子たちが自らの手で己の命を途絶えさせる様など誰が見たいものですか!!私のこの話を聞いても尚『自害』という言葉を口にした者が居たならば、私はその者に対して『自害』よりも恐ろしい罰を与えるつもりです。宜しいですね？」
「「はいっ!!」」
　ローザリアの説教を受けた従者たちは一様に了解の意を示した。
　後ろに控えているセバスは彼女の寛大な措置を間近で受け、感動の

余り涙を流している。
数刻の後、あぁ、とローザリアは思い出したようにくるりと再びセバスへと向き直す。
「そうだ、セバスの質問に答えていませんでしたね。えぇ、確かに私はアインズさんのい言う通り、彼とは少し様子が違うみたいです。」
再び会場が凍り付く。しかしローザリアは笑顔を崩さない。
「でも安心してください。ほんの小さな誤差の様なものです、決して命を落とすような問題ではありません。」
彼女の『命を落とすような問題ではない』と言う部分に、全員がホッと胸を撫で下ろしたように思えた。
――――だがこの言葉を覆すような出来事が近い未来に起ころうとは、誰も思いも疑いもしなかっただろう。
隣に座っていたアインズも立ち上がり、ローザリアの言葉に続けて説明を加える。
「それに、彼女の不調は治療をすることが可能だ。」
おぉ！と会場がどよめく。
「でも、どうやってローザリア様の不調を治すんですか？」
もっともな質問をアインズにぶつけたのは、活発、天真爛漫と言った言葉が良く似合うダークエルフのアウラだ。
「うむ。彼女にはこの祝賀会の後、第６階層の円形闘技場（アンフィテアトルム）でかつてウルベルトが作り上げた大災厄（グランドカタストロフ）を封じた魔像の試作品を用いて模擬戦闘を行ってもらおうと思っている。」
「ナント！ローザリア様ノ模擬戦闘ガ行ワレルノデスカ！」
真っ先に反応したのはナザリックが誇る武闘派守護者、水色の美しい外部装甲を極寒の冷気で覆う蟲王コキュートスだ。
戦いを大いに好む彼にとって、至高の御方が戦う姿はとても興味があるのだろう、小顎を短くカチカチと鳴らし、腹にある複腕が落ち着きなく動いている。
「しかし、なぜ模擬戦闘をすることが治療に繋がるんでありんすか？」
再びもっともな質問をぶつけて来たのは、少女ながらもその蝋のように白い肌に妖艶な美しさを携える吸血鬼、シャルティアだ。

「簡単に言うと、彼女は恐らく我々とは違う方法でこちらの世界に来てしまったがために、上手く精神と体が馴染めていないのだ。そして彼女が外の世界で自らのスキルを開放したとき、意識の変化があったと言う。つまり積極的にスキルを開放して行ける環境を作り出せば、此方の世界の体に馴染む事が出来るのではないかと私は考えたのだ。故に模擬戦闘を行い、彼女にスキルを開放していってもらう。だが、あくまでこれは実験に過ぎない。この方法で完治できると言う保証はどこにもないからな。もし上手くいかないようであれば、また別の方法を探さねばなるまい。」
「その時は我々が全霊をもってローザリア様の治療法を探す補佐をさせていただきますわ。」
　ナザリック階層守護者統括、純白の小悪魔アルベドが胸に手を当ててアインズとローザリアに礼を捧げる。他の守護者達もアルベドに続くように頭を下げた。
「皆さんありがとうございます。もしもの時は宜しくお願いしますね。」
「「はっ!!」」
　主人の役に立てることが彼らの至上の喜び。ローザリアから直々に、不確定ではあるが彼女の助けとなれることを約束された守護者達は、キラキラと満足そうに眼を輝かせていた。
「あのぅ…アインズ様？」
「ん？どうしたマーレ？」
　おずおずと尋ねて来たのはアウラの弟であり、ナザリックが誇るダークエルフ生粋の男の娘マーレだ。
「えと、その…ローザリア様の模擬戦闘は、僕たちも見ていいんでしょうか…？」
「…ふむ。」
　アインズは一瞬だけローザリアに視線を送る。それに気づいたローザリアはニッコリと笑い返した。
「ええ。私は一向に構いませんよ。ただ私も体を動かすのは久々ですから、少々お見苦しいところを見せてしまうかもしれません…それで

もよいと言うのなら、どうぞ見学に来てください。」
会場全体がうおお!と興奮の波に包まれる。
守護者とは違い、普段あまり至高の御方と接する機会の少ないメイドや、その他の従者たちは自分の仕えるべき主の勇姿を見る事が出来るビッグチャンスの到来に、沸き立たずにはいられなかった。
「ではデミウルゴス、お前にはナザリックの防衛面に最小限の影響しか及ぼさぬようなプランを考え、実行することを命ずる。それが終わり次第、此方も模擬戦闘の準備を開始しよう。できるな?」
「はっ!不肖デミウルゴス、持てる力の全てをもって任務に当たらせていただきます。」
「うむ。それと、アウラとマーレ。二人は円形闘技場を使えるように準備をしておいてくれ。」
「はいっ!畏まりました」
「よし、頼んだぞ。では皆の者よ、祝賀会の閉会時間まで、もう暫しの間存分に楽しむがよい。」

狭い階段を上る三つの影を、通路脇に設置されたフットライトが淡く照らす。
「成程、話を聞く限りでは私も乗り気だったようですね。」
「えぇ。でも、やはり模擬戦闘を公にしたのは止めておくべきだった…祝賀会の雰囲気にのまれて、冷静な判断を欠いた自分が恨めしくて仕方がありません。」
階段を上りながらも、二人は全く息を切らすことなく会話を続ける。
「アインズさん、それは違います。後悔とは、先に悔やむ事が出来ないから後悔なのです。少なくとも、その時のアインズさんの中ではそれが最善の判断だった筈です。それに私も同意したのですから、もし罪があると言うのなら私も同罪です。」

「…はい。」
骨であるがゆえに顔に感情を表すことは出来ないが、それ以上に彼の纏う雰囲気から悔しさがひしひしと伝わってくる。
沈黙が場を支配する。誰一人として口を開くことなく、ただ階段を上る。
ようやく出口である地上の光が見えて来た。
地上へ出ると、そこは建物の中だった。しかし一目で一般的な建物ではないことが分かる。
そこは教会だった。
バロック調の荘厳な建築様式の教会は静寂に包まれており、訪れた誰もが息を飲む美しい輝きを放っていた。。
この教会の名は《薔薇(ローゼン・チャペル)の教会》。
ローザリアがかつて仲間たちと共に長い月日を経て作り上げたものだ。そのメンバーの中にはもちろんアインズも含まれている。
名の由来は、文字通り薔薇の花弁が教会のいたるところに散りばめられていることからだ。また外では絡みつく蛇のように薔薇の蔓が教会を覆い、年中色とりどりの薔薇を咲かせているところからも来ている。室内を歩けばそれに合わせて花弁が空中に舞い上がり、幻想的な景色を作り出す。そして花弁から薫るほのかな薔薇の香りが落ち着いた雰囲気と合わせてとてもリラックスのできる空間を生み出している。
そんな教会の最奥に位置する聖堂に置かれた十字架像の下から自分達は出てきたようだ。
「そういえば、ナザリックに来てからここにはまだ訪れていませんでしたね。またこうしてこの教会を見る事が出来るなんて、夢を見ているみたいです。…ただ、少し残念な形となってしまいましたが…。」
「ローザリア様…」
今となっては少女の姿になってしまったその幼い横顔に、やるせなさと悲しみのこもった表情を浮かべる。
だがそれも瞬き一つするころには、いつもより幾分か引き締まった

顔があった。
「ではアインズさん。続きをお願いします。」
「わかりました。ではまた歩きながら…」
そうして三人は再び歩き出す。
ひらひらと舞い上がり落ちてくる花弁は、流せない涙を体現している様に思えた。

悲劇：前触れ

第六階層の中央に存在する円形闘技場（アンフィテアトルム）は、かつてない程の熱気に包まれていた。

ナザリックに居るほぼ全ての住民が集まっており、観客席は蟻の入る隙間もない程に埋め尽くされている。

まるでお祭り騒ぎだ。

「うわ～、みんなすごい盛り上がってるね。」

「そういうお姉ちゃんも、さっきから落ち着きがないよ。」

「だってしょうがないじゃん！模擬戦闘とは言え、ローザリア様が戦う様子が見れるんだよっ!?ワクワクしないほうがおかしいよ!!」

「えぇー…そうかなぁ…？」

闘技場全体を見下ろせる高い位置にあり完全な部屋となっているこの観客席は、所謂ＶＩＰ席と言われている。

本来ならばここは至高の４１人が座し、侵入者を生贄とした娯楽試合を観戦する場所なのだが、今はたった二人を除き身を隠してしまったため、代わりに守護者達の普段の優秀な働きからその褒美としてこのＶＩＰ席での観戦を許されたのだ。セバスを筆頭に、プレアデスも招かれている。

「マーレは楽しみではないんかぇ？」

至高の御方の勇姿を拝めると言うのはそれだけで光栄なことであり、同時に仕える僕としてこれ程胸が熱くなるものは無い。

だがどうしたことだろう、その僕であるマーレはあまり乗り気ではない。シャルティアがそんな彼に怪訝な表情を向けるのは当然だろう。

「別に楽しみではないわけじゃないよ？でも、その…ローザリア様ってすっごく奇麗でしょ？」

何故そんな当たり前の事を聞いてきたのか不審に思いながらも、火を見るよりも明らかな事実に二人は真顔で頷く。

「うん…だから戦う姿が想像できないっていうか、あまり血なまぐさい姿を見たくないなーって…。」

マーレの言い分に「あー…」と納得した様なしてない様な曖昧な返事が返ってくる。
「でも、確かにローザリア様がどんな戦いをするのかアタシ知らないかも。」
「そう言えば…あちきも知りんせんぇ。」
「おや、なかなか興味深いお話をしていますね。」
唸る少女たちの輪にやってきたのは、インテリチックな眼鏡をキラリと光らせるデミウルゴスだ。
「あら、その言い分だとデミウルゴスはローザリア様がどんな戦い方をするか知っているでありんすよねぇ？」
シャルティアはニヤリと、しかし僅かな期待のこもった一瞥をデミウルゴスに向ける。
「いえ、知りません。」
潔い彼の即答に三人は思わずずっこける。
「えぇい！紛らわしいでありんす!!」
「あら、勝手に勘違いをしたのはそちらでしょう？デミウルゴスは一言も知っているなんて言っていないわ。これだから教育のなってない脳みそ筋肉のバカは嫌なのよ。」
「あぁん!?」
新たに会話に加わったかと思えば、即効でシャルティアと火花を散らせるアルベド。
美女が決してしてはならない鬼の形相でお互い睨み合いながら暴言の限りを尽くすこのやり取りは、もはや恒例の漫才だ。そんな彼女たちの騒ぎを聞きつけ、続々と階層守護者達が集まってくるも、誰も止めようとはしない。夫婦ではないにしろ、痴話喧嘩は犬も食わないと言ったところか。
「ハンッ!!アインズ様のことになったらすーぐに女の顔しちゃうどこかの淫乱メスゴリラよりはましよっ!!」
「なんですってぇ…っ!!!」
いよいよ何かの拍子に取っ組み合いになりかねない一触即発の状況に、周りが「そろそろ止めようか」といった雰囲気で身構える。

「はいはい二人ともいい加減にして。論点がずれてるよ、もう。」
と思ったが、結局いつも通り女三人のまとめ役であるアウラが仲裁に入った。
「まったく、今話してるのはローザリア様の戦闘方法でしょ？いつの間にアインズ様の話になったのよ…。で、他に誰か知ってる人はいないの？」
やれやれと言った様子で脱線しかけていた話の本筋を戻したアウラだったが、結局分からずじまいなので、周囲へと問いかける。
周りが「うーん…」と唸る中、ガシャガシャと重そうな音を立てながら一人のメイドが前に出た。
「私…一回だけ…ローザリア様と…一緒に戦ったことがある。」
この会話が始まって以来の有力な情報を提供した発言者へと、全員が驚愕の表情を浮かべながら一斉に目を向けた先に居たのは、戦闘メイド集団《六連星（プレアデス）》の一人、ＣＺ２１２８・Δ（通称：シズ）だった。
「そ、それは本当なのシズ？」
すぐそばに居たプレアデスの副リーダーであり長女的存在の、ユリ・αがシズに真意を確かめる。
「うん…本当。」
「はえー、いつの間にそんな羨ましいことしてたっすかシズぅ～。」
うりうりと妹の柔らかそうなほっぺたを指でこねくり回すのは、アウラとマーレに続く褐色肌の持ち主ルプスレギナ・βだ。
「その時の事ぉ…詳しく教えて欲しいぃ。」
脳が甘くとろける様なゆっくりとした喋り方で当時の詳細を求めるのは、着物をモチーフとした和風テイストのメイド服を着たエントマ・ヴァシリッサ・ζだ。
「ね、ねぇふぁん（姉さん）…やめふぇ（やめて）……ふぅ…私…喋るの下手だから…きっとこれからやる模擬戦闘を…見た方が早い。」
確かに、彼女はその種族も相まって普段あまり喋ることが無く、表情も滅多に変えることはない。それを一番よく知っている彼女たちプレアデスは、少し残念そうな顔をしながらもそれ以上深く言及するのは止めた。

「でも…一つだけ言えることがある…。」
ぽつりと呟くように、しかしはっきりと聞こえる様に彼女は言った。
全員がそのあとに続くであろう言葉を聞き漏らさないよう集中する。
「…あの人は…怖いくらい…とても〝精確〟。」
彼女は自身が体験した記憶を思い出し、震える両肘を抱えてさする。
〝精確〟とは、精密で正確であることを表す。普通ならばこんな何の変哲もない言葉で人を怖がらせることなど不可能だ。
だがその場にいた全員が背筋に冷たいものを感じた。自分たちの崇めるローザリアという人物はその〝精確〟というただ一点だけで、滅多に左右されない彼女の感情に〝恐怖〟をもたらせたのだ。
一体どれほどの経験をしたらそんな事が言えるのか、想像できる者は誰一人としていなかった。
「…。」
しばらくの間、誰も口を開けなかった。
「…ナレバ、己ノ目デ見テ確カメルトシヨウ。」
沈黙を最初に破ったのはコキュートスだ。
短くも的を得た彼の一言で全員は納得し、各々が思い思いの席へと戻り模擬戦闘の開始を待った。

一方そのころ、闘技場入場口では今回の主役であるローザリアと開催主であるアインズが最後の打ち合わせをしていた。
「しかし凄い人の数ですね…もしかしたら祝賀会の時より多いかもしれません。」
「みんなローザリアさんのかっこいいところを見たいんですよ。」
「もうっ！そうやって無駄にハードルを上げないでください!!」
「ははは、すみません。」
衰えない会場の盛り上がりを入場口付近で一身に受けるローザリアは、期待という未だかつて感じたことのない大きなプレッシャーに

平常心を保てないでいた。
「全く、アインズさんが羨ましいです。もっとまともに精神操作無効化スキルが発動していれば、こんなにドキドキしなくて済むのに。」
　わざとらしく不貞腐れた表情をするローザリアだが、美しい彼女が可愛くなるだけだ。
「それも含めた、今回の荒療治ですから。僕の予想が正しければ、終わるころには無事に完全な同期が完了している筈です。ただ、そのためにはいろいろなスキルを積極的に発動してみてください。今のところ分かっているのは、種族スキルを開放したときだけですから。今回は武器もありますし、職業スキルなんかも試してみるといいかもしれませんね。」
「わかりました、やってみます。」
　まじめな会話をしている間に、気の抜ける子供っぽい声が割り込んでくる。
「やっとマーシーちゃんのカッコカワイイセクスィーナイスボディーを皆に見せる事が出来るんだね！いやーダイエットしといてよかったよ～」
「はぁ…貴女のどこにそんな要素があるんですか、全く…」
　どこで育て方を間違えてしまったのかとローザリアは頭を抱えそうになるが、彼女の訳の分からない言動のお陰で先程まで感じていたプレッシャーが薄くなっていたことに気付く。
（もしかしたら彼女なりの気遣いだったのかもしれませんね…）
　心の中でマーシーに感謝する。だが決して口には出さない。なぜなら、確実に調子に乗るだろうことが手に取るようにわかるからだ。
「さて、そろそろ時間です。準備はいいですか？」
　微笑ましそうに二人のやり取りを見ていたアインズが頃合いをみて入場を促す。
「ええ、いつでも。」
「マーシーちゃんもだいじょーぶ！」
　余裕を取り戻したローザリアの瞳には、いつも通りの母の様に優しい輝きが宿っていた。

それを確認したアインズは満足そうに「行ってらっしゃい」と告げ、入場口の鉄柵を上げた。
入場口が解放されたことで闘技場内のボルテージは一気に急上昇し、留まることを知らない。観客の視線が全てその一点に向けられる。
「行ってきます。」
そう短く返事を返し、ローザリアはいつの間にか出現させたカタパルトの滑走路に両足を固定する。
「固定よし。次、スキル発動〈エナジー・ウィング〉。」
ローザリアがスキルを発動すると、彼女の背部に幾何学的な亀裂が入りその中からいくつかのビットが射出され、それぞれが所定の位置で空中にとどまる。
「配置完了。ウィング、展開。」
彼女の言葉と同時にビットから高出力のエネルギーフィールドが発生し、大きな光の翼を形成した。
スキル〈エナジー・ウィング〉は、所謂魔法の〈飛行(フライ)〉と同等の効果を使用者にもたらし、更に飛行速度、旋回性、瞬発性といった飛行能力を飛躍的に高めることのできるものだ。但し燃費があまりよくなく、発動中はじりじりと魔力を消費してしまうデメリットがある。
何故彼女がわざわざそんなものを使用したのかと言えば、ただ単にかっこつけたかったからだ。だって普通に歩いて入場してくるよりも、派手に飛び回った方がかっこいいでしょう？
「展開完了。背部、脚部スラスター正常駆動確認、出力上昇。」
普段閉じて服や皮膚と同化しているスリットを展開し、ゴォ!!という爆音と共に内部から高温の熱風が吹き荒れる。そのため彼女の修道服は、強風に煽られた旗の様にバタバタと耳障りな音を立てる。
しかし衣服が乱れるのも構わず、膝を曲げ体を前に倒し前傾姿勢をとる。
「発進準備完了。カウントダウン開始。5…4…3…2…1…ローザリア、出撃します!!」
叫ぶと同時にスラスターを最大出力で噴射させる。爆風を受けた

カタパルトは大きく軋みガタガタと揺れるが、構わずローザリアは速度を上げ、一瞬でトップスピードに達したところで火花を散らす両足のロックを外しその勢いのまま外へと飛び上がった。
（相変わらず、女性にしては男心をくすぐる演出をわかってるなぁ…。さて、僕も上に戻るとしようかな。）

待ち焦がれた彼女の派手な登場に、観客席は大いに盛り上がりを見せた。
きっと高速で飛び回る彼女は、大きな翼とそこから発せられる眩い輝きでとても神々しく映ったことだろう。
ひとしきり観客を沸かせた後、ローザリアは闘技場中央に置かれた悪魔を模した小さな像の手前へとゆっくりと降り立った。出しっぱなしにしていると、魔力をただ浪費するだけなので、さっさと〈エナジー・ウィング〉は格納する。
（バッチリ決まりましたね。）
（ええ、皆さん喜んでくれたみたいで良かったです。）
恐らく、もうすでにＶＩＰ席へと戻ったアインズとメッセージで言葉を交わす。
（これから僕が開会式をするんで、ローザリアさんはその間に諸々の準備をしちゃってください。）
（わかりました。）
メッセージの終了と共にアインズの声が闘技場内に響き渡る。同時に、一瞬で先程までの喧騒が嘘のように静かになった。
「今日は皆忙しい中出向いてくれてありがとう！今日はナザリックの・・・・」
アインズの演説が始まったことを確認したローザリアは、自分の事に集中する。
（しかし、よくもまぁあんな風にスラスラと言葉が出てきますね。やっぱりこう、上位者としてのキャリアの差なのかしら…？尊敬します。）
そんなことを考えつつ、首から掛けているロザリオの十字架部分を

数珠から取り外す。
「いよいよマーシーちゃんの出番だね！」
「そうね、今回は貴女の力をどれだけ引き出せるかが重要だわ。」
「おぉっ!!いつになくご主人様が乗り気だぁ！これは張り切らないとね～。」
　掌の上で、十字架がストレッチでもしているかのように体を伸び縮みさせる。
「マーシー。こちらの世界に来てから早速で悪いけれど、最初から飛ばしていくわよ。」
「おぉ～？と言う事は、〈単身突撃〉を〈クアドラプルモード〉でオラオラですか？」
「ちょっと言葉が足りないけれど、まぁそんなところね。」
　二人の間でしか通じ合わない会話で模擬戦闘をどのように進めるか、短い打ち合わせが行われる。
「初期形態と弾種はどうしましょう？」
「とりあえず大口径拳銃（いつもの）でいいわ、慣れてきたら色々変えていくつもりよ。弾も通常弾で構わないわ。」
「ラジャー！後はー…そうだ！照準補助はいりますか？」
「うーん、そうね…最初はいらないわ。もし駄目そうなら、その時は頼むわね。」
「アイ・マム!!お、丁度アインズ様の演説も終わりそうですよ。」
　意識をアインズの方へと戻すと、マーシーの言う通り演説は締めの部分に入っていた。
「――――さぁ、勇猛果敢なる悪魔に挑みし剣闘士よ。己の備えが万事完了したならば片手を挙げて示すがよい。」
　アインズに指示された通り、右手をゆっくりと上げる。
「よし。では戦闘、始めっ!!」
　アインズの力強い開始の合図で、悪魔像の目が赤く光り起動する。
　起動した悪魔像を中心として暗い影が闘技場の地面一帯を覆いつくし、そこから這い出てくるようにして数えきれないほどの多種多様な悪魔が表れた。

小型の悪魔から巨大で大柄な悪魔、犬や蝙蝠と言った動物を彷彿とさせる悪魔がいれば、生き物と形容してよいか分からない程気持ちの悪い見た目の悪魔まで様々だ。
このアイテムは一定数の悪魔が倒されるまで永遠と悪魔を生み出し続ける代物であり、『悪』と言う言葉にこだわり続けた一人の男が、世界中を覆いつくすほどの悪魔を無限に召喚できるワールドアイテムに魅せられて同じものを作ろうとした時にできた試作品でもある。
生み出された悪魔たちはギラつく瞳で標的であるローザリアを嬲るように睨みつける。そこに理性や知性などは感じられない。あるのは決して潤わない喉の渇きをただ満たしたいと言う本能だけだ。
グアアァ！と身の毛もよだつような恐ろしい叫び声を上げながら、ローザリアの血肉を食らわんと我先に悪魔たちが突撃して来る。その勢いは凄まじく、人間であるならぶつかっただけで挽肉になってしまうだろう。
しかし、ローザリアはそれを避けるでもなく平然とただ待ち構えている。
「ちょ、ちょっとマーシー！早く武器へ展開しませんかっ!!」
…いや、どうやら待ち構えているのではなく、武器を出せずに四苦八苦している様だ。
「入力サレタ音声キーガ違イマス。」
「もうっさっきからそればっかり!!」
ローザリアはグイグイと無理やり武器への変形を促すが、マーシーはびくともしない。
「ほらほら～、もっとカッコイイ決め台詞があるでしょ～？早くしないと圧し潰されちゃいますよぉ？」
「くっ!!」
見ればもうそこまで悪魔の群れが迫ってきている。別に彼らの突進を食らったからと言って、かすり傷一つ負わないことは分かり切っているが、それでは至高の御方と呼ばれる者にとってあまりに格好悪すぎる。
観客席では、いつまでたっても動きを見せないローザリアに不安の

声が上がり始め、どよめき立つ。傍から見れば、数百数千の敵にあっという間に囲まれてしまったようにしか見えない。黒く悍ましい無数の悪魔が、一人の聖女に襲い掛かる様は思わず目を瞑りたくなる光景だ。

余りの悲惨な光景で観客席の一人が悲鳴を上げそうになった時、天を貫く一筋の眩い閃光が迸る。

『聖なる十字架に秘めし内なる撃鉄を呼び起こせっ!!慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）!!!』

「――タキタキタキタキタキタァーーーー!!!」

それは天高くほうり投げられた慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）が、封印されていた爆発的な魔力を開放した光だった。

慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）を武器へと展開したことで生まれた衝撃は、半径１０メートル以内の悪魔を全て消失させ、またその余波で周りを取り囲んでいた悪魔たちは遥か後方へと吹っ飛ばされ、闘技場を囲む高い壁へと激突し、耐久力の低かった悪魔は壁に激突した衝撃でその体を破裂させていた。

（恨みますよ…ヘロヘロさん…っ!!）

慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）を武器として展開するためには音声認証キー、平たく言えば合言葉が必要なのだが、これは開発に携わったヘロヘロ氏が悪戯で仕込んだものだ。

但し、その合言葉はいかにも厨二病を患った少年がノートに筆記体の英訳付きで綴っていそうな非常にこっぱずかしいものであり、今回無事に正しい音声認証キーを入力し終えたローザリアの顔は今にも火が吹き出そうなほど真っ赤だった。

（あぁ…これから皆さんとどんな顔をして会えばよいかわかりません／／／／。）

赤面するローザリアとは裏腹に、空中でくるくると回りながらハイテンション極まるマーシーは銃形態へとようやく変形を始める。

「はいはーい、ちゅうもーく!!ここからはマーシーちゃんの生着替え大サービスショットの時間だよ～。みんなー!カメラの準備はいいかなぁ？」

一体誰に向けて発言しているのか分からないが、今の彼女はなんだか（物理的にも）とても輝いている気がする。
「じゃぁまずは、ちょっと大きくなりまーす!!」
おや？なぜだろう。背景がパステルカラーになり、まるで魔法少女が変身するときに流れるようなＢＧＭが聞こえてくるぞ…。
「それからそれから、縦方向に半分に割りまーす！あっ、私の恥ずかしいところそんなに見つめちゃイヤンッ／／／」
様々な方向からカメラカットが入り、余すことなく魅力的な慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）の変身シーンが撮影される。
「そしてそして、山折りしまーす！そうするとー、あらあら不思議！拳銃っぽく見えなーい？…見えるでしょ？見えるよねぇ？」
そう言われてみれば見えなくも無いような気がする（ゴリ押し）。だがそれだけではあまりかっこよくないので、マーシーちゃんの説明からあぶれた箇所もしっかりと手が加えられ、銃口部分に赤い魔法陣などが浮かぶようになったころには白と金が織りなす美しい拳銃の姿へと変わっていた。
「変身完了であります!!」
誇らしげに報告するマーシーは十字架の頃とは違い、とんだり跳ねたりしなくなったものの、喋るたびに中央部に露出したコア・ジェネレータが赤くチカチカと光る。
ローザリアの手の中にぴったり納まると、ローザリアの裾から伸びて来た魔力ケーブルが銃床と繋がれる。この魔力ケーブルによりローザリアから直接慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）に魔力が供給され、リロードを挟むことなく半永久的に撃ち続けることが可能となるのだ。
「んあぁ…快♡感／／／／」
「ふざけてないで、もう少し真面目にやれないのですか？」
「はーい、真面目モード入りまーす！ピーガガガ…ユーザー認証、至高の御方ローザリア様、使用許諾確認。適正ユーザーです。システム、執行モード。慎重に照準を定め、対象を排除してください。」
「…また変なアニメに影響されましたね？」
「変なとは失礼な!!アニメは保護されるべき過去の偉大な文化ですよ

!!」
「はいはい…。さぁ、そろそろ来ますよ。」
前方へと目を見やると、先ほど吹き飛ばした悪魔たちが起き上がり、また消失した分を上回る数を新たに加えて再びローザリアへと突撃して来る。
ローザリアの目つきが真剣なものへと変わる。
捕食対象の雰囲気が明らかに変わったのを本能で敏感に感じ取る悪魔だったが、他に襲い掛かる術を持たない悪魔たちは、足を止めることなく更に走る速度を加速させた。
「1(ウーノ)。」
猛烈な勢いで肉薄して来る悪魔に全くひるむことなく、両手でしっかりと固定したマーシーを握り締め、ただ一点のみを狙い、撃つ。
――バンッ！
射撃音と同時に銃口から赤い薔薇の花弁が舞う。花弁は地面に落ちると同時に消えてなくなった。これはアインズの持つスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンに組み込まれているエフェクトデータ「禍々しいオーラ」と同類のもので、慈悲の十字架(ザ・クロス・オブ・マーシー)の場合は発砲するたびに花弁が舞うように設定した「舞い散る花弁」というエフェクトデータが組み込まれているからだ。
見事に射線上にいた悪魔の脳天に撃ち放った魔力弾をヒットさせ、首から上を失った悪魔は力なく膝から崩れ落ちた。
それからは最初の一体を皮切りに、射撃速度を速めて次々と迫りくる悪魔たちの脳天を正確に貫き一撃で沈めるローザリアだったが、やはり拳銃一丁では分が悪いのか徐々に押され始める。
悪魔たちは好機が見えて来たのをいいことに、薄気味の悪い笑い声をあげ、ローザリアを煽る。だが彼女は一切動じずに、ただただ自分から一番近い位置にいる悪魔を倒すことに専念している。
「だ、大丈夫かなローザリア様…なんだか押されてるみたい…」
自分が戦っているわけでもないのにビクビクと体を震わせるマーレは隣にいる姉へと救いを求めるような目で話しかける。
「大丈夫に決まってるでしょバカマーレ！相手は６０レベルも無いよ

うな雑魚ばっかりよ？ローザリア様がそんなの相手に負ける筈がないわ!!」
　観戦を邪魔されたためか、プリプリと半分怒りながらさっさとアウラはマーレをあしらう。
　一方あしらわれたマーレは未だ不安そうにしている。
「安心しなさいマーレ。」
　マーレの頭の上に優しく手が置かれ、泣く子をあやす様に撫でられる。
「アインズ様…。」
「アウラの言う通り、ローザリアさんはあの程度の相手ならば負けることは無い。それに一ついいことを教えよう。」
　アインズの言った「いい事」と言う言葉に、マーレは不思議そうな顔を浮かべる。
「いいかい？今のローザリアさんは本来の力の1割も出していないんだよ。」
「!!」
　信じられない射撃速度に加え、的確に相手を一撃で葬り去るなどハッキリ言って常人のなせる業ではない。しかし、これに加えまだ彼女は9割も力を残している事実を伝えられたマーレは唖然とするしかなかった。
「だからよく見ておくといい。彼女が隠している力の一端をね。」
　一方で、いよいよ数の暴力に追い詰められてきたローザリアは旗色の悪い状況に渋い表情を浮かべている。
（全盛期なら、これ一本でもっとやれてたと思うのですが、やはりブランクが長かったせいで思ったようにはいきませんね。）
「そろそろ力を抑えたまま戦うのはキツイんじゃないですか～？」
　心を見透かされたようにマーシーが図星を突いてくる。
「っく…ええそうね。軽い準備運動ぐらいのつもりでいたけれど、これはそろそろ潮時かしらね…」
　マーシーと会話をしたことで若干の隙が生まれ、それを見逃さなかった悪魔はすかさずその隙を突き、彼女の背後へと回り鋭い爪を振

りかざす。その軌道は直撃コースであり、正面を向いている彼女が振り向いて撃つ頃には既に間に合わない。
悪魔は顔が歪むほど笑みを浮かべた。勝利の笑みを。
しかし、あぁ…可哀想に。
相手がどれほどの強者かも知らず、ただ己の爪を振りかざせば相手が肉塊になると信じて疑わない浅はかで哀れな悪魔に、鋼鉄の聖女から裁きの鉄槌が下される。
「一丁だけで戦うのは。」
次の瞬間、パァンッ！という風船が破裂したような音と共に後ろに居た筈の悪魔の頭が無くなっていた。
間近で悪魔の頭が破裂するのを受けたローザリアは、その修道服を飛び散った悪魔の血でべっとりと汚す。
一体何が起きたのか、あまりの一瞬の出来事に観客席が色めき立つ。
よく見ると背後に居た悪魔に向けて片手が伸び、その手には慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）が握られている。おそらく目にも止まらぬ速さで持ち替えて撃ったのだろう。しかしその速度と、顔もむけずに背後に立った悪魔を倒すとは、やはり尋常ならざる力を持つものにしかできない荒業だ。
あれ？違う、そうじゃない…
持ち替えたであろうはずの手にも慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）が握られている…!!
「2（デュオ）。」
簡単なことだ。一丁で対応できない、ならば〝増やせばいい〟と。
そう、彼女は誰に気付かれるでもなくいつの間にか二丁拳銃となっていたのだ。
その事実に気付いた瞬間、観客席から一斉に大きな声援が上がった。
「ナ、ナニガ起キタノダ…」
「一体いつの間に増えたのでしょうか…全く見えませんでした。」
一時も目を離さず見ていた守護者達も、今さっき起きた出来事が把

握できず狼狽えている。
　そんな彼らを見てアインズはまるで自分の事の様に嬉しくなり破顔する。
「ははは！そう、あれが彼女の持つ慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）の凄いところなのだ！あの武器は彼女の意思で自由自在に数を瞬時に増やしたり減らしたり出来るのだよ。」
「そのような非現実的な事を可能にするとは…流石至高なる御方自らが創造された神器級アイテムでございます。」
　デミウルゴスは普段薄く閉じている瞳をカッと開き、アインズとローザリア二人に対して深い敬意を見せた。
（素晴らしい！やはり、ローザリア様もアインズ様と等しく肩を並べるに相応しいお方だった!!いや、そもそも優劣をつけようとすることが間違いだったのだ！なんと自分は愚かで浅ましいのか。本当ならば守護者として余りにも愚劣極まるこの失態、死をもってしても償いきれぬものだが、全てをその慈愛で包み込むローザリア様は自害を禁止なされた…。なればこの己の恥辱を一生背負うことで戒めとしよう。あぁ…それにしてもなんと美しいのだろうか。普段からは想像もつかない荒々しさを感じさせる戦闘に、あのお美しいお顔を汚す飛び散った赤い血潮の背徳的コントラスト…堪らないっ!!）
　一人悶える男を尻目に、アインズは意気揚々と続ける。
「今日は皆を前にした彼女の晴れ舞台だ。きっと最大数まで出してくれるだろうよ。」
　手は二本しかないと言うのにあれ以上数を増やすとは、いったい何が起きるのか。守護者達は生唾を飲みながらその真相を探るべく、再びローザリアへと視線を釘付けにした。
　二丁拳銃となった彼女は形勢を逆転させていた。一丁の時とは比べ物にならない速さで彼女を取り囲む悪魔たちを倒していく。二丁になったからと言ってその精度は落ちることなく正確に頭を撃ち抜き、円を描くように狙いを定めるその姿はさながらダンスを踊っているように見えた。二つの銃口から放たれる無数の花弁が
（このまま終わってしまうのもつまらないですね。）

一丁では補いきれない部分が補われことで悪魔を倒すことに余裕が生まれ、この状態が続くと普通に倒しきってしまう事を危惧した彼女はあえて射撃を緩め、自分の近くへと悪魔を招き入れ始める。
どうやら悪魔たちは彼女の射撃の手が緩んだことを疲労によるものと捉えたらしく、ここぞとばかりに彼女の術中にはまってくれる。
（そう、いい子ね。もっといらっしゃい。）
わざと両手を広げ、完全に真正面がガラ空きの状態を作り出したローザリアは、走ってくる子供を迎え入れる様に目の前を猛然と駆けてくる牛頭の悪魔を待ち受ける。
それを好機と見た牛頭の悪魔は、頭に生える太い角で突き刺してやろうと頭を低い位置へと下げ鼻息荒く突進する。
彼女の目の前まで迫った時
「わざわざ首（こうべ）を垂れるなんて、いい子ね。」
と言う彼女の言葉を聞いた後、頭に凄まじい衝撃を受けた事だけを覚え死んでいった。
彼女は頭突きを食らう寸手で突進力を無かったことにするほどの踵落としを食らわせ、その踏みつぶした脳天に踵へ装着した慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）を撃ち放ったのだった。
「3（トレース）。」
よく見ると、片足の踵に装着されている慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）は両手に持っている物に比べ長く太い。魔法陣の色も両手が赤であるのに対し、こちらは黒色だ。
「〈形態変化（モードチェンジ）〉も問題なさそうね。」
「はい。やっぱゼロ距離は〝オニキス〟が輝きますね！あ、もう片方はどうします？」
「そうね、いい加減頭ばかり狙うのも飽きてきましたし、派手に〝エメラルド〟で行きましょう。」
「うっきゃーー！楽しくなってきたーーー!!」
先ほどから彼女たちが口にする宝石の名前は、慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）に登録されている銃の種類を表している。
ローザリアが最初に言ったスキル〈形態変化（モードチェンジ）〉を発

動させることでマーシーの姿を変える事ができ、両手に装備している赤い状態が〈ルビー・ローゼス（大口径拳銃）〉、右足の踵に装着しているのは〈オニキス・ローゼス（散弾銃）〉、〝派手に〟と表現されたエメラルドは〈エメラルド・ローゼス（ロケットランチャー）〉。他にも〈サファイア・ローゼス（狙撃銃）〉や〈アメジスト・ローゼス（重機関銃）〉、〈トパーズ・ローゼス（ビット）〉があり、いずれも彼女の任意のタイミングで変形させることが可能だ。

新たに左足の踵へと出現した慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）はその姿をどんどんと変形させ、明らかに足に装着するにしても不釣り合いなほどの大きさになった。しかしローザリアは重たそうな顔一つせず足をブンブンと振り回し、使用感を確かめる。

「４（クァットゥオル）。やっぱり他と比べて大きいからちょっと取り回し辛いわね。」

四肢全てに銃を装備するという異様な彼女の姿こそ、慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）の力をフルに発現させた真の姿のなのだ。合計四門から発射される無尽蔵の弾丸は圧倒的な火力をもって数多の対象を撃ち、貫き、穿つ。これが彼女の最も得意とする戦術〈単身突撃〉の全貌だ。

「ご主人様！二時の方向より距離５０メートルの位置に悪魔が多数出現！接近中であります!!」

「あら、丁度いいわね。まとめて倒してしまいましょう。」

「アイ・マム！」

ローザリアはエメラルド形態のマーシーをあえて敵の集団へと向けず、地に足をつけたままロケット弾を発射した。そうなればもちろんロケット弾が向かう先は地面であり、とてつもない爆風と衝撃波がローザリアを包み込む。しかし彼女はそれを逆手に取り、爆風の反動で大きく跳躍すると四つ全ての慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）をエメラルド形態へと変形させ、下で蠢く悪魔たちへと向ける。

「〈弾種変化（バレット・チェンジ）：マルチミサイル〉！」

「アイ・マム！」

ローザリアの掛け声と共にそれぞれ一つしかなかった砲門が、規則

的に並んだ数十の小さな砲門へと変化する。
「全ターゲット捕捉、照準誤差±０．５％で補正完了、いつでもいけるよご主人様！」
「よしっ！ミサイル、発射!!」
「正義の雨に☆裁かれよ!!」
　発射の合図を受け、数えきれない砲門から小型のミサイルが雨の様に悪魔たちの頭の上へと降り注ぐ。
　地獄絵図と化した闘技場は熱と爆風が支配し、それをモロに食らう悪魔たちは悲鳴を上げる事すら許されずにその身を灰へと変える。もうまともに動ける悪魔は存在していなかった。運よく免れたであろう悪魔もすぐさま発見され、無慈悲に頭を撃ち抜かれる。
　炎の中で揺らめく彼女の姿は、地獄の様な周りの景色とのミスマッチで逆に不気味に見える。
（あァ…楽しいなァ、たのしい、タノシイナァ…）
「ご主人様、もう少しです！段々と悪魔が湧くスピードが遅くなってきました!!あれ？…ローザリア様？」
　マーシーに話しかけられハッと我に返る。
「いえ、何でもないわ。両足をトパーズに変えて湧いた傍からオールレンジ攻撃で潰していくわよ。」
「アイ・マム！」
　両足から離れた慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）は十字架の形を模したビットになり彼女の周りをゆっくりと回りながら浮遊している。
（さっき私は何を考えていたの…？）
　闘技場を歩きながら、一瞬無意識状態に陥った時のことを思い返す。
（こんな殺戮が楽しいですって？なんてことを考えているの私は!!例え相手が悪魔であろうと命を授かった生き物なのですよ？それを楽しいなどと…言語道断です！神に仕える身としてあるまじき行為だわ!!）
　彼女は例えゲームの世界であろうと、現実世界の職業であるシスターの精神を忘れなかった。その精神は他人からしてみれば少し異

常であり、データでしかないレベル1の雑魚モンスターを倒すときでさえ、その倒したモンスターの死後に祝福が訪れることを本気で祈っていた。
だから今模擬戦闘で相手にしている悪魔にも自分の糧となってもらっていることに感謝をし、敬意をもって弔っている筈だった。
湧いてくる悪魔はビット形態のマーシーに相手をさせ、自分は立ち止まり自問自答を繰り返していると、何者かに足を掴まれた。
視線を落とした先に居たのは、腰から下を失った悪魔が最後の力を振り絞って襲い掛かってくるでもなく、まるで懇願するかのように救いを求めていた。
(なのに、それなのに私は…)
しかしローザリアは無言でその悪魔の眉間に銃口を突き付け、引き金を引く。
同時に背筋をゾクゾクとしたものが勢いよく駆け上がる。
(殺めることに快感を感じてしまっていると言うの…っ!?)
自覚すればするほど彼女の精神に逆らう様に体が殺戮を求め、手当たり次第に悪魔をねじ伏せていく。
(駄目!駄目よこんな、快楽を求める為だけに人を殺めるだなんて!!)
しかし引き金を引く指は冷えた鉄の様に固まり、離す事が出来ない。
そして悪魔を撃ち抜くたびに得られる逆らえない快楽の波に、だんだんと理性が支配され始める。
(あぁ、でも…たりない、足りない、タリナイ…。)
貪欲に悪魔をいや、ただ己の欲望を得る為だけに屠る対象を求めだしたローザリアの瞳が黒く濁る。
気がつけば闘技場内にいた全ての悪魔が狩り尽くされ、中央に置かれていた悪魔像にひびが入っている。つまり模擬戦闘の終了を表していた。
観客席から大きな祝福の歓声が上がる。
だがそれももう彼女には騒音にしか聞こえなかった。
(ウルサイな、五月蠅い、うるさい、ウルサイウルサイウルサイ…)

煩わしそうに声のするほうへと目線を上げる。
(もっと、もっとモットモットモット快楽ガ、欲シイ…)
目線の先にはスタンディングオベーションで拍手喝采を送るナザリックの仲間達だ。メイドや、異形のモンスター、守護者にアインズさんも見える…。
不意に、未だ握り締めている慈悲の十字架(ザ・クロス・オブ・マーシー)が目に入った。
「…アハ!アハハハハ!!アヒャヒャヒャヒャヒャ!!」
狂喜。
目は針金の様に細く垂れさがり、口は大きく横に裂け三日月の様な笑みが顔に張り付けられる。
「ご、ご主人様?何だか様子が…って、なにこれ!?なんかドス黒いものがご主人様から流れ込んでくるっ!あっあっ、や、らめぇぇ////」
マーシーに話しかけられたことで辛うじて意識を再び取り戻せたローザリアはその黒く濁った眼を見開いて驚愕する。
その瞳に映ったのは
――仲間を対象とした無数のロックオン表示だった。
(何よ、これ…!?何を考えているの!?それだけは駄目!絶対にダメよ・・・やめて、やめなさい・・・やめてぇっ!!)

――バキンッ
頭の中で何かが壊れる音がした。

「アァ…ナンダ、マダ沢山〝有ル〟ジャナイカ。」

ズル… ズル… ベチャ…

悲劇・暴走の始まり

『薔薇の教会（ローゼン・チャペル）』扉口前室

教会の入り口となる巨大な木造の扉の前にアインズ、アルベド、そして少女の体に意識を移したローザリアが佇む。

「ローザリアさん、この扉を開ければ間もなく外ですが、その…少し覚悟をしておいてください。恐らくローザリアさんにとっては酷な光景だと思うので…。」

きわめて力なくアインズは彼女に忠告する。

「…そんなにも外の状況は酷いのですか…？」

アインズは顔を向けずゆっくりと頷き肯定の意を示す。

「アルベド、扉を開けよ。」

「はっ、畏まりました。」

アルベドは前に進み出て重厚な扉のノブを握り、ゆっくりと手前に引いていく。見た目に反して扉は非常に滑らかに開き、木が擦り合わされて生じる軋むような不快な音は一切しなかった。

扉の隙間から眩い光が漏れてくる。

「――っ!!」

しかしその眩い光の先にあったものは晴天の青空などではなく、見渡す限り一面の焼け野原がそこには広がっていた。

アインズの忠告は聞いていたつもりだ。だがあまりの想像を絶する光景にローザリアは膝から力なく崩れ落ちる。

「そ…んな…これを…私が…？」

信じられなくて、信じたくなくて藁にも縋る思いでアインズに救いを求める。

しばらくの沈黙の後、先程と同じようにゆっくりと頷く。一つ違う点を挙げるならば、彼の視線はしっかりとローザリアの目を見つめていたということだ。それはまるで「これはお前がやったのだ」と言われたような気がした。

今すぐにでもこの凄惨な景色から両目を覆ってしまいたかった、しかしそれは自分の犯した罪から目を背けることとなる。

ギルドの中でも人一倍自然を愛したブルー・プラネット氏が環境汚染により現実世界では失われてしまった光景を熱い情熱をもって作り上げたのがこの第6階層だ。ローザリアも彼と等しく自然を愛する者の一人として彼の掲げる精神に大いに賛同し、第6階層の制作に携わった一人であった。

――――それを自らの手で破壊したのだ。

多くの時間を費やして作られた自然を愛する者達の理想郷を見る影もない姿へと変えてしまった罪深さにローザリアの精神は押しつぶされそうになる。そしてその自覚がないことが悔やんでも悔やみきれない。

しかし懺悔する間もなく重くのしかかっていた負の感情がフッと霧散する。

それはあまりにも突然すぎたため一瞬何が起こったのかとパニックになりかけたが、一つの記憶を思い出しすぐに冷静になる。

(そう…これが〈精神操作無効化スキル〉なのね…。)

だがそれでもじりじりと心の奥底で燻るように自責の念が余燼となって胸を焦がす。

「大丈夫ですか、ローザリアさん。」

打ちひしがれたローザリアを案じ、アインズが手を差し伸べてくる。

しかしローザリアは罪の意識から彼の好意を素直に受け止めきれず自力で立ち上がった。

「すみません、もう大丈夫です。アインズさんが仰っていた〈精神操作無効化スキル〉が正常に発動したようで、今は平常心です。」

「ということは…」

「はい。恐らくですが一度自我をマザーベースに保存し以前の機体とのネットワークを完全に遮断して、改めて新しい機体にアップロードし直すことででバグが取り除かれ、完全にこの世界とのつながりが確立しました。そのため以前の様な違和感はもう感じません。今では完全にこの機械の体が受け入れられて、今の自分こそが本当の自分だと言い切れます。」

アインズはほんの少しだけ、彼女の言葉の端に苛立ちの様なものを感じたがあえて触れる事でもないと判断し会話を続ける。
「それは良かった。では一応当初の目的は果たされたと言えますね。」
しかしこの一言がローザリアの逆鱗に触れてしまう。
「…こが…どこが…これのどこが良いと言えるのですか!!」
初めて見るローザリアの怒りにアインズは面食らう。かつてギルドで過ごしていた頃でもこんな激情を仲間に見せたことは一度も無かったからだ。
「確かに…確かにこの世界とのズレは解消されました！当初の目標も無事に達成されています！でも…でも！その代償としては余りにも失ったものが大きすぎるんです…!!!ギルドの皆が必死に作り上げたこの階層をこんなにも滅茶苦茶にして…そんなことをした記憶も無くて!!挙句の果てに手に入れたこのスキルのせいで後悔することも懺悔することもできなくて、これのどこが良かったなんて言えるんですかっ!!!」
ロザリィの大きな瞳が若草色と赤色の点滅を激しく繰り返している。〈精神操作無効化スキル〉が発動しているにもかかわらず彼女の怒りの感情が余りにも大きいため一回では収まらずに連続で発動しているようだ。
「こんなの…私は耐えられません!!…いっそ〈自爆〉でもして…」
「ローザリアさん!!」
アインズが強く割って入る。
完全に自責の渦に飲まれていたローザリアは突然大声で名前を呼ばれ、思わず肩をビクリと震わせる。
肩に優しく手を添えしっかりと彼女と目を合わせる。
「よく聞いて下さい、ローザリアさん。確かに第6階層を焦土にしたのは紛れもなくローザリアさんです。でもその中には暴走したローザリアさんを止めるために僕が放った魔法の流れ弾もたくさん含まれています。なによりローザリアさんを暴走させてしまったのは僕のせいなんです。これは全て僕の判断が間違ったせいで起きてしまったが故の結果なんです。ですからそんなに一人で抱え込もうと

しないでください。責めるべきはローザリアさん自身ではなくこの僕です。」
ローザリアの瞳の明滅が止まり、元の若草色に戻る。どうやら落ち着いてくれたようだ。
それから暫くしてローザリアがポツリポツリと呟き始める。
「そう…貴方が…全部アインズさんのせいなんですね…」
そう、それでいい。そのまま僕を責めてください。そうすれば僕も…
「それならやっぱり、アインズさんを責めることは出来ません。」
「えっ？」
予想していたこととは全く反対の答えが返ってきたため、アインズは思わず呆けてしまった。
「だってそうじゃないですか。私は私の意思でアインズさんの言うことに従ったんですよ？もし無理やりやらされていたのなら話は別ですが、私はアインズさんの仰ることに納得し自分で判断して最終的にアインズさんの言うことに賛成したんです。だったらアインズさんを私が責められるわけないじゃないですか。」
目に移るのは、先程までの怒りや悲しみに染まった負の感情がどこに行ってしまったのか聞きたくなる程彼女の顔には柔らかい笑顔が浮かんでいた。
そうか、貴女はそういう人だと言う事を忘れていました。少し前まで罵倒してくれればどんなに気が楽になるかと思っていた自分が恥ずかしい。
「ですから、あくまで私たちの間では同罪と言う事にしましょう。やった、やらせたを言っていたら多分いつまでも終わらないでしょうから、奇麗にきっちり半分こです。」
なんの屈託もない表情で言われてしまっては反論しようがない。ここは素直にローザリアさんの提案を受け入れることにしよう。
「それと、アルベド。」
「は、はい！」
今までのやり取りを黙って傍でずっと見守ってきたアルベドへと

急に話の矛先が向いたので、突然のことに戸惑いを隠せない。
「ごめんなさい。私が暴走していた時の記憶を全く覚えていないのだけれど、きっとたくさんの迷惑をかけたと思うわ。貴女だけじゃない、他の守護者達にも。アインズさんとはこうやって落としどころを見つけられたけど、貴方達は別。私を止めてくれた恩と、そして傷つけてしまった罰を私は貴方達へ償わなければいけない。」
先程のアインズの時とは違い、打って変わって真剣な表情でアルベドに深く謝罪する。
「いいえ！ローザリア様が我々にそのようなことをする必要は全くありません!!我々にとってローザリア様が無事にご帰還された事だけで至上の喜びなのです。」
これは本心だ。自分よりも立場が格段に上の者から謝罪、ましてや償いを受けるなど守護者の彼らにとってあってはならないことだと本気で思っている。
当然ローザリアにはこの返答が予想できていた。だから前もって考えていたことを述べる。
「いいえ、それでは駄目なのよアルベド。例え貴女が許してくれても、主がお許しになっても、この私自身が絶対に許せないの。だからアインズさんにはずるいと言われてしまうかもしれないけれど、私は自身に賠償を設けます。」
「それは…？」
「第一にこの森を私自身の手で復興します。自分で破壊したのなら、自分で治すのは当然の行いです。そして第二に、この森の復興が終わるまで、私はローザリアとしてではなく、ロザリィとして行動します。つまり、自分で言うのもなんですがナザリックの頂点に君臨するローザリアとしてではなく、アルベド達守護者と同等かそれ以下の存在として行動していきます。もちろんロザリィの中身が私だと言う事は秘匿してですが。」
「なっ!?」
二人そろって驚きの声を上げる。
話を聞く限りまだ第一の賠償は納得できたが二つ目が突拍子もな

さすぎる。
「そ、そのようなこと無茶ですローザリア様!!どうかお考え直しを…」
アルベドは何の脈略も無しにとんでもないことを言い出したローザリアに困惑し、アインズと言えば
「ず、ずるいぞローザリアさん!僕だってどうやってみんなに迷惑をかけた償いをしようか必死に考えていたのに!!」
なんともまあ情けない。
そんな二人の様子を見てどこか満足そうに、ローザリアはいたずらっ子の様にチロリと可愛く舌を出し、いたずらっ子のまねごとをする。
「だから、ごめんなさい。でもこれだけはどうしても譲れません。今の私に貴方達の上に立つ資格はないわ、だから自分が満足できるほど自分の事を許す事が出来たら改めてローザリアとしての立ち振る舞いをするわ。その時まで、元の体は封印しておきます。」
ローザリアの言葉に絶対の意思を感じた二人は、もう一切の口をはさめなかった。
しかしアインズは一つ重要なことに気付く。
「ローザリアさん。」
「はい、何でしょう?あ、言っておきますけど何を言われようと絶対に曲げませんからね!」
「それはもう口出しするつもりはありません。それよりも一つまだ重要なことをお伝えしていませんでした。」
アインズは一拍置いて衝撃の真実を告げる。

「貴女の元の体は、未だに暴走状態なんです。」

第六階層：闘技場

ドガンッ!!!

突如として耳をつんざく爆音と共に一部の観客席が黒い硝煙に包まれた。
爆発地点近くの観客席からは悲鳴が上がり、規律も統率も無い無様な逃走劇が繰り広げられる。
「何事だっ!!」
その様子はＶＩＰ席に居たアインズからも明瞭に確認でき、ナザリックの防御面が極限まで薄くなったところを狙われた〝外部からの敵襲を許す〟という最悪の事態が頭をよぎった。
周りにいる守護者達も不測の事態に顔を強張らせる。
だが、アインズが危惧したその考えはすぐに改められることになった。
なぜならば、アインズが考える外敵の襲撃を受けたであろう観客席は傷一つ無かったからだ。
しかしその代わりとして、爆発の起こった観客席近くの空中にガラスが割れた様な大きな亀裂が入っている。
観客席にはあらかじめ闘技スペースとの間にある壁から普段は視覚化されない高度の魔力障壁が一面に張られてある。これは万が一にも闘技者達からの流れ弾が飛んできても観客席側に被害が及ばない様にするための安全措置だ。
そして今、およそ並大抵の攻撃ではびくともしない筈の魔力障壁が先程の謎の爆発により大きく罅割れ、壁の形を保っているのが奇跡と言える状態になっている。もし次に何かしらの攻撃を受けたならその耐久限界を超え、音を立てて全てが崩れてしまうだろう。
現状を整理すると、一撃で魔力障壁が機能不全に追い込まれ、観客席側に被害が出ていないことから魔力障壁の内側（闘技場側）から攻撃がされたということになる。
ここまで要素が揃ったならば、思い当たる人物は一人しかいない。
アインズはその真実に困惑しながらも混乱を引き起こした者の名を叫んだ。
「ローザリアっ!?」

異形種（オーバーロード）となった鈴木悟の身体能力は人間の頃と比べると比較にならないほど向上しており、１００メートルは離れているような距離でもハッキリと視認対象の全容を見ることが出来る。

その優れた瞳に映ったローザリアの様子は明らかに――

おかしい。

「ヴヴヴ…ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ッ゛!!!」

到底女性の声とは思えない絶叫をあげる彼女は何かに抗おうとしているように見える。しかし抵抗が厳しくなったのか力なく体勢を崩し四つん這いになりながらも、頭を激しく地面に打ち付け、更には銀色の液体の様なものがその動きに合わせて周りにまき散らされていた。

仲間に向けて攻撃をしたという冗談にしても許せない行為に対しての怒りはすっかり鳴りを潜め、むしろ異常すぎる彼女の姿に無い筈のアインズの肝は冷え切っていた。

「なんだ…あれは…?」

全く事態が把握できないでいるアインズをよそにローザリアのうめき声に変化が生じる。

「ア゛ア゛…ア゛ア゛ア゛…ア゛ア゛ッ…ア゛ハ…ア゛ハハッ…ア゛ハハハ、ア゛ハハハハハハハッ!!!!!――――――――――――ッッッ!!!!!」

うめき声は聞くに堪えない高笑いへと変わり、最後はもはや生物の出す音ではない完全な機械音の絶叫が闘技場全体を震わせた。

紅く煌々と光る両眼に残光を迸らせ、慈悲の十字架然り、彼女の持つ全身に隠されたすべての砲門が赤く煌めき解放されたことが分かる。そこには「次こそは…」といった絶対の意思が感じられた。

「やめろ!ローザリア!何を考えているっ!!」

おおよそ彼女が何を仕出かそうとしているのか直感的に感じ取ったアインズは、ことが及ぶ前に魔法による瞬間移動で彼女に肉薄し普段余らせている強大な魔力を彼女の胴体めがけて打ち込んだ。

時間にして数秒も経たない速攻攻撃を受けたローザリアはその衝撃で闘技場中央から壁面まで吹き飛ばされ大きな砂煙を上げる。

この騒ぎにより一層闘技場内が混乱の嵐に包まれる。
アインズは彼女が沈黙している今のうちに通信(メッセージ)で守護者全員に指示を飛ばす。
『アウラ、マーレ！デミウルゴス！パンドラズ・アクター！プレアデス各員！お前たちはまだ観客席に残る者達を避難させよっ!!アルベド、コキュートス、シャルティア、セバスは私についてこい!!事態は急を要する、各員迅速に事に当たれ!!』
『『は、はっ!!』』
アインズのひっ迫した声音に守護者達からは僅かに動揺の色が見受けられるがそれも一瞬で、すぐさま指示された通りに行動を開始する。
命令により４人の守護者達が時を待たずしてアインズの背後に控える。
「アルベド、コキュートス、シャルティア、セバスの４名、御身の命により参上いたしました。あの、アインズ様…」
代表して守護者統括であるアルベドが推参の旨を伝える。そして次に出るのは当然ローザリアの異変についての質問だろう。だがアインズはその問いに答えられるほど現状を把握できていないし、むしろ誰かに教えてほしいくらいだ。だからそれ以上先を言われる前に割って入る。
「あぁ、すまないが今はお前たちの疑問に答えている暇はない。…というよりは察しろ。お前たちも感じている筈だ、この重くまとわりつくような禍々しい殺意を…。」
守護者達は一様にこくりと頷き、神妙な顔つきで額には冷や汗を浮かべている。
そう、未だ収まらない砂煙の向こうから冷たい殺気が亡者の如く地面を這いずり回り、生きているものを見つければ全身に絡みついてくるその不快感は吐き気を催す。
何故彼女がこうまでして殺意をまき散らしているのか皆目見当がつかないが、これを止めるのも悪化させるのも行動を起こさなければ始まらない。

覚悟を決めろ、俺。
アインズの覚悟とほぼ同時にガラガラと砂煙の舞う崩れた壁面から何かが立ち上がる様な音がした。
「っ!!」
一気に緊張の糸が張り詰める。
一層強くなる殺気にアインズ達が身構える中、ゆっくりと人影が歩み出てくる。だがソレは自分たちが良く知る人物とは到底かけ離れた存在だった。
「ひっ……!」
背後から小さく悲鳴が上がる。
ローザリアはナザリックでもアルベドやシャルティアを凌ぐ絶世の美女だった筈だ。
大きく調律の執れた切れ長の瞳には美しい若草色の輝きが讃えられ、その中心を通る鼻筋には一切の無駄な凹凸がなくスラリと伸び、薄くも形の整った唇は口紅でも指しているかのように健康的なピンク色をしている。更に一点のシミも無いまるで真珠を見ているのではないかと思わせる肌は純白を極め、それら全てを最も美しく魅せるパーツ配置と顔の輪郭はもはや神の領域だ。そして彼女は顔だけではない、女性にしては高身長な体は男女問わず誰もが唾をのむほど官能的で、神話に登場する豊穣の女神を彷彿とさせた。
だが今はそのどれもが――――――――見る影もない。
強い火に当てられた蝋人形のようにドロドロと爛れ、惨たらしいまでに彼女の美しさは破壊されていた。
「なんと…言う事だ…」
ナザリック地下大墳墓には異形種ばかりが集まるため、中にはかなりグロテスクな見た目のモンスターもいたりする。もちろんグロテスクな見た目だからと言って蔑ろにするようなことはナザリックの一員である以上決してないが、今回は別だ。
今のローザリアは正直言って見るに堪えない。自分が作りだした亡者たちの中でもこうまで酷いのは見たことが無かった。
見た者すべてを魅了するあの美貌は右目付近を残し全てが爛れ、そ

の部分以外は人骨に酷似した真っ黒な頭部骨格がむき出しになってしまっている。顔だけではない、身に纏う修道服も溶けた部分が穴の様に広がり、そこから見える体も例外なくすべて溶け出して足元に大きな水溜まりを作っている。

銀色の水溜まりだ。

この銀色に輝く液体は彼女の体表面及び衣服を構成する液体金属であり、普段は彼女の意思力によってその決められた姿かたちを保っている。逆を言えば、いま彼女の体表面を覆う液体金属が形を保てず流れ出てしまっていると言う事は、彼女が〝正気でない証拠〟だ。

「ア、アインズ様…あの方は本当にローザリア様なんでありんすか…？」

シャルティアが恐怖と混乱の視線をアインズに向け、震える声でアインズに問いかける。

対するアインズも言葉がうまく出てこない。これまでの不可解な彼女の行動で頭を悩ませていたのに、今目の前で起きている目を瞑りたくなるような光景のせいでもう頭がパンクしそうなのだ。

それでも頭の中を整理し、今できることを懸命に判断し、シャルティアの問いにアインズは答える。

「…あぁ、つい先ほどまではな。今の彼女はとてもではないがローザリアと呼べるほどの面影を見いだせない。彼女がああなってしまった原因は分からないが、一先ず私がコンタクトをとろう。まぁ、とても話ができる様子には見えないがな。」

「では、決裂した場合はどうなさるのですか…？」

セバスがアインズの発言を受け、至極当然な質問を返す。

「耳が痛い質問だなセバスよ、だが尤もだ。寧ろそちらに転ぶ可能性の方が高いと言えよう。…その場合は十中八九戦闘になる。故に、お前たちを呼び集めたのはひとえに戦闘に長けているからだ。」

守護者達の内心は酷く複雑なものに変わる。自分たちの生みの親であり、忠義を誓った偉大なる存在に自ら剣を向けなければならない、しかし戦わねば先ほど以上の被害が起きてしまうかもしれないのだ。

だが彼らにも覚悟を決めてもらわねばなるまい。
一拍置いてアインズは前に居る異形のローザリアに注意しながら、背後に控える守護者達を見やる。
「注意しろ、あれは彼女(ローザリア)であって彼女(ローザリア)ではない。戦闘になった場合確実に殺しに来るだろう。自分の身を守ることを第一に優先し、彼女の動きを止めることに集中してくれ。その間に私が何とかする。」
「はっ、畏まりました。」
守護者達の目から迷いが消えた。どうやら彼らも決心してくれたようだ。
しかしアインズの内心は彼らが覚悟を決めてくれた喜びよりも不安で一杯一杯だった
(…守護者達に覚悟を決めさせるため仕方なかったとはいえ、まだ何にもわかってないのに「私が何とかする」とか言っちゃったよ俺！くそっ、くよくよしてたって始まらない。わからないんだったらわかるようにするだけだ！)
自信を鼓舞して胸中に渦巻く不安を払拭し、ローザリアと対話を試みるべく歩を進め始める。
「よし、では行ってくる。もし戦闘になったら、その時はアルベドを中心として各員臨機応変に対応してくれ。私もいちいち指示を飛ばしていられるほど暇ではなくなるだろうからな。頼りにしているぞアルベド。」
「は、はい!!アインズ様！必ずやこのアルベド、アインズ様のお役に立てることを誓います!!!」
このナザリック史上最大の緊急事態でアインズ直々に頼りにしていると言われたアルベドは、大好きな人に認められたという興奮と幸福感に鼻息荒く目を輝かせ小さくガッツポーズをする。
「ドウカオ気ヲツケテ…。」
「あぁ、どうか話だけで済むように祈っていてくれ。」
守護者達に背を向けゆっくりと確実に一歩一歩、歩みを進める。
そしてローザリアに近づくにつれ、身にまとわりついてくる殺気はさらに濃度を増してくる。

それにしても機械が殺気を放つというのも考えてみればおかしな話だが、やはりそこに意思があるならば可能なのかもしれない。
（なんて、今考える事じゃないよな。でも余計なことを考えていないと、このプレッシャーに飲み込まれそうになる。それに仲間から敵意を向けられるのがこんなに辛いことだとは思わなかった…。）
歩きながらアインズはスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを虚空へと仕舞い、数ランク低い戦闘用の杖を取り出す。
友人、親、恋人…そういった親しい関係の存在から負の感情を向けられるというのは精神に掛かるストレスがかなり大きい。それこそ全く知らない異世界で奇跡的に再会する事が出来た友人からともなれば、そのショックの大きさは相当なものだろう。
だが次第に心で渦巻く行き場のない憤りは、いつまでも不快な殺意を振りまく彼女への怒りへと変化し、スタッフを握る力が強くなる。
（なぜ…なぜそんなにも僕たちに敵意を向けるんだ…ローザリアさん！あんなことまでしてっ！絶対に理由を聞かせてもらいますよ!!）
アインズ程度が本気で握ったところでへし折れることなどないが、それでもミシミシとスタッフが軋み悲鳴を上げる。しかしながらいつもの如く〈精神操作無効化スキル〉によって昂ぶった心が強制的に鎮められ、強く握り締められていた拳はすぐに緩められた。
（…まぁ、冷静さを取り戻す分にはすごく便利なスキルだけど、こうも唐突に発動されると何とも言えないな…。それにしても、ここまで近づかれておきながらアクション一つ起こさないなんて、ますます何を考えているかわからない。）
もうすでに、ローザリアとの距離は１０メートルも無い。これだけ殺気を漂わせているなら近づいてくる脅威に対して真っ先に攻撃しそうなものだが、一向に吹き飛ばされて激突した壁の付近から動こうとはせず、ただただ体を爛れさせている。
（笑っている…のか？）
もうほとんど顔の液体金属は剥がれ落ちており表情を見ることが困難だが、よく見ると肩が小刻みに上下している。こういった動きは大抵笑っているときに見られるものだ。

（くそっ！何がおかしいって言うんだっ!!）
彼女の混乱を招いたと維持者として相応しくない態度に先ほどの怒りが再燃し感情が爆発する。
「ローザリアよ！貴様一体何を考えている!!なぜあんなことをした!!例え私と同じくナザリックの頂点に立つ者だとしても、仲間を傷つけるような真似は決して許される行為ではないぞっ!!!」
普段から温厚なアインズの本気の怒号は会場内をビリビリと震わせる。
だがそれに答えたのは静寂と沈黙。
一瞬だったのか、それとも数分、いや一時間にも感じられるほど沈黙を続けるローザリアの態度はアインズの神経を逆なでる。
「答えろっ!!!」
再び沈黙が訪れるかと思われた。
「フフ…フふフ…ふフフふｆｕ……アァ…嗚呼？……何故？…何故でスッテ…フフ、アハハ…面白イわ…愉快ｄａワ……えェ、エぇ…知ラｎａイのね…可哀想、カワイｓｏウ…ソゥ、教えルのネ？…教えてアゲまショう…迷えル子羊には救済ヲ…高慢ｎｉ、強欲ニ…怠惰ｎｏ牛の四肢ｗｏ捩ギ、嫉妬の蛇は果実を求メ、暴食の蠅ｈａ理性を貪り食らウ…なンて素晴ラシイ…フｆぅ、フフフｆｕ…我が主ｎｏ思召しを…」
聞こえてきた声は完全形態の時とはまた違う不気味さを持っていた。普段の凛とした声に被さるように第三者のまったく聞き覚えのない低い合成音が重なり、生物的でありながら非生物を連想させるこの矛盾が実に気持ち悪い。
喋る言葉も支離滅裂で、第一目標であった対話は不可能だ。
（ちっ、やはり理性が飛んでしまっている。これでは会話など不可能だ。他に何か手はないか…？）
解決策を模索したことによってローザリアへの注意が一瞬疎かになる。
「主は仰ｒｉまシた…」
その一瞬のうちにローザリアが視界から消える。

「しまった!!」
　気づいた時にはもう遅い。
「壊したいからに決まっているじゃない。」
　その時は、その時だけは酷くうっとりとした恍惚的な声音が耳元で囁かれた。
　…これが背後から後頭部に銃口を突き付けらている状況でなければ、もっと扇情的に聞こえたのかもしれないな。
　ダァンッ!!と銃声が鳴り響くが、アインズは間一髪で躱し反撃のため反射的に射線外へと距離をとる。
「ぐあぁっ!」
　しかしその行動は読まれていたらしく、飛びのこうとした方向から回し蹴りを食らい凄まじい力で弾き飛ばされる。
　そのまま闘技場の魔力障壁にぶち当たり、ついにガラスが割れる様な音と共に砕け散った。それでも衝撃を殺しきれなかったためそのまま観客席へと激突し大量の砂煙を上げる。幸いに、闘技場の避難は既に終わっていたため他に被害を受ける者が居なかったことが救いか。
「「アインズ様!!」
　目の前で行われた一瞬の攻防に守護者全員が悲鳴を上げるが、それも一瞬で言われた通りアルベドを筆頭として迅速に行動を始める。
「ではアインズ様の命により、ここからは私が指揮を執ります!まず私はアインズ様の安否確認のためアインズ様の下へ向かいます。そのままアインズ様の守護防衛に就きます。」
　アルベドの指示にシャルティアが咬みつく。
「ちょっと!アインズ様に任されたからってずるいんじゃありんせん!?わたくしもアインズ様と一緒が良いでありんす!!」
　全くこんな非常事態にコイツは何を言っているんだと、怒りを通り越して呆れてしまう。その思いを代表してアルベドが怒りの形相で説き伏せる。
「脳筋を通り越して本物のバカねあなたは!いいかしら、アインズ様は自分の身を第一にとおっしゃったけれど、それでアインズ様を失い

でもしたらこの先どうするつもりなのかしらシャルティア!!自分の身の前にアインズ様の御身を護ることが大前提よ!そしてこの中で防衛能力に長けているのはこの私!少しでもアインズ様を安全にお守りするためには私が行かなくて誰が行くのよ!!」

「ぐ…わ、わかったわよ!!」

鬼の形相で詰められたシャルティアは渋々引き下がる。

コホンと軽く咳払いしアルベドは再度指揮を執る。

「残りの貴方達は私がアインズ様の安否確認と防衛に就くまでなんとしてもローザリア様の注意を引いておいて。今のローザリア様の戦闘能力は未知数だけれど、3人がかりならある程度は持ちこたえられるはずだわ、というか持ちこたえなさい。では各員行動に移れ!!」

アルベドの号令によって各々が散開する。アルベドは未だに動く気配がないアインズの下へ。セバス、シャルティア、コキュートスは猛スピードでローザリアの下へ駆ける。

「では、一番手は私が頂きましょう!!」

セバスの役職はモンクであり近距離戦闘に長け、それを補助するスキルも多数持つ。

中でも〝気功〟と呼ばれる体の内に秘める生命エネルギーを直接打ち込むことで、対象の体内の〝気〟を強制的に変化させることにより、破壊や逆に怪我の治癒などができる技を得意としている。他にもまだまだスキルは所持しているのだが、それら全てに共通するのは拳(こぶし)または掌(てのひら)に関係があるということだ。つまり、傷つけるにも癒すにもその手が直接触れなければならないため、必然的に戦闘範囲はほぼゼロ距離になる。

射撃による遠距離戦を得意とするローザリアに対しては戦術上かなり不利を取るが、懐にさえ入ってしまえば逆に有利に持ち込めるため、撃たれる前にセバスは一瞬だけ構えの姿勢をとると、更に早い速度でローザリアとの距離を一瞬にして縮める。

「参るっ!!」

牽制攻撃をさせる間もなく詰め寄ったセバスは、アインズに命令通りローザリアの拘束を試みる。

「ローザリア様、ご覚悟を！〈地縛掌〉!!」
一気にローザリアの至近距離へと詰め寄ったセバスは腰付近で握り拳を作り、両拳に光が宿ったかと思うとローザリアの腹部めがけて弾丸の如きスピードの掌底が叩き込まれた。
〈地縛掌〉は近接打撃ダメージ＋気功を打ち込み相手の動きを封じるデバフ効果があり、気功の特性上特に生物に対する効果が大きい。
ドンッと鈍い音が鳴り、衝撃波はローザリアを貫通し反対側で砂煙が舞う。手には確かな重みと手ごたえを感じた。
だが――――
（くっ、やはり無機物生命体であられるローザリア様には効果が期待できませんか…！）
反面、生命エネルギーがもともと少ない無機物生命体は気功などと言った体内の生命エネルギーに直接干渉してくる攻撃に対して耐性を持つ。それは無機物生命体の頂点に立つローザリアも例外でなく、〈地縛掌〉を受けても尚微動だにしていない。それどころか攻撃を受けたにもかかわらずその攻撃者に対して見向きもしていない。
少しでもこちら側に注意を向けさせるため、セバスは動きを止めるのではなく危険対象と認識されるようダメージを与える方針に転換する。
「ならば！〈白虎口〉!!」
半歩引いたところから繰り出される猛烈な突進と共に上下から双手突きが放たれる。
〈白虎口〉はセバスの持つ攻撃の中でも特に火力の高いものであり、強烈な突進力が合わさった双手突きは万物を破壊する威力を持ち、更に高密度に練られた気は牙の幻影を作り出し、打撃と斬撃の両属性を与え相手に重度の出血効果をもたらす。
金属を強く叩きつけた様な先ほどよりも大きい音が辺りに鳴り響いた。
衝撃によりローザリアを覆う液体金属が激しく飛び散る。
「なっ!?」
しかし聞こえてくるのはセバスの驚嘆の声。

渾身の一撃で放たれた〈白虎口〉は、ほぼ?き出しの骨格だけになったローザリアの細い胴体へ見事に命中していたにもかかわらず、ダメージはおろか本当に攻撃が当たったのか疑いたくなるほどに攻撃を食らった仕草も形跡も見当たらない。

少し、ほんの少しだけ、王女へ攻撃をするという罪悪感から力を抜いてしまったのは逃れようのない事実だ。だが、手加減をしたと言っても今と同じ力加減で別の対象を攻撃していたなら間違いなくそれは原型を留めぬほど大破していた筈だ。

――――――ゾッ……!!!

時間にしてコンマ一秒も立たない一瞬の戸惑いの中、彼女と目が合った。

動けなかった。

黒く濁った中に煌々と浮かぶ真っ赤な瞳に見られた瞬間、足はすくみ上り、全身の筋肉は体感したことのない恐怖に強張り、奥歯はガチガチと太鼓をたたく壊れた玩具の様に鳴りやまない。

「……――――。」

もはや人語ではない機械が発する音。だが分からずとも伝わってくる

――――――死ネ、と。

硬直し動けないでいるセバスへと、アインズの時と同様に回し蹴りが炸裂する。

「サセルカッ!!」

そこへ追いついたコキュートスが割って入り主腕で持っていたハルバードを深々と地面に突き刺してローザリアの回し蹴りを受け止め、副腕でセバスを力任せに投げ飛ばした。

(クッ、何ト重イ一撃ダ……!)

回し蹴りを受け止めた衝撃がハルバードから両手に伝わり、強い振動が掌を痺れさせる。その衝撃から今の回し蹴りの威力の高さがうかがえた。

「背中がガラ空きですわローザリア様!〈ブラッディ・クロス〉!!」

攻撃後に硬直しているローザリアへといつの間にか背後へ回って

いたシャルティアが自身の能力により血で強化した両手の爪で致命の一撃を与える。
パリンッと皿が割れる様な音がした。
「えっ!?でしょ!?」
シャルティアの驚きの先にあったのは、血で形成された長い爪が粉々に砕け散る光景だった。
ローザリアには致命傷どころか傷一つすらついていない。
「攻撃ノ手ヲ緩メルナ！」
攻撃の通らないローザリアに戦意が下がりそうになる二人にコキュートスは発破をかけて立ち上がらせる。
「ウオオオオオオ!!」
ローザリアに肉薄し、目にも止まらぬ速さで巨大なハルバードを振り回しながら攻撃するコキュートスだったがそのすべてが軽く手で弾かれ、有効な一撃が一向に与えられない。
そこへ突如として大量の蝙蝠がローザリアの視界を遮る。
突然のことに動きが止まった所をすかさずセバスが背後からローザリアの姿勢を崩し上方向に掌底をくらわすことで大きく体を浮かせる。
何の打ち合わせもアイコンタクトも無かったが全てを悟ったコキュートスは渾身の力をハルバードに溜め、宙に浮いたローザリアめがけ――――放った。
「クラエ、〈不動明王撃〉!!!!!」
その一撃は見事にローザリアの腹部に命中し、金属が強く擦れる音と共に凄まじい速度で闘技場の壁にぶち当たり、辺り一帯がその衝撃で原型を留めないほど大破した。
「…。」
大量の砂煙を上げるその先を三人はじっと見つめる。
「やった…で、ありんすか…？」
動く気配がしないことから、ぼそりとシャルティアが独り言を漏らした。
しかし――――

「イヤ…」
コキュートスが手に持つハルバードを強く握りしめ直す。が、握り締めた拍子にハルバードに無数のひびが入ってバラバラと砕け散る。
「…マダダ。」
「「…っ!!」」
だんだんと砂煙が晴れる中でそいつは立っていた。ガラガラと瓦礫が崩れる中でそこだけ時間が止まったかのように静かに屹立する黒い人の形をした塊が。
先ほどのコキュートスの一撃で体に纏う全ての液体金属が四散したのだろう。人骨を模したローザリアの内部骨格が全て露わになっている。
その体に傷や凹みといった外傷は一切見受けられず、崩れた瓦礫の隙間から差し込む光を反射して鈍く光り輝いている。
信じがたい光景に三人は思わず呼吸をするのを忘れてしまう。
「ああいうの、何て言うんでありんしたかねぇ…」
不意にシャルティアがまたポツリと小さく呟く。しかし静寂の中でそれは独り言というには少しばかり声量が大きいようで、全員の耳に届いた。
走馬燈の様に在りし日の小耳に挟んだ創造主達の会話を思い出す。
そして一つのワードに思い当たる。
「あぁ…そうそう、思い出したんでありんす。」
ローザリアの赤く煌々と光る両目が、目前の三人をようやく捉える。
「確か」
前傾姿勢になったローザリアが声にならない雄叫びをあげながら三人の所へと猛スピードで突進する。その姿はまるで血に飢えた獣のように狂気に満ちていた。
「〝ちーと〟って言うんでありんしたかぇ…。」

悲劇：元凶

聞くに堪えない雄叫びを上げ、眼前に迫りくる狂気の輩。
こちらの攻撃が一切通らない鉄壁の防御力を持ちながら、一発が致命傷になるほどの攻撃力を併せ持つ規格外のバケモノ。
そんな相手にどう対処してよいのか。いや、そもそも至高の御方と戦うという事態が異常過ぎている。
《ユグドラシル》時代、話すこともままならなかった彼らが、ましてや実際に手合わせなどした事がある筈もなく、初見で強大な力を持った存在と対峙せなばならないのだ。〝恐れ〟〝畏怖〟〝絶望〟、そういった感情が頭の中でしきりに警鐘を鳴らす「動け！」という意思に反して、体を石像のように固まらせてしまう。
（グ…私ノ渾身ノ一撃ヲ受ケテ無傷トハ…恐ルベシ…。）
持参していたハルバードの用途はあくまで護衛用であり、不測の事態に備えてと言うよりかはむしろ護衛者としての〝見た目〟を意識した側面が強かった。
よって今回持参していたハルバードの等級は、コキュートスが本気の戦闘で用いる武具に大きく劣るが、しかしそれでも伝説級の代物だったことは間違いない。
それを攻撃の反動で崩壊に至るほどの威力で見舞った筈なのに、当の対象は無傷で尚も戦力は衰えていない。
これを恐れずして何を恐れるのか…。
（手ノ内デデキル最大ノ攻撃ガ効カナイト分カッタ今、我々ニデキルコトハ最早何モナイ…）
コキュートスは絶望する。
己の力の至らなさに、至高の御方の御力の偉大さに。
（スミマセヌアインズ様…我々ハココマデノ様デス…。）
目の前を見れば、もうすぐそこまで死の権化は近づいてきていた。
（嗚呼、アインズ様…モット貴方ノオ傍ニ…）
コキュートスが死を悟った時、――――待ちかねていた奇跡がやって来た。

――――ドガーンッッ!!!!!!!!!!

凄まじい爆発音とともに大量の砂埃が巻き上げられる。

突如として発生した衝撃によって後方へと吹き飛ばされたが、素早く姿勢を正し爆発のあった方に視線を戻す。

その目には、超巨大な大質量の黒い魔球に押しつぶされているローザリアの姿が映しだされた。

「ギギ…グ…ガガガ…」

そのあまりの重さにうまく身動きが取れず、チカチカと目を点滅させて唸り声をあげる。

だが彼女への攻撃はまだ終わりではなかった。押しつぶされたローザリアを囲むように地面から無数の亡者が生え我武者羅に掴みかかり、もがき暴れる彼女の四肢を地面へと縫い付ける。

それからローザリアを中心とし、半径１０メートルの円周上に分厚く刺々しい骨の壁が出現すると、黒い魔球ごと取り囲む。

さぁ、まだ終わらない。

更にその骨壁を覆う様に真っ黒な正六面体が何重にも重なりあって巨大な棺が出来上がったかと思えば、締めと言わんばかりに巨大な四本の剣（つるぎ）がその四面と平行になるように地面に突き刺さり、それぞれの刃の間を紫電の如く魔力が迸る。

最後に、それらの上空に三重のサークル状魔法陣が浮かび上がると、ガチャンッと錠前が閉まるような音が響き渡り、先程の喧騒が嘘のように静まり返る。

「さて、これで暫くは彼女も身動きが取れない筈だ。」

中空から聞こえてくる一人の声。

それはとても聞き慣れた、しかし心の底から安心出来る偉大なる御方の御言葉（みことば）。

目の前で起こる出来事をただ立ち尽くし、呆然と見ていることしかできなかった三人の前へと黒き死神が悠然と舞い降りる。

「「アインズ様!!」」

「待たせてしまってすまない。」
僅か数分の間しか離れていなかったというのに、まるで数十年ぶりに再会したかのような錯覚に陥り、目頭が熱くなる。
「ア、アインズ様ぁ～!!」
絶望的な状況に救世主のごとく現れたアインズはシャルティアの心を強く打ち、嬉しさが限界を超えて抱擁と言う名の突撃をかます。
「うぐっ…」
しかし返って来たのはいつもの優しい愛想笑いではなく、何か痛みに耐える様な鈍い呻き。
すぐさま異変に気付いたシャルティアは飛び退き、青ざめた顔で自らが抱き着いた箇所をくまなく観察する。すぐにアインズが脇腹を軽く手で抑えていることが目に留まり、青白い肌から更に血の気が引く。
「まさかっアインズ様！どこかお怪我を!?」
その一言でセバス、コキュートスもあからさまに顔色を青ざめさせる。
（しまった…）
少し面倒になりそうな予感を察知したアインズは、これ以上深く問い詰められまいと咄嗟にオーバーリアクションに出た。
「ふぇ…？」
最初シャルティアは自分がどのような状況であるのかわからなかった。
しかしとにかく心地がいいのは間違いない。
体全体を包み込む黒い布、顔に当たる白く堅牢な太い骨、そして何より間近で香る大好きな人の匂い（いや匂いなどするはずないのだが、アルベド含め恐らく彼女たちしか感じ取れない特殊な何かがあるのだろう…）。
ぼんやりとだが、それらの要素から一つの結論が導き出される。
（あれ…？もしかして私抱きしめられてる…？）
その真相を確かめるべく目線を上げると、そこにはストライクゾーン直球ど真ん中クリーンヒットの超イケ骨のご尊顔があった。

ボンッと軽い水蒸気爆発が起きる。
「はわ…はわわわ…／／／／」
顔を真っ赤に熟したリンゴよりも赤く頬を染めるシャルティアに、アインズは更に追い打ちをかける。
「何、心配するな。こんなものはただの掠り傷だよ。それよりも私はお前たちが無事でいてくれて本当に嬉しく思う。よく持ちこたえたな、シャルティアよ。もちろんお前たちもだ、セバス、コキュートス。」
「あ、有難きお言葉…」
自分の身よりも家臣の安否を優先するアインズの姿に、二人は敬服せざる負えなかった。方やシャルティアと言えば、アインズの怒涛の猛攻を受け、少し人目に晒すのを憚るくらい溶けたバターの様に顔面を蕩けさせていた。
（よし、何とか言いくるめられたかな…？）
アインズの怪我について誰も言及してこなさそうなので、アインズはいよいよ本題へと入る。
「ローザリアについて分かったことがある。」
「!!」
突如として暴れ出したもう一人の至高の御方の原因が分かった。これは守護者達にとって朗報以外の何物でもない。なぜ突然我々に牙を剥いたのか、なぜあんなにも心を乱しているのか、そもそもなんでこんな事態になってしまったのか、湧き上がる疑問は後を絶たない。
「ストップだ。皆色々言いたいことがあるだろうが、それらに答えていられる時間は残念ながら微塵も無い。」
しかしそんな雰囲気を瞬時に察知したアインズが片手を突き出し、守護者達から言葉が出る前に黙らせる。
「見て分かる通りだが、私の持てる上位の拘束魔法をアルベドの補助魔法で更に強化することで今現在彼女を封じ込められてはいるが、恐らくあと数刻も持たない筈だ。」
「なんと…!!」
アインズから告げられた事実に守護者達は驚きを露わにする。な

ぜならばもうすでに勝敗が決したものだと思っていたからだ。そりゃ誰だってあれだけ巨大で強力な封印を見せつけられれば勘違いしてもおかしくはない。
「すべては終わった後だ、まずは私の話を聞いて欲しい。…よいな？」
守護者達は一様に頷く。その誰もが、危機的状況が未だに続いている現状に表情を強張らせていた。
「うむ、では始めよう。先に結論を言っておく。現在、彼女は一つの〝パッシブスキル〟に自我が蝕まれているせいで暴走状態に陥ってしまっているのだ。」

――――少し前

（うっ…ここは…？）
意識が朦朧とする。
（くそ、駄目だうまく頭が働かない…。）
視界は霞みがかり、周りの状況が思う様に呑み込めない。
《ユグドラシル》時代、敵の攻撃により、視界不良、麻痺、毒といった状態異常に陥ったことは何度もあった。だがそれはあくまでゲーム上の演出であり、実際はステータス画面に状態異常アイコンが点灯し、それに伴った効果が適用されるだけでリアルな症状が反映されるわけではなかった。それに鈴木悟として過ごした現実世界でも、意識が朦朧とするような生活を送ったことは一度もない。
だからこそ今、初めての経験に体がついていけていない状態だ。
瓦礫の山から手を伸ばし、手探りで掴めるものを探していると誰かに手を握られた。
「アインズ様！ご無事ですか!!」
耳慣れた声。少しクリアになった視界で声がした方向を見ると、黒髪の美しい女性が今にも泣き出しそうな顔でこちらを覗き込んでいる。
「アルベドか…すまない、そのまま引っ張り上げてくれ。」
「畏まりました。」

アルベドによりゆっくりと上半身が起こされる。しかし
「ぐおっ!!」
突如、猛烈な痛みが脇腹に走る。だが、そのショックで皮肉にも意識は完全に覚醒した。
「もしやどこかお怪我を!?」
アルベドが悲鳴に近い声を上げるが、アインズにはそれに答えてやれるほどの余裕がなかった。
――痛い。
アインズの頭の中はこの言葉で埋め尽くされていた。
さっき、意識がどうのとか言っているレベルではない。余りの痛さにある筈のない内臓がひっくり返るほどの吐き気を催す。
ＲＰＧゲームなんかに夢中になっているとき、プレイヤーが操作するキャラが大ダメージを受けた時など思わず「痛い痛い」と言ってしまった経験は無いだろうか？
強力な攻撃を受け、瀕死の状態に追いやられてもあくまでそれはゲームの世界の中であり、敵と瀬戸際の攻防を繰り広げるスリルが面白さに繋がる。たとえ死んでしまったとしても、セーブデータをロードし直せば一から万全の状態で再戦できるのだ。
だから大抵は、敗因から反省点を見つけ出し、改善していくことで見事敵に勝つ事が出来れば、「あのボス強かったなぁ」とか「一撃で全滅したこともあったっけ」など最終的に笑い話になったりする。
だがこれを、プレイヤーに操られるキャラクターの視点で考えてみてほしい。
プレイヤーにとって操作キャラがいくら切り刻まれようが死のうが関係は無い。だがキャラクターにとって、それは紛れもない現実なのだ。
そして今、アインズは正にその状況に置かれている。
ここは《ユグドラシル》のバーチャル世界なんかではない、紛うことなき現実（リアル）世界なのだ。
（くっそ、ダメージを食らう事がこんなにも苦痛だったとは…）
激しく痛む脇腹を見ると、太くゴツイあばら骨が一部欠損してい

た。その傷跡からローザリアとの戦闘が脳裏にフラッシュバックする。
（そうだ、たしか回し蹴りを食らってぶっ飛ばされたんだよな。）
ふと違和感を覚える。
（回し蹴り…？）
そうだ、何か引っかかる。なんだこの違和感は…ああ、くそ駄目だ！まだ頭が回らない!!
「あぁっ！なんと酷いお怪我を…すぐに治療しなければ!!」
しかしアインズの傷口に気が付いたアルベドによって思考が妨げられる。少しそのことに苛つきを抱きつつも呑気に治療を受けるている場合ではないので、一先ずアルベドを落ち着けることに専念する。
「いや、その必要はない。この程度の怪我なら、こうすれば…元通りだ。」
傷口に当てていた手がほんのりと淡く紫色に輝くと、欠損していた部分がパキパキと音を立てて再生していく。あっという間にいつも通りの逞しいあばら骨に戻り、怪我をしていたことを微塵も感じさせない。
「な？」
「は、はい…。」
と言っても、見てくれだけを治したに過ぎず実ダメージはまだ治療しきれてはいない。アインズの所持するスキルにより時間経過で体力は回復するのだが、全快するまでにはまだ時間がかかりそうだ。まあ、治ったと思わせる分には十分な効果が得られたようだから良しとしよう。
「しかし…理性を失えど、さすがは偉大なる御方と言うべきでしょうか…」
「ん？」
先程とはまた違った面持ちでアルベドが嘆息を漏らす。
「いえ…私はローザリア様のことを他の偉大なる御方々から聞き及んだ〝射撃の名手〟と言う事ぐらいしか存じ上げませんでしたので…。

あの尋常ならざる身のこなし方、まさか近接戦闘においても長けているとは思いもよりませんでした…。あのお方に我々が付け入る隙はあるのでしょうか…？」

「!!」

アルベドの一言で霧散してしまっていた違和感が再び実態を取り戻し、尚且つその答えまでが導き出された。

「それだアルベド！そうだ、何故気が付かなかった！ありがとう!!」

突如、興奮状態になったアインズに両肩を力強く掴まれ前後に揺さぶられながら覚えのない感謝をされたアルベドは、頭の中が嬉しさと混乱でごちゃごちゃになる。

「そうだ、おかしいんだ！彼女の回し蹴り程度で俺がダメージを食らう筈が無い!!」

最初に感じていた違和感の正体はこれだった。アルベドと違いアインズはギルド長という立場からギルドメンバー達の特徴をよく把握していた。もちろんローザリアのことだってよく知っている。なにせあのピーキーすぎるステータスは一回見れば忘れたくても忘れられない。

少し彼女についておさらいをしよう。

彼女の初期種族である『人型機械（アンドロイド）』は『無機物異形種』という括りの中でも『機械生命体』という系統に属する。『機械生命体』はプレイヤーの成長のさせ方によって多少の差は生じてくるものの、最終的には大半が〝射撃攻撃〟主体のビルド構成になる。そして、大抵こういったビルドに見られる傾向として〝物理攻撃〟が相対的に低くなるのがＲＰＧの常だ。そして彼女の種族はそれが更に顕著に表れる。

そう、彼女の〝物理攻撃〟は初期ステータスから毛ほども成長していない。

１００を最大とした時、彼女の物理攻撃ステータスはたったの２０しかない。分かり易くこの２０という数値を例えるなら、初期エリアでのＢＯＳＳエネミーが何とか殴り殺せる程度。１０レベル帯であるならば相応の強さと言えるが、彼女の場合はこれ以上成長する事が

できない上限ＭＡＸの１００レベルなのだ。同じレベルの土俵で考えれば、その値はもはや『無い』に等しい。魔術師（マジックキャスター）のアインズでさえ４０近くは所持しているのだから、彼女がいかに物理攻撃が得意でないのかがよくわかる。

故に、６０レベル以下のダメージを無効にするスキルを持つアインズに対して、なんのスキルも使用せず蹴りと言う単純な近接攻撃でダメージを負わせることなど絶対に不可能である。

…だがどうしたことだろう、現に彼女の蹴りは体のパーツが欠損する程の威力を持ち合わせていた事実が説明できない。

彼女に防御力を著しく下げられたような痕跡はなく、かといって〈上位物理無効化Ⅲ〉を解除していたわけでもない。

（考えたところでキリがない、確かめるのが一番だ。）

アインズはコンソールを呼び出しギルド長権限でローザリアのパーソナルデータへアクセスを試みる。

戦いにおいて『情報』は〝力〟だ。

敵の弱点、習得しているスキル、武器や防具の特性、パーティーを組んでいるのか…こういった情報を知ることで、〝備える〟という大きな〝力〟が生まれ、自分がいかに不利な状況に晒されていようと、逆転の一手に繋がる可能性が大いにあるのだ。

アインズは手慣れた指さばきでコンソールを操り、次々と画面が移り変わる。そしてギルドメンバー一覧表までたどり着いたとき、止まることなく動いていたその指先が固まった。

――〝ＴＨＩＳ　ＤＡＴＡ　ＩＳ　ＢＲＯＫＥＮ．〟

（データが破損しているだと？）

ギルドメンバー４１人が並ぶ中で、丁度ローザリアの名前が表記されている部分だけが赤くノイズがかかった文字でそう書かれていた。

アインズは困惑した。《ユグドラシル》をプレイしていた頃にこのような表示は見たことが無かったからだ。

単純にギルドメンバー然り、ＮＰＣなどの名前が赤く表示されるのであれば、その人物が「Ｄｅｔｈした」という証明であることは当然知っている。だが、今回の様に名前以外の表記がされているのは完全

にイレギュラーだ。
（どうする…。）
何事にも万全の策を講じるアインズは、当然このイレギュラーに対して原因の解決を図ろうとした。しかし、一刻も早く彼女の異常事態の原因究明にたどり着きたかったアインズは、焦りもあり目の前にあるイレギュラーよりも彼女のステータス画面を覗くことを優先してしまった。
彼女のステータス画面が現れる。
時に情報は〝力〟だと言った。
それは相手を知ることでこちらが有利になれるよう〝備える〟事が出来るようになるからだ。だがそれは相手にとっても同じことであり、ましてやただ漫然と自分の情報が漏洩させている様な奴は自殺願望者の他でもない。そして万が一にも自身が秘匿してきた情報を覗くような者が居れば、当然〝報復〟を与えるだろう…。

（ALERT）――
――（ALERT）（ALERT）
――（ALERT）（ALERT）
（ALERT）（ALERT）（ALERT）（ALERT）
（ALERT）（ALERT）（ALERT）
（ALERT）（ALERT）（ALERT）（ALERT）
（ALERT）（ALERT）（ALERT）（ALERT）
（ALERT）（ALERT）（ALERT）（ALERT）
（ALERT）（ALERT）（ALERT）（ALERT）
（ALERT）（ALERT）（ALERT）（ALERT）
（ALERT）（ALERT）（ALERT）（ALERT）
（ALERT）（ALERT）（ALERT）（ALERT）
（ALERT）（ALERT）（ALERT）（ALERT）

（ＡＬＥＲＴ）

だが次の瞬間――――おびただしい量の（Ａ　Ｌ　Ｅ　Ｒ　Ｔ）の文字で画面が真っ赤に染まった。

（…しまっ!!!）

経験したことがあるだろうか?

バグやウィルスによりパソコンの画面が警告音と共に大量のウィンドウで埋め尽くされていく恐怖を。だがこれはそんな生易しいことだけでは終わらない。

「アルベド!離れろっ!!」

「きゃっ!!」

寄り添っていたアルベドを力任せに突き放した直後、眼前のコンソールに写る（Ａ　Ｌ　Ｅ　Ｒ　Ｔ）の文字が凝縮し、膨大な魔力の

奔流となって殺戮の光線が発射される。
（えぇいっ、間に合え!!）
コンマの後にいくつゼロが並ぶだろうか、それほどの速さで両手に魔力を集中させ向かってくる赤い光弾を真正面から受け止める。
「ぬおおおおおおおおおおっっ!!!」
バチバチと凄まじい音を立ててアインズの両手が焼かれ、その激しい痛みで顔が苦痛に歪む。何とかして別の方向へと受け流したいが、尋常じゃない直進力のせいで受け止めていられるのが精一杯だ。
異形ゆえの超人的な反射速度で両手のみだけは目の前の破壊力に耐えうるように保護できたが、逆を言えばそれ以外に魔力を割いている余裕がない。もしこれを腹にでも受けてみろ、一瞬で保健室の骨格人形みたいにバラバラになるぞ…。
「おぉおおおおっ！」
ぶつかり合う衝撃波で猛烈な暴風が吹き荒れ、周りの瓦礫は舞い上がり、ローブがバタバタとやかましくはためく。
「アインズ様！お手伝いいたします!!〈籠城せし重騎士の甲冑（コントラディクション・アーマー）〉!!」
一目瞭然の主人の危機に黙って見ているような嫁（自称）はいないとばかりに、最上級の防御スキルをアルベドが発動させる。
〈籠城せし重騎士の甲冑（コントラディクション・アーマー）〉は自身または他者に対して神器級も真っ青の防御力を持つ鎧を魔力で作り出し、強制的に対象へ装備させるスキルである。ただし、装備した者は一歩でも動くと鎧が剥がれてしまうという制約がある。
しかし動こうにも動けない状況に居るアインズに対しては、むしろ最適解と言えよう。
アインズの手、足、胴体に次々と重厚な西洋鎧が装備されていく。
明らかに両手に掛かる負担が軽減されたことを感じたアインズは、この好機を逃さないよう更に魔力を込める。
「ぐ、がああああああああああああ!!!!!」
兜の奥から紅い眼孔が迸る。
ダンッ！と力強く踏み込み、その反力を利用して思いっきり両腕を真上へと跳ね上げた。

――――ズガンッ!!!
真上へと弾き返された光弾は目にも止まらぬ速さで第六階層の天井へぶち当たり、そのまま貫通していった。恐らくすべての階層をぶち破ってもあの勢いは殺せないだろう。
「はぁ…はぁ…はぁ…。」
こちらの世界に来て初めて死の恐怖に直面した。本当に一歩間違えば自分が死ぬ状況だったのだ。冷や汗が止まらない。
鎧はいつの間にか消えていたが、装備していた時よりも手足が鉛の様に重く感じる。
「アインズ様…お怪我はありませんか…？」
おずおずとした声が、張り詰めていた緊張を解かす。
何度目になるだろうか、アルベドから同じような質問を受けるのは。
「アルベドか…あぁ、すまない…大丈夫だ。さっきは助かった、感謝する。」
「いえ…しかし両手が…」
眉をこれでもかというくらい〝への字〟に曲げて心配そうな顔をする。
言われた通り両手を見やると、手の甲に至る部分までが真っ黒に焦げていた。正直感覚が麻痺していて痛いのかどうかさえ分からない。とりあえず強がっておく。
「心配するな、こんなものはただの煤だ。それよりも…」
一瞬だけ写ったローザリアのステータス画面を思い出す。
決して見逃さなかったある文字を。
「〝〈乱射狂い（トリガーハッピー）〉〟だと…。」

悲劇：犠牲者

「〝乱射狂い(トリガー・ハッピー)〟だと…。」

――――〈乱射狂い(トリガー・ハッピー)〉。

彼女が持つ数多くのスキルの中でも、とびっきりにぶっ飛んだ効果を持つスキルである。

しかしこのスキルは謎が多く、〈乱射狂い(トリガー・ハッピー)〉は彼女のビルドを確立させていた時期に、本人も知らぬ間にいつからか存在していたスキルである。

その能力は「一定数以上の敵を倒すことでスキルが発動、それ以降倒していった敵の数によって攻撃と素早さのステータスにボーナスが与えられる。」と言うものであった。

ただ、この「一定数」という非常に確実性のない〝ワード〟のせいで、いったい何体倒せば発動するのかがハッキリとせずその使い勝手の悪さから、ローザリアはこのスキルをあまり好ましく思っていなかった。

しかし厄介なことにこのスキルは本人の意思に関係せず発動する、いわゆる〈パッシブスキル〉と呼ばれるもので、条件を満たしてしまうと強制的にスキルが発動してしまうのだ。

更に面倒なことにこのスキルにはデメリットが存在する。

スキルが発動すると、スキルの効果が消えるまでなんと〝攻撃〟以外のあらゆる行動が出来なくなってしまう。スキル使用、アイテム使用、回復行動…その他諸々の行動ができないと言う事は、豊富なオブジェクトを用いて高度な情報戦が繰り広げられる《ユグドラシル》において単調になった攻撃ほど対策しやすいものは無いため、このスキルは自分の首を絞める以外のなにものでもないのだ。

ただし、発動した場合の効果は他に類を見ないほど凄まじい内容になっている。効果は攻撃力と俊敏性にボーナスが付与されるとのことだが、なんとその上昇量には制限が無い。つまり平たく言えば、敵を倒し続ければ攻撃力と俊敏性が無限に上昇することを意味する。

…そして今、彼女はそのスキルが発動している。

原因は明らかだ。

彼女の精神がこちらの異世界に来た時に躯体と１００％合致しておらず、そのズレを治すため彼女の経験談からスキルを積極的に発動できるよう闘技場に大量の悪魔を召喚し、それらを彼女は誰の力も借りず、一人で、全てを、平らげた。

（まず間違いなく〝あのスキル〟が関係していると言えるだろう。それにしてもあまりに久々だったからあの面倒くさいスキルの存在を忘れてしまっていた…これは僕のミスだ。）

ギルドリーダーとしてメンバーのスキル構成は全て把握していた筈のアインズにとって、この失態は非常に悔やましいものだった。自然と奥歯を噛み締める力が強くなる。

しかし疑問が一つだけあった。

（〈乱射狂い（トリガー・ハッピー）〉の効果は攻撃力と俊敏性の上昇だけの筈だ、あんな風になる効果は聞いたことも見たことも無い。）

過去に彼女は戦闘において数回ほどこのスキルを発動させてしまった事があった。しかしそのどれでも彼女は理性を失ったことは一度も無く、スキルの効果が切れるまで後方支援に回していた記憶がアインズにはあった。

だが現に彼女は面影も残さないほどに荒れ狂っている。

緊急事態の中、一刻も時間が惜しいというのに解決の糸口が何も掴めない己の無能さに苛立ちがつのる。

「チッ、クソがっ!!」

そのはけ口として近くにあった瓦礫を力任せに思いっきり蹴飛ばした。

バゴーンという轟音と共に瓦礫が八方に飛び散る。

しかし気分は晴れるどころか更に焦り、不安、怒りが増していくだけだった。

アルベドは何も言わず静かにアインズを見守っている。

もう一度瓦礫に蹴りかかろうとした時、ふとアインズの動きが止

まった。
先程まで煮えたぎる窯の湯の様に感情が沸騰していたにも関わらず、一瞬で波一つ立たない湖面の様に静かになっていた。
すぐに「あぁ、〝あれ〟のせいか」と納得したのもつかの間、アインズは一つの仮説を閃いた。
だが最初は否定した、鼻で笑えるほど何とも安直で単純な考えだったからだ。しかし考え付いたならもうそうとしか思えなくなってしまった。
（〈乱射狂い（トリガー・ハッピー）〉が文字通りの意味になってしまっているとしたら？）
異形種固有のスキルである〈精神操作無効化スキル〉がこちらの世界において改変を受けた様に、他のスキルだって影響を受けていたって何らおかしくはない。それこそスキルが名前通りのものになったとしてもだ。
――――彼女は今〈乱射狂い（トリガー・ハッピー）〉に支配されている。
それがアインズのたどりついた結論だった。
「俺のせいなのか…。」
同時に後悔と謝罪の念がぐるぐると心を支配していく。
この結論が正しいならば、もとをたどれば彼女が暴走する原因を作り出したのは自分だからだ。
しかし状況はアインズが落ち込んでいられるような生易しい時間を与えない。
ドカーンッ!!!と凄まじい音が耳をつんざく。
我に返ったアインズは音がした方へ注意を向けると、どうやらコキュートスがローザリアを弾き飛ばしたようだ。
それを見て、幾分か張り詰めていた心に余裕が戻ってくる。
〈乱射狂い（トリガー・ハッピー）〉には二つの解除方法がある。
一つは時間経過。一定時間敵を倒さないか攻撃しないでいると効果が切れる。そしてもう一つは〝ダメージを受ける〟こと。
〝1〟でもダメージを受ければ即時効果が消滅する仕様になっていた筈だ。（スキルが改変されているという結論を出した今、それが有効になっているという保証はどこにもないが…。）

それでもどこか期待してしまっていた自分が居た。これでようやく騒ぎが終わったと。

しかし、いかにその考えが甘かったかを思い知らされる。

「雄おオオＯオ悪ォ…」

舞い上がる砂煙の中から現れたのは、ローザリアの面影など微塵もない、生ける者全てを屠らんとする怨念に満ちた漆黒の餓者髑髏だった。

煌々と真っ赤に輝く瞳は怒りに染まり、全身から竜巻の様に吹き上がる殺意は骨の芯まで震わせる。

アインズは〈乱射狂い(トリガー・ハッピー)〉の効果を思い出さざるを得なかった。

敵を倒した数だけ攻撃力が上がる、つまりただでさえ高かった魔法攻撃力も上がっていると言う事を意味する。

では、いったい彼女は何体の悪魔を殺した？　彼女の攻撃力はいったいどこまで跳ね上がっている？　その状態で魔法による攻撃がばら撒かれでもしたら…

――不味い。

考えるよりも先に体が動いていた。

何をするにもまずは一通り筋道を立てて行動するあのモモンがだ。

「アルベド、手を貸せ！　あれは絶対に止めるぞっ!!!」

「はっ！」

「うむ、では始めよう。先に結論を言っておく。現在、彼女は一つの〝パッシブスキル〟に自我が蝕まれているせいで暴走状態に陥ってしまっているのだ。」

――アインズは合流した守護者達に、自分が導き出した推論を説明した。
「つまりローザリア様はご自分の意思とは関係なく、この世界の影響で変化した〈乱射狂い（トリガー・ハッピー）〉というスキルに苦しめられているのでございますね。」
セバスが神妙な面持ちでアインズの説明をまとめる。
「あぁ、その通りだ。すまない…私の軽率な行動でお前たちを危険な目に合わせてしまった。」
アインズは心から守護者達へ謝罪を述べる。もっと気づくのが遅くなっていたら本当に誰かを失いかねない状況になっていたのだ、彼らの主だとしても謝罪するのは当然であるべきだ。
「おやめ下さいアインズ様！一領主であられるお方がそう易々と下々の者に頭を下げてはなりません!!…幸いにも怪我などを負ったものは一人もおりませんから、どうぞ憂いなく御頭をお上げくださいませ。」
アインズは純粋に仲間に迷惑をかけてしまった事を謝りたかっただけなのだが、アルベドに注意をされてしまった。主従関係に重きを置く彼らにとって、やはり自分たちが崇める君主には威厳ある行動を求めるようだ。
アインズの深い謝罪の姿勢を否定するわけではないが、この世界で《ユグドラシル》の時と同じようにリーダーとなることを決意したのだから、やはり立ち振る舞いには注意をせねばならない。
組織の主が頻繁に頭を下げていては格好がつかないと言うもの。人間であった時のサラリーマン根性がなかなか抜けない鈴木悟にとって、やはり何事にも動じない威風堂々とした態度を身に着けるのにはもう少し時間がかかりそうだ。
「そうか…わかった、では切り替えていくとしよう。次は彼女を止める算段だ。」
内心反省しつつも残り少ない時間的猶予を無駄にしないためにも、ローザリアを止める作戦を立てていく。
「先に説明した通り〈乱射狂い（トリガー・ハッピー）〉を止める方法は二つある。一つは時

間経過だが、あの状態の彼女を効果が切れるまで放置していては、このナザリックが崩壊しかねないので却下とする。」
守護者達は無言で頷く。
「ならば必然的に二つ目の方法になる訳だが…お前たちは戦ったからよくわかると思うが、彼女は凄まじく〝硬い〟。そうだな、コキュートス？」
名前を呼ばれたコキュートスが一歩前に踏み出る。
「ハ。ローザリア様ノ御身体ハ、私ノ渾身ノ一撃ヲ受ケテモ傷一ツオ付ケニナラナイ尋常ナラザル防御力ヲオ持チデアリマス。」
「そうだ。この中で最高の攻撃力を持つコキュートスの力をもってしても彼女にはダメージを与えられない。これが彼女の最も強く、最も恐ろしい〝鋼鉄のシスター〟たらしめる点なのだ。」
ごくりと生唾を飲み込む音が聞こえる。
静まり返る中、シャルティアが口を開く。
「…でしたら、ローザリア様にダメージをお与えすることなど不可能なのではありんして…？」
誰もが思うもっともな質問だ。おそらくあの厳重な封印の下でも元気にもがいていることだろう。
「あぁ、確かにな。だが私は知っている。仲間だからこそ知りえる彼女の〝弱点〟をな。」
「!!」
その一言で守護者達の顔色に希望の色が混ざる。キラキラと輝く瞳は「早く教えろ」と言わんばかりに訴えているようだ。
「時間がない。一度しか言わないから、聞き漏らすことのないように。」
沈黙を了承と受け取ったアインズは説明を始める。
「まず、少々特殊だが彼女の防御力には〝アーマー値〟と言うものがセッティングされている。これは攻撃を受けることで徐々に減り、数値が低くなるほどに防御力も比例して低くなる仕様だ。そしてその値は3層のシールドによって守られている。1層目は魔力シールド、彼女自身の魔力を消費して永続的に張られているものだ。そして二

つ目の層は彼女の体表面を覆っていた液体金属だ。あれは彼女を形作ると同時に弱点属性を克服するための重要な存在だ。そして最後は皆も見たと思うがあの黒い内部骨格だ。《ユグドラシル》でもまれにみる超希少金属で全身コーティングされたあれは、いかなる攻撃をものともしない。」
「我々は彼女にダメージを負わせたいならばこれらすべてのシールドを突破していかねばならないことになる。」
「さて、そこでカギとなるのが〝アーマー値〟だ。これは彼女の弱点属性をぶつけることで大幅に下げる事が出来る。幸いなことに弱点の耐性を大きく上げる1、2層のシールドは現在すべて取り払われている。彼女のアーマー値を下げることは容易と言えるだろう。」
「では、その弱点属性とはいったいなんでしょうか？」
　アルベドが素直に問いかける。
「うむ。彼女の弱点、それは〝酸〟だ。金属は腐食による劣化が最大の弱点とされていて、彼女も例外ではない。現代では超酸と呼ばれるあらゆるものを腐食させる酸があったが、《ユグドラシル》にはそれすらも遥かに凌駕する〝極酸〟と呼ばれる酸が存在していた。」
　アインズの説明を静かに聞いていたシャルティアが、何かを思い出したかのようにシュバッと手を挙げる。
「あっ！はいはいっ!!それならあちきが守護する第3階層の罠の一つに酸のプールがありんすわ!!もしかして、あれがアインズ様の仰っていた〝極酸〟でありんすか？」
　こくりとアインズが頷く。
「その通りだ。今作戦は彼女をその酸のプールに沈め、もう一つの弱点である刺突攻撃でダメージを与える事である。なお、彼女にダメージを与える役目は私に任せてほしい。」
　明確な到達目標を提示したことで、守護者達に活気が戻ってくる。
「只今戻りましたアインズ様!!」
　アインズの背後に3騎の影が降り立った。
「おお、アウラ、マーレ、デミウルゴス。よくぞ戻った。」
「はい、パンドラズアクターは万が一のために宝物殿の守護に戻らせ

ました。それと我々の方で確認しましたところ、先程の避難において軽症者数名はおりましたものの死傷者は０でございます。」
デミウルゴスの吉報に胸が安堵する。あの狂乱の中で死者が出ていなことは素直に喜ばしいことであり、迅速な避難を誘導できた彼らの統率力はやはり階層守護者足り得るものだと改めて実感した。
「それは何よりだ、お前たちの尽力に感謝する。丁度良い、これから作戦を発表す――――」

ドンッ!!!

それは遥か後方から聞こえてきた。
苦虫を噛み潰したかのようにアインズの顔が苦渋に歪む。
「…ッチ、あれだけ張った結界が僅かともたないとはな…。総員戦闘に備えよっ!!」
アインズの掛け声で守護者達は身構える。

ドンッドンッ!!

次第に音は大きくなっていき、振動が空気を伝わってビリビリと震える。
「すまない、もう少し余裕があると思っていたのだが、どうやらアレは待ってくれないようだ。作戦は戦闘しながら〈伝言（メッセージ）〉にて行う、各自臨機応変に対応してくれ。あとくれぐれも彼女の攻撃に当たらない様に、戦闘は出来るだけ避け回避と自衛に専念しろ、よいか？」
「はっ!!」
守護者達の返事を皮切りに一際大きい音が鳴り響いた後、黒い正方形の結界に次々と音を立てながらひびが入っていく。その隙間からは禍々しい赤い光が煌々と漏れだしていた。
「…来るぞ。」
アイテムボックスから取り出した戦闘用の杖を握る力が無意識に強くなる。

（王として情けない姿は見せられないっていうのに、歯を食いしばっていないと三下みたいにガタガタ奥歯が鳴ってしまいそうだ…！）
周りに控える守護者達も封印から今にも解放されようとしている化け物に緊張と恐怖で顔を強張らせている。
パキパキと音をたて、ひびが結界を覆いつくした時、内側から放たれる光が一層強さを増す。

キンッ――――という鎖が切れた様な音が響いた。

溢れだそうとする力に抗いきれなくなった結界は粉々に砕け、四方に配置された護封剣をも飲み込む真っ赤な光の柱が天を貫いた。
ガシャ、がシャ
何かがこちらに歩みを進める音が光の中から聞こえてくる。
ガシャ、がしゃ
ぼんやりとした黒い影が、次第に形を表しながら光の中を進む。
餓しゃ、餓者
「っ!!」
光の中から現れ出たのは、獣の様に手足を地面につけ、這いつくばるようにして進むもはや異様を通り越した化け物だった。
「Ａｈｒｒｒｒｒｒｒ…」
半開きの口からは絶えず蒸気が漏れ、頭は不気味に震えている。目だけが絶えずぎょろぎょろと動き回り獲物を探しているようだった。
「う…気持ち悪い。」
ポツリとアウラが呟いた。それに対して誰も何も言わなかったが、内心同じことを思っていたに違いない。普段のローザリアの姿を知っているからこそ、見るに堪えない悍ましいあの姿は嫌悪感すら覚える。
いつの間にか動き続けていた彼女の目が一点を見つめていることに気付いた。
「え？」
それが自分を見ていることに気付いた時には、もう遅かった。

次に自分は宙を舞っていて、遅れて腹部に鈍痛がやってくる。訳が分からないままの状態で目に映ったものは、目と鼻の先で輝く二つの赤い光。

（あ、ダメだ。）

アウラはなんとなくだが、自身の〝死〟を悟った。

「お姉ちゃんっ!!」

突如として隣から姿を消した姉に驚愕しつつも、誰よりも早く反応したのはマーレだった。

ローザアリアは文字通り目にも止まらぬ速さでアウラを吹き飛ばし、そのまま勢いでアウラの四肢を拘束、覆いかぶさるようにして地面に押し倒していた。

「なんて速さだっ!?」

遅れてアインズも反応するが、あまりの一瞬の出来事に戦慄していた。

（俊敏性ステータスはギルメンの中でもワーストに入る部類だったはず、それがこれ程まで強化されているとは…っ!!）

しかしそんな悠長な事を言っている場合ではなく、ローザリアは口を一段大きく開けると、何処に収容していたんだと言わんばかりに大きな砲門を露出させ、今にも目の前の少女の頭を吹き飛ばそうとしていた。

「ヒッ…」

少女の小さな悲鳴が耳に残響する。

そこに居た全員がアウラを救出しようと動いた、だが間に合わない。

いや、違うのだ。

異形の頂点に立つ彼らでさえ追いつかないほどに彼女が速すぎたのだ

誰もが間に合わないと思ったその時だった。

「〈隆起する二対の白角（アップリフト・ツイン・ホワイトルート）〉!!!」

唯一、誰よりも早く反応していたマーレだけが間に合った。

瞬間、アウラの両脇あたりの地面から超極太の白い木の根が勢いよ

く2本生え、ローザリアを遥か上空にまで吹き飛ばした。
この好機を見逃さないために、アインズは守護者達に〈伝言（メッセージ）〉で指示を送りつつ〈飛行（フライ）〉を使いローザリアを追いかける。
『各員に通達。アウラとマーレ以外は私に着いて来い、マーレはアウラを安全な場所へ移し彼女の治療をせよ。以上。』
命令を受けた守護者達は瞬時に各々の方法でアインズを追いかける。しかしその中で誰一人としてアウラを心配する者はいなかった。
少し厳しい言い方になってしまうが、主人の役に立てなくなった者はいらないのだ。この考え方は守護者達の共通認識であり、常識であり、普通なのである。もし仮にアウラが逆の立場だとしても、同じ対応をしただろう。
むしろアインズに見捨てられずに人員を割いてまで治療に専念しろと言われたのだから、感謝して然るべきなのだ。まぁ、アインズに部下を見捨てる等と言う考えは毛頭ないのはご存じだろうが、いまいちその認識に差があるのが現状である。
「…大丈夫、お姉ちゃん？」
あっという間に二人きりにされ、訪れた沈黙を破ったのはマーレだった。
「大丈夫そうに見えるわけ？」
「ご、ごめん。」
苛立ちのこもった軽口に思わず尻込みしてしまうマーレだったが、アインズの命令に従わなければと思い直し、アウラに近寄る。
「っ！」
近寄って分かったことがある。アウラのお腹の部分は大きく凹み、掴まれていたであろう手首と足首は握りつぶされたのか、異常な色で変色しあらぬ方向へと折れ曲がっていた。
「あーぁ、何してるんだろうね、私。こんなになっちゃって、アインズ様のお役にも立てなくなって、もうほんと、駄目だなあ…。」
喋るのもつらい筈なのに、余裕そうなそぶりを見せるのは弟の前だからだろうか。
次第に言葉には鼻声が混ざり始める。

マーレは傷に障らない様にゆっくりと寄り添い、アウラを優しく抱きかかえる。
「大丈夫だよ、大丈夫だよお姉ちゃん。」
マーレの優しさに触れ、アウラは胸の中で涙ぐむ。
「うっ…ぐす…情けないなぁ、もう…弟に慰められるなんて、かっこわるぅ…うえぇ…っく…。」
マーレはただ黙ってアウラの背中を優しくなでる。
「怖かった…怖かったよぉ…ローザリア様に見つめられたら…体が、石みたいになって…動けなかった…気づいた時には、もうこんなだし…」
「うん…うん…。」
「死んじゃうかと思ったぁ…っ!!」
胸に抑え込めていた恐怖の感情が決壊し、ついに大声で泣き崩れた。
「ガハッ!?」
だがお腹に力を入れた為か、破裂した内臓から上ってきた血が逆流し口から大量に吐き出される。
「お姉ちゃん!?大丈夫っ!?ちょっと待って、すぐに応急処置するから!!」
マーレは緑色のオーラを片手に宿し、アウラの腹に当てる。治癒の力を流し込んで内蔵の出血を止めるためだ。
しばらくしてアウラの呼吸が軽くなる。しかし完治させたわけではないため、まだ安静が必要だ。
「お姉ちゃん、体動かすよ。掴まって。」
アウラの手を組ませ、自分の首へと回しそっと抱き上げる。
「さぁ帰ろっか、僕たちの家に。」
闘技場を出たところで音もなく飛び上がり、風の様な速さで木々の間を駆け抜ける。目的地は彼らの住処である巨大樹だ。
「マーレ…」
ヒューヒューと風鳴りのような呼吸音の中、今にも消え入りそうな掠れた声が耳元で囁かれる。

「ん、なーに？」
マーレは静かに、聞き漏らさない様に耳を澄ます。しかし歩む足は止めない。
「…助けてくれて…ありがとう…。」
普段の姉からは絶対出てこない様なお礼の言葉を言われ、少し驚いたもののマーレはその返事としてアウラを抱きしめる力をちょっとだけ強くする。
「うん、どういたしまして。」

悲劇・荒ぶりし鋼鉄の化身

鬱蒼と生い茂る森の中では、1対6の攻防が繰り広げられていた。
原始の時代の様に植生物が織りなす豊かな自然は飛び交う魔法や光線、ぶつかり合う衝撃波により無残にも破壊され、荒れ果てていく。
渾身のマーレの攻撃によって弾き飛ばされたローザリアはそのまま大きく闘技場外に放り出され、間髪入れずアインズが追撃。追い打ちを受けて尚受け身をとることも無くそのまま地面に激突したローザリアだったが、何事も無かったかのように立ち上がり追ってくるアインズ達と会敵し今現在に至る。
戦況は芳しいとは言えない。
(〈乱射狂い(トリガー・ハッピー)〉による強化を受けた彼女の戦闘力は、僕の想定以上だ…)
ギリっと奥歯を強く噛み締め、顔が阿修羅のごとき様相に歪む。先程のアウラの凄惨な姿が脳裏にこびりついて離れない。
(どう見たって重症だ、それも階層守護者がたったの一撃であんな…くっ、無事でいてくれアウラ!!)
胸がキリキリと万力で絞められているかの様に痛む。
あれだけ護ってみせる言っていたくせに、あっけなく瀕死になるほどの怪我を負わせた挙句、それの償いもままならない己に嫌気が指す。何よりも彼らの生みの親であるぶくぶく茶釜さんに顔向けができない。
だからこそ、これ以上自分の過失で次の犠牲者が出てしまう前に、一刻も早く彼女を止めねばならないのだ。
作戦を実行に移す為〈伝言(メッセージ)〉を開き、火球や稲妻を放ちローザリアを牽制しつつ守護者達に呼びかける。
『諸君、そのまま戦いながら聞いて欲しい。私は作戦の要である転移魔法陣を形成するため〝呪縛の森〟へ向かう。その間、お前たちにはローザリアの注意を引いてもらいたい。…危険な任務を押し付けることになる、すまない…。』
結局アウラの二の舞になるかもしれない選択しかできないことに、

悔しさがこみ上げる。しかしこの作戦を遂行させるにあたって仕方がないことなのだ。
　ローザリアと戦うだけなら、守護者達なぞとっくの後方に下げてタイマン勝負をしていたことだろう、だがそれでは勝てないのだ。今の彼女と正面で戦い続けても、アーマー値を削り切る前にこちらがやられてしまうのが目に見えている。それを何とかするためにも第三階層の罠の一つである〝極酸〟をぶつけてアーマー値を大幅に低下させる必要があるのだ。
　しかし問題なのはここが第六階層であることだ。彼女に〝極酸〟を浴びせたいのならば、彼女を第三階層へ連れて行くか、〝極酸〟をこっちへ持ってくるほかない。前者では新たな被害が広がる可能性があるため後者に絞り、そこでアインズが考え付いた作戦が〝極酸の転移〟だった。だがそれを行うためにはナザリック地下大墳墓の転移術式に手を加える必要があり、そのアクセス権限はギルドマスターであるアインズしか持っていないのだ。
　故にこの作戦を実行できる者はアインズしかおらず、前線から引かざる負えないのである。
『何を謝られる必要があるのです。』
　アインズの気持ちとは裏腹に心底不思議そうな声でデミウルゴスが〈伝言（メッセージ）〉を返す。
『我ラハアインズ様ノ忠実ナル僕。』
　デミウルゴスに続くようにコキュートスがハルバードを縦横無尽に振るいながら答える。
『アインズ様から御命令をいただくことは、至福の喜びであり。』
　黒い鎧を身に纏い大斧を巧みに操るアルベド。
『任務を遂行することは最大級の幸福でありんす！』
　深紅の鎧にスポイトランスを装備したシャルティアは怒涛の攻めを見せ。
『ここは我らにお任せくださいませ。』
　手甲を装備したセバスは軽快な脚運びでつかず離れずを繰り返し相手を翻弄する。

彼らの言葉通り、もうそこにはアインズが割って入る隙は無かった。
守護者達の力強さに思わず胸が熱くなる。
『そうか…諸君らの心意気に感謝する。アルベド、来い！』
名前を呼ばれたアルベドは反射的にアインズへ向かい、アルベドが抜けた穴をすぐさま他の守護者達がカバーする。
「アルベド、御身の命にてただいま参上つかまつりました。」
呼びつけて数秒もしないうちに到着したアルベドがアインズの前に片膝をつき、次の言葉を待っている。
「うむ、お前にこれを預ける。」
アインズが懐から五体の素材が不明な奇妙な人形を取り出し、アルベドに差し出した。
「これは…？」
得体の知れないアイテムを渡されたアルベドが丁寧に受け取りつつも不思議そうに見つめる。
「それは《身代わり人形（スケープ・ゴート）》と言ってな、一日に一度だけ所持する者が瀕死になるような攻撃を代わりに受けてくれるアイテムだ。使いきりでな、効果が使用されたら消滅する。願わくばその様な事が起きないことを祈るが、お守りとして持っておくといいだろうと思ってな。隙を見て全員に渡して欲しい。」
「そのような貴重なアイテムをいただいてしまっても宜しいのですか!?」
アインズの説明を受けアルベドが驚愕の声を上げる。
「よい、お前たちをアウラの二の舞にさせないためにしてやれる最大限の手向けだ。むしろそれぐらいしかしてやれないことを許せ。」
「とんでもございません!!有難く頂戴いたします。」
アルベドは恭しく頭を下げ、アインズの命令を遂行するため激しい戦いを繰り広げる守護者たちの下へと戻っていった。
アインズは〈飛行（フライ）〉を発動させ空中にとどまると、地上で戦っている守護者達に命令を下すため、再び〈伝言（メッセージ）〉を起動し呼びかける。
『よし、ではこれより作戦に移る。最後の命令だ〝誰一人として死ぬ

ことは許さん〟。諸君らの奮闘を祈る、以上。』
『はっ!!』
守護者達の心強い返事に逆に勇気づけられたアインズは、危険な務めを果たしてくれている守護者達のために一刻も早く作戦を成功させるため〝呪縛の森〟へと向かった。

一方で、アインズから大命を賜った守護者達がその使命を全うするため荒ぶる破壊の化身と成り果てたローザリアと激しい戦闘を繰り返してきたが、真綿で首を絞める様に少しづつ状況が苦しくなり始めていた。
ローザリアは〈乱射狂い（トリガー・ハッピー）〉により、理性を蝕む狂化と引き換えに通常ではありえないほどの強化を受けた。俊敏性は異形の頂点ともいえる彼らですら追いつけない域に達し、攻撃力はＬｖ１００の階層守護者すらも一撃で粉砕する必殺の領域に上り詰めている。
更にその凶悪なまでの防御力を盾に１対５の波状攻撃にもびくともせず真正面から反撃して来るため防戦に徹するしかなく、また彼女の攻撃は苛烈を極めるためそもそも反撃していられる隙など与えてくれない。
絶えず防御バフを張り続け、死なないために必死に攻撃を凌ぐのが精いっぱいだった。
「あーんもうっ！ペロロンチーノ様から賜わった鎧がボロボロでありんす!!」
シャルティアはスポイトランスでローザリアの猛攻をギリギリのところでいなしつつも、その身に纏う鮮血の鎧は彼女の言う通り、いたるところに亀裂が走っている。彼女の攻撃を受け止めた時の余波が余りにも凄まじいためだ。
「そうやって無駄口を叩いているからですわ！〈大地断絶（アース・ディスコネクション）〉せええええいっ!!!」
同じく漆黒の鎧に身を包んだアルベドが身の丈もある大斧に破壊のオーラを纏わせて大きく振りかぶり、隙だらけの背後を狙う。
「危ない!!」

「きゃああっ！」
　デミウルゴスの警告で、すぐスキルをキャンセルし止め飛び退こうとするが、彼女の背骨付近から放たれた無数の光線が肩を直撃する。だがそれだけでは終わらず、攻撃を受けてバランスを崩したところに人体の駆動域を完全に無視した軌道で裏拳が叩き込まれ、大きく吹き飛ばされてしまう。
「つぐぅ…。」
　寸でのところで斧の柄を盾にし直撃は免れたが、反動で大きく吹き飛ばされ何本も太い木をへし折ったところでようやく地面に足がついた。
「貴女もあまり人の事は言えませんね。」
「ッチ…黙りなさいデミウルゴス。」
　バサバサと頭上で喧しい羽音を立てる蝙蝠をアルベドは忌々し気に睨めあげる。
「はいはい、今回復をかけますから動かないでくださいね。」
　憎まれ口を叩かれながらも面倒を見る姿は、反抗期の子供を持つ母親の様だ。と言うのも、デミウルゴスはあからさまに戦闘に向いたビルドではなく、ローザリアと正面から戦えば負けることは確実なのでこうして守護者達の補助に回っている。
　アルベドのカバーに回るため今度はセバスとコキュートスが二人係でローザリアを相手する。
　生身で相手をすれば、先程のアウラと同様悲惨な目に遭うことが証明されているため、セバスは手甲をコキュートスは新たに取り出した二本のハルバードを装備している。
「オオオオオオオオッ!!」
　この中で唯一まともにローザリアと渡り合える事が出来るコキュートスは巨大な二本のハルバードを四つの腕を使い、攻防を巧みに織り交ぜながら目にも止まらぬ速さで打ち込んでいく。
「――――――――ッ!!!!」
　しかし、それがどんなに鋭く重くとも「関係ない」と言わんばかりにローザリアは避けもせずコキュートスの攻撃を食らいながら、無理

やり自分の攻撃を押し通してくる。
　そのため有効打に欠け、効果的な一撃を加える事が出来ない。むしろ打ち合いになってしまえば防御を気にしないローザリアの方が圧倒的有利であり、コキュートスの青く美しい水晶のような外骨格にはところどころヒビが入り始めている。
（グオオ…押サレ、始メテイル…武人トシテ作リ上ゲラレタ私ノ全力ノ連撃ヲモノトモシナイトハ、流石至高ノ四十一人ノ一人デアラレルオ方ダ。ダガ…）
　絶対零度の冷気を身に纏う極寒の化身であるはずの彼の胸の内には、その性質とは全く真逆の熱い高ぶりがこみ上げていた。
「ダガ負ケル訳ニハイキマセヌッ!!コノ身ハナザリック地下大墳墓ト言ウ神域ヲ作リ上ゲラレタ創造主タル至高ノ御方々ニ捧ゲラレタモノ！デアルナラバッ！我ガ身、我ガ命ガ燃エ尽キルマデ御仕エスルノガ被造物タル我ラノ絶対ノ務メ！必ズヤローザリア様ヲ苦シミノ淵カラ解放シテ見セマスゾ!!」
　眼孔は鋭く光り、ガンガンと力強く顎が打ち鳴らされる。そこには固い決意と共に興奮の色が混ざっていた。
　武人建御雷に創造されたコキュートスは、そのすべての能力が戦闘に特化した構成になっている。そして本人も創造主の意向に沿い、誰よりも武人であろうとしてきた。しかしその力を最大限に発揮できた機会はほとんど無く、同時に自分の力と渡り合える相手が居なかった。
　だからこそ、今の状況が最高に自分を興奮させていた。
　今までの誰よりも強く凶悪で、全力で自分を殺そうとしてくる攻撃は事実当たれば必殺級の極限の命のやり取り。強大な敵に守護者としてではなく、ただ一人の武人として挑むことがこれほどまでに己を昂らせている事実に〝守護者〟というフィルターのせいで本質的には気づけていない。がそれらを全て目の前にいる狂気に取り込まれた主人を救うという原動力に変えてただひたすらにハルバードを振るう。
　しかしいくら打ち合っていても埒が明かないため、コキュートスが

打って出た。
「全テノ厄災ヲ焼キ切ラン〈神憑り迦具土・地獄鋏〉!!!」
スキルを発動させると同時に、持っていたハルバードを交差させ瞬く間に表面を氷が覆いつくしたかと思えば、すぐさま割れた。
しかしその割れた氷の中から表れたのは目を疑う程の巨大な鋏。
大口を開けたそれをコキュートスが屈強な4本の腕を使い力任せに閉じた。
「――!!」
圧倒的な力で挟み込まれ、ローザリアは身動きが取れなくなったことに少しばかり驚いたように見えた。
「マダマダァッ!!」
コキュートスが鋏に魔力を流すと鋏全体が赤く輝き始め、次の瞬間
――轟っ!!
と、身動きの取れないローザリアの体が激しい炎で包み込まれた。
ローザリアの影すらも残さないほどに激しく燃え盛る炎は、そのあまりの熱に周囲の植物をも燃やし始め辺り一帯を地獄絵図に変えてしまう。
氷に覆われた第五階層を守護するコキュートスは、その見た目からも氷雪系の使い手であることが容易に想像でき、保有スキルに関してもそういった関連の物が多い。しかし攻撃スキルに至ってはその限りではなく、今使用している〈神憑り迦具土・地獄鋏〉のように炎属性のものや、雷属性といった氷雪系に縛られない多様な属性技を持っていることも彼の大きな強みである。
普通ならば、コキュートスの怪力とこの炎で対象はあっという間に切断されて絶命するか、骨も残さず灰になるかのどちらかである筈なのだが、依然としてこのローザリアと言う化け物はどちらにも当てはまらないようだ。
(コノ技ハ魔力ノ消費ガ激シイ、後ドレダケ持チ堪エラレルカ…。ソレニシテモ手応エガ全ク感ジラレナイノガ空恐ロシイナ…。)
コキュートスは絶対零度の外殻に何か冷たいものが流れる様な錯覚を覚えた。されど鋏を握る手は緩めず、決して油断はせず轟々と燃

える眼前の存在へ集中する。
すると、燃え盛る炎とは別の「パキパキ」といった音がすることに気付いた。
（何ダ？）
異変に気付いたのもつかの間、鋏を何かが強くつかみコキュートスの怪力を超える力でじりじりと鋏の刃を開いてゆく。そしてそれ以上に恐ろしいものがコキュートスの目に映る。
それは劫火の中にあってもその光に負けない二つの赤い煌めきが、真っすぐコキュートスを睨めつけていたことだった。
「グ…オオオオオオオオオオオ!!!」
焦りを覚えたコキュートスは鋏に送り続けていた魔力を止め、肉体強化に回しこれまで以上の力で鋏を締め付ける。魔力の供給を止めた為これにより炎は消えてしまうが、何が起きているかわからなかった炎の中の状況を確認するためでもあった。
「あ、亜アぁあアァア…」
消えた炎の中から現れたのは、炎に包まれる前と何ら変わらないローザリアの姿だった。唯一違うとすれば、動かない両腕から枝の様に細い副腕が二本生えて鋏を掴んでいたことくらいだ。
肉体強化をかけているにも関わらず、信じられないことにその枝の様な副腕だけでどんどんと鋏は開いていき、ついに両腕の開放を許してしまう。
ローザリアはそのまま腕をクロスさせて副腕で抑えていた鋏の刃を掴んだ。
「ナニ!?」
途端に押しても引いてもびくともしなくなった得物に驚きを隠せないコキュートスをよそに、ローザリアは両肩から三本ずつ鋭い突起物を生やしたかと思うと、その間でバチバチと激しい電光を走らせ、それに連動するかのように刃を掴む両掌が赤く輝き始める。
「武器を放しなさいコキュートス!!」
後ろで戦闘に加わる機会を伺っていたセバスの声にハッと我に返ったコキュートスが反射的に手を離した瞬間、ローザリアの両肩の

棘が目にも止まらぬ速さで収容され、両掌から尋常ではない量の赤い稲妻が迸った。
　稲妻の奔流をもろに食らった鋏は数秒形は残したもののすぐさま耐え切れずに跡形も無く消え去ってしまった。あの鋏はアイテムの階級でもかなりの上位に入る名のある伝説級のハルバードを変形させたものだった筈だ、それをいとも容易く破壊しうる威力たるや想像を絶するものだろう。
　コキュートスは震える両手を強く握りしめる。もしあれを直に食らっていたら…
（良クテ両手ガ吹キ飛ブ、最悪ハ…死、カ。）
　すぐさまセバスがコキュートスとローザリアの間に割って入る。
「二人で戦っているわけではないのですよ、貴方は一旦下がって次の戦闘の準備を！」
　セバスは半ば放心している彼に喝を入れ戦線から下がらせつつ、たった今武器を破壊した両手を確かめるようにワキワキと動かしているローザリアを注意深く睨みつける。
（アレを食らえば無事ではいられない…不本意ですが遠距離から攻めざる負えないでしょう…ならば！）
　セバスは呼吸を整え浅く腰を落とし、両拳を腰のあたりで構え気を溜める。その両手はうっすらと光をまとい、徐々に光が強くなっていく。セバスが装備している手甲は防御力もさることながら、彼の使う〝気〟を何倍にも高める効果があり、装備するだけで総合的に強化されることと同意義になる大変な優れ物だ。
「練気最大出力〈気弾〉！」
　勢いよく両手を突き出し、最大まで高めた〝気〟を撃ち放つ。
〈気弾〉は文字通り気を圧縮し、膨大な生命エネルギーの塊として相手に撃ち込むものである。直撃したときの物理ダメージも相当ながら、被弾した者の生命エネルギーを局所的に増大させることで、被弾箇所の生命エネルギーが暴走し内部から崩壊させるという、対生物においてはかなり有効かつ恐ろしい技である。しかし…
「……。」

「ぬかに釘」「暖簾に腕押し」と、生物と言う概念を超越したローザリア（機械生命体）にとっては特に相性が悪い。期待できるのは当たった時の物理ダメージ位だが、直撃する寸前に片手による軽い一振りで〈気弾〉は容易く地面に弾き飛ばされる。

「っ！・まだまだぁっ!!!!」

だがそんなことは鼻っからわかり切っていることであり、セバスもそれを承知で次々と〈気弾〉を打ち込んでいく。

それを次々と叩き落としていくローザリアだが、目的はダメージを与えることではない。作戦の要であるアインズから注意を逸らし、少しでも時間を稼ぐことが守護者達に与えられた本来の役目である。

「はぁっはぁっはぁっ…」

数えきれないほどの〈気弾〉を短時間で撃ち続けることは例えＬｖ１００のキャラクターだとしても楽なことではない。体力のギリギリまで粘ったセバスは肩で息をする。同じく数えきれないほどの〈気弾〉が撃ち落とされたため、地面は大きく抉（えぐ）れ大量の土煙がローザリアを包み込んでいた。

「…？」

すぐに反撃が来るものだと警戒していたセバスだが一向にその気配は無く、あたりは嘘のように静まり返る。

突如訪れた静寂に、一抹の不安を覚えながらも次にいつ訪れるかどうかも分からない好機を利用し、各々の状況を確認するため守護者達が集合する。

「皆さん、あとどれ程戦えますか？」

デミウルゴスの単純にして明快な質問が問いかけられる。

「正直なところ、あと一回打ち合えるかどうかと言ったところね…。肉体強化のスキルを使い過ぎて、もうほとんど魔力がないわ。それにしてもほぼ防衛だけに魔力を使い切るなんて初めての経験よ…。」

「はぁ」と珍しく溜め息をつきながらアルベドが気弱に答える。普通の戦闘においては自分だけのために魔力を使うため、そこまで魔力の消費と言うものは激しいものでは無い（強力な魔法やスキルを頻繁に使用すれば話は別だが）。しかし今回の戦闘においてはアルベドの

豊富で優秀な防御スキルがローザリアの魔手から逃れる生命線となるため、全員に施され尚且つ剥がれればすぐさまかけ直すことを繰り返していたため、魔力の消費は通常の何倍も激しかった。
　それに、「誰一人として死ぬな」という王命を守るためにも生命線となる自分の能力を生かすために常に気を張っていなければならず、その心労は計り知れない。
　アルベドを皮切りに、それぞれがそれぞれの事情で限界が近いと言う事を口々に漏らし始める。
（ふむ、これはいけませんねぇ…）
　第三者の観点からデミウルゴスが冷静に状況を確認する。
（全員まだギリギリ戦えそうではありますが、お互いの状況を確認し合ってしまったがために限界が近いことが分かり士気が落ち始めている。）
　顎に指を当て思慮に耽るその姿は正に参謀らしい姿だが、内心は穏やかではない。
（士気の下がった武将などそこらの雑兵と何も変わりません。このままでは戦闘はおろかアインズ様の盾にもなれずに野垂れ死んでいくでしょう…なんとか士気を高めねば。）
　戦いで士気の落ちた兵達を再び燃え上がらせるのに最も効果的な方法は、彼らをまとめ上げる存在からの激励である。しかしその存在は作戦の準備のため不在、邪魔をするわけにはいかないので呼びつけるのはもってのほかだ。
（しかし、どうすれば…失礼を承知でアインズ様にお言葉をいただくか？この情けない現状を説明するというのか？馬鹿馬鹿しい!!）
　全くもって情けない彼らと己の姿に親指の爪をギリギリと噛む。
（…であるならば、この現状を逆手に取るしかありませんね。）
　ふと冷静さを取り戻したデミルルゴスはパンと軽く手を叩き注目を集めさせる。
「今の貴方達をアインズ様がご覧になられたらさぞや悲しまれることでしょうねぇ。戦意を喪失した戦士ほどみじめなものはありません。我々はアインズ様直々にご命令を受け作戦準備完了までローザリア

様を抑えるという大役を任されたのですよ?それをそのまま項垂れてアインズ様の御命令と信頼までをも裏切りになるおつもりですか?」

静かだが明確な怒りの色が混ざった厳しい言葉に守護者達はハッと我に返る。

統率者が居ない今、その次に有効な手段は彼らが狂おしい程に尊敬し信仰するアインズから見放されるという未来を匂わせる事である。

自分たちの創造主であり、《ユグドラシル》が終わった後もお隠れにならず自分たちのために残って下さった大変慈悲深い方に恩義を仇で返す様な真似は、死んでも許されない最大級の罪である。もしそんなことを仕出かそうとする輩がこのナザリックに居たならば、ナザリック中から非難を浴びその存在すら初めから無かったかのように全てが抹消されるだろう。

だからこそ、アインズに仕える最高位の家臣とも言える階層守護者の彼らにとって、今のデミウルゴスの発言は絶対に許せるものでは無く、熱い忠誠心の炎が燃え上がる。

「そんなこと…してたまるもんですかっ!!」

シャルティアが蝋のように蒼白な顔を少し赤らめて叫ぶ。それはシャルティアだけでなくほかの守護者達も同様に戦意を取り戻した様が見て取れた。

デミウルゴスは心の中で不敵に笑うも、彼らに再びやる気を取り戻させることができたことに少しばかり安堵する。

「でしたら、やるべきことがございましょう?」

鷹揚にデミウルゴスが手をローザリアの方へ向ける。未だに土煙が収まっていないことから、相当量の土が巻き上げられたのだろう。

「えぇ、皆まで言う必要はないわデミウルゴス。だけれど少し静かすぎないかしら。」

アルベドの指摘に緊張が張り詰める。

そう、おかしい。先程まであれだけ激しく攻防を繰り広げていたにもかかわらず、このやり取りが終わるまでの短い時間、一向に動く気配がなかったのだ。

一抹だった不安が大きなものに変わるのにそう時間はいらず、焦燥感が体を覆う。
「誰かあの土煙をどかしなさいっ!!」
「〈ブリザード・ブレス〉!!」
アルベドの指示に間髪入れずコキュートスがスキルを発動させた。
コキュートスから吹き出される極寒の暴風が瞬く間に世界を白銀の世界に染め上げていく。
切り裂くような冷気の奔流が跡形も無く土煙を吹き飛ばした。
「「!!?」」
そして驚愕の〝モノ〟を目にする。
「なんだ…あれは…」
息をするのも忘れ、誰かが静かに呟いた。

――――そこにあったのは、全身を変形させ巨大な砲身と化したローザリアの姿だった。

もうすでに発射体制は整っており、威力未知数の攻撃がいつでも撃てる様子だ。その証拠にローザリアから漏れ出した圧倒的熱量により吹雪が蒸発し、光を歪ませる陽炎(かげろう)が彼女を中心に発生させていた。
理性よりも先に生物の本能が体を突き動かさせた。〝逃げろ〟と。
「総員退――――」
一瞬だけ見えたローザリアの顔は嗤っていたように見えた。
彼女は何故彼らが無防備な状態の時を狙わなかったのか。否、わざと攻撃しなかったのである。
奴らが何をしようと自分の攻撃から逃れる術はない、その傲(おご)りは紛れもない真実であり、故の〝嗤い〟だったのだろう。
彼女の思惑通り、全てはもう遅いのだ。その結末からは何人たりとも逃れられない。
「――〈超高密度収束光(ガ・レーザア)・Ω(お目)〉。」
――――世界が赤く染まった。

悲劇：狂気の果てに

〝呪縛の森〟――場所は第六階層の北部、普段は誰も訪れようとはしない薄暗くジメジメとした不気味な雰囲気のこの森は、中心部の原生林とは違い魔法的な効果を持つ植物が多く群生する場所だ。

極太のツル植物が蛇の様に絡まり巨大な一本の木になった様なものが空を覆う程に鬱蒼と生い茂り、紫色の粘液をまるで唾液の様にダラダラと花弁からこぼす食虫植物ならぬ〝食人〟植物や、見たことも無いほど毒毒しい色味のキノコ達が呼吸をしているかのように胞子をあたりにばら撒いている。空を覆う木の枝に鈴なりに生(な)っている果実はどこか人面の様であり、何事も〝不気味〟の一言に尽きる。

その〝呪縛の森〟で作戦の要ともいえる転移魔法陣及びその術式の準備を進めていたアインズの瞳は、彼方の空へと釘付けにされていた。

「なんだ…この光は…!?」

偽りの夜空をまるで逢魔が時の夕暮れの様に染め上げる不吉な赤。僅かとたたずに消えた光は、大地を震わす轟音と全てを呑み込む衝撃波を連れてきた。

「うおっ！」

その凄まじい音と風に森は激しく揺さ振られ、少し開けた場所に居たアインズは直撃をくらい思わず両手で顔を庇った。しかしすぐに払いのけ周囲の状況を確認する。

細い木やツルは根元から見事に薙ぎ倒され、立ち残った木々もその葉を大量に落とされている。最重要の魔法陣は吹き飛ばされた枝や葉に覆われてしまっているがどうやら機能に支障は出ていないようだ。

（無事の様だな…しかしあの方角は！）

光が強く発せられた方角は、紛れもなく守護者達がローザリアと戦っていたと思われる方向だ。

一瞬の出来事ではあったが、１０キロメートル以上も離れたここにまで破壊の力を及ばせたあの光を間近で受けたのならば、無事でいら

れる保証などないに等しい。
アインズの脳裏に最悪の事態がよぎる。
すぐさま〈伝言(メッセージ)〉を起動し、全守護者達へオープンチャンネルで呼びかける。
『おい!・大丈夫か!?何があった!?状況を報告できる者はいるか!?おいっ誰か答えろ!!』
しかし返ってくるのはザーザーと耳障りなノイズばかりで一向に返答は無い。
奥歯をかみ砕かん勢いで歯を食いしばり、怒りの形相で雄叫びを上げる。
だがその怒りは他でもない、不甲斐ない自分自身に向けられたものだ。
「くそっ…くそが!!何度同じ過ちを繰り返すんだ、俺はっ!!!」
何度も何度も地面を足でけり上げ、抉られた地面が大量の土煙を巻き上げる。
しかしとどまらぬ激しい怒りの波は、〈精神操作無効化スキル〉に触れて強制的に鎮められる。
望まずして平常心を取り戻せたアインズは複雑ながらも状況を整理し、次の行動を考える。
『…ア…ズ様…ア…ンズ様』
その時、微かにだがはっきりと自分の名を呼ぶ声が聞こえた。
『その声はアルベドだな!…全員無事か?』
はやる気持ちを抑え、冷静に、決して焦りを見せてはならない。不安は伝染する、ましてや一国の王が真っ先に不安な心を見せては部下を更に不安に陥れてしまう。だから緊急事態であろうと、心が正反対であろうと、王として堂々と何も心配させぬよう振舞う。
『は…い…。アイン…様から賜わ…《身代わり人形(スケープ・ゴート)》…より全員…命…取りと…まし…。』
ノイズが酷く所々聞き取り辛い部分があったが、アルベド曰くどうやら全員無事な様だ。最悪の事態を想定して擦り切れていた心に届いた朗報で、ホッと胸が撫で下ろされる。

『そうか…それは本当に良かった…。ところでアルベド、原因は分からんがノイズが酷い。このままでは情報伝達に支障が出かねない。よって〈転移門(ゲート)〉を開いて直接そちらに向かう、座標を教えよ。』
『畏ま…し…。我々…居…のは中…部の闘技場…南西…5㎞程…離…た〝昔日(せきじつ)の森〟…った場所で待機…おり…す。』
そこでアルベドからの通信は途切れた。
第六階層はそのほぼ全てが森で覆われいるが、実は大小さまざまな森が合わせってできている。アインズが転移魔法陣を仕掛けた〝呪縛の森〟然り、アウラとマーレが住む巨大樹の足元にある文字通り巨大な木ばかりの〝巨大樹の森〟、これから向かうアルベド達が居るという〝昔日の森〟は緑豊かだった時の地球に存在していた植物を再現した森などなど、それぞれ呼称がついているので意外と場所を特定しやすいのだ。
アインズはアルベドに言われた〝昔日の森〟の位置を思い浮かべて〈転移門(ゲート)〉を開く。多少座標がずれていようとも近くまで出られれば彼らの気配を追って落ち合うことは出来よう。
黒々と渦を巻く〈転移門(ゲート)〉を前に、全身を緊張感が縛っていた。戦闘用の杖を強く握り込む。
この門をくぐればそこは〝昔日の森〟。即ち、戦闘区域である。潜り抜けた瞬間にローザリアと戦闘になる可能性はゼロではないし、大技を準備して待ち構えている可能性だってある。ここにきて戦闘を守護者達に任せていたツケを払う時が来たようだ。
なんにせよ、止まっている暇は無い。守護者達の状態の確認、周辺状況の確認、ローザリアの動向の確認、及び場合により戦闘…他にもやるべきことは山積みだ。
(まずは守護者達と合流することを優先しよう。保険も兼ねて…)
意を決し、出合い頭の戦闘にも対応できるよう今施せる最大限の防衛手段を自身にかけ危険地帯へと続く暗黒の門を潜り抜けた。
「こ…これは!!」
守護者達は探すまでもなくあっけない程に発見することは容易かった。彼らが決して軽症でないことも遠目から確認できる。

ついでに言えば、件の問題であるローザリアの姿は見えず、気配すらしない。
いや、今はそのどれもがどうでもいい。
「こんなことがあり得るのか!?」
アインズは〈転移門（ゲート）〉をくぐる前のことを全てほったらかして目の前の光景にひたすら唖然とする。
――何も、ない。
――見渡す限り、何も。
――何もかもが、無くなっている。
広大な焼け野原がそこには広がっていた。
発射地点と思われる場所から放射状に焼け野原は広がり、地面は半円状に抉れそれが第六階層の端まで永遠と続いている。更には直接的な被害を免れた周辺の森も、見渡す限りでは全てが炭ないし灰へとその身を変えてしまっている。
アインズはマジックキャスターという職業柄、かなりの数の魔法を習得している。そして不死者（アンデッド）というクラスが合わさり、その多くは黒魔術、呪術、死霊魔術など『死』と言う負の概念を操るものである。とくに生者に対して強く効果を発揮する魔法もあり、いずれも〝死の支配者〟に相応しい内容となっている。もちろんクラスに影響される魔法だけではなく、魔術師を極める者ならば誰でも習得するであろう上位の属性魔法（炎や雷、氷など）や、Ｌｖ１００でしか扱えない「世界を変える」とまで言われる超位魔法をいくつも操るなど、その能力は多岐にわたり強力だ。
だがそんなアインズでさえ目の前の光景を作り出せるようなスキルや魔法は所持していない。
確かにローザリアが地図を書き換えねばならないほど強力なスキルを所持していることは知っていた。だがそれは諸刃の剣であり、使用後は数時間のクールダウンと行動不可と言う重いペナルティが課せられたはずだ。ましてやあれの使用には相当な手順を踏む必要があるため、５人の守護者相手にそこまでの隙が晒せたとは到底思えない。もっと言えば、この光景を作り出したであろう張本人がここに居

ないことが、この推測を完全に否定している。
故に導き出される結論は、〝ただの強力な攻撃〟、だったと言う事になる。
余りに壮絶すぎる光景と信じがたい結論に、足から力が抜け崩れ落ちそうになる。
それでも己の立場と使命を思い出し、なんとか自分を奮い立たせる。
（落ち着け…落ち着くんだ、自分のやるべきことを見失ってはいけない…そう、まずは守護者達と落ち合って何があったのかを聞き出さなくては…。）
焦る心を落ち着かせるため、守護者たちの下へ急ぎ向かいながら無い肺へと深く空気を吸い込む。
「うっ!?」
激しい不快感が腹から喉へとこみ上げ、思わず口を押える。
（なんだこのむせ返るような濃度の魔力残滓は…アルベドとの〈伝言（メッセージ）〉でノイズが酷かった原因はこれなのか？）
必要性は要検証だが、やらないよりはマシだろうと魔力で汚染された空気を吸い込み過ぎないようにローブの裾を手に巻き付けて口元を抑えつつ、守護者達に向かう歩を早める。
「アインズ様!!」
主人の到着に心底嬉しそうな表情を浮かべる守護者達の姿は、その表情とは真逆に見るに堪えないものだった。
全身を血に濡らし、火傷、打撲、内出血等で皮膚は変色、骨折は当たり前で中には体の一部が欠損している者もいた。まさに満身創痍という言葉が体を表しているようだ。
それでも彼らは創造主と崇め奉るアインズを前にして、跪き崇拝の姿勢を崩さない。
愛しい彼らの痛々しい姿に目を背けたくなるが、彼らの努力があってこそ作戦の準備は整ったのだ。その事実を忘れてはならない。
「…皆面を上げよ、楽な姿勢をとるがよい。…よくぞ耐えた。そのように傷つきながらも己が使命を全うしたことを褒め称えよう。そな

たらの働きにより、今作戦の用意は全て整った。なにより誰一人として欠けることなく生き残ったことは最大級の功績である。守護者達よ、心から感謝する。ありがとう。」

彼らにとって最大の褒美であるアインズからの盛大な賛辞の言葉に、今までずっとため込んできた恐怖や不安と言った感情が温かく融かされ堰(せき)を切ったように涙を流し始めた。

アインズは一人ひとりの前に赴き、優しく肩を抱いて感謝の言葉を述べて回る。本当に感謝しているのだ。自分のためにここまで体を張ってくれる部下たちの存在は何物にも代えがたく、その忠誠心の厚さは自分一人に向けられるのがもったいない程だ。

少し落ち着いた頃合いを見計らい、当初の目的である状況の確認を行う。

「さて諸君、辛いだろうが状況把握のためもう暫し付き合ってくれぬか。ここで何があり、ローザリアはどこへ消えたか分かる者が居れば簡潔に教えてくれ。」

アインズの問いかけにアルベドが一歩踏み出て答える。戦闘の際に装備していた漆黒の鎧姿ではなく、いつもの美しい白いドレスを身に纏っていた。愛するアインズの前では奇麗な姿で居たいという女心なのだろうか。

「はっ。では守護者を代表して統括である私が申し上げます。ローザリア様はお恥ずかしながら我々の隙をつき、広範囲による超高火力で全てを焼き払われました。目測ですが規模にしておよそ第六階層の二割ほどの面積がこれにより消滅ないし蒸発したと思われます。ですが我々はあらかじめアインズ様より賜わりました《身代わり人形(スケープ・ゴート)》によって辛うじて一命をとりとめることができましたが、すでに限界の近かった我々はそのまま鬼神の如き猛攻に押し切られ敗北。最後にローザリア様を確認できたのは真東へ向かったとコキュートスが証言しております。」

アルベドの報告を受け、アインズは「ふぅむ」と少し考え込む。

「なぜ彼女はお前たちを完全に殺せる状況を見逃し東へと向かったか、心当たりはあるか？」

アインズの問いに、アルベドが少しだけ哀しみのこもった複雑な表情を浮かべる。
「確証はありませんが…恐らく〝飽きた〟のだと思います。」
「〝飽きた〟だと？」
予想外の答えが返ってきたことにアインズは少しばかり驚きを覚える。「見逃した」とか、「実は殺す余力がなかった」とかだと大変ありがたかったのだが、「飽きた」となるとこれいかに。
「はい。ローザリア様がここを去る際に、微（かす）かにですが『ツマラヌ』と確かに仰っていたのを耳にしました。」
はぁ、とため息をつきながら、アインズは困ったように片手で後頭部を撫でる。
「なるほどな…『ツマラヌ』ときたか。しかしまた随分と余裕そうな物言いをしてくれるよ、まったく。」
ナザリック最強を誇る五人を相手にしてまだ物足りないとは、感心を通り越してただただ呆れてしまう。
「彼女の気まぐれというのが非常に癪（しゃく）ではあるが、ともかく命が助かったのは喜ばしいことだ。さて、彼女が向かったという東だが、どこに向かったと思う。」
「多々ございますが…恐らく可能性として一番高いのは、ローザリア様の個人領域であります『薔薇の教会（ローゼン・チャペル）』だと思われます。」
「ふむ、アルベドもそう思うか。」
「はい。この場所からもそう遠くなく、ローザリア様と所縁（ゆかり）の深い場所ゆえ、何らかの感情が働いたのではないかと推測いたします。」
こちらの世界に来てから用事もないため訪れたことは一度も無かったが、アルベドの言葉でかつての記憶が思い出される。
『薔薇の教会（ローゼン・チャペル）』――ローザリアが住居として最後まで使用していた彼女の守護領域。
《ユグドラシル》時代、仮想の世界でも自分の信仰を忘れたくないという強い希望から、多くの仲間たちと協力して作り上げたられた彼女の現実（リアル）。
第六階層の真東に位置するそれは、鬱蒼とした森の中に唐突に表れ

る聖域である。
教会の周りは奇麗に整地され、柔らかい芝生と美しい花々が絶えず咲き誇る庭が広がる。その脇には小さいながらも清水が湧き出る泉と景色を楽しむために用意されたガゼボ（日本でいう東屋）が織り成す景観は完成されたパズルのようにピッタリと嵌り合い、それはそれは美しかった。
彼女は暇さえあれば教会へ戻り、庭の手入れや、花の様子を観察したりと仮想の世界ながらも大いに生活を楽しんでいた場所だ。
そこへ破壊の化身と化した彼女が今向かっている。
アインズには全く見当がつかなかった。狂い果て、かつての心のより所までをも破壊しようというのか。
「うむ、駄目だな。考えるだけ時間の無駄だ、手持ちの情報が少なすぎる。詳細は彼女にでも直接聞くことにしよう。情報の提供感謝する。」
そう述べたあと、守護者達の前に〈転移門（ゲート）〉を開いた。
「これは第九階層の医療病棟に通じている。皆その重症の体をゆっくり休めて療養に励むがよい。此度の務め、誠に大儀であった。」
しかし守護者達は動こうとしなかった。
アインズが不思議に思い見渡すと、彼らの表情が全てを物語っていた。不安、怯え、恐怖にも似たその表情からは快くアインズの提案を受け入れられないといった思いがひしひしと伝わってきたからだ。
アインズは困ったように溜息を吐く。
アルベドが沈黙を破るように、守護者達全員の思いを代表して言葉を発した。
「お言葉ですが、それではアインズ様お一人になってしまわれます！あまりに危険ではないでしょうか！どうか、どうかご再考を!!誰かお一人でもアインズ様の壁となれるよう御傍にお付けすることをお許しください!!」
アルベドの言う事はもっともだろう。至高の41人により創造された選ばれし九人の内、五人が束になってかかっても勝てなかった相手をたった一人で相手するというのは、ハッキリ言って〝愚か〟とし

か言いようがない。ましてやナザリックの支配者たる存在の一柱が我を失ってその座から離れてしまっている今、最後の一人であるアインズさえも失ってしまってはこのナザリック地下大墳墓を統治できる人物がいなくなってしまうからだ。配下としてこれ以上に避けたい未来は無く、無礼を承知で君主に考えを改めることを具申するのは部下の鑑と言えるほど至極当然の判断だ。

何よりも、アインズの物言いから「お前たちはもう用済みだ」と言われている気がしてならなかったのだ。

創造主から必要とされなくなることは即ち、〝死〟と同意義でありむしろそれ以上の恐怖を彼らに与える。

《ユグドラシル》そっくりの異世界に来て、ナザリック地下大墳墓に居るすべてのキャラクターとコミュニケーションが取れるようになってもう数か月、それなりの時間を共に過ごしてきたアインズはＮＰＣ達の思考の根底にそういった共通認識があることを知り、またそれが全ての原動力となっていることも理解した。

だからこそアインズは彼らが何を考えているのか手に取るようにわかった。

――――「アインズ様が死ぬくらいなら、代わりに自分が死ぬ。」

見上げた自己犠牲の精神だ。

だがそれでは全員が生き残った意味がないのだ。それを彼らはまだ理解できていない。

「大馬鹿者が!!」

明確な怒気のこもった咆哮に、ビクリと全員が肩を震わせる。

それから静かにアインズは言葉を繋ぐ。

「もう少し冷静になれ、お前たち。よいか?今のお前たちを全員侍（はべ）らせたところで肉壁どころか弾除けにもならん。いたずらに死人を増やすだけだ。それに手負いの者と共に戦ったところで気になって集中することなどできる訳がないだろう。アンデッドの私が言うのも可笑しいが、私はナザリックに住む者の死体など誰一人として見たくはないし、出させもしない。今のお前たちにできることは私の犠牲になることではなく、しっかりと体を治し次の仕事をこなすこと

だ。御覧の通り、ローザリアのお陰で暫くは仕事に困らんだろうからな。」
皮肉も交えて結構良いことを言ったつもりなのだが、自己犠牲を第一に置いている彼らにはいまいちピンとこないらしく、納得できるようなできないような微妙な表情を浮かべている。
アインズは心の中で盛大に溜息をつき、とっておきの脅し文句を垂れる。
「…それとも何か？お前たちはこの私が〝負ける〟とでも思っているのか？」
「「め、滅相もございませんっ!!」」
精一杯不機嫌そうに言ったことが効果的だったらしく、目に見えて守護者達が慌てている。
「さぁ、話が分かったなら門が閉じる前にさっさと動け。一人で立てぬものは私が手を貸そう。」
守護者達を次々と〈転移門（ゲート）〉に通していき、最後に一人アルベドが名残惜しそうにアインズを見つめている。
「アインズ様…あの…その…。」
珍しく口ごもる彼女は何かを言いたげに一生懸命口を動かすが、言葉がついてこない。
『モモンガを愛している』という呪いをその身に受けながら、それを事実であるかのように誰よりもアインズの事を考え、悶え、愛してきたアルベドはどうしても心配で堪らなかったのだ。そう、それはまるで戦地に赴く夫を見送る妻の様に…え？目を覚ませ？一体何を仰っているのかさっぱりですわ。
「何も心配することはない、後の一切を全て私に任せよ。必ずローザリアを止めて見せる。」
アインズの自信に満ちた言葉に何も言えなくなってしまったアルベドは最後に「どうかご無事で。」と残し、恭しく頭を下げながら門の中に姿を消した。
全員通過したことを確認し、手を軽く握るような仕草で門を閉じる。

誰もいないことを改めて確認し、凝り固まった背筋を伸ばす様に思いっきり背伸びをした。
「はーぁ、あんだけ大見得切ったんだ。…絶対に止めて見せますよ、ローザリアさん。」
ポツリと呟くように、しかし決して決意が揺らがぬように声に出して自分を奮い立たせる。
「さて『薔薇の教会(ローゼン・チャペル)』に行くには東の方角だけど…あー、あれだな、絶対…。」
焼け野原の先、炭と化した東の森に一本の道が作られていた。
しかしそれは道と言うよりも〝正面にあった物が邪魔だからぶっ飛ばして進んだ跡〟にしか見えない。
「まぁ、とても分かり易くて助かりますよ。」
アインズは〈飛行(フライ)〉を発動させ、最高速度でその跡を追う。
まるで定規を使って線を引いたかのようなその跡は、森と言う緑のキャンパスに白い絵の具で一本の線が描かれているようだった。
〝囀(さえず)りの森〟、〝精霊の森〟を超えていよいよ『薔薇の教会(ローゼン・チャペル)』がある〝夢咲(ゆめさき)の森〟付近に突入したとき、明らかに空気が変わったのを肌で感じた。
空気中には焼け野原で蔓延していたむせ返るような濃さの魔力の残滓と同じものが漂っており、ローザリアの存在が近いことを表している。
目的の場所へ近づくにつれその濃度は更に濃くなり、今では色がついて目に見えそうなほどだ。
(見えた!…ん?どうした、これは…?)
目的の教会が見えた時、同時に目的の人物も視界に捉えた。だが何やら様子がおかしい。
アインズは当初、教会へと到着した彼女はその破壊衝動のままに破壊の限りを尽くしているものだと思っていた。
ところが現実はと言えば、想像とかけ離れた姿でローザリアはそこに居た。
教会の入り口から数メートル離れた位置で無防備に立ち尽くす彼

女を、地中から生えてきたとしか言いようがない無数の太い電線がグルグルと何重にも体に巻き付いて、雁字搦めにしていたのだ。
　余りにも異様な光景だったが、彼女が急に暴れ出すような気配は感じられなかったため、十分注意は払いつつも彼女の後方１０メートルほどの位置にアインズは静かに降り立った。着陸した時、心なしかアインズの影が一瞬だけ揺らいだように見えたが、そんなことよりも目の前の光景の方が遥かに気になる。
（教会が傷つけられていないのは幸いだが、どうしてこんなことに。一体彼女に何があったんだ？）
「ヨウヤク、来タカ。」
「!!」
　アインズが来ることを待ちわびていたかのような口ぶりで、突如目の前の存在が話しかけてきた。
　彼女の死角とはいえ気配も殺さずに近づいたのだ、自分の存在に気が付くのは当然として、今までほぼ絶叫しか発していなかった彼女側からまともなコンタクトを取ってくるとは予想外だった。
「これは驚いたな…まさか言葉を解するとは思わなかったぞ。」
「ハハ、ハ言ッテクレルジャ、ナイカ。」
　アインズは気安い返事で答えるが、それは彼女とコミュニケーションが取れかどうかを確かめるためだ。そして彼女はそれに答えた。会話が成立すると分かった以上、なんとしてでも彼女との会話で情報を引き出したいところだ。
「しかしまた随分と…いい趣味をしているな。君は縛られるのが好きだったのか？」
「ハハハッマサカ！ソンナ訳ナイダロウ？マンマトシテヤラレタノサ！」
　表情が見えないためどういう感情なのかは定かではないが、彼女はなぜか楽しそうに話す。
「ほう？してやられたとは、私以外にもお前を罠に嵌める様な者がいたということか？」
　アインズの記憶が正しければ、守護者を含め全員がアインズを残し

この第六階層から避難したはずだ。そんな中で王命に背いてまで彼女をこのような状況に陥れる様な者が居たとは考えにくい。なにより彼女を縛る存在が異過ぎる。あんな物で縛る拘束魔法は自分ですら知らない。

「ヒヒッ、アアソウサ。手ッ取リ早ク〝ヤツ〟ヲ黙ラセヨウト思ッテ教会(コイツ)ヲブッ壊シテヤロウト来テミレバ、寧ロ誘イ込ムノガ狙イダッタトハ。見事ニ一杯食ワサレタゼ。オ陰デコンナ有様ニサレチマッタ。〝俺〟ノ力(ちから)デモビクトモシナイナンテ流石ニ恐レ入ッタヨ。」

呆れたように言う彼女は、やはりどこか楽しそうである。

いや、それよりも重要なのは今彼女が動けないという事実を手にする事が出来た。もちろん嘘である可能性もあるが、これはまたとないチャンスである。今のうちに更に情報を引き出し、戦闘を有利に備える事が出来るだろう。

「なるほどな。さて、ここで一つ聞いておきたいんだが――――お前は誰だ。」

先程までの楽しげな雰囲気が、彼女からはたと消えた。沈黙が二人の間に訪れる。

ここまで彼女と会話をして気が付かない筈が無い。

彼女の発する声は紛れもなくローザリア本人そのものだ。だがその声音にかつての高潔さは無く、凛としながらも母のようであった優しさは微塵も感じ取れない。そもそも口調がまるで別人だ。

だからいま自分と言葉を交わしているのがローザリア本人でないことは一目瞭然だった。では誰なのだ?彼女の口を借り、声を借り、体まで乗っ取って好き放題している目の前の存在は、いったい〝誰〟だ?

アインズはその疑問に対する答えを一つだけ導き出していた。しかしそれは余りにも理解の範疇を超え過ぎている。スキルの変質は前例があるためまだ納得の余地はあった、だがこれは、もしこれが本当に答えなら、それはあってはならない現象だ。

(あり得るのか、本当にそんなことが…しかし…)

沈黙を先に破ったのは彼女だった。しかして以前よりも楽しそう

に彼女は嗤う。
「ククッ…カカカッ！俺ガ誰カダッテ？意地悪ナ質問ヲシテクレルジャァナイカ、モウ分カッテルイクセニ。」
その一言で、アインズはついに認めざる負えなくなってしまった。否定し続けたその答えを。
「そうか、やはりそうなんだな…貴様は――――〝〈乱射狂い（トリガー・ハッピー）〉〟!!」

驚愕の声でアインズはその名を叫んだ。
〝スキルの自我保有化〟――それが導き出した答えだった。
この異世界に来てからと言うもの、とても多くの信じがたい事柄が起きた。だがそれらのほとんどは次第に慣れたり、すぐに対応できたりする言ってしまえば取るに足らないものだった。いまなら柱に掘られた石悪魔（ガーゴイル）が急に話しかけてきたとしても、鼻歌交じりに挨拶を交わせるだろう。
だがこの問題はその比ではない。何故ならもしこれが実現されてしまえばもはや自分の身を完全に守ることなど事実上不可能になってしまうからだ。
保有する数百ものスキルにいつどんな時に自我が芽生え、意思を奪われ、自分が自分でなくなってしまう恐怖に怯える日々を送らなくてはならない。そしてそれは他人でも第三者でもなく自分の身の内から起こるため、防ぐ手段などありはしない。
だからアインズは祈るしかなかった。あれだけ核心めいて言った言葉をを鼻で笑う様に彼女の口から「ハズレ」と言ってくれることを。こんなバカげた考えを認めることが無いように。
「フフ、大正解ダヨモモンガ。イヤ、今ハ『アインズ』ダッタカナ？」
しかし現実は非情だった。
アインズは絶望し、彼女は見事に自分の正体を見破った正解者へと称賛の拍手を送る。

（拍手だと？）

その一点で、衝撃の事実に打ちのめされ失われかけた思考力が生気を取り戻した。

「ヒヒッ。アーァ…イイ加減賢（かしこ）ソウニ喋ルノモメンドクセェ。コッカラハ素デイカセテモラウゼ。」

気づいた時には彼女を覆いつくす様に縛り付けていた無数の電線がボトボトと力なく解（ほど）け落ちていた。どうやって？いつの間に？いや今はそんなことなどどうでもいい。大事なのは狂化の力でも抜け出せなかった強力な拘束から彼女が解放されてしまったという現実だ。

「ナンダァ？間抜ケナ面シテ、豆鉄砲ナラ売リ切レダヨ。ソレトモテメェハ俺ガイツマデモ捕マッテル馬鹿ダトデモ思ッテタノカ？」

アインズはここにきてようやく己の失態に気付かされ、心の中で大きく舌打ちをする。

情報戦を第一とするアインズは、意思疎通が困難であった相手とコミュニケーションが取れると分かった以上、当然情報を聞き出してくることはかって仲間であった彼女なら予想していたことだろう。そしてまんまと乗せられたアインズはベラベラと喋らせる隙を作り、彼女に時間を与えてしまったのだ。

彼女は体が自由になったことをアピールするように首をバキバキと鳴らし、人体ではありえないような挙動で全身の関節を動かす。

「ッタク、クソアマガ、ガッチガチニ縛リヤガッテ…。サーテ、俺ノ正体ヲ見破ッタアインズ君ニハ〝イイモノ〟ヲ見セテヤロウ。」

そしておもむろに両手を合わせ、開いた。その上には、見覚えのある十字架が乗せられていた。

「それは…《慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）》、なのか？」

「ソ、《慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）》。イヨイヨオ前ガ相手ダカラナ、俺モヨウヤク本気ヲ出シテヤロウト思ッテサ。オイ、起キロ。」

トリガー・ハッピーの言う通り、それは紛れもなく《慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）》だった。だがそれはアインズの知っているものと似ても似つかない有様をしていた。

神聖さの象徴である透き通るような純白は失われ、その身は汚泥にさらされたかのように黒く穢れ、淀んだ闇を宿していた。かつての輝きは欠片も残されていない。

ローザリアに指の関節でコツコツと表面を叩かれると、十字に交差する部分にあしらわれた深紅の薔薇が呼応するように淡く光った。

「ふあーぁ…おはようございまふ…んぁ？あれ、えーっと…メモリーの調子ガガガ…ここは誰？私はどこ？なんだか気持ち悪いのが体の中に入って来たとこまでは覚えてるんだけど…」

マーシーの発する言葉に連動して、薔薇がチカチカと点滅する。

「オウ、シカト決メ込ンデンジャネエヨ。」

ドスの効いた声で呼びかけられ、思わず小さな体をびくつかせる。

「おおっとこれはこれは、寝起きで目が眩んでおりました。ご機嫌麗しゅうございます（？）。あーその、大変申し上げにくいんですけど、一体全体どちら様でしょうか？」

トリガー・ハッピーの雰囲気が剣呑なものに一変する。

「ア゛ァ゛？本格的ニ逝ッチマッテンノカ？テメエヲ起動デキンノハ一人シカイネエダロウガ。ソレトモ、ゴ主人様ノ顔モ覚エラレナイポンコツハ今スグ廃棄物（スクラップ）ニナルコトガオ望ミカナァ？」

「なんとぉっ!?」

思いがけず全てを悟ったマーシーは、ギリギリと身を締め付ける彼女の握力が耐久力の限界を超えないうちに取り急ぎ弁明する。

「はっはまさか、寝起きの軽い冗談（グッドモーニング・ジョーク）ってやつですよ〝ローザリア様〟。いえいえ、なんだか以前に見た時と随分と雰囲気が違ったものですから、ちょっと混乱しちゃっただけですテヘペロ。そう、以前と比べてえーっと、とても…その、スレンダーになりましたね。へへへ（おいっ!!あの豊満な双丘はどこに行ったんだあああああ！私の天国（ヘヴン）んんんん!!）」

「ケッ、舌ダケハ相変ワラズヨク回ルミタイダナ。オラ、トットト変形（トランスフォーム）シヤガレ。」

「おんやぁ？私のトランスフォームはマスターの声帯認証が鍵（キー）であることはもちろんご存知でしょう??さあさあ、いつもの様にカッコよく

キメ台詞を…うぐぇぇっ」
　再び暴力的に体を握られ、マーシーはヒキガエルの様な呻き声を上げる。
「阿保カテメェ？誰ガヤルカヨソンナコト。…イイ加減俺ノ我慢ガ効ク内ニ言ウコト聞イテオケヨ？」
　先程よりも更にドスの効いた忠告を受け、小さい体を更に小さく竦(すく)ませる羽目になった。ご主人様ってこんなに怖かったっけなぁ？
「ヒエッ…ウス、サーッセンシタ。エー…オホン。それでは、改めまして…自立展開シークエンス(オート・マニピュレート)を発動します。武器展開コードを声帯認証から自動操縦モードに切り替えて実行。…切り替え完了、《慈悲の十字架(ザ・クロス・オブ・マーシー)》のデストロイモード起動準備に入りまーす。カウントダウン開始、１０，９，８…」
「待てっ！止まるんだ《慈悲の十字架(ザ・クロス・オブ・マーシー)》!!」
「４，３…およ？」
　予想だにしていなかった突然の第三者の介入により、中途半端な状態で変形が止められる。
　声の聞こえた方へと視覚センサーを向けるとなにやら見覚えのある骸骨が目に入った。
「おや、貴方はご主人様のお友達のモモンガさんではないですか！こんなところで会うなんて、いやはや奇遇ですねー。あれ？いや、もっと最近会ったようななかったような…？んー、まぁいいや、ご主人様に怒られちゃいますんでお話はまた後程…」
「待てと言っている！」
　アインズは再度武器形態へと移行するマーシーを再び呼び止めた。
「んもう！何ですか!?お話は後でって言ったじゃないですかっ！ほらぁ！こうしてる今もご主人様が私を握る力がどんどんと強くウオオ…」
「少しでいい、話を聞いて欲しいのだ！今君が主人と言っている人物は君の本当の主人ではない！この異世界に歪められた存在が体を乗っ取り操っている！私はその存在から彼女を開放したい。君もローザリアに忠を尽くす武器ならば、私と共闘し彼女を救ってはくれ

ないか!?お前と一緒なら必ずローザリアを取り戻せる!」
　これは賭けだ。《慈悲の十字架(ザ・クロス・オブ・マーシー)》もこの異世界で自我を獲得し、武器でありながら一人の人間のようにコミュニケーションをとることが可能となった。つまり感情があり心がある。そこへ本来忠を尽くさねばならない相手が未曽有の危機に瀕していることを訴えかけこちら側に引き込められれば、ヤツにとって最強の戦力を奪う事が出来る。

「へー?」

　しかし返ってきたのは不気味なほど何の感情も含まれていない感嘆詞だけだった。
「なっ、それだけか?」
　驚くほど呆気ない返答は流石に予想しておらず、アインズは思わず聞き返してしまった。しかしそれが仇となり、アインズの意図を汲み取ったマーシーは幾分か声のトーンを下げ、冷ややかに告げる。
「モモンガさん、何か勘違いしてませんか?」
　声は冷ややかなままに、変形をゆっくりと再開させる。
「私はローザリア様に使役されるべく造られた、たった一つの武器(ウェポン)です。ですからローザリア様に仕える誇りこそ有れそこに私の意思は無く、我が願い、我が喜びはローザリア様と等しくあります。即ち今のローザリア様が何処の誰であろうと、ローザリア様というだけで私には価値があり、ご主人様の願いを叶えるべく己の力を尽くすだけなのです。」
　とうとう堪え切れなくなったのか、トリガー・ハッピーは大きく口を開けて盛大に嗤う。
「キハハハハッ!ダァッテサ、アインズゥ?当テガ外レタナア?」
　両手を軽く広げ挑発する姿は、さも「ザマアミロ」と言っているかのようだ。
(くそっ、こいつ初めからわかっていて口を挟まなかったな…!)
　何度目になるかわからない舌打ちを心の中でし、アインズは憎々し

気にローザリアを睨みつける。
「当テガ外レテ声モ出ネェカ。ンジャア最後ニ冥途ノ土産デ教エテヤロウ。俺ハ少々特殊デネ、自我自体ハコッチニ来ル〝前カラ〟有ッタノサ。」
「なにっ!?それはどういう意味だ!」
アインズの懸念を覆す衝撃的な発言を受け、思わず食い気味に問いただす。

――――ザンッッッ!!!!

しかしトリガー・ハッピーは一瞬と言う言葉でも足りないほどの信じられない速度で距離を詰め、いつの間にか身の丈ほどもある大砲へと変形させていた《慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）》を胴体へと突き付けた。
避ける隙など、何処にもない。
「言ッタダロウ?冥途ノ土産ダッテ。」
眩いばかりの赤い光が二人を包み込み、アインズの背後にあった森は跡形も無く蒸発する。
光の収まるころには広大な焼け野原が広がり、真正面に立っていた人物は足首から下を残して全て消え去っていた。
「ケッ、ナァンダ全然大シタコトナイジャネェカ。アノ虫共ヨリ歯ゴタエガ有ルト思ッタカラ《慈悲の十字架（ザ・クロス・オブ・マーシー）》マデ出シテヤッタノニ、マサカ虫以下トハナ、ガッカリダヨ。期待外レモイイトコダ。」
「あーあ、見事に一面焼け野原ですねご主人様。けど、本当によかったんですか?命令通りに消し飛ばしちゃいましたけど、ご友人だったんでしょう?」
「アァ?知ラネェヨソンナモン、俺ニトッチャ全員ゴミダ。ハーツマンネ…コレカラドウシタモンカナァ。」
マーシーを元の十字架の形に戻すと、どこからともなく数珠が生え首からぶら下げた。
「ソウダナァ…ヨシ、取リ敢エズココニ居ル奴ラ全員ブッ殺シテ、ソノ

後ハ外ノ世界モ塵(みなごろし)ニシヨウ。ヒヒッ、〝アインズハ死ンダ〟ナンテ言ッタラ守護者(アインツラ)ドンナ顔スルカナァ？コリャ楽シミダ。」

そしてそのまま腕を組み人の様に考える真似事をしながら焼け野原と化した荒れ地を歩き出した。

「ッ!?」

しかし超人的な反応速度で歩んでいた足を止めて後ろに高速の回し蹴りを放ち、すぐ背後まで迫ってきていた巨大な火球をその衝撃波で消し飛ばす。

「ナンダァ…？何処カラ撃ッテキヤガッタ」

気配も無く突然攻撃を受け、全身に鋭い緊張感が張り詰める。

臨戦態勢をとりつつ、カメレオンのようにギョロギョロと左右別々に瞳が動き回らせ、くまなく火球が飛んできたであろう方向を観察するが、容疑者となる様な人物は見つけられない。

真っ先にアインズを仕留め損ねたかと考えたが、先程の手応えは確かなものであり、依然としてヤツの足首は数十メートル後ろに残されていることからも考えにくい。

では一体誰が？気配も感じさせず一体何処から？

その瞳に映る光景の大半を占めるのは、焼け野原の只中にありながらも、神聖な輝きを放つ純白の教会、『薔薇の教会(ローゼン・チャペル)』。

確証は無い、けれど直感が告げている。

「ッチ、ヤッパブッ壊シテオクベキダッタナ。」

ローザリアは再び《慈悲の十字架(ザ・クロス・オブ・マーシー)》を身の丈ほどもあるバスターライフルに変形させ、教会へとロックオンする。

「ウオッ!?」

しかし照準を合わせた途端、視界が〝ＥＲＲＯＲ〟の文字で赤く染まり、バスターライフルをつがえていた両腕は強力な重力に押さえつけられるかのように地面へと強制的に引きずりおろされる。

誰の所業かなど、考えるまでも無く一目瞭然。

反抗する余地を悉く断ち切り、心を折り、絶望の淵へと追いやったと思っていたのに、最後までとことん諦めの悪い、心底腹立たしい女

！

《あなたに『薔薇の教会（ローゼン・チャペル）』は、絶対に壊させないっ!!!》

「ギギギィ！マダ抗ウカ！ローーザリアア!!!」

激昂の叫びをあげるトリガー・ハッピーだが、両手はおろか、気付けば両足までもが制御不能に陥り、立っていることすらままならなくなって跪くように姿勢が崩れ落ちた。

「情けない姿だなトリガー・ハッピーよ。その様子だと、まだ君の中で彼女は頑張っていると見える。」

どこからともなくもうこの世には存在しない筈の声が木霊する。

「アァ…最悪ノタイミングデ出テクルトハ、アンタモイイ神経シテルヨ、アインズゥ！」

バスターライフルでの攻撃は諦め、声の主へと自身の体に備え付けられた砲門からやたらめったらにレーザーを放った。しかしそのどれもは真正面にある筈の教会を避ける様な軌道を描いて飛び、背後へと着弾して大爆発を起こす。

「チクショウメ!!」

トリガー・ハッピーは途端に思い道理に動かなくなった体に悪態をつきつつ、前方を睨みつける。

その視線の先、教会の一番高い位置にある鐘楼（しょうろう）の影から浮かび上がるようにアインズは現れた。

「もう一つ言えば、索敵機能も働いていないな。今の攻撃で一点攻撃をしてこなかったのも、数を撃てば当たると思ったからだろう？彼女の頑張りでその算段も外れたようだが、俺の位置が分かっていたならば収束させていた筈だ。まあそれも最初の工作に気付けていない時点で察しはついていた。何と言ったかな？…ああ、そうそう〝期待外れもいいとこだ〟。」

アインズはおもむろに懐に手を入れ、取り出したのは《身代わり人形（スケープ・ゴート）》とはまた違った骨で全身が構成されているなんとも

不格好な形をした人形だった。
それを目にしたトリガー・ハッピーは悔し気に瞳を細める。
「《虚影の骸人形(リアリティー・シャドウ)》カ…ツクヅクムカツク野郎ダナ、テメェ。」
《虚影の骸人形(リアリティー・シャドウ)》は使用者の見た目、現在のステータス、装備品等の情報全てをコピーした虚像を作り出すマジックアイテムだ。本人と寸分違わないニセモノを作り出せるのがこのアイテムの強みだが、欠点が一つある。
それは一切〝動かない〟と言う事だ。所詮は使用者の皮を被った只の人形であり、【傀儡師(パペット・マスター)】の上位職でもない限りそれを有効に活用できることはまず無い。
「イツカラ入レ替ワッテヤガッタ。」
「無論、初めからだとも。お前の正体にはある程度当たりをつけて色々用意していた。もし見破られて破壊された場合は他の策を実行したまでだが、存外素直な性格をしているのだなお前は。」
だが、今回に限りそのフェイクは有効に働いたようだ。アインズの言った通り初めから彼女を〈乱射狂い(トリガー・ハッピー)〉と仮定すれば、攻撃以外の一切の行動が制限される状況において索敵機能も働かないと予想できるため、事実彼女には本物にしか見えなかっただろう。到着と同時に人形を起動し、影の中を移動する〈影縫い〉を使うことで殆ど違和感なく入れ替わったのだ。
「少し考えればわかると思うがな。俺を殺そうとしてくる相手を馬鹿みたいにゼロ距離まで近づけると思うか？」
やれやれと言わんばかりにアインズは両手をやるせなく広げる。しかし内心はそうも言っていられなかった。
何故ならば、あの人形は現状できる全ての加護や防御を自身に掛けた状態を引き継いでいた。にもかかわらず、一瞬で吹き飛ばされてしまったのだ。彼女のステータスがいよいよ化け物じみていることの証明をまざまざと見せつけられたようなものである。
〝当たれば死〟こんなに分かり易い立場は《ユグドラシル》を始めた初期の頃を思い出す。
しかし今はそれと比べ物にならない状況だ。《ユグドラシル》では

たとえ死んだとしてもデスペナルティがつくだけで、本質的な死は無かった。だがこの異世界では勝手が違う可能性は大いにある。デスペナルティすら発生せずそのまま本当に死ぬのだとしたら、このナザリックを守るものとして絶対に〝ＤＥＴＨ〟は避けなければならない。

「彼女の頑張りを無駄にするわけにはいかない。この好機、存分に使わせてもらう。」

反撃の狼煙をあげたアインズは、両手の間に眩いばかりの雷を奔らせる。

両手から零れ落ちた蒼雷は大気を跼天蹐地（きょくてんせきち）と震えさせ、万物万象を粉砕せしその輝きは、真に極地へと至った者のみが行使する神雷である。

膨大な魔力が込められた雷はその形を独鈷（ヴァジュラ）へと変え、アインズはそれを大きく振りかぶる。

「食らうがいい、〈天帝釈地雷独鈷（てんていしゃくちらいどっこ）〉！」

豪速で放たれた雷槍は空中でいくつにも分裂し、雨の様に降り注がれる。

「ヌゥアアアッ!!小癪ナァ！」

無数の槍はトリガー・ハッピーの体を容赦なく貫き、またそれ以外の槍も深々と周りの地面へと突き刺さる。当然それだけでは終わらない、槍と槍の間を稲妻が奔り、まるで網のように張り巡らされる。

アインズが放った〈天帝釈地雷独鈷（てんていしゃくちらいどっこ）〉は、第十位階の攻撃魔法である。見た通りの雷属性攻撃であり、衝突時の超強力な刺突ダメージ及び範囲内の敵に超強力な持続ダメージ＋行動遅延Ｖ、帯電状態Ｖ、気絶確立倍化付与といった様々なデバフを被弾者及び効果範囲内に居る者に与える効果を持つ。

アインズの持つ魔法の中でも上位に食い込む強力な攻撃魔法だが、これで彼女の〈乱射狂い（トリガー・ハッピー）〉が解除できるとは思っていない。目的は後述のデバフの方だ。ダメージは通らなくとも何の防衛能力も無い今の彼女に対して、デバフはモロに刺さる筈だ。

アインズは鐘楼から飛び、動けなくなったトリガー・ハッピーのす

ぐそばへと降り立つ。
「何とでも言うがいい。いかに圧倒的な力を手に入れようと、それが自らの制御を外れたものならば〝無力〟であると知れ！〈転移門（ゲート）〉!!」
動けないトリガー・ハッピーの背後に黒く渦巻く異次元の門が開かれる。
すかさずアインズは〈伝言（メッセージ）〉を飛ばす。
『今だっ!!!!』
「ウォオッ!?」
アインズの叫びと同時に次元の門から何本もの太い植物の蔓（つる）が飛び出し、触手の様に何重にもトリガー・ハッピーの体に巻き付く。そしていとも容易く持ち上げ門の中に引き摺り込んだ。
アインズも同時に門を通り抜け自分が開いた転移門（ゲート）が逃げ道になってしまわないようすぐに閉じた。
目の前には無数の蔓により地面へと磔にされるトリガー・ハッピーの姿があった。そしてその周りを取り囲むように複数の巨大な蛇のような姿をした植物属モンスターが体から一般的な木の幹ほどもある蔓を彼女に向け伸ばしていた。
この巨大なモンスターは『プレデター・ギガ・プランツ』と呼ばれ、ここ呪縛の森の生態系の頂点に立つ存在である。Ｌｖ８０代の高レベルモンスターであり、《ユグドラシル》では自然には存在しないギルドメンバーに作られたモンスターだ。
その能力は高く、攻撃力守備力共に高ステータスで、且つあらゆる弱体系スキルに耐性を持つ。スキルもそこらの同レベルＭＯＢに比べはるかに多く所持し、その多くは毒などの状態異常系で、見た目に反しじわじわと相手を嬲り殺す様な戦い方を好む。
彼らは今回の作戦の肝とも呼べる存在であり、故にこの場所で策を実行せねばならなかった。
「ウ、グアアアアアア!!」
〈天帝釈地雷独鈷（てんていしゃくちらいどっこ）〉の効果が切れたのか、トリガーハッピーが暴れ始める。
「させんよ。」

しかしそれを見越していない訳が無いアインズは、次の手を打つ。
アインズが指を鳴らし、あらかじめ用意しておいた魔法を起動した。すると、彼女の頭上数ｍの位置に黄色く輝くを小さな魔法陣が現れ、大量の木の実が次々と転送されてはトリガーハッピー目掛けて落ちていく。
果汁の多い木の実であったためか、落下の衝撃でその実が破裂し辺り一面を気味の悪い紫色に染め上げる。
びちゃびちゃと全身を紫色に濡らすトリガーハッピーだが、お構いなしに抜け出そうともがき暴れるも、徐々にその動きが鈍くなっていく。最期にはピクリとも動かなくなってしまった。
「クソ…俺ニ、何ヲシタっ!!」
体は動かなくとも眼孔は鋭く赤く煌めき、アインズを睨みつける。
それにひるむ素振りもなく、アインズは軽く答える。
「なに、これだよ。」
そうして懐から取り出したのは、今もトリガーハッピーに降り注ぐ木の実の一つだった。
「〝帰さずの実〟。まさか知らぬわけではあるまい？」
「アア…チクショウ、チクショオオ！」
アインズの言った〝帰さずの実〟とはこの森に多く群生するツル植物が実をつける果実である。
呪縛の森のそこかしこに転がっており、その実は皺ひとつないツルりとした見た目をしている。このどこにでもある様ななんの変哲もない実にはある特徴がある。それは非常に脆いと言う点だ。落ちた衝撃で割れる、踏んだだけで割れる、触っただけで割れる、最悪触らなくても割れる。
そんな虚弱な割れた実の中からは、見た目からは想像できないほど大量の果汁をあたりに一面にぶちまけるのだ。
この実が〝帰さずの実〟と呼ばれる所以はこの果汁にある。この紫色の果汁には『浴びた者のＭＰを少し奪取する。』というデバフ効果がついている。その効果の通り、木の実一つ当たりのＭＰ奪取量は微々たるものだ、１００レベルのプレイヤーにとって到底脅威とはな

りえない。ただし、このデバフ効果は何重にも重なる（・・・・・・）のだ。
　たとえ一個では何ともなくとも、これが１００、２００と重なった時、そのＭＰ奪取量は看過できないものになる。そして真に恐ろしいのはＭＰ奪取ではない。この果汁はＭＰを一定数吸い取ると蒸発するのだが、その時とても強烈な甘い匂いを放つ。この甘い匂いはこの森の頂点に君臨するプレデター・ギガ・プランツを刺激し、招き寄せるのだ。
　ＭＰが少ない状態で、プレデター・ギガ・プランツとの戦闘を強いられるのは例え熟練のプレイヤーであったとしても勝利するのは難しい。故に、この森に入ったものを生きては帰さない、〝帰さずの実〟なのである。
　もちろん理屈さえ分かってしまえば対策など容易なのだが、今回に限りトリガーハッピーに対して非常に有効となる。
「貴様の様に、体を動かすのにも逐一魔力を消費せねばならない者にとっては地獄の様な効果だろう。さぁ、存分に味わうがいい。」
　再び指を鳴らすと先程の倍の量が魔法陣から零れ落ち、もはや雨の様である。
　ここまで執拗に彼女の魔力を奪う理由は、いかに魔力を奪えると言っても一過性のものにすぎず、彼女の場合時間経過で魔力を大量に生産することが可能なため、行動を制限するためには継続的にこの果汁を浴びせ続けなければならないからだ。
「さて、頃合いか。」
　うんともすんとも言わなくなったトリガーハッピーの姿を確認し、アインズは作戦を次の段階へと移行させる。
「皆これより魔法陣を起動する、私の掛け声と同時に彼女の拘束を解け。安心しろ、もう奴は動けん。でなければお前たちの大事な触手が溶け落ちてしまうからな。」
　アインズは片膝をつき、両手を地面へとつけると魔力を地面に描かれた魔法陣へと流した。
「物質転送魔法陣起動準備、第二階層から第六階層までの臨時バイパ

スを形成、初期転送座標を第五十八トラップルームの底面へ固定、開通後は第六層に形成したループ機構へ移行させ、終了命令まで継続。ギルドリーダー権限にてこれらの一時的変更を承認する。」

　アインズから流れ出る魔力は、水が細いホゾをなぞる様に魔法陣の模様へと流れ込み、その姿を徐々に露わにしていく。それは地面だけではなく空中にも表れ、合わせ鏡のようにトリガーハッピーを挟み込む。

　全ての模様に魔力が流れ込んだ時、魔法陣はトリガー・ハッピーの頭上にある小さな魔法陣と同様に黄色く輝き、辺りを明るく照らした。

「転送魔法陣形成完了。これより起動する、皆準備はいいか!」

　アインズの問いかけに、周囲のプレデター・ギガ・プランツ達は無言で頷き同意を示した。

「よし、ではゆくぞ!カウントダウン、3、2、1…魔法陣起動!!」

　掛け声と同時に拘束が解かれ、直後に上空の魔法陣から滝の如く透明な液体が降り注いだ。

「嗚呼(ギャ)ァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

　耳を劈(つんざ)く悲鳴は、聞く者の心を締め付ける様な苦痛の念を響かせる。

　この透明な液体こそ、あらゆる物質を溶かし消滅させる《ユグドラシル》最強の酸、〈極酸〉である。そしてあらゆる攻撃を受け付けない鉄壁の彼女が持つ唯一の弱点。

　酸耐性を高めるための体表を覆う液体金属が存在しない今の彼女に、この弱点だけに特化した攻撃を防御する術はない。

「アアアアアアアアアアアッ!!!」

　身をよじり、もがき苦しむ姿は思わず目を背けたくなる光景だった。

　酸の滝は容赦なく彼女の体を溶かし、犯し、蹂躙していく。

「オノレ!…オノレッ!!…オノレェエエエエエエエエエエエエエエエエ!!!貴様ダケハコロシテヤル!殺シテヤルゾ!!モモンガァアア

アアアアアアアアアアアアアア!!」
憎しみと憤怒に満ちた叫びを最後に、糸の切れた人形の如く全身から力が抜け、ガシャリと音を立てながら力なく地面へと這いつくばった。
「…。」
アインズは無言のまま魔法陣を停止させ、ゆっくりとトリガーハッピーの下へと歩み寄る。
目に映る彼女の体は酸による浸食で赤黒く錆び、所々穴が開いて見えるばかりか右腕は肩から外れ落ち、両足は膝から下の骨格が溶けて無くなり、露出した電線からは火花が散っていた。
「〈状態異常回復(リカバー・ディスオーダー)〉。」
アインズの魔法によりローザリアの体が薄緑色の光に包まれ、全身に付着していた酸が全て排除された。
ボロボロの彼女を抱き上げ、最後の行程を実行する。
「起きてください、ローザリアさん。〈静電気(ショック)〉」
ローザリアの額に当てられたアインズの人差し指からパリッと一瞬電気が放たれ、同時に彼女の体が小さく跳ねる。
完全に〈乱射狂い(トリガー・ハッピー)〉の効果を断ち切るための措置だ。
少しして、暗く光が灯ていなかった瞳に若草色の輝きが明滅する。
「ア、イ…ンズ…さ、ん…?」
掠れ、蚊の鳴くような小さな声。
しかしそれは紛れも無く、疑う余地も無く、待ち焦がれたローザリアのものだった。
アインズの胸に熱い感情がこみ上げる。この気持ちだけは抑制されてほしくないと願うばかりだ。
「あぁ…おかえりなさい、ローザリアさん。」